

031
KI 68

031-Ki68㊦

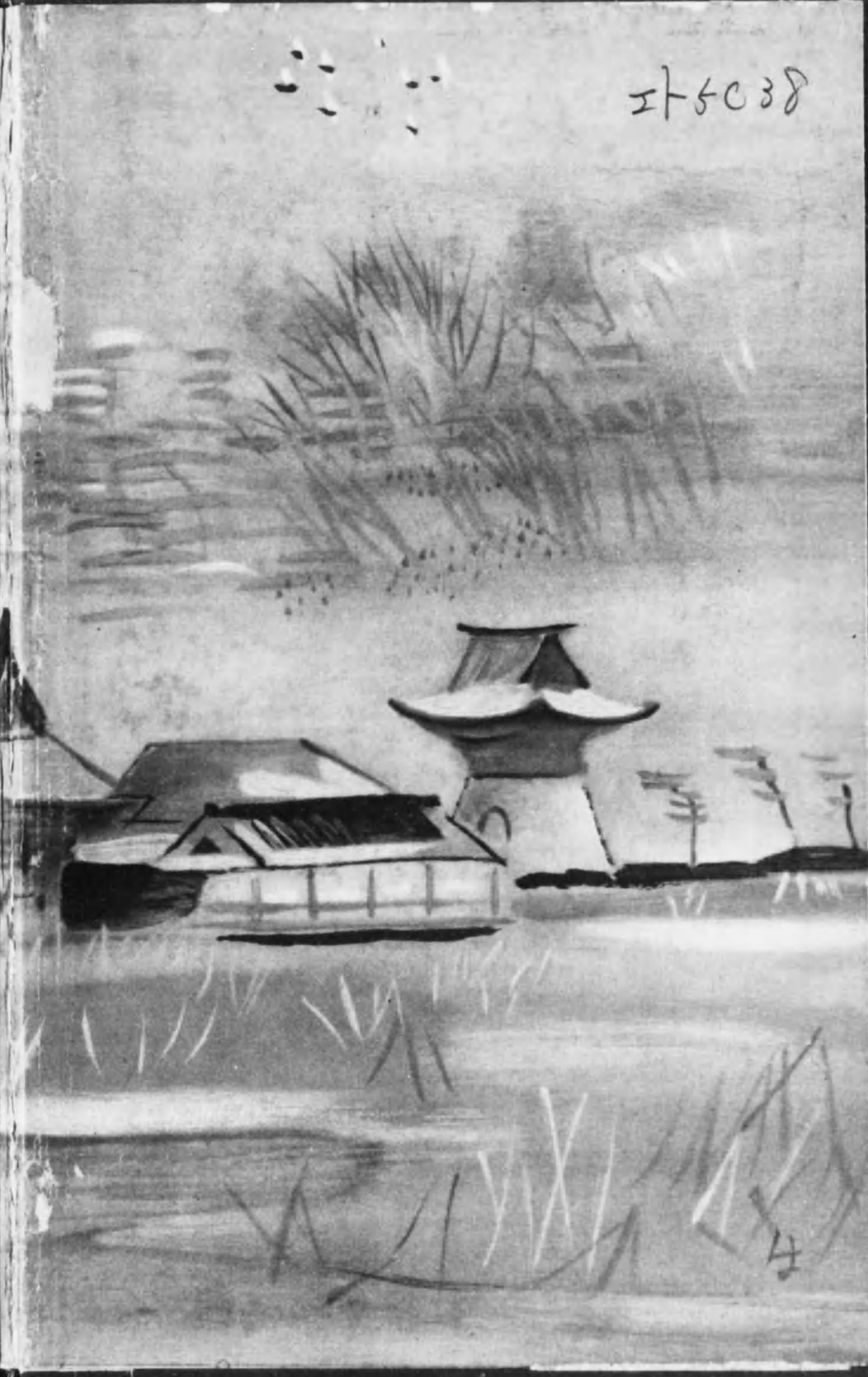


1200500724170



始





5c-38

031

116

(2)



嬉遊笑覽

下卷

日本隨筆大成編輯部編



東京

成光館書店藏版



嬉遊笑覽索引

○下卷

卷六上 音曲

管絃	一琴	一青葉笛	二箏	四筑紫琴	五八橋一流
組歌	五こと瓜	八假甲	八爪びき	八三線	九阮咸
月琴	九二絃	〇四絃	〇五絃	〇三絃の渡り始	〇小弓
琉球組	〇古近江家譜慕碯	〇四絃	三三絃六筋かけ	五八筋かけ	五古製
續さほ	五備馬樂	六風俗	六郢歌	七宴曲	七今様
小歌	七らうさい	七長唄	元隆達なげぶし	元一上り二下り調子	二〇
なげぶし	二さどんざ	二しばがき踊	二ほそり	三口説	三加賀節
めりやす	二めりかり	三めりはり	二西土手ぶし	二西大盡舞	二五半太夫ぶし
かぢるといふ事	二六開の山	二五なげぶし(再出)	二六琵琶法師	二七平家物語	二六小倉踊
川崎音頭	二六開の山	二六伊勢音頭	二六琵琶法師	二七平家物語	二六小倉踊
琵琶法師參院の事	二六開の山	二六地神經よみ	元くわうじん	元天夜の尊	元名字の最初
筑紫方	三〇八坂方	三〇坂東方	三〇總檢校	三〇紫衣勅許	三〇八坂方(再出)

嬉遊笑覽索引

- 綱引 三 漕入 三 涼の塔 三 雨夜の城了 三 城宇都字のこと 三
- 城をひと調しこと 三 盲女 三 ござ 三 陶眞 三 按摩 三
- 腹とり 三 按摩とり笛をふく 三 足力 三 とも僧 三 幕露 三
- 馬ひじり 三 とも僧尺八を吹く事 三 普禪師 三 尺八 三 一節截 三
- 俠客尺八を吹く名ある人々化とも僧の體古今異なり 三 鼓弓 三 元らへいか 三
- 提琴 四 胡琴 四 四ツ竹 四 歌板 四 木琴 四 擊甌 四
- オルゴール 四 風樂 四 しやきり 四 護花鈴 四 鳥おどし 四 風鈴 四
- 音律の妙 四 調子を聞いて占ふ 四 鸚鵡石 四 響石 四 山びこ 四
- 鸚鵡が辻 四 八人藝 四 三絃曲びき 四 八撥 四 羯鼓 四 八からかね 四
- 寒聲 四 説經淨るり 四 吾鉢扣の歌 四 吾歌念佛 四 説經 四 仙臺淨るり 四 門だんき 四
- 祭文 五 歌祭文 五 江戸祭文 五 門説經 五 左内 五 喜太夫 五
- 色祭文 五 淨瑠璃 五 天薩摩 五 淡路 五 薩摩外記 五 三すいでん 五
- 虎や 六 女太夫 六 とさ淨るり 六 土佐外記 六 河東ぶし 五 十寸見堂 五
- 小ざつま 六 大ざつま 六 語齋 六 半太夫節 六 宮古路 六 竹本 六
- 角太夫 六 都一仲 六 岡本文彌 六 阿波太夫 六 新内 六 鶴賀 六
- 豊後節 六 常盤津文字太夫 六 義太夫淨るりの始 六 宇治嘉太夫 六 竹本義太夫 六
- 岡本 六 宮園 六 義太夫淨るりの始 六 石井飛驒 六 でのぼう 六
- 豊竹若太夫 七 豊竹肥前 七 あやつり 七 操道具 七 石のろま人形 七 そろま 七
- だうこのぼう七 齒おやま人形 七 淨るり座看板の圖 七

卷 六下 翫 弄

- むきま 五 出づかひ辰松 五 淨瑠璃作者 七 近松門左衛門 七 井原西鶴 七 南京あやつり 七
- 雨がへる 六 南京と云事 七 おでこと云事 七 からくり人形 七
- ぜんまいと云事 八 彌三五郎 八 竹田 八 覗きからくり 八
- 硝子を作る事 八 獨狂言 八 樽人形 八 笠人形 八 與次郎人形 八 碁盤人形 八
- 七變化 八
- 兒戯 九 あはく 九 かふく 九 ほうしご 九 鹽のめ 九 れろく 九
- べろく 九 ねんく 九 ていく 九 たいく 九 コテンの詞 九 人見しり 九
- がてんく 九 かぶりく 九 あわく 九 あんよ 九 とく 九 隠れ遊 九
- かくれんぼ 九 目かくし 九 めなしどち 九 いちくたちく 九 提迷藏 九 芥かくし 九
- 草履隠し 九 鬼ごと 九 子をとり子とろ 九 ちんくもんがら 九 竹馬 九 高足 九
- 耳ひき 九 指きり 九 べかゆう 九 がこし 九 むくりこくり 九
- 馬貝の戲 九 鳩車 九 てんがう 九 うぶめ 九 もが 九 目くらべ 九
- ぜくがかう 九 皿屋敷 九 かけくら 九 すみたふれ 九 紙つけ合 九
- 耳引かけてしつべい 九 ヤリヤンヤンリウ 九 馬のり 九 はい馬 九 肩ぐるき 九 手車 九
- 道中駕籠 九 うなぎの瀬登り 九 目じろおし 九 つばな拔 九 手にて豆を作る事 九
- 鬼の留守に洗濯 九

瓜をくふ 一〇一 わやく
剛卯 一〇三 打毬
玉をきる 一〇六 飾り花
十二月かけ物
胃人形 一〇七 ちまき馬
内裏羽子板 一〇三 京羽子板
人がた流すこと
額に犬字書くこと
雛祭 一〇八 雛流し
白酒 一〇九 生姜市
江戸雛 一一〇 土焼の雛
子なき女の人形を愛すること 一〇四 さゝやかなるもの
ぶせうばは 一〇六 ばいごま
坊主ごま 一〇七 木ばちまはし
うなり 一〇八 つるはかし 一〇九 硝子よま
白杵 一一〇 ツクマイ 一一一 いしなどり 一二三 きさご大小
かさごはちきのツマとヤツ 一二三 どうくめぐり
まはりまはりの小佛 一二三 ぼうすく 一二四 千艘萬艘
かみかたかれ 一二三 いたいけ 一二三 てうらかす

一〇二 ヤニチャ 一〇二 だど
一〇四 毬杖 ぶりく
一〇六 さつきの玉 一〇七 薬玉
一〇七 葛蒲緋 一〇八 削りかけの胃
一一一 小兒山伏の學び
一二三 つくばね 一二三 躍種
一四四 はふこ 一四五 犬張子
一五六 ひよな 一五七 ひよなの家
一五九 雛の調度 一六〇 繪櫃
一六三 飯詰 一六三 後の雛
一六四 奈良人形 一六四 衣装人形
一七〇 ちたんぼう 一七〇 たうごま
一七二 いかのぼり 一七二 たこ
一七三 切ぬき風 一七三 からくり風 一七三 鞆
一七四 いしなどり 一七四 きさご大小
一七五 どうくめぐり
一七六 ぼうすく 一七六 千艘萬艘
一七七 いたいけ 一七七 てうらかす

一〇三 またぶり
一〇五 玉振々
一〇七 菜黄
一〇九 葛蒲刀
一一三 羽子板 こきのこ
一二四 あまがつ 一二四 あからこ
一五六 犬の子
一七二 ままごと
一七三 あまさけ
一七三 装束雛
一七四 押繪
一七五 はかた狛
一七六 けんとうごま
一七六 からすだこ
一七三 はじき
一七五 一の膳いやく
一七五 ハイロン
一七六 てうらかす

しりもちつく 一二三 のよさま 一二三 おつきさまいくつ 一三三 七ツ 一三九 尼が紅
おまんが紅 一二三 あま 一二三 木のぼり 一四〇 ひなたぼこり
砂あそび 一四二 小家を作る 一四三 雛廻し 一四四 雪の山 一四四 ゆき佛
雲灯籠 一四三 雪やけ 一四三 雪女 一四四 雪こんこ 一四四 雪打
寒氷 一四五 氷をたくく戯 一四五 小兒翫物字の事
無木簪 一四七 竹かへし 一四七 つき 一四八 ふりつゞみ 一四八 はりつゞみ
おきあがりこぼし 一四九 ふんだん 一四九 紙をぼし 一四九 合點首
唐人笛 一五〇 豆太鼓 一五〇 風車 一五〇 張子 一五〇 獅子笛 一五〇 鶯笛
猿松笛 一五一 ひばり笛 一五一 笙の笛 一五一 むぎ笛 一五一 ぼんびん 一五一 ぼこんく
弾き猿 一五二 幟さる 一五二 釣する猿 一五二 つながり猿 一五二 水挽さる 一五二 米搗さる
桃核の猿 一五三 蜜柑の猿 一五三 松笠の鳥 一五三 松毬にて翫物を作る
折形の蛙 一五四 折居の鳥 一五四 紙捻の犬 一五四 缺切形 一五四 假面
般若面 一五五 尉の面 一五五 乙御前の面 一五五 天狗の面 一五五 しほ吹 一五五 芥子人形
今戸焼の小人形 一五七 相撲人形 一五七 金平人形 一五七 飛人形 一五七 輕業人形
てんぼ 一五九 土の西行 一五九 土焼の鈴 一五九 麩猴羅 一五九 七夕の短冊 一五九 繪のぼり
頭巾すゞかけ 一六〇 つげぎの燕 一六〇 とんぼ 一六〇 蝶々 一六〇 小鍋
箔の團扇 一六二 ぼづき挑灯 一六二 麦わらの地 一六二 唐團扇 一六二 葎の穂鳥
つぼく 一六三 削の花 一六三 餅花 一六三 栗花かやの穂にて馬猿など作る
作り花 一六四 五色綱 一六四 はぜの花 一六四 はぜ 一六四 えんぎの金 一六四 箔おきの金

- 一文長刀 一五 浮島 一五 浮人形 一五 酒中花 一五 紙でつばう 一六 豆でつばう 一六
- 蟲目鏡 一六 竹の吊瓶 一六 ふくら雀 一六 雀の笛 一六 與二郎人形 一六
- 笠の上に人形を置いて舞す 一七 人形筆 一七 湯本細工 一七 ひきもの 一七 手車 一七
- 錢ごま 一六 きやこん 一六 びやぼん 一六 狸々小僧 一六 鯛釣 一六
- あやふや人形 一六 かはり屏風 一六 芋蟲 一六 ほらうづき 一六
- 江戸ほらうづき 一七 丹波ほらうづき 一七 海ほらうづき 一七
- 草の葉を鳴す 一七 葱を吹 一七 眞菰の馬 一七 篠船 一七 松葉の鎖 一七
- ちやわんの尻を手に付る事 一七 瓜さし 一七 瓜戦 一七 ほぞち 一七 豆奴 一七
- 菓物燈籠 一七

卷七 行遊

- 行遊 一七 手向 一七 鹿島立 一七 坂迎 一七 松と胡桃 一七 ぬさ袋 一七
- 旅籠 一六 百はたこ 一七 伊勢參 一七 三寶荒神 一七 二方荒神 一七
- しまさん紺さん 一七 お杉お玉 一七 びつき 一七 歌枕 一七 花見 一七
- 鎗鐵炮 一七 花見小袖 一七 衣裳幕 一七 上野の繁昌 一八 智恩院八坂 一八 飛鳥山 一八
- 日暮里 一八 向島 一八 葎簀はり 一八 上野山 一八 隅田川 一八 淺草川 一八
- 目黒 一八 曹司谷 一八 王子 一八 護國寺 一八 深川洲崎 一八 佃島 一八
- 報恩寺 一八 坊主もち 一八 八景 一八 納涼 一八 糺 一八 茶屋 一八
- 糺の涼 一八 四條の涼 一八 屋形船 一八 船遊 一八 大屋形船の始 一八

- をどり船 一八 花火船 一八 船賃 一八 御座船 一八 扇流 一八 杯ながし 一八
- 水練 一八 水掛あひ 一八 水馬 一八 浮香 一八 ころく舟 一八
- くらはんか舟 一九 つきつけ賣 一九 垢離 一九 大山詣 一九 富士詣 一九
- 千垢離 一九 富士嶺登り初め 一九 駒込富士 一九 新富士 一九 順禮 一九
- 山上日出 一九 氷 一九 おひする 一九 西國順禮 二〇 六十六部 二〇 遊行上人 二〇
- 三十三番觀音順禮 二〇 四國廻り 二〇 二十四輩 二〇 二十五ヶ所の靈場 二〇 七福参り 二〇
- 廻國順禮 二〇 四國廻り 二〇 百塔 二〇 百寺参り 二〇 新高野 二〇 三塔順禮 二〇
- 六阿彌陀詣 二〇 千社参り 二〇 百度 二〇 千社参 二〇 物詣の落書 二〇 手ちやうらく 二〇
- 居所の柱に歌を書く 二〇

祭祀 佛會

- 祭會 二〇 御師 二〇 御被一萬度 二〇 日待 二〇 庚申 二〇 三猿 二〇
- 呪歌 二〇 七猿 二〇 甲子侍 二〇 大黒天 二〇 三面大黒 二〇 橋板 二〇
- 夷子講 二〇 賀茂祭 二〇 飾り車 二〇 祇園祭 二〇 山鉾 二〇 大嘗會標 二〇
- 无骨村 二〇 あほう鉾 二〇 江戸山王御祭禮 二〇 神田明神祭禮 二〇
- 祭りの露拂 二〇 ぼろ 二〇 屋臺 二〇 傘鉾 二〇 神田神事能 二〇
- 祭禮番組 二〇 拍子 二〇 鎌倉拍子 二〇 品川拍子 二〇 だし 二〇 臺尻 二〇
- 氏子 二〇 根津權現祭禮 二〇 寶永祭 二〇 練り物 二〇 秋葉祭 二〇

風流 一九 放免附物 二九 ぶりうの面 二九 細男 三〇 祭日異禮 三三 阿波大杉 三三
 魁星 三三 文昌星 三三 三十年開龜 三三 開帳の奉納作り物 三四 嵯峨釋迦 三四
 善光寺如來 三六 本多善光 三六 秘佛 三七 今出川薬師 三七 目黒不動 三六 梅若像 三六
 下總諏訪明神之像 三六 本尊流落開帳のぼり 三九 善の綱 三九 散米 三九
 くま 三九 はなしね 三九 打蒔 三〇 さんぐ 三三 散錢 三三 賽錢 三三
 初穂 三三 十二銅 三三 つゝお米 三三 縁日 三三 朝觀音夕薬師 三三 陽物を祭る 三三
 寅薬師 三三 そゝり觀音色薬師 三三 聖天 三三 うそ替 三三

卷八 慶賀忌諱

忌諱 三三 五月忌、正五九に婚姻忌事 三三 齋月 三三 五月五日誕る子を忌む事 三三
 三齋月 三三 六齋日 三三 掃ことを忌事 三三 俵子 三三 躰うち 三三
 春の始の祝ごと 三三 新宅は三年煤を掃はず、すゝはきの壽 三三 胴あげ 三三
 福は内 三三 厄落、厄拂 三三 やあらく 三三 東方朔 三三 門戸を扣事 三三 つと入 三三
 初夢 三三 寶船 三三 廻文の歌 三三 狹 三三 夢ちがひ 三三 狹の札 三三
 摸枕 三三 虎枕 三三 唐の頭 三三 虎の頭 三三 犬はりこ 三三 染物忌事 三三
 懸想文 三三 若夷賣 三三 名詮種々 三三 移徙粥 三三 粥杖 三三 嘉定 三三
 嘉定錢 三三 嘉定喰 三三 八朔の賀 三三 年の賀 三三 物忌 三三 齋宮の忌詞 三三
 米をしね又よねと云ふ 三三 梨子をありの實と云ふ 三三 くるく 三三 ごしき袋 三三
 人の母を御袋と云ふ事 三三 夷子紙 三三 夷子膳 三三 硯の水に我影をうつさず 三三

硯に物書く事 三三 福と云ふこと 三三 福わけ 三三 移り紙 三三
 としの實 三三 灸の忌日 三三

方術

壺の頰 二四 小兒衣の守り 二四 とく萬歳 二五 くそをくらへ 二五
 鼻に紙捻を入れる 二五 あくびのうつる事 二五 休息の字 二五 呪の軀 二五
 廁にて郭公を聞く 二五 芋畑にて杜鵑を聞く 二五 がんばり入道 二五
 水祝 二五 水懸振舞 二五 師走油は火にたゝる 二五 わる樽 二五 事始 二五
 事納 二五 すゝ拂ひ 二五 節分に龍を戸外に出す 二五 蟲除 二五 虎の字 二五
 小兒の退齒 二五 しびれの呪ひ 二五 疫神を送る 二五 風神送り 二五 送夜鬼 二五
 鍾馗の畫 二五 照々法師 二五 蚊網に雁金 二五 疫の呪 二五 蚊屋 二五 こさのこ 二五
 門戸に蟹殻又蒜を掛くる事 二五 時ならぬ正月 二五 こま犬の足を括る 二五
 盜賊の呪に手洗を伏す 二五 猫の逃たる呪 二五 白の目切 二五
 鯉によはさる方 二五 藥 二五 祈禱 二五 釜鳴 二五 壺口禁忌 二五
 口寄 二五 ものゝけ 二五 より人 二五 寄絃 二五 神より板 二五 巫女 二五
 懸巫女 二五 いちこ 二五 外法頭 二五 うしろ佛 二五 狐つかひ 二五 茶吉尼天 二五
 飯綱 二五 五通 二五 こだま 二五 髪きり 二五 牛馬を呑む 二五 婆々狐 二五
 狐の書畫 二五 金鼠 二五 箕仙 二五 犬神 二五 蛇神 二五 すいかつら 二五
 闇 二五 籤 二五 關帝籤 二五 孟珩 二五 辻占 二五 足占 二五

橋占	二六八	口占	二六八	鏡聽	二六八	響ト	二六八	街ト	二六八	石ト	二六八
うらやさん	二七九	算おき	二七九	賣ト者の體	二七九	起課	二七九	ありまさ	二七九	疊さん	二七九
灰ト・虎ト	二八〇	投さん	二八〇	歌占	二八〇	卷ト	二八〇	夢合	二八〇	夢解	二八〇
胸に手を置いて寝る	二八〇	夜は夢物語をせぬもの	二八〇	一富士二鷹三茄子	二八〇	無盡籤の呪	二八〇				二八〇
貧乏くじ	二八〇	御祓くじ	二八〇	観音くじ	二八〇	九姑女女課	二八〇				二八〇
五百羅漢の顔にて占ふ事	二八〇	仕かけ山伏人を迷はす	二八〇								二八〇

卷九上 娼妓

娼妓	二六一	吉原の起原	二六一	元吉原の再興	二六一	鈴の森	二六二	大夫	二六二
格子の若はし	二六二	局	二六二	大夫名目	二六三	散茶	二六四	五寸局	二六四
三寸局	二六四	うめ茶	二六四	風呂屋もの	二六五	むめ茶	二六五	ちらし	二六五
お茶を挽く	二六六	吉原の町々	二六六	鐵炮	二六六	傾城風俗	二六七	切賣	二六七
女郎の風俗	二六七	二人禿	二六七	遊女櫛をさすこと	二六八	すあし	二六八	内八文字	二六八
大夫の絶る事	二六九	遊女の道中	二六九	燈籠の始	二六九	櫻を植る事	二七〇	俄狂言	二七〇
遊女の數	二七〇	昔の大夫	二七一	とらんぼう	二七一	とらんぼ	二七一	とりんぼ	二七一
ぞめき衆	二七一	兎の御の字	二七二	前わたり	二七二	やきて	二七二	だてのうすぎ	二七二
三枚拾	二七三	花をやる	二七三	紙ばな	二七四	花に色々	二七四	揚屋さし紙	二七四
やりて	二七五	くわしや	二七五	花車	二七五	ぎう	二七五	そり	二七五
きんちやきん十郎	二七五	おひやる	二七六	素見	二七六	ぞめき	二七六	冷かし	二七六

卷九下 娼妓

油むし	二六六	すけん	二六六	けんさま	二六六	新五左	二六七	遊女の詞	二六七
きちんといふ事	二六八	おいらん	二六八	丹前	二六八	丹前風	二六九	勝山	二六九
奴風	二六九	編笠やみし事	二六九	あみ笠茶屋	二七〇	土手の馬	二七〇	附馬	二七〇
町駕籠の制限	二七〇	吉原駕こ	二七〇	温泉	二七〇	湯あみ	二七一	板ぶろ	二七一
むし風呂	二七一	伊勢風呂	二七一	風呂吹	二七二	水風呂	二七三	錢湯	二七三
湯舟	二七三	薬湯	二七三	しほぶろ	二七四	竈風呂	二七四	湯女風呂	二七四
晝三	二七六	女藝者	二七六	太鼓女郎	二七六	永代島	二七六	かくしよね	二七六
處々の茶屋者	二七六	女の牛鬼	二七六	比丘尼	二七六	まるた	二七六		二七六
勸進比丘尼	二七六	賣比丘丘	二七六	めし盛女	二七六	踊子	二七六	かこひもの	二七六
ころび藝者	二七一	いろは茶屋	二七一	蹴ころばし	二七一	遊所	二七一	綿つみ	二七一
町藝者	二七三	はをり藝者	二七三	百藏	二七三	さげ重	二七三	山猫	二七三
船まんちう	二七四	筒もたせ	二七四	呼出し藝者	二七五	深川新地	二七五		二七五

うかれめあそび	二七六	遊女傘をさす	二七六	子夫	二七七	子君	二七七
古へ遊女招かざるに押して来る	二七八	遊女人を撰びて逢ふ	二七八	町賣	二七八		二七八
遊女乗物にのる事	二七八	島原起源	二七八	おろせ	二七八	島原人形みせ	二七八
轡	二七九	傾城町賣	二七九	夜みせ	二七九	おどり場	二七九
燈籠井作り物	二七九	遊料の異名	二七九	大夫	二七九	天神	二七九

かこひ	三三 きんご	三三 半夜	三三 端	三三 局	三三 暖簾	三四
廊中昔のさま	三四 遊女伽羅を焼し事	三四 遊女伽羅を焼し事	三四 金看板伽羅の男	三四 金看板伽羅の男	三四 暖簾	三五
衣服	三五 若衆女郎	三六 うき世詞種々	三六 種々	三六 種々	三六 種々	三七
ぐわち	三七 ぬめる	三七 しやら	三七 わざくれ	三七 のさばる	三六 太鼓もち	三六
どらうつ	三六 一日買	三六 大門をうつ事	三六 日本國中遊女町目録	三六 日本國中遊女町目録	三六 日本國中遊女町目録	三六
朝込	三六 壺入	三六 入ぼくろ	三六 傀儡	三六 所々の新地	三六 柳町	三六
祇園町	三六 八坂	三六 石垣町	三六 かつほり	三六 柳町	三六 揚屋町	三六
藤森稻荷の茶屋	三六 伏見の撞木町	三六 越後町	三六 腕久豆蔀	三六 瓢箪かくし	三六 杖久幕	三六
大坂新町	三六 瓢箪町	三六 佐渡島町	三六 大坂中茶屋	三六 脂粉錢	三六 樂戸	三六
阿波の大盡	三六 山本與次兵衛	三六 掠もの	三六 運葉	三六 籠ばらひ	三六 比丘尼ふね	三六
新町遊女の數	三六 月掛	三六 夜たか	三六 たちぎみ	三六 つじぎみ	三六 男籠	三六
暗物	三六 さうか	三六 すはり	三六 阿釜と云事	三六 田樂猿樂の少人	三六 小草履取	三六
にやけ	三六 かげらう	三六 若衆齒を染る事	三六 渡り小性	三六 かげま看板	三六 飛子	三六
かげ子	三六 草履取禁制	三六 江戸かげま茶屋	三六 舞臺子	三六 色子	三六 色子	三六
小草履取	三六 江戸かげま茶屋	三六 金剛	三六 金剛	三六 金剛	三六 金剛	三六
野郎	三六 江戸かげま茶屋	三六 金剛	三六 金剛	三六 金剛	三六 金剛	三六
男風すたりし事	三六 江戸かげま茶屋	三六 金剛	三六 金剛	三六 金剛	三六 金剛	三六

言語

詞に古今雅俗の異あり	三五 さゝしん	三五 まちかね	三五 こがらし	三五 うぐひす	三五
鯛をむらさきと云事	三五 こすく	三五 來々	三五 しらぢ	三五 たち木に水かね	三五
けちないなりでとりぬがない	三五 きそん十七寅の年	三五 らつひらんくわい	三五 すつばのかは	三五	三五
ちよひく	三五 あつちやく	三五 やんや	三五 日本一	三五 天下一	三五
三國一	三五 門前一	三五 よござりましやう	三五 ちんぶんかん	三五 もさ	三五
致ます御座ります	三五 やつがれ	三五 ちんぶんかん	三五 まんざら	三五 十方もない	三五
しこたま	三五 つがもなき	三五 てんこちもない	三五 大原のざこね	三五 入間詞	三五
てつぼう	三五 ふがいなし	三五 逆こと葉	三五 ちよろまかす	三五 咽が乾	三五
ぐりはま	三五 ありやく	三五 一字はさみ	三五 ちよろまかす	三五 咽が乾	三五
やくしの前地藏の後	三五 ちよむさい	三五 御茶が湧	三五 咽が乾	三五 へらぬ口	三五
あぐむ	三五 喉過ればあつさわする	三五 ほうろく千につち一	三五 與吉が女房	三五 古今の諺	三五
座頭によばひ	三五 鍋尻やく	三五 與吉が女房	三五 古今の諺	三五 圖はづれ	三五
みしやれかつたい	三五 お茶あがれ	三五 耳たぶによる	三五 さばほん	三五 あんぼんたん	三五
若いがきどく	三五 さばほん	三五 あんぼんたん	三五 しみたれ	三五 江戸の流行詞	三五
近來流行詞	三五 やくざ	三五 べらぼう	三五 しみたれ	三五 江戸の流行詞	三五
すべた	三五 ふてふ	三五 やけのやんばち	三五 あてこすり	三五 講釋師	三五
きいた風	三五 耳こすり	三五 あてこすり	三五 講釋師	三五 辻談義	三五
				三五 太平記よみ	三五

軍談の双紙	三六八	辻講釋	三六八	咄	三六八	巡物語	三六九	利口物語	三六九	百物語	三六九
ぢよばよの物語	三六九	猿の尻	三六九	狸の火傷の咄	三七〇	瓜姫の咄	三七〇	鬼が島	三七二	隠れ蓑	三七二
幼あそびの話	三七〇	釣駱駝	三七〇	桃太郎	三七二	花咲せ爺	三七四	落し咄	三七四	野郎藤六	三七四
隠れ笠	三七二	舌きり雀	三七二	羅城門鬼	三七三	野郎藤六	三七四	件内	三七四	安樂庵策傳	三七六
お月様いくつ	三七四	咄に名ある者	三七四	スツバ	三七五	小左衛門四郎齋	三七六	講釋師	三七六	穢銀杏	三七六
曾呂利	三七五	藤六に同名の者	三七五	休慶	三七六	講釋師	三七六	穢銀杏	三七六		
露五郎兵衛	三七六	鹿野武左衛門	三七六	志道軒	三七六	蟹のはなし	三七七				
露休	三七六	彦八	三七六	おどり萬歳	三七六						
はなし家	三七七	豆藏	三七七	口づゝ	三七七						
心學	三七八										

卷 十上 飲食

飯	三九〇	臺	三九〇	ひめ	三九〇	飯食節用	三九〇	幾本立	三九〇	七五三	三九〇	茶	三九〇
昔武家にて晝飯を食ふことなし	三九一	別足	三九二	大匠大饗	三九三	物の食やう	三九三	包み焼	三九五	昆布卷	三九六	鳴焼	三九六
汁かけ飯	三九二	龜足	三九二	楚割	三九五	すぢ魚	三九五	おこと汁	三九七	ムシツ講	三九八	和雜餠	三九八
四足類料理	三九四	獸店	三九五	雉子やき	三九六	狸汁	三九七						
肉菜にならひて作る精進物	三九六			さくく汁	三九七	いとこ煮	三九七						
壺焼	三九六	筍干	三九七	ばくち汁	三九八	筏餠	三九八						
むしつ汁	三九八	ことづて汁	三九八										

かざうなます	三九〇	うづら汁	三九〇	あをがち	三九〇	かぜちあへ	三九〇	かじやうなます	三九〇	酢むつかり	三九〇	わさびおろしの異制	三九〇
稻荷祭供	三九〇	がりくおろし	三九〇	後段	三九〇	魚羹	三九一	一點心	三九一	非時	三九一	澤庵漬	三九三
引菓子	三九一	飯の湯	三九一	鬼毒味	三九一	昔は寺々一食なり	三九一	奈良漬	三九二	澤庵漬	三九三	うどん豆腐	三九四
事	三九一	食前方丈	三九二	かよひ	三九二	香の物	三九二	駿河煮	三九三	板かまぼこ	三九四	天竺ひしほ	三九五
ふくらに	三九三	すつぼう	三九三	櫻煮	三九三	駿河煮	三九三	板かまぼこ	三九四	天竺ひしほ	三九五	宇治丸	三九五
杉焼	三九四	かまぼこ	三九四	竹輪かまぼこ	三九四	鬼みそ	三九五	料理茶屋	三九六	女の料理人	三九七	淡雪豆腐	三九八
下踏と焼みそ	三九五	なまづ	三九五	はんべい	三九五	魚	三九六	百膳	三九八	冷麥	四〇〇	熱麥	四〇〇
鰻	三九五	なまづ	三九五	すんぼん	三九六	圓魚	三九六	冷麥	四〇〇	熱麥	四〇〇	蕎麥切	四〇一
江戸料理茶屋	三九八	田樂	三九八	奈良茶	三九八	けんどん	三九八	雜吹	四〇一	蕎麥	四〇一	忍びけんどん	四〇二
十二文茶漬	三九八	入麵	四〇〇	茶飯	三九八	麥繩	四〇〇	雜吹	四〇一	蕎麥	四〇一	温鈍に梅干を添る	四〇二
蕎麥切	四〇一	庖丁汁	四〇〇	煮雜	四〇一	雜煮餅	四〇一	雜吹	四〇一	蕎麥	四〇一	うどん桶	四〇二
提重	四〇二	忍びけんどん	四〇二	むしそば切	四〇二	けんどん(再出)	四〇二	大名けんどん	四〇二	伊吹蕎麥	四〇三	温鈍	四〇四
雞卵うどん	四〇四	温鈍に梅干を添る	四〇四	二八蕎麥	四〇四	夜鷹蕎麥	四〇四	風鈴蕎麥	四〇五	夷宮	四〇五	道光庵	四〇五
しつぽく	四〇五	夜の煮賣	四〇五	手打蕎麥	四〇五	葛西太郎	四〇五	納豆漬名	四〇六	させん納豆	四〇六	ちやのこ	四〇六
むさしや	四〇五	麥斗庵	四〇五	あすか味噌	四〇六	法論味噌	四〇六	扣納豆	四〇七	冬瓜のきり賣	四〇七	鯉節を削て賣る	四〇八
ちやのこ	四〇六	濱名納豆	四〇六	ほろあへ	四〇七	扣納豆	四〇七	坐禪豆	四〇八	寺納豆	四〇八	一休納豆	四〇八

金山寺みそ	四〇八	鬼みそ	四〇九	三峰尖	四〇九	しゆみせん汁	四〇九	梅びしほ	四〇九
昔のひねりたる料理	四〇九	口頭	四〇九	吸口	四〇九	醍醐獨活芽	四一〇	鞍馬木芽漬	四一〇
淺草海苔	四一〇	初鱈	四一〇	初物を走り	四一〇	と云ふこと	四一〇	おんざのはつもの	四一〇
初茄子	四一〇	青梅茄子	四一〇	松もどき	四一〇	茶筌茄子	四一〇	蓮花茄子	四一〇
唐茄子	四一〇	薩摩芋	四一〇	薩摩芋先生	四一〇	筍	四一〇	しつほく食卓	四一〇
南蠻	四一〇	鴨南蠻	四一〇	みさご鮓	四一〇	一夜ずし	四一〇	なまなり	四一〇
雀ずし	四一〇	食ずし	四一〇	おまん餅	四一〇	當座餅	四一〇	鮮賣	四一〇
てんぶらあげもの	四一〇	栗生姜大根の花形	四一〇	銀まくは	四一〇	大黒煎餅	四一〇	松がすし	四一〇
真桑瓜	四一〇	本所瓜	四一〇	本田瓜	四一〇	銀まくは	四一〇	梵天瓜	四一〇
りんごの紋	四一〇	酒宴獻酬	四一〇	まはり酌	四一〇	鬼のみ	四一〇	酒をのむに種々の名あり	四一〇
中のみ	四一〇	鶯のみ	四一〇	三つ星	四一〇	取違	四一〇	蓮のみ	四一〇
瀧のみ	四一〇	卯酒	四一〇	硯水	四一〇	酒戰	四一〇	杯に種々あり	四一〇
ころろぎの盃	四一〇	黒塗の盃	四一〇	鬼ころし	四一〇	朱器	四一〇	とりさん	四一〇
をはら	四一〇	叵羅	四一〇	貝盃	四一〇	可杯	四一〇	五と土器	四一〇
玉子盃	四一〇	吹よせ	四一〇	清酒	四一〇	太郎貝	四一〇	うかむせ	四一〇
下り酒	四一〇	四斗樽	四一〇	早こと	四一〇	物まね	四一〇	造酒改焼印	四一〇
酒の肴に雑伎	四一〇	拵戰	四一〇	拳すまふ	四一〇	狐拳	四一〇	さかな舞	四一〇
はやしごと	四一〇	拵戰	四一〇	與次郎人形	四一〇	酒胡子	四一〇	撞席	四一〇
中指の戲	四一〇	拳玉	四一〇					甘葛	四一〇

甘蔗	四二〇	がらくたもの	四二〇	手束	四二〇	索餅	四二〇	餅肢	四二〇
粉熟	四二〇	團喜	四二〇	餛飩	四二〇	餛飩	四二〇	子錠	四二〇
沙糖	四二〇	饅頭	四二〇	大湯餅	四二〇	點心	四二〇	羹菜	四二〇
元弘様	四二〇	羊羹	四二〇	水織	四二〇	せいせん卷	四二〇	盤羹	四二〇
碁子麵	四二〇	けんひやき	四二〇	昆布茶	四二〇	苔菽	四二〇	しんすい豆	四二〇
衣豆	四二〇	霰餅	四二〇	道明寺	四二〇	引飯	四二〇	椿餅	四二〇
やきもちひ	四二〇	鶉やき	四二〇	洞はれ	四二〇	姥がもち	四二〇	はらぶと餅	四二〇
大福餅	四二〇	自在餅	四二〇	善哉汁	四二〇	汁粉	四二〇	かき餅	四二〇
すとりだんご	四二〇	あんころばし	四二〇	圓山かるやき	四二〇	ぼたもち	四二〇	かい餅	四二〇
萩の花	四二〇	お萩	四二〇	醒井餅	四二〇	輕燒	四二〇	鹽煎餅	四二〇
煎餅	四二〇	片餅	四二〇	經卷	四二〇	助惣	四二〇	銀銀	四二〇
器粟焼	四二〇	鉄のやき	四二〇	さゝ餅	四二〇	藤の花	四二〇	しんこ馬	四二〇
どら焼	四二〇	金鐔	四二〇	櫻餅	四二〇	杉原もち	四二〇	あんびん	四二〇
あこや	四二〇	あかつき	四二〇	米饅頭	四二〇	臥饅頭	四二〇	姫饅頭	四二〇
あも	四二〇	いまさか	四二〇	矢口餅	四二〇	亥日餅	四二〇	黒餅の紋	四二〇
洲濱	四二〇	豆餅	四二〇	花のくだもの	四二〇	鮮花	四二〇	ちまき	四二〇
玄猪の餅	四二〇	御嚴重	四二〇	御福の餅	四二〇	青さし	四二〇	金餅糖	四二〇
宮筈	四二〇	花びら菱餅	四二〇	算木餅	四二〇				
みたらし團子	四二〇	目黒の餅	四二〇						

落雁 四八 羊羹 四九 正徳中の菓子ども 四九 七色菓子 四九 煉羊羹 四〇
 南蠻菓子 四〇 てんぶら 四〇 百一口の菓子 四〇 ひきぼし 四〇 みづから 四〇
 昆布 四一 國土の菓子 四一 山女 四一 一位の實 四一 泳サクノ木 四三 櫃の左巻 四三
 玉づさ 四二 氷豆腐 四二 ころ柿 四二 かひ舗 四三 くだ物いそぎ 四三
 白強飯 四三 赤飯 四三 瀬戸の染飯 四三 喰倒れ 四三 煙草 四三 花山たばこ 四三
 煙草の禮式 四三 きせる廻し 四三 長烟管 四三 烟管の鏝 四三 煙の輪 四三 刻み烟草賣 四三
 薄色 四三 嗅煙草 四三 水煙 四三 異ざまなる煙管 四三 煙管通し 四三

卷十下 火燭

火燭 四六 きり燈臺 四六 結び燈籠 四六 高塚 四六 菊燈臺 四六 燈籠 四六
 漢土の燈市 四六 七月の燈籠 四六 猜燈 四六 しよんかん 四六 辻燈籠 四六 つじが花 四六
 切子燈籠 四六 燈籠見物 四六 柱松 四六 たちあかし 四六 東たいまつ 四六 蠟燈 四六
 挑灯 四六 燭黍の眞 四六 せつかんろうそく 四六 朱かけの蠟燈 四六
 發燭 四六 つけ竹 四六 ほうづき挑灯 四六 行燈 四六
 懐中ろうそく 四六 戴燈籠 四六 ひじり行燈 四六 たばこやの赤あんどん 四六 廻り燈籠 四六
 走馬燈 四六 戴燈籠 四六 櫻燈籠 四六 かんてら 四六 影繪 四六 影人形 四六
 化物ろうそく 四六 箱挑灯七月用 四六 高燈籠用 四六 地口行燈 四六 初午 四六 行燈に傘 四六
 ささちやう 四六 爆竹 四六 唱文師大黒 四六 左義長の法度 四六 御火燒 四六

吹簫祭 四九 庭火 四九 火廻し 四九 火もじくさ 四九 文字鎖 四九 火渡し 四九
 脂燭の詩 四九 しそくの歌 四九 影法師 四九 花火 四九 大からくり 四九 十二挑灯 四九
 火桶に足を暖む 四九 火燧 四九 火を起す 四九 火びつ 四九 燒石 四九
 板倉の冷こたつ 四九 夜光木 四九 鬼火 四九 東大文字 四九 北辰燈 四九
 夜に光りある物種々有り 四九 正月庭籠 四九 救火のまとい 四九 煮茶 四九 茶税 四九
 地踊 四九 月華日華 四九 茶 四九 漢土の茶の事 四九 茶湯 四九
 火の見やぐら 四九 團茶 四九 とうちや 四九 ながちや 四九 走摘 四九 朝日園 四九
 蠟面 四九 岩上茶 四九 宇治の茶園 四九 一字文字 四九 後音 四九 茶製造 四九
 挽茶節會 四九 日本製の製法 四九 茶式 四九 一椀にて數人喫す 四九 本茶 四九
 宇治の茶摘 四九 鹿色茶 四九 茶歌舞伎 四九 茶道坊主 四九 同朋 四九
 唐茶の製造 四九 回茶買茶 四九 茶歌舞伎 四九 茶 四九 茶坊主 四九 同朋 四九
 邦の茶 四九 茶式傳來 四九 利休 四九 わび 四九 すきこそ物の上手の歌 四九
 數寄 四九 人眞似 四九 里見家の茶禮 四九 別儀捕 四九 意氣 四九 嗅茶 四九
 九輪釜 四九 はな香 四九 極捕 四九 先輩の論 四九 茶神 四九 漢土の茶人 四九
 青茶 四九 茶をもみちにてよ 四九 茶筌 四九 茶匙 四九 茶托 四九 茶湯ふくさ 四九
 雲脚 四九 茶具 四九 茶杓けづり 四九 小座敷 四九 茶湯 四九 圍ひ 四九
 茶を磨事 四九 茶桶 四九 灰匙 四九 五徳 四九 白炭 四九 遊女が茶湯 四九 一服一錢 四九
 だうこ 四九 灰匙 四九 五徳 四九 白炭 四九 遊女が茶湯 四九 一服一錢 四九
 地火爐 四九 灰匙 四九 五徳 四九 白炭 四九 遊女が茶湯 四九 一服一錢 四九

- 水茶屋 四九五 辻賣煎茶 四九六 煎じ物 四九六 櫻湯 四九六 店茶 四九七 鹽茶 四九七
- 隠元茶 四九七 滝茶 四九七 賣茶翁 四九七 茶煎 四九七 煮花 四九八 煮散方 四九八
- は宇治の本郷を最地とし 四九八 茶品 四九八 江戸水道の沿革 四九九
- 芭蕉桃青水道の普請にかゝりし事 五〇〇 沈香 五〇〇 伽羅 五〇〇 奇南 五〇一
- 蘭奢待 五〇一 たき物 五〇一 合香の名 五〇二 香式 五〇三 十種香 五〇三 十姓香 五〇三
- 源氏香の圖 五〇三 系圖香 五〇四 鼻根 五〇四 嗅 五〇四 香を聞 五〇四 初音 五〇五
- 柴舟 五〇五 香を多く用ひし事 五〇五 まなばんまなか 五〇六 銀葉 五〇六
- 香敷 五〇六 千鳥の香爐 五〇六 蛤貝に薫物を入る事 五〇七 うぐひす 五〇七

卷十一 商賈

- 商賈 五〇九 暖簾 五〇九 みせ店 五〇九 既子棚 五〇九 町 五〇九 屋 五〇九
- 立賣 五〇〇 口上商人 五〇〇 れんちやく 五〇〇 相場 五〇一 すあひ 五〇一 毛二歳 五〇一
- すあひ相場 五〇二 藏まはり 五〇二 すあひ雑魚 五〇二 問屋 五〇二 替銭 五〇三 問丸 五〇三
- 庭給仲人 五〇三 販婦 五〇三 物を頭に戴く事 五〇四 ちやう 五〇四 鳥足 五〇四 水波女 五〇六
- 大原女のはゞき 五〇五 千日詣の行人 五〇五 酒はやし 五〇七 物の賣聲品々 五〇七 竹馬 五〇七 菜さう 五〇八
- わけもの 五〇七 看板 五〇七 千駄櫃 五〇八 高荷 五〇八 引札 五〇八 呉服屋 五〇八
- でいゝ 五〇九 小便買 五〇九 現金安賣掛直なし 五〇九 振賣商 五〇九 商物の相場をふれありく 五〇九
- 江戸の町みせ棚のさま 五〇九 古金買 五〇九 振賣商 五〇九 商物の相場をふれありく 五〇九
- 古着屋の起立 五〇九 振賣商 五〇九 商物の相場をふれありく 五〇九

- 切 五三 ぶり賣札 五四 髪結札 五四 棒手振 五五 棒にふる 五五 青豆時 五五
- 安賣十九文 五五 とつかいべい 五五 めける 五五 飴賣の笛 五五 飴賣の傘 五五
- よみ賣 五五 辻賣繪双紙 五五 紙畫 五五 ほろろくの一 五五 めづらしき商人品々 五五
- 暖簾師 五五 口上商人 五五 やまうり 五五 ヤシ 五五 しもたや 五五 古道具屋 五五
- 耳の垢取 五五 飴菓子諸の藥賣 五五 蓮葉商ひ 五五
- まゆむ 五五 茄子の枯るを舞と云ふ 五五

乞士化子

- 乞食 五元 阿彌陀の聖 五元 暮露 五〇 鉢扣 五〇 鉢扣の歌 五〇 高野聖 五二
- いたか 五二 ひじり 五三 ひじりと云吳服屋 五三 せり呉服 五三 せり賣色々々 五三
- 作り山伏 五三 梵天 五四 桂女 五四 桂給 五五 大原みこ 五五 八瀬大原 五五
- 姥たゞ 五五 物もらひ 五五 偽多し 五五 手燈 五五 頭香 五五 腕香 五五
- 火わたり 五五 騙きり 五五 仲間六部 五五 鳩の飼 五五 すれからし 五五 鳩の戒 五五
- 慶庵 五五 口入 五五 はうさい念佛 五五 葛西念佛 五五 方藥拂 五五
- あほう拂 五五 てうさい坊 五五 よせい 五五 だて老 五五 べらぼう 五五 穀つぶし 五五
- 足を手に代 五五 鼻で笛吹 五五 胸たゞき 五五 節季候 五五 鳥追 五五 きよめ 五五
- 非人 五五 かたゐ 五五 物吉 五五 かたゐ仕切札 五五 非人小屋 五五 なりんぼ 五五
- 乞丐人髪を斷る 五五 雪駄直しでいゝ 五五 出家山伏願人坊主名前人數調 五五
- 新非人 五五 女兒の非人を町人の奴となす 五五 出家山伏願人坊主名前人數調 五五

卷十二上 禽 蟲

願人またく 五七 木葉坊 五七 神事舞太夫西八

見せ物 五九 水右衛門 五九 鹽屋長次 五九 蛇づかひ 五〇 蛇壘 五〇 犬神 五〇
くだ狐 五一 孔雀づかひ 五一 天狗のみせ物 五一 猿まはし 五二 猿引道具 五三 猿廻し 既の禮禱に出る 五四 猿眼 五四
猿を既に置く事 五五 猿眠り 五五 たぬき寐 五五 猪睡 五五 猪評定 五五 貉つき 五五
蚤とり眼 五五 猿眠り 五五 人を馬となす 五五 食後に臥て牛となる 五五
四國を廻りて猿となる 五五 十二支の歌 五五 光陰の道行 五五 十二相屬 五五 御猫産子 左右大臣有産養事 五五
もうく 五五 猫も杓子も 五五 猫のちよつかい 五五 犬けしかくる 五五 猫に袋 五五 三毛猫 五五
猫乳母 五五 犬に名を付ることいと古し 五五 犬けしかくる 五五 ちん 五五 白鼠 五五
へげ猫 五五 犬一番頭の白鼠 五五 鼠の嫁入 五五 鼠鳴 五五 鼠おとして 五五
犬の聲べうく 五五 鼠ごつこ 五五 鼠ごつこ 五五 鼠ごつこ 五五 鼠ごつこ 五五 鼠ごつこ 五五
熊鼠 五五 狐の窓 五五 狐の挑灯 五五 獺 五五 萬八 五五 千三
人を鳥獸に比す 五五 藪の中で屁 五五 うそ八百 五五 萬八 五五 千三
鼬火にたゝる 五五 雁のつら 五五 蝸牛角出せ 五五 まひくつぶり 五五
うそつき彌二郎 五五 棕櫚の蠅たゝき 五五 蠅取り蛛 五五 蟲繪 五五
禽獸の勢を去る事 五五
鴉空中にて投食をはむ 五五
蠅の捧つかひ 五五

卷十二下 漁 獵

蜂拂 五八 ウソフキ 五九 虫の弔 五九 虫の合戦 五九 虫が目を借る 五〇
虫を釣 五七 虫を食 五七 一かじか 五七 螢狩 五七 宇治の螢合戦 五七
石山螢谷 五七 虫を捕る 五七 蟬脱 五七 西はどち 五七 つくくぼうし 五七
蜻蛉を捕 五七 蜘蛛の灸 五七 腹きり蛛 五七 あまのじやく 五七 鈴虫 五七 松虫 五七
虫撰 五七 虫吹 五七 促織 五七 虫屋 五七 虫屋 五七 麦櫛籠 五七 虫を商ふ者 五七
ちんちろりん 五七 虫籠藤花 五七 虫屋 五七 蟲を飛す 五七 ひを虫 五七
虫を種る法 五七 松虫の卵を取る 五七 蠶を飛す 五七 鬼子の諺 五七 蟻の熊野参り 五七
虫の油を髪にぬる 五七 簀虫 五七 鬼子の諺 五七 蟻の熊野参り 五七
蟻の合戦 五九 蟻の塔 五〇 あばれ蚊 五〇 蚯蚓の鳴聲 五〇 蚯蚓陰晴を知る 五〇
蛸笛 五〇 小兒陰腫 五〇 虫目鏡 五〇 鬮 五〇 しやむ 五〇
野郎遊女が鬮合 五二 小鳥合 五二 鬮合 五二 あひろ 五三 かりの子 五三
鶯谷 五四 三光 五四 昔の鳥籠 五五 鶯受取り渡し 五五 烏屋 五五 付子 五五
鶯はうぐひすにあらす 五五 鶯の産地 五五 鳥を弄ぶ事 五五 烏屋 五五 鶯の目縫ふ 五五
鳥さし 五五 江戸鳥屋の事 五五 あひ夫 五五 鬮 五五 放ち飼 五五 傳書鳩 五五
鶯合 五五 麥うづら 五五 白鳥 五五 寒苦鳥 五五 寒號鳥 五五 諸鳥 五五
はとの聲 五九 鼻の聲 五九 白鳥 五九 寒苦鳥 五九 寒號鳥 五九 諸鳥 五九
鳴落し 五二 づく落し 五二 四の事 五二 寒苦鳥 五二 寒號鳥 五二 諸鳥 五二

- 漁獵 五九二 鷹狩 五三三 犬 五三三 鶴鴉つかひ 五三四 鶉糞 五九五
- 猿が鳥をつかふ 五九六 漁獵の事 五九六 鹿狩 五九六 狗山 五九六 しし狩 五九七
- 釣 五九七 六物 五九七 ぶり 五九七 荻梗 五九七 蚊かしら 五九八 餌番 五九八
- あま 五九八 釣殿 五九八 はい尻笠 五九八 蚯蚓 五九八 ごかひ 五九八 ぬけえさ 五九九
- てぐす 五九九 釜 六〇〇 ひよ 六〇〇 いけす 六〇〇 やなす 六〇〇 網代 六〇〇
- ひよ竹 六〇一 あぐり網 六〇一 大網六人引 六〇一 御菜白魚網役 六〇一 どうろけ 六〇二
- やな 六〇二 鯉魚やなに落す 六〇二 江戸近國漁獵の壇場 六〇三 ふしつけ 六〇三
- 鮭を一尺二尺と云ふこと 六〇三 地獄網 六〇三 佃島山緒 六〇四 白魚を取事 六〇四 御菜島 六〇四
- 大まき 六〇四 汐乾 六〇四 突魚 六〇五 ひよし 六〇五 やす 六〇五 立こみ 六〇五
- かなわらち 六〇五 うなが穴釣 六〇五 數珠子 六〇六 貝突 六〇六 底突 六〇六 空突 六〇六
- 竹煙 六〇六 きす釣 六〇六 はぜ釣 六〇六 根突 六〇七 漁獵止の札 六〇七 川釣 六〇八
- 田船釣の始 六〇八 宿の始 六〇八 殺生禁制 六〇八 はやつり 六〇九 たなごつり 六〇九
- 髪毛を糸に代て用 六〇九 續き竿 六〇九 岡釣 六〇九 堀釣 六〇九 金魚 六〇九
- ぼろふり 六〇九 漢土の金魚屋 六一二 びいどろの壺 六一二 金魚 六一二
- 江戸の金魚屋 六一二 鬮魚 六一三 辨慶がに 六一三 談義坊 六一三 杜父魚 六一三
- 捕魚打鳥吉日の歌 六一三 水瓶に魚を入れ置こと 六一三

草木

- 草合 六四四 すまひ草 六四四 馬唐穂相撲 六四五 むから相撲 六四五 松葉きり 六〇六 かつら草 六〇六
- ひな草 六一六 款冬皮のかもし 六一六 茅花をくへば肥るといふこと 六一六
- 草結 六一七 山茶花くらべ 六一七 白つばき 六一八 草木はやりもの 六一八
- 朝がほ 六一八 植木鉢 六一九 菊 六一九 菊のきせ綿 大菊 六二〇 金目貫 六二〇
- 菊合 六二二 作り菊 六二三 梅やしき 六二三 萩寺 六二三 千葉蓮 六二三 並頭蓮 六二三
- 橋の下の菖蒲 六二三 種まき 六三四 穀收 六三四 林檎に模様 六三四 花の塔 六三四
- 花の塔の事始 六三五 薺を行燈に吊す 六三五 松揃の歌 六三七 正月の松かさり 六三七
- ひよんの木 六三六 なんじやもんじや 六三六 花を瓶にさす事 六三六 活花 六三六
- 松竹梅 六三七 松葉の兵 六三六 藤原吉野 六三六 投入 六三九 菜籠 六三九 蒲はた 六三九
- 削り花 六三八 立花の法式廻り花 六三九 水仙の早咲 六三九 生花の書 六三九 後世生花師 六三九 鉢植木 六三九
- うけ筒 六三九 竹筒 六三九 嫁樹 六三九 江戸の本草學の始 六三九 御藥園 六三九
- ならうかなるまいか 六三九
- 採藥使記 六四〇

或問附録

- 和歌三神 六五五 しづをかけたる雪の笠 六五五 武家のみつゆび 六五五 みさき踊 六五五
- 高野六十奈智八十 六五五 きな臭い 六五五 内儀とカミサマ 六五五 春雨歌 六五五
- 畫法を用ひて假山を作る 六五七 庭 六五七 鞠歌のオケンシヨサマと云こと 六五七 江口君畫賛 六五七 猿の繪の事 六五七
- 烏丸光廣卿十二支和歌 六五七 蛇の怖るゝ歌 六五七 江口君畫賛 六五七 猿の繪の事 六五七
- へたと云ふ語の事 六五九 鎌子を南方と名くる事 六五九 三方荒神の事 六五九

よぼろの事 六〇 庖丁の事 六〇 する星 六〇 垣下坐 六〇 椽の下の舞 六四〇
 美婦を凸と云ふ 六〇 常陸祭文 六〇 日本祭文 六〇 チヨボクレ 六四二
 常陸祭文の一種 六二 貧家の籠 六二 百日紅 六二 香字の意義 六二 茶博士 六四一
 松竹梅 六二 頭巾を燈心入れとなす 六二 鼠とり薬 六二 書物を糸針入とせんとす 六四二
 指甲紅 六二 四景題情 六二 圓社 六二 牧童畫軸の詩 六二 古き筆きりくす 六四二
 折櫃 六二 笑語 六二 以髮易糖 六二 落咄 六二 鬼に疣とらる 六四二
 險肆 六二 蔡京毎に香を焚く 六二 妓館の婦を鴛と云 六二 七尺の夫に二尺の婦 六四三
 書を讀て睡る 六二 足癖に柴芒を鼻に付る 六二 燈籠は白きを尙ふ 六四三
 次第の燕に賓客を下し諸工を上とす 六二 乞兒の詩歌 六二 大蘿蔔 六二 芋くらべ 六四四
 歪をなす者の誠め 六二 痴塔 六二 對食 六二 免車 六二 大言 六四四
 好酒不食 六二 薇花 六二 百日紅 六二 椿 六二 盆景 六二 箱庭 六四五
 花を括る事 六二 蛸笛 六二 幫間の風從 六二 獄舎を禁中と云ふ 六二 盆笛 六四六
 馬頭 六二 笑飴 六二 魚關 六二 杭子 六二 遺 六二 許願 六四六
 還願 六二 幫傘 六二 脚力 六二 妾末有室 六二 遺 六二 許願 六四六
 福生帳布 六二 御身 六二 我身 六二 江戸に猪狩の事 六二 はたご 六四七
 堺の眞言僧 六二 てぐる坊 六二 放出 六二 紙裏より見れば數字に見ゆる假名 六四七
 三十三間堂の起立 六二 突上窓の事 六二 破甕を以て關又は門となす 六二 傀儡 六四八
 撮弄之戲 六二 撮桿之術 六二 冬學 六二 ベツ 六二 長押 六四九
 杵新きも冠とならず 六二 岩木にあらねば 六二 ニツ瓦三ツ棟に造たる船 六四九

昇居屋形の船 六四九 見みえの意義 六四九 そこはか 六四九
 止觀行者四種三味の大意 六四九 許魁の膂力 六四九 大腹賈 六四九 私錢盜鑄 六四九 人肉を食ふ 六五〇
 淨心の法號は淨土宗葬所は天台宗 六四九 歌誹百人撰の作者鼻首せらる 六五〇 おも黒き 六五〇 烏金 六五〇
 延命院と仙石騒動の作者 六五〇 筆師に小法師と云ふこと 六五〇 かも黒き 六五〇 烏金 六五〇
 正保頃の町名 六五〇 かたぐるしき者を延喜式又は古文眞寶と云ふ 六五〇 烏金 六五〇
 浅草三十三間堂創起 六五〇 古へ遊女白拍子招かざるに來る 六五〇 食店 六五二
 行菜 六五二 鑄頭 六五二 素分茶 六五二 日蓮救母の劇 六五二 シンマクと云ふ事 六五三
 今とかはれる手まり歌 六五三 幡隨院長兵衛の異説 六五三 シンマクと云ふ事 六五三
 策祝 六五三 步搖 六五三 文房四神 六五三 神粧 六五三 拾赤子 六五三 賣赤子 六五四
 織婦 六五三 孔子買 六五三 人置かゝ 六五三 杜預書を吝て人に借さず 六五三 ケサイ 六五五
 藝が身を助くる不仕合 六五三 肖像の寫し難き事 六五三 箭庭 六五三 在地判 六五五
 武夫の殘暴 六五三 醫師の不在 六五三 大小の札物折紙のこと 六五三 太刀の目貫 六五三 柄の卷やう 六五五
 金漆 六五三 童の勇力 六五三 宿殿 六五三 ホツホ 六五三 一件をひとまきと云ふ 六五七
 穴目々々 六五三 閻羅 六五三 荻藥師 六五三 野老藥師 六五三 香水の菊柴舟 六五八
 鬼杉原 六五三 百巧團 六五三 乞兒詩 六五三 奇南香 六五三 鏡背の紋 六五三 龜泉 六五九
 犬居目禮古佛坐 六五三 犬居目禮古佛坐 六五三 櫛に結ぶと云ふこと 六五三 普請と云ふこと 六六〇
 陰毛を毛虫になすらふ 六五三 かはつるみ 六五三 鞠の名 六五三 鞠をける聲 六六一
 下駄と焼みそ 六五三 一月とスツボン 六五三 仲間の勤方 六五三 奉公引米 六六一
 檢校の番人は謂れなし 六五三 文人の支配 六五三 相撲を武藝とせしこと 六六一

錢を撰む制札
當世名聞を貧る人々
趨迎して腰を折るに懶し
盛衰記に出たる事ども
おあん物語 六五二

- 六三 如木水干 六三 白張 六三 如木雜色 六三 仕丁 六三
- 六三 狂歌師錢ある者の歌を高點とす 六四 人の別號 六四
- 六四 知名の人々 六四 盲者の記應 六四 道念節 六五
- 六六 ウケムケの事 六七 七福神 六七 お菊物語 六八

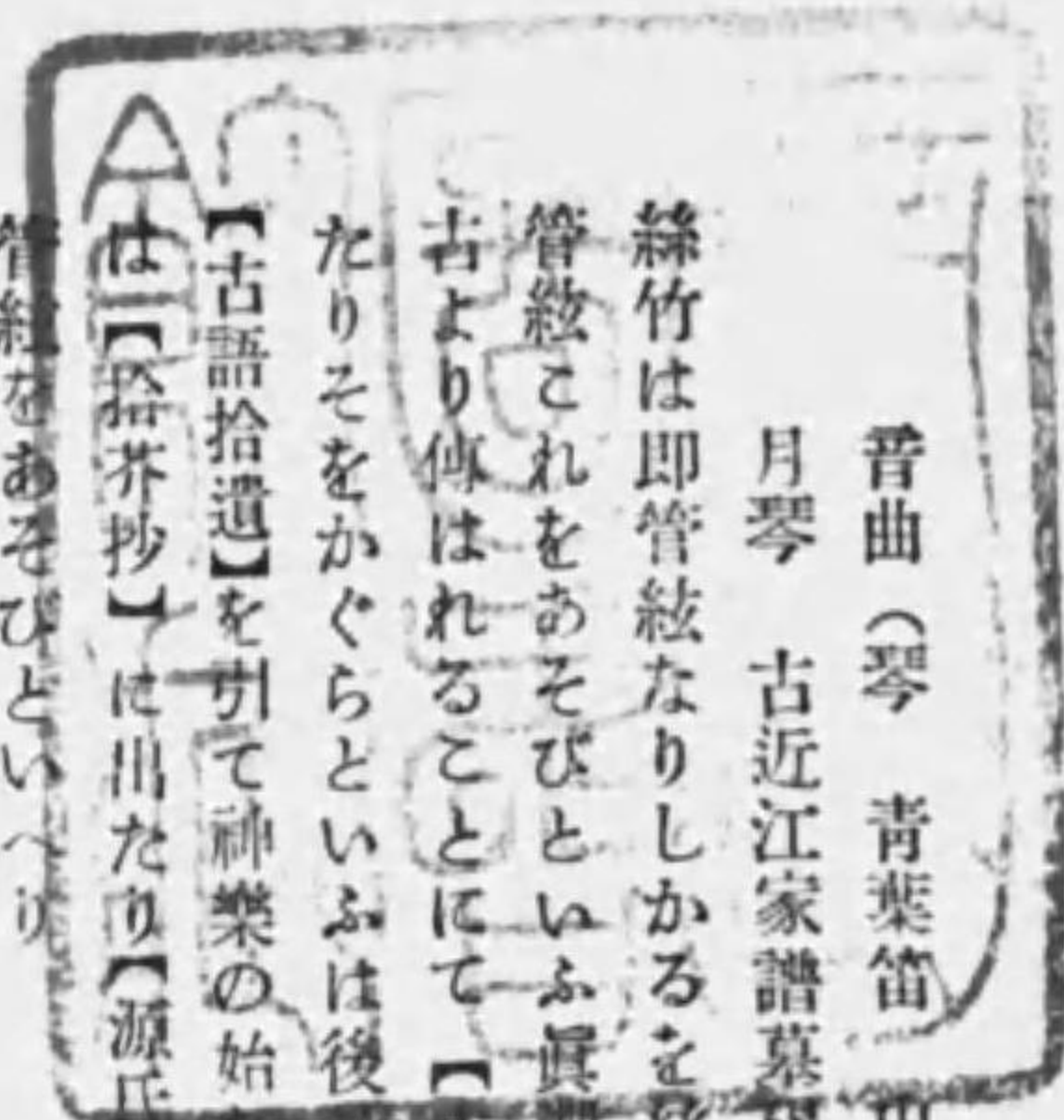


嬉遊笑覽卷之六上

喜多村信節撰

管絃

琴



音曲 (琴) 青葉笛 山路が笛 箏 筑紫琴 組歌 八橋 こと瓜 瓜びき ○三線 阮咸
月琴 古近江家譜纂稿三絃六筋かけ八筋かけ 古製 續さほ

絲竹は即管絃なりしかるを絲竹管絃とつらねいふ事【陸賈新語】また王羲之が【蘭亭序】などにみゆ
管絃これをおそびといふ實淵云神樂の事を云て神あそびと唱へし樂のことを後の物語にあそびといふ
古より傳はれることにて【古事記】(仲哀天皇條)建内宿禰大臣曰恐我天皇猶阿曾婆勢其大御琴と見え
たりそをかぐらといふは後世の言なれば古書になき事なりといへり一條禪閣の【神樂註秘抄】などに
【古語拾遺】を引て神樂の始をいへり【本望書籍目錄】管部に【神樂譜】二卷とあり今傳はらず【神樂目錄】
は【拾芥抄】に出たり【源氏物語】(桐壺)月のおもしろきに夜ふくる迄あそびをぞし給ふなどいへるは
管絃をあらわすといへり

○琴は雄略天皇の御時吳人貴信琴を彈すそれより國史に往々載たり其外【雙紙物語】等にも出て世には
翫はれし物にて雅樂の内すぐれし器なるに早く引絶しは惜むべし【源氏物語宇治十帖】に琴をひくこ
と今は好ずなり行とあるは廢れたるにこそ【體源抄】に寛治八年圓憲といふ者筑紫にて唐人に琴を習
たりしが微音にて紙障子の内に蛇をこめしやうに聞ゆと禪空殿下笑はせ給ひしと記せりもとの琴とは
違ひたるにや【源氏】に五節の君が筑紫よりのぼるとて須磨の浦を舟にてつなで引するに琴の音風に

つきてはるかに聞ゆとあり蛇のやうなる聲ならばいかでかはるかに聞ゆることあらん【春湊浪語】すでに此ことを論じたり【取かへはや】(一)に吉野宮は唐にわたりて琴をおぼへたることを中納言聞たる處へ参りかよひて世にたへたるきんならい奉りまた見及はぬふみの所々聞あらはさん同(四)に吉野の大姫君きんひく處すべて今は世にたへたる物にておさ／＼ひきならす人もなかめるをめぐらしきひきこめ玉へけるも有がたく

青葉笛

○【春湊浪語】に青葉といふ笛は無雙の名物にて始は葉二ツといひける云々按るに【拾芥抄】名物の笛を擧て葉二【江談】云朱雀門鬼笛又號青葉歟とあり【江談】に葉二者、高名横笛也、號朱雀門之鬼笛是也、淨藏聖人吹笛、深更渡朱雀門、鬼大聲感之、自爾此笛乎給件聖人、云々と見えたり【世繼物語】を按るに博雅三位朱雀門の前にて鬼の笛と我笛と取替て吹たる笛なるを三位失て後帝此笛を召て時の笛吹共に吹せらるゝに其音を顯す人なかりけり其後淨藏を召て吹せ給ふに三位に劣らざりければ帝御感ありてもと此笛を得たる朱雀門の頭にて吹せられけるにその門の樓上に高聲に猶逸物哉とぞ譽にけるとなむ攝州須磨寺なる青葉の笛はあらぬ物なることしるし敦盛の笛を青葉といふ事物に見えず【江談】には博雅三位の事をいはず又【元享釋書】(十)淨藏が傳をみるに此笛を吹たる事を洩したりこれ又何れを正しとせむ

○和歌を琴に合せ彈こと【大鏡】(八)天曆村上帝の御時のことなり承和殿の女御と申は齋宮女御に帝久しく渡らせ玉はさりける秋の夕暮にをいとめでたく引玉ひければ急ぎ渡らせ玉ひ御かたはらにをはしましけれど人やあるともおぼしたらでせめて引玉ふを聞しめせばさらぬだにあやしき程の夕暮に萩ふく風の音ぞきこゆると引たりし程こそせちなりしかと御集に侍るこそいみじく候へど云もあまりかたじけなしやな

山路が笛

○さん路が笛【謡曲拾葉】云世にとねりやうなる姿のよき裝束を着し牛に乗て笛を吹是を牧笛の圖とす又この童をさんろ殿といふこれ又いぶかしといへり按るに【日本紀】に弘計天皇御兄弟難を避け給ひ牛を牧給へる事を取て【烏帽子折の草子】に豊後國まのゝ長者が娘を用明天皇召て后に立むと勅ありしかどもまいらせざりし故天皇御身をやつし其國に下り給ひ長者が家の牛飼になり草刈童となりて御名を山路と呼その處に神祭ありてやぶさめを射る事なりしにこの事を知るものなかりしを山路知りて射し故長者これを婿となす又八幡の御告によりて天皇にましますこと顯れ娘を召具して還幸ありしといふことを作れりこれ山路が草刈笛の起る處なりさて牧童をさんろと名付しは紀の齋名が暮春遊覽の賦の序に山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲などあるによりてなり故に【えぼし折】にやまと竹にめをあげたる草刈笛にて候を云々是をもちてこそ夜更て心すめるをばさんろの草刈夜の笛云々とあり十二段の【淨瑠璃】にこの文をとりてやまと竹にめをあげてさんろが吹しくさかり笛と有り

○猿樂の翁のうたひものゝ詞昔より注釋なし【南留別志】にとう／＼たりやらりろうといふことは樂の譜なるべし陀羅尼なりといへるはひがことならんといへり【職人盡歌合】猿樂の詞書にあげまきやとんとうひろはかりやとんととうとありこれは【催馬樂】の詞なり眞淵云あげまきはをのわらはを云ふ一ひろはかり女とさかりてねたれどもつひにまろびあひたりとう／＼はとく／＼といふなりとんとろは拍子なるべし【鄂曲】五節のびんだらにやれこととうとあるとうとうといへるも同じかるべしちりやたらりは【體源抄】青海波の條に聲歌太良利知良利々良太利良利(打夕取)とあり【源氏】にたけぶちちり／＼たりをなかきかへしはやりかにひきたることばなどもわりなくふるめきたりと有を【細流抄】に笛の音をしやうかにするなりたけぶちちり／＼たり唱歌なりと云り【體源抄】に聲歌と有はしやうがなるべしおうさい／＼は于思に發聲をそへて云るなり【運歩色葉集】に于思翁申樂三

番奏之詞也とあり于思は老人の鬚多き良をいふ【春秋左氏傳】宣公二年宋の國城を築く者諷曰【上略】于思于思葉甲復來といふ註に于思は多鬚之良と見えたり【卜養狂歌】にうさいをうよろこびやりや悦あれあとの大夫に鈴菜まいらしよ

箏

○箏はもと筑紫より起れること統秋が【體源抄】にみえたり今の筑紫琴は箏より出【望一后千句】琴のけいこもいまだ初春やふ殿に去年の冬よりつかへ人その始は【琴曲抄】(元祿八年刻)肥前の人賢順(後奈良院御時永祿已前なりと傍注に記す)筑後善導寺の僧に(誰ともなし)箏術をうけて我同國慶岩寺の僧玄恕に傳ふ賢順都に上り古郷に歸らんとする時大納言敷殿その藝を惜まれ居士が門弟の内然るべきを必越よといはれしによりて歸後僧法水といふものを【和事始】に善導寺の僧法水とあり恐は非)のぼせしが其藝いたく劣りければ人々心づきなきを法水みづから耻て逃去り武藏國に至り還俗して柏屋と號し琴絃を商へり(寛文四年刻【糸竹初心集】に中頃九州に玄淨法水とて二人の僧あり或時長崎に至りて琴の彈やうを唐人より傳はり其後都に上り公家殿上の交りをなし寛永二年のころ琴の御ゆるしを下し給はりて法水は關東に下り琴をひろむる玄淨は筑紫へ歸りてこれも琴を専らに修行するによりて今在家にひける樂をつくし樂といふなり云々玄淨玄恕は一人なるべし其名いづれか是なるをしらざれども【琴曲抄】の説委しきに似たり)八橋檢校はしめはこれに逢て筑紫琴を學び後肥前國に行て玄恕に隨身し其奥義を究む八橋おもへらく筑紫樂は雅なれども俗耳に遠しとて新に十三曲を制す後また新曲二組を補ひ八橋一流となれり(已上【琴曲抄】の説なり【糸竹初心集】又云雲井の調へといふことを此頃八橋檢校ひき出したり此八橋もと三線の上手なりしが中年より琴を學び不思議に琴の妙を得て今日本の名人となる云々は萬治寛文の初めを云なり)八橋は貞享二年に身まかれりとぞされば新曲二組は(橋姫とありしなり)八橋が手をつけたるにはあらず【琴曲大意抄】(安永八年山田松

筑紫琴

八橋一流

黒撰)山住勾當といふ人(生國岩城)昇進して上永檢校となる又其後八橋と改【大幣】貞享二年刻)に寛永の初攝州に加賀都城秀といふ座頭兩人三絃に堪能なり東武に至り加賀都は柳川城秀は八橋とて共に檢校となると有り)新たに組箏を製し古組の足らざるを補ひ表裏中奥の曲譜の次第を定め今の十三曲となれり後都にのぼり箏術を廣む此傳をうけ續人々終には新八橋生田隅山繼山藤池など諸流に分る云々然るに箏の書たるもの【八橋琴曲抄】近來安村が【雅譜集】の外いづれの流にも見えず(古八橋流にいふ古流前流當流とあり古流とは蟬丸の頃より文祿年中迄をいひ文祿より正保迄を前流といひ正保よりこのかたを當流といふ云々是は和琴琵琶などの事にて組箏の古流當流は筑紫八橋よりこのかたをこそ申へけれ云々

組歌

○緒組といふことは三絃の曲より出(その家にはさる事をいはず)おなじ趣の小歌をよせ聚めたるを組といふなり【琴曲抄】の説も私あるに似たり筑紫樂も京都には寛永のころ専ら行はれて下賤のものも翫びしなりおもふに其時はひと歌ふた歌のみにて長き曲はなかりしなるべし【色音論】(寛永二十年草子)はやりものゝことをいへる處にうたふしやうかに琴の音はみな家々にをとづれて【鞞草】(寛永二十一年草子)琴などいふものはやむことなきかたの取あつかひ給ひて賤きものは申々見たることもなく繪にかきたるをのみながめぬる然るを此ころは町かたに殊の外もてはやし座頭ごせこめくらの類まで我おとらじと而々にけいこたしなむ故籠の前座あくたの邊ともいはずむさとかきならしぬる惣して本樂ばかりにてあらはかく下蕩などの手にかゝらん物にはあらねどもいつその時より筑紫樂といふこと有て彈けるそれに隨てあひさの興に小歌などをせ侍るにより賤の耳に入やすく町かたに取あつかふとみえたり此頃猶しもつくしやうにても樂ばかりもてはやさばすこしはおかしからむに小歌のをかさきをどりなどのみにてひきまはれば琴の道ははやすたれたるやうになむ有けるといへり筑紫

樂といふは今の組歌の一歌づゝのものとみゆ【春豪獨語】に箏はもと樂器にて管絃にのみ入りしに三百年のむかし公家の入筑紫に流されて配所のつれづれに箏の手を弾かへて越天樂の歌をのべてふしを長うし箏に合せて弾れしを筑後國善導寺の僧その曲をならひ傳へて弘めしより筑紫箏と號て世の翫となれりとかや其後八橋檢校その曲を習ひ越天樂のふきといふも草の名といふ歌を本として色々の歌を誰人にか作らしめ組と名付てさま／＼の曲節をなしけるより彌世に行はれて貴賤の玩となれりと云へり(享保の末より三百年の昔は文安前後なるべし)此説も又覺束なし先づ筑紫に配流せられし人は誰にか越天樂を長く延たるが本にてそれを善導寺の僧習ひ傳へて世の玩となるほどに弘たらば越天樂ひと歌のみには有べからず然るを八橋より色々の歌出來たるやうにいへるはいかにぞやもと箏の器は仁明天皇御時に遣唐使の傳ふる所とも又内教坊妓女筑紫の彦山にて唐人に是をつたはるともいへり此二説【體源抄】に出いづれば是なるはしらざれども筑紫に傳へぬることは古しとしらるこれに依ておもふに雅樂は俗耳に遠ければおのづから筑紫樂は其處に出來る物にて其歌は皆今の組歌の内に入しなるべし三絃の組に倣ひて組歌に造りたるは八橋に始れり

○慶長六年霜月二日江戸より下總行徳へ大風に物の飛たる事の處に七尺の屏風も火事にはなどか飛ざらんと【見聞集】に見え又【鷹筑波集】(寛永十五年)琴を聞てぞ命延ける七尺の屏風をすむとをどり越(是今のふき組の唱歌なり)【同集】琴よりもまつ引は振そで花の頃愛宕へ參るつくしもの(筑紫琴と付たるなり)また貞徳が【新犬筑波集】只まいれ蓼ひや汁のからだせん琴のしやうがであそぶ夏の日(自注)琴のしやうがにからだせん地蔵が戀に腰をそらいたと云ことありと云り【夷曲集】寄若僧戀(入安)うつくしき地蔵のことき若僧に死ぬるからだはせんばかりなりからだせんは法羅陀なり【地藏經】十輪經曰在在羅帝耶山諸牟尼仙所依住處【延命地藏經】曰在在羅陀與大比丘衆萬二千人俱など有り)

是今の梅枝の唱歌に八十の翁の戀に腰をそらいたとうたひかへたり此ら八橋より前にふきの歌ばかりにあらざる事しるべし又三絃の歌をとりたるも多かるべし三絃秘曲の七傳に堺といふ曲あり其唱歌に幾春もこゝに猶みはしの櫻色まさる雲の花は久かたの空ふく風も及ばし云々(今の【花宴】の唱歌なり)又【小歌惣まくり】(寛文二年板)秘曲天下大平長久に云々桐壺の更衣の云々たそ夜の夜中にまぎれ板戸を敲くは云々恨めしき我ゑん云々などある皆今の組歌の中に入たりこれらも彼筑紫樂の唱歌を三絃のかたに取たるものもあらむ【箏曲大意抄】に橋姫古作不知手付絶たるを倉橋の時代三橋補明石末松空蟬北島檢校作九段七段調子作者不知五段調子北島生田兩家の内作者不明新雲井弄齋倉橋檢校作三曲に可附古新曲羽衣若葉北島牧野兩家の内作者不明思川北島生田兩家の内作者不明中古新曲飛燕 清平調 安村檢校作宮鶯三橋檢校作○裏可附中古新曲二長雪月花六玉川浮舟三橋檢校作中可附中古新曲四季富士玉葛四季戀雲井九段與前同作裏可附近來新曲四季友友千鳥久村檢校作花宴石塚檢校作三曲可附近來新曲春宮曲 三ツノ調 石塚檢校作凡組三十三曲段調子七弄齋二首也○別に當流唯授一人々々秘曲あり四季源氏乙の曲と云と近來三橋中されし八橋北島生田倉橋より三橋傳來りて此曲を同門安村へ傳置よし聞ゆ此秘曲今多くひく人あり中にも三橋より傳授したる人彼此あるなりさすれば唯授一人の曲とも中難し古八橋流に四季源氏の曲乙の曲と二曲ありこゝに章歌をしるす【八橋四季源氏】の曲春のおまへの池水にからめく舟のよそほひはうら／＼にさしてゆく袖の棹の雫に花かほる月のかつらの追風に調べ合せむつま曲の聞すてがたき君かゝや催し顔のほと／＼ぎす(合手)朝夕霧の光もよのつねならぬいろ／＼たもとかゞやくせんさいのちどに亂る／＼秋風あれたるやとのかき庵につもる雪の橋をはらへどもとの末の松あをたつなみのおもかけ千代萬代のよもさき君がめぐみははやましけやまかけたかく賑ふ民の家々○乙の曲いさ／＼らば時鳥涙くらべん諸ともに我も昔の忍ばれて夜もすがら夢も結

ばず命あらむかぎりはなれし君の面かげ何としてか忘れんと思へばいとゆかしきおもひを人にしらせじと心にふかく包めども戀しさいやましてわれとこぼるゝ涙かな袖にふれし移りかも落るなみだにそゝがれて形見にのこる色だにもうせておもひのます花なきは世の中のうきみにつむ柴ぶねのたかぬ先よりこがれ行この身は何となるべき波にゆるるゝ濱ちどり逢夜かたし我袖にあとふみ付よあはれにもせめてとり見てもしのばむ右二曲は古章歌なり【當流四季源氏】乙の曲(文略す)古作にあらず云々又云いにしへの奥秘事鑿の曲といふ曲あり(章歌略す)右曲生田の作なるよし云古流にキンのしらべギンのしらべありとこの事むかしより申つたへたりいまだ不考古八橋流に四季源氏の曲乙の曲なるよしをいふ

こと爪

○【春湊浪語】に箏のことをひくに今作り爪をさしてひく是はいつよりのことにや齋宮女御(村上女御微子)の箏を引給ふに右の御手の爪をゝしみ給ひ常には左がちにひかせおはしませし故に後には御僻になりしと【夜鶴庭訓】に見えしされども【大鏡】には此箏をひく人はへちに爪を作りて指にさし入て引ことにて侍りしと芹川御幸の物語に見え然ば昔も必一やうにもなく作り爪をも又用ひしなりと云りまた相國宗輔公ことの爪にて枇杷の實をむきて蜂にあたへて散らさざりし事【古事談】また【十訓抄】等にみゆおもふに假甲は後に出来し物ながら此器有て後はこれを用るが本にて手の爪して弾は假なるべし(今爪びきと云と異なる事はあらじ)假甲もと漢土の製なり【資暇録】に今彈琴或削竹爲甲以助食指之聲者亦因汎公也嘗患代指而舊甲方墮新甲未完風景靡澄授琴思泛假甲於竹聊爲權用名德既崇人爭倣効好事者且曰司徒甲云々【山堂肆考】一伎女以鹿角琢爲爪以彈箏曰繫爪○浪語又云つれ／＼草にある男の爪をおふしたるあり琵琶などひくにやと書たれば兼好法師の頃も作り爪なくてひきける歎されどもびはを引に爪をおふしたるといふはいかゞいぶかしといへり爪びきは箏のみにあらず【源氏物語】

假甲

爪ひき

(紅梅)宮の姫君へ紅梅のせめきこえ給へばくるしとおぼしたる氣色なからつまびきにいとよくあはせてたゞすこしかきならし給ふ(是びはを引ところなり)と有り爪弾は假そめの事ながら其道を嗜まむものは用意に爪を生したりとみゆ

三絃
阮咸
月琴

○三絃【藝苑日涉】云據【事物紀原】及【絃子記】則秦謂之絃蕤、魏晉以來謂之秦漢子、宋人謂之槽琴者、即今之三絃也、未知果然否、大氏絲竹之制古今或不同、況如三絃本出胡部、而熾於輓近、假令爲絃兆鼓遺象、後世率意增損、恐非復古絃蕤矣と云り西土にもその起源さだかならず按るに【三才圖會】の阮咸其形いとよく似たる物なりされども此圖は阮咸のもの形にはあらじ故に【三才圖會】も其説には、武后時、蜀人判朗、於古墓中得銅器似琵琶、時人莫識之、元行冲曰、此阮咸所造、命匠人以木爲、之以其形似月、聲似琴、名曰月琴、杜祐以晉竹林七賢圖阮咸所彈與此同、謂之阮咸、云々、四絃十三柱、倚膝撥之、謂之擘、以代撫琴之艱、今人但呼曰阮、と見えたり然らば形員く琵琶にひとしき物なるべきをその圖さもあらぬは此器當時(王思義が其書を作りし時)あるものを載たるにて古物傳はらざる事としらる此圖説の適はさるによりてや【和漢三才圖會】には琵琶に似たる物を圖せり是しかしなから杜撰に作れる圖にもあるべからず今月琴とて清商の持來る物ありそれと形似たれども異なり是もそのかみ月琴とて渡り來し物なるべければさま／＼に作りたる事とみゆ王思義が時より後に出たるものなり王思義が出し、圖は二絃なり是はその形は異なれども月琴にひとしきは月琴は四絃あれ共其實は二絃なるも同じく二絃ツ、同調なり南都東大寺正倉院の寶物の中に四絃の鳴器ありこれ古への月琴なるべし西土には却て古物亡びてその製りさまをしらするものと思はる但し陸奥國會津農家に四絃の器あり【集古十種】に載たり槽は今の三絃の槽のことく柄は三段に續たり長さ惣て三尺二寸二分木にて作る大よそ今の三絃の形に似て四絃なり何ころの物なるか彼王思義が圖せる物の類とみゆ【楊升菴外

二絃

四絃

【集】に今之三絃始于元時、小山詞云、三絃玉指、雙鈎艸字、題贈玉娥兒といへり然れ共元史の樂志曰火不思、制如琵琶、直頸無品、有小槽、圓腹如半瓶榼、以皮爲面、四絃皮絃、同一孤柱、とありて三絃にあらず但【庶物異名疏】に湖撥四長二尺計三絃【事物異名】に三絃子胡不兒(蒙古云)と云るは渾不似を三絃とするなり絃の數は阮咸も定まらず【事物紀源】に四絃十二柱或五絃十三柱といへるが如し今も異國より來る地皮はれる三絃其槽方圓ひとしからず半瓶榼の如きものもあり【五雜俎】に有所謂三絃者、常合簫而鼓之、然多淫哇之詞、倡優之所習耳、とみゆ趙子昂が婦人管道昇がかきたる繪に三絃をもてる女あり予【三絃考】に載て委しくいへりよりてこゝには略す

五絃

三絃の渡り始
小弓

○三絃のこゝに渡りし始は【糸竹初心集】(寛文四年板)文祿のころほひ石村檢校といふびは法師琉球の島にわたりけるに彼島に小弓といひて糸三筋にてならずものあり小き弓に馬の尾を絃にかけて引なれば小弓とはいふとぞ石村これを探りみるに琵琶をやつしたる物なり糸のしらべやうも一二はびはの如く三の糸はびはの三よりも二調ほど高くあはせたるものなりと思へり所の者いひけるは此島には眞蛇の多き所なるがラヘイカといふもの有て此まむしを食物とすさればラヘイカの鳴聲小弓の音に少もちがはざる故眞蛇を退けむが爲に専ら引なりびは法師も爰に逗留の間はひき給へといふ其後石村京都にかへりておなじく琵琶をやつし此三味線を作り出せり琉球の島より得て來るといふ心にて琉球組といふことを作り置り弟子虎澤檢校に残らず傳へしかば虎澤又組破手といふことを作り出す虎澤より山井檢校に傳授して世に廣まる糸の合せやうは是も一二は琵琶のごとく三の糸はびはの四の糸の調子なり(神田定宣が【淺草船遊の記】三味線の起りは元琉球より薩摩へ渡れり琉球國は地多く有て民屋路次に横り女童を惱す五月雨洪水の頃は分て多く出でうるさかりしかども三味線と小弓の音は恐れて寄不來それ故男女ともに此二種を樂み彼難義をのがれ或は一興をなせりとかや三味線は地皮小弓はラヘ

琉球組

イカと云り何の頃にかこの國に渡り日本にあまねくわきて武江に翫びて戀慕の道のよせ太鼓とや云々貞宣は江戸の人元和中に生る此舟行は明曆以前とおぼしき事あれどたしかには云難し)また【大幣】(貞享二年刻)永祿年中琉球國より是をわたす其時は地皮にて張て二絃なるものなり泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲目に人のとらせたりけるを云々長谷の觀音に七日參籠し彈やうを祈りしにあらたなる靈夢によりて一絃をまして三絃とせしをしばらくして虎澤といひし是を弾かため本手破手といふことを定めて是を傳ふ其後澤住といふ盲人ありて是を彈おぼえ歌にのせてひき出したりそれより公家武家のうちに賞翫させ給ふ方多く有てみづからもひかせ給ふ其後は此器に緒をつけて頭にかけて引を用とす云々淨瑠璃といふ事をのせて三味線を引初たるは澤住がなす所なり然して後寛永の初め攝州加賀都城秀といふ座頭兩人堪能なる事古今に獨歩せり東武に至り加賀都は柳川檢校城秀は八橋檢校となれり柳川流八橋流といふは是なり此兩人三味線の曩祖たり是によりて今世三味線の工人に八橋の柳川のといふも此名字をゆるされたる者なりとみえたり(松の葉)(元祿十六年板)には中小路より石村虚澤澤住と相うけてと載たり【大ぬさ】には石村なし【竹齋物語】に石村檢校みえたり慶長の頃なり)これらの説どもを合せ考ふるに【糸竹初心集】には三線を小弓よりといひ【大幣】には二絃なりしを一絃を添たりといひて其説おなじからされども造り改めて新たに引出したるやうにいへるはいづれも私説なるべしこはもとより三絃子にて琉球國の彈やうを習ひて其後さまざまに彈出し術も器も彼よりは勝れし事となれるなるべし又小弓も二絃もそのかみより渡りて有しことゝみゆ琉球より渡れるよしは琉球組三線歌の始にて【吾吟我集】の自序(慶安二年)さみせん糸のよりゝに絶すぞ有ける是より先の歌を集めてなむりうきうと名づけたりける云々其器早渡りしも有べけれど世のさわがしきほどにて翫ぶものもすくなくよく彈おぼえたるものなどはなかりしにやされば永祿頃より有といへる【大幣】の説隨

ふべし文祿中に石村よく彈出し者ゆゑ是を始といへる説も有と聞ゆ(中小路は虎澤が初めの名と聞ゆれば是石村が弟子なり)抑此器緒の數定まらざりしこと【事物紀源】に見えたるが如し然るを靈夢によりて一彈を添たりといへるは其物を貴くしてその術を賣むが爲なり二絃三絃四絃もみなもとより有し物なりこゝの古書に四絃も往々見えたりさて三絃もや古く渡りたることは明らかなり【室町殿日記】(十九)遊女二人を中に置いて何心なく三味線を弾て遊び居ける(天文永祿頃の日記なり)【狂言記】外五十番の内昆布賣口しやみせんにて上るりぶしに昆布賣ことあり(狂言は古きものなれどもこれらはいと後に出來しにや)【義殘後覺】に三味線大鼓にて踊をすることあり(此書文祿五年の跋あり)【醒睡笑】(永祿よりこなたの落しのはなしなり)都の人東の宿なる中ゐに相馴たるか別るゝ時一しゆのさみせんをつかはしたる物語あり又慶長頃の物には多く見えたり【仁勢物語】(光廣卿の作といふ)むづかしと平家もしらすしやみせんもひはも小歌もいかで過てき【恨のすけ草子】雪の前が三線ひく處に華美を盡した三線のさまをいへり猶多くあれどもこゝには略すさばかり世にもてはやしゝ器なるに久仁が歌舞伎には未だ是を用ひず(そは舞猿樂等をまねびたる故なり)淨瑠璃などに是を用ふことは異國より然り【廣東新語】(十二)粵俗好歌、凡有吉慶必唱歌、以爲歡樂、云々、其歌之長調者、如唐人連昌宮詞琵琶行等、至數百言千言、以三絃合之、每空中絃、以起止、益太簇調也、名曰摸魚歌、或婦女歲時聚會、則使瞽師唱之、如元人彈詞、曰某記某記皆小說也、其事或有或無、大抵孝義貞烈之事爲多、竟日始畢一記、可勸可戒令人感泣沾襟、と云り

古近江家譜墓碣

○三絃の器はもと蛇皮などはりて製作ふつゝかなりしをこゝにてよく作りなほしゝは石村よりこなたとみえたり古近江といへる匠の造りたるを世にこよなき寶とすめり元祖近江は稱を源三といひて京都の人なれど今は墓處も定かならず實名さへしれずといへり按るに近江といへるが即實名なるべし又この家石村氏なれば石村檢校の子孫か又はその名字をうけたるもの歟(柳川八橋は三線の名人たるに依て工人其流の器を作り八橋柳川などゝ呼たるが如きにや)近江が子孫江戸に來り世々其器を作る今その家譜と墓碣とによりてその時代をしるす墓は三田の大信寺にあり其古き墓は上の右の方少し缺たり左の九名を刻す行譽淨本信士(寛永十三年三月二日)法譽性眞信士(寶永五十一年九月九日)正譽道薫信士(明曆三丁酉八月廿五日)廣譽源智信士(元祿九月二日)實譽淨眞信士(元祿九丙子正月廿七日)教用院淨玄信士(寶永七九月晦日)還譽本立信士(正徳六丙申正月九日)心譽昂還信士(正徳二年七月五日)西譽永欣信士(元祿八六月十八日)また石村近江累代と記したる墓あり、石村近江(住京師墓地未詳)淨本信士道薫信士淨心信士性眞信士本立信士相流信士倫超信士又別に太兵衛が墓あり累代とある墓は後に建たる物なり古近江九代孫春峯孤雲信士(天明七年正月二十二日)俗名太兵衛忠豊 石村氏 わきの方に孤雲翁世をかく南無 鳳尾「若守と成て朽るか捨ころも(十代目近江月峰秋善信士文化元八月十九日)ありと。元祖近江は俗名源三京師に住す二代淨本俗名源左衛門始て江戸に來る依て江戸元祖淨本近江と云ふ三代道薫(淨本より以下源左衛門といふを通り名とす)實名忠義四代淨心(墓碣に淨眞と有る心は誤なるべし)實名忠政(四代迄は作る處の三絃に焼印を用ひず)五代性眞實名忠次俗名善兵衛といふ此時より始て焼印を用ひ此者總髮にてありければ世に惣髮善兵衛と云ふ六代本立信實名忠貞七代相流實名宗忠(六代迄は實子にて相續す七代めに至り男子幼少故弟子の内より宗忠七代めを續り)八代倫超實名忠陸俗名善五郎六代忠貞が實子なり九代春峯實名忠豊俗名太兵衛世に太兵衛近江と稱する是なり十代秋元但馬侯妙工の家絶む事を惜み此時扶持せらるとなり右の焼印相傳へて六代めごろにはいたく損へるに依て七代めに今の焼印に改めたりとぞ此家の風にて三絃の槽の裏鼓の胴の鐫かたに似て綾杉といふものに造れり焼印は根緒かくる處の下に押こと常なり焼印あるものは古近江にはあらずされども太兵

衛が如き者は殊に名手の聞えありて祖先に耻さるものなれば新古をもて工拙を論ずべきにあらず(南畝老人が「假名世説補」に古近江と稱するは二代目善兵衛が事なり初代源左衛門二代目善兵衛隠居して惣髪となり貞心と號す世俗がつそう近江といふ三絃に自銘を付るといへり初代源左衛門にあらず源三なり善兵衛は五代めにて二代めにあらず貞心といふ者十代の内になし五代め善兵衛は性眞なり何に據て書たる歟いと妄なり又栢屋近江とあるは初の號にはあらず

○【雍州府志】近世筑紫琴三味線之流行也非古樂之所及也依是巧人亦多云々【人倫訓蒙圖彙】に琵琶琴三味線同職なり室町一條上ル長門釜座二條上ル近江此外寺町處々に有といへり【琴曲抄】をみれば長門は今井氏にて二家あり其は一は一條通室町西へ入ル町今井播磨なり近江は神田氏にて是も二家あり室町通四條上ル町神田七左衛門なり此外に東洞院佛光寺下ル町永田内記といふあり【江戸總鹿子】(貞享四年刻)琴三味線師京橋北一町目石村近江この外に石村河内石村山城とあり近江が家京師にもあれど名匠は江戸に出るにや【風流徒然草】何事も東は物いやしくふつゝかなれども近江が三味線は耻ずといへば江戸しやみせん屋の申侍し近江にかぎらず何れの細工人も外より勝れたり其故は江戸の繁榮に付れきくの簾中おく方より高直にかまはずあまた打出す故しぜんとその妙を得たり殊に近江は古作の名人の鞞の筒うちのかんなめなどよく考へしやみせん屋の筒のうちの一ツのかんなめを工夫したり是秘藏の事なり此かんなめにていづれのよりをも調べ侍ると申き凡しやみせんはわづか三ツ緒をもつて何れの調子にも叶ふなり云々近江がしやみせんはくるはずよき調子なりといへりかくあるは秘髮善兵衛などの時をいふなるべし

○樂器は其藝未熟なる者名物の器を用ればふさはしからねば常の器よりも鳴りがたしとぞ【北窓瑣談】に新九郎物語に六條本願寺に近江の作の三絃あり類なき名器なり折々借し給はりて是を弾くに少しに

三絃六筋
かけ

ても無利あり按へ所の坪厘毛も違ふ時は一向に鳴らず弾きやうに無理なければ神妙の音を出す故にあやまち明白に聞えて耳に立我ながら藝の不熟なるを覺えられて器に對し耻かしくおもふといへり新九郎も三絃にとりては妙手にて人みな知ところなり然るに彼三絃などはいまだ不相應なりとみえたり

八筋かけ

○三絃六筋がけは【原本洞房語園】に慶安の頃江戸町二丁目の揚屋喜齋といひし者六筋がけとて其頃隠れなき三絃の上手なりし【二代男】(四)こくたんつぎさほの六筋がけを取出し云々らうさいその聲の美しさ【西鶴置土産】(五)番町にさる御かたの隠し藝に八筋がけをしのびごま引せられしが又もなき音

古製
續さほ

曲是を役者の九兵衛が御指南うけてまねびし(是は本手小歌のことをいふ處)などみえたりかく八筋がけなといふもあるをおもへば糸のさるふとさして三線の棒も大きなるをいふにやあらむ又古譜にみえたる三絃に今の根緒かくる處に金物の環ありこれは「大幣」に此器に緒をつけて頸にかけて引を用とすとあればその爲に設たる物としらる又撥のもとに緒を付たるがあり是も三絃に添置に便利なる故と見えたり又三絃にかせかくることも古くみゆ【世話焼草】(明暦二年刻)三味線も月にひかんの企にかせや手車ならべ置秋(かせは鹿をかせぎといひ二股の杖をかせ杖といふ是より出し名と聞ゆ)【神巷談苑】に續さみせむは琵琶に續びはあり長明【方丈記】にみえたり是によりし物にやと思はるれどさにあらず前にもいへる會津農家の四絃の古器續柄なれば三絃もとよりつぎたるも有しなるべしそは調子の爲にあしければにや近江が家には造らずと歟(次にいふこの頃新刻に先哲のことを書たる物あり其内に東涯先生が續三絃の匣をしらざりしことを擧ぐ此説非なり余が傳へ聞しは先生醫師の用る百味たんすやうの古き匣を買て諸書より見出たることを少なき紙に書て其類を分て入る器とせられたりとぞ此事を誤れるにや續三絃をだにしらすして【制度通名物六帖】をつくりたるは怪しむべし此の語は仁齋妓家に入てその妓家なることをさたらざりしといへるにおなじ宮崎筠圃にもこれに似たる物語あり實

に是をさとらざらむには至愚といふべしいかでか一家の學を唱へて一代の儒宗といはるべきもし人を欺けるならば惡むべしとにかくにかゝる事を稱美するは彼昔神を雷になり給へるといへるにひとし

催馬樂 風俗 郢曲(宴曲) 今様(小歌)らうさい 隆達なげふし 長唄 ほそり 口説め
りやす 土手節 大盡舞改かじる(よしノ山、小倉)

催馬樂は【體源抄】云伯朝葛新作と云ふ【續教訓抄】云催馬樂と云は催馬樂といふ樂あり其より事起れり此樂の唱歌に駒を催すと云ことありけるをやがて歌となして國々よりうたひ出したたり我駒といふ催馬樂是なり故に馬を催とかきたるなり古注にむかし貢調の歌といへるは誤なるべし此説も心得かたし先づ催馬といふ樂ありとは異國の樂名とするに似たりその章に駒を催すとあるを歌となして我駒だゝ一曲ならば國々よりうたひ出したたりとはいかゞその本の催馬樂は早く亡びたりなといふ心にやいと おぼつかなしもと此歌【萬葉】(十二)に乞吾駒早去欲云々ある歌なり初め二句馬を催す詞なるもて催馬樂とは名けたりこの樂のこと先輩種々論じたれども定かならず【和名抄】に催馬樂(律我駒曲是也)狹路河(律澤田河曲是也)と並び出たり【拾芥抄】催馬樂部ありて目錄多く載たる内に狹路河も入たり【和名抄】には並び出たれども催馬樂は我駒曲のみにて狹路河は別なり然らばもと我駒の曲のみなりしをその曲調に種々の歌をうたひ出しなりもとより駒催す歌なれば貢物を納る時の口すさみにも謠しなるべし(今も船歌こむろぶし木やり石引それ〴〵の歌あるがごとし)この曲調亡びたるはいつの頃にか【年山紀聞】に賀儀(定基朝臣)今日歌遊准久富家禪閣七十賀儀件時催馬樂也其曲調斷絶仍以朗詠代之といへり久安にはいまだ傳はりしなり

風俗 ○風俗は諸國の國ぶり歌なり【拾芥抄】に目錄あり東遊もこの内なり新井白石の【學對】に東遊は駿河國有度濱に神女降て舞遊ぶ事有しに起れる由を申傳ふ安閑天皇の御時の事なり道守氏の人其曲を傳

郢歌

へしなど申すされば又是を駿河舞とも申き【江家次第公事根源】等に見えたり

宴曲

○郢曲四條大納言公任卿【朗詠集】二卷を撰み四季雜を分ち時にあたりし句を見むに便ならしむるは此曲をうたはむ料なり安齋人の間に答云郢曲はすべて歌をうたふ事の總名なり催馬樂今様其外何にてもうたふ事なり郢曲とて定りたる歌はなきなり【徒然草】に【梁塵秘抄】の郢曲の詞こそまたあはれなる【野槌】云郢曲は楚國の都なり【文選】に客有歌於郢中者云々これより歌曲を郢曲といふなり後に宴曲といふもの出來たり其譜【宴曲集】等種々あり水宴曲などいふも是なり

今様

○今様【紫式部日記】わかやかなる公達いまやう歌うたふもふねにのりおほせたるをわかうおかしく聞ゆる云々【枕草紙】藏人すけたゞはいみしうあら〴〵しければ殿上人女房はあらはにとぞつけたるを歌に作りてさうなしのぬしをはりうどのたねにぞ有けるとうたふは尾張の兼時がむすめのはらなりけり是を笛にふかせ給ふ(主上の御笛なり)其外【續世繼】等諸書に見えたり思ふに今様とはその當時の歌にして新たに作り出るなり文字の數など定りしことはなしとみゆされば【平家物語】に佛御前が君をはじめてみる時は千代も經ぬべし姫小松云々また【東鑑】文治二年四月八日鶴岡の廻廊にて靜が舞曲の處吉野山峯のしら雪ふみ分て入にし人の跡ぞ戀しきしづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな(是らは尋常の歌の文字數なれど曲調ことなるべし)【平家物語考證】白拍子の謡歌は今狂言の花子の小歌に曲節相似たり故に狂言の徒花子の小歌を秘曲とせりと云り然らば今四ツ拍子にうたふを今様とするものは非なるべし

小歌

○今の琴うたの内に雲わらうさいといふものあり寛文の初ごろ八橋雲井の調を引出しとなり是また三線のかたより取たる物とみゆ【松の葉】なが歌の中に雲わらうさいあり其歌「やまのはいかな夜も人こそしらね聞はなみだのふちとなるよしやなげかしかなはぬとてもさだめなきこそうきよなれわれ

ふりすてゝ一こゑばかり何くへゆくぞやまほとゝぎす」是によりて雲むとはいふなるべし(琴歌もはなれくゝのうき雲みればとあり)雲井はこゑをはりあぐるにとれる名と聞ゆ【今昔物語】天狗のつきたる女の物語に聲を雲井の如くして叫ぶといふことあり【あら野集】唱歌はしらす聲ほそりやる(嵐雪)なみだみるはなれくゝのうき雲に(同)是をみれば今の琴歌も三線にての唱歌なり琴の調子三線の三下りに合するは彼らうさいの調子にてこれを雲井の調子といふをもてその曲三線よりとれるを知べしらうさいは弄齋などゝ書る故人の名のやうに思はるゝから【昔々物語】に百三十年ばかり已前弄齋といふ遊び坊主りうたつがことを學び是も歌を作り歌名をろうさいと付て唄ふといへるは妄説なりらうさいといへる歌うたひの事いまだ聞すらうさいは癆瘵にて病の名なりらうさい流行しことは(流行病にはあらねど斯いひ出しものなり)【見聞集】に見しは今らうさいはやり皆人煩らへり去程にくすし達この時花病をなほし手からにせんと術を盡し良薬をあたふといへども治することかたし爰にくすしにもあらざる老人申されける此煩の起りを伺ふに風邪寒冷よりも出す心よりおこる病なり然る間此病を心氣と名付て薬にては治し難し唯おのれが心を轉じ變すべきなりと有り【似我蜂物語】にはなげのばして月なみそかつらをのこのまねぎやるに或連歌きらひの者いひけるは扱もくゝ此小歌よくぞ作りたり何のこともなきに月をあほうげに仰のきにながめわけもなきにぶらぐゝとのどろにうなりらうさいやみの食をくらふとおなじ事じやとあるは連歌師をそしりていふなり物思ひつゝ月を見空を詠めなどするによりてらうさいの歌は出来るなり【寶倉】(三)三線の條くすしもしらぬわつらひにはらうさいの一ふしを薬ときゝなし手なれしかども云々故に俳諧には【はなひ草】に癆瘵は戀病なりとす(後藤佐一が【病因考】癆瘵は人これを病は必死で祭らるゝの義かといへり)是らうさいを戀やみとするにや【貞徳文集】に普請奉行被成候哉云々材木屋鍛冶屋多塗師屋疊屋近來召連在京仕爰元に居申候御大

工部屋へ召連度候何も分限成奴原に候弟子一族多持候故何成大儀をも無造作相濟申候癆瘵薬に候世界の重寶候恐々頓首これは苦勞なく作事出来るを癆瘵薬と云たり【けだ物歌合】七番右いたちのこしぬけぼう「らうさいにかみはうつゝいたちのをみるにこしほねなへにけるかな判云戀しきこと數まさりてらうさいとなりかみもち腰ほねもみるたびになゆるごとくなるべしこれは世の人の小歌にきみはうつゝかるたをうつかわれはらうさいにてかみかうつといへるをふまへたと見ゆれども云々(是又戀やみを云り)

○また【昔々物語】長唄の始は右近源左衛門が海道下りに始り小歌は隆達より起れり弄齋の歌はほそりまたはたゝき杯とて皆短歌といひしとかや其後長歌口説歌などいひし云々いへるすべて誤なり歌はもとよりうたふべき物なり【金葉集】(永縁)きくたびにめづらしければ時鳥いつもはつねのこゝちこそすれ俊頼朝臣の歌をかゞみのくゞつどもうたひけると聞て永縁僧正うらやみびは法師をかたらひてさまゝゝものとなせなどして此歌をうたはせける(又【無名抄】にみゆ)これ今様なり【新撰類聚往來】(中)歌三長歌短歌之今様とあり【榮花物語】玉の村きくの卷川そひ柳風ふけばうごくともれど根はつよしといふ今様あり後世なげぶしの唱歌に似たりその今様うつりかはりて小歌となる室町將軍の頃専ら行はる猿樂の狂言小歌ぶしの事多くみゆ(又早歌あり思ふに今の小うたひのやうなるものか今の淨るりぶしなど皆曲節急なり)

○隆達は聲よくて一風をうたひしなり(【堺鑑】に高三隆達元は日蓮宗常津顯本寺の寺内に住す故有て還俗し高三氏の家に往て薬種を商ふ年を経て小歌の節を一流うたひ出すより世俗りうたつ流とてうたひもてなすとみゆ古寫本にふしづけしたるもの往々あり或は自筆に寫したるには文祿某年自庵隆達としるしたるもあり自庵は隆達が別號なり【焦尾琴】に見えたり元祿刻本の書目録には隆達小歌二巻と

長唄

隆達なげぶし

みえたり

○【恨のすけ草子】(慶長十九年の草子)あやめ殿かれうひんかの御聲にて當世はやりけるりうたつぶしとおぼしくて吟じ給ひけるは君が代は千代に八千代をかさねつゝ岩ほとなりて苔のむすまでなげぶしといふもの即これなり近江すげ笠などの歌のふしにんゝやあこれのといふ事有なげぶしは末をやんとはねるらうさいは猶古きものにや【松の葉】になげぶしの事元來江戸らうさいのふしをなほしてうたひきたるとかや音聲しめやか(寛永十九年の【吾嬬物語】にらうさいの一ふしに三絃の音ひゝしく聞ゆなど見えたり)に調子ひくきかたよし云々古へ大坂屋河内風といひてうたひしはかみしもの句さらりと三味線あひしらひも短く歌のとまりはふしにていひすてゆうゝと聞え侍る云々中頃より二上りの調子を用ひて此ふしをうたへることありこれには本調子とつれひきよし(此河内風といへるはなげぶしなり大坂屋とあるは誤なるべし【一目千軒】なげぶし明曆の頃かしはや又十郎抱へのたいこ女郎河内といへりしもの諷ひ始めしなり云々其後正徳ころ三文字屋又左衛門抱へのたいこ女郎よし松といひしものこの歌に名人なりよし益諸方へ弘まり行はる其後山本やつやのかゝへ小倉といふたいこ女郎上手なりし寛保の頃迄居たりしなり今にこの一ふし相續して名物とぞなれりける島原のなげぶしよし原のつぎぶし新町のまがきぶしとして古來より三名物なり(元祿の頃行はれし節なりといへれど天和二年に刻したる【武藏曲】遁世の餘所に妻子をのぞき見て(芭蕉)つき歌耳に残るよしはら(峽水)

一上り
下り調子

○一下り調子水府史館總裁にてありし小池源太左衛門中根元圭に逢て音律のことを聞ける時二上り三下りなど三絃に申候一上り一下りと申こともこれ有べきにいまだうけたまはらず如何と申候へば喜び候て申候は一下りの調子の音曲を引て見候へとて銀座のよほど三絃ひきの者へ先年中候て引せ申候に

なげぶし

とかく妙音出申さず候ひし然る處近年何がしと申座頭一下りの手を引出しことの外おもしろき由頃日うけたまはり候といへり元圭は律に委しく日本の律學取立んとして故ありて打捨たりとぞ

○【紫一本】金輪寺の條抑なげぶしと云こと往古にもなきに非ず野曲にも是あり道遙院殿御歌におもふことなげぶし聲にうたふなりめでたや松の下にむれゐて紀逸が【雑話抄】に光廣卿御作自筆のなげぶし「おなじ空なる影かとおもてみればあやしや月さへさまと共にみぬめはかはるけな【松の葉】(五)なげぶし唄百首ありその内にあめのふる夜は一しほゆかし云々又のべにかはづのなく聲きけば云々などあり是今もうたふめりやすの唱歌なり延寶八年【洛陽集】なげぶしや親父初音のほとゝぎす(行正)【五元集】浅妻舟につゝみを入れて月をみる女の水平に扇かさしたる畫に「思ふことなげぶしは誰月見舟爰は山中もりのかけ月夜からすはいつも鳴と云ふ隆達が歌を立入て秋もゝのゝ月よがらすはいつもなくと伊丹の鬼貫が句あり

○【春臺獨語】に盲法師妓女などのうたふ歌も寛文延寶の頃迄は長歌らうさいなどいふ曲ありて俗ながら詞やさしく節もゆるやかにおぼらしき事ども多かりかりそめのそゝろ歌も小倉よし野などいふは詞やさしくよき人の前にて諷ひても聞にくからず

さゞんざ

○慶長ごろさゞんざと云歌はやれり【竹齋物語】に石村けんげう參られて歌のてうしを上につけり情は今思ひのたねよつらきは後のふかき情よ雨のふるよにたがぬれてこぞのたそおしやるはよそ心さかなさかづきとり出したびん／＼申てはづかしけれど又さゞんざなどうたふ云々【一代男】越後寺泊の條に六七人聲して三國一しや拍子があふのあはぬのと同じことのみうたひけるほどに亭主にやうすをきけば此ごろ上がたよりさゞんざと申小歌がはやり來りこゝもとの若い衆いろ／＼けいこいたせども聲がそろはぬと申はべるさても世はひろいことを今おもひ合すしばがきをどりはしつてかたとたづねける

しげがき
踊

ほそり

口説

加賀節

に夢にもしらずと申云々しげがきは承應明曆ごろはやれりこれ田舎の流行におくれたることをいへり
○【大幣】に【貞享二年】新曲とて載たるは皆長き歌なり【松の葉】(元禄十年)には是を長歌といへり(天和頃の歌舞伎番付をみるに小歌とありて長歌とはなし又あやつり座にも小歌端うたなどしたるなり)
○【大ぬさ】の頃までは長歌といふ名いまだあらざりしにやその長歌どもは江戸浅利檢校佐山檢校京朝妻勾當々風引出すとあれば歌舞伎より起るにあらずほそりは【大ぬさ】破手の内に唯ひと歌あり【松の葉】には下總ほそりとあり七歌ばかり載す【大ぬさ】に出たるも入たり(【小歌惣まくり】にほそりづくしとありて其歌の内にほそりのヤレ出ところはやまとのつぼさかそのふしなをすなみのゝたにぐみとあるは西國順禮の歌より出たるに似たり)口説は長歌にあらず【松の葉】端歌の内にくどきありもと平家曲節の名なり舞なども口説あり
○【昔々物語】享保よりなれば寛文四年に當るしかれ共寛文元年に法度ありて今の如く芝居三ヶ所に定れり六十年已前稱宜町の狂言勘三郎座に多門庄左衛門野郎に出来島小ざらし花井才三郎上村吉彌玉川千之丞山川内記玉川主膳これらは稱宜町にて無隠美男の拍子利なり聲もよくこれら寄合加賀節といふ歌を唄ひ出す諸人感ぜり最前のろうさい節に負ぬ歌なりといへり【錦緞】に一とふしを加賀商人の聲おかしやりての下戸や宵の間の月(其角)是元禄中の付合なり天和三年の文三千風が【行脚文集】加州金澤の文に燕樂の加賀節も此時にはやり出悲哀の柴垣早歌は遠く廢れて吟人さらになし加賀節唱歌は【松の葉】に出たり短歌なり【松の葉】三端歌の内かぶぶし「つとめものうきひとすぢならばとくもきえなん露の身のひかけ忍ぶのよる／＼人にあふをつとめのいのちかな」是ほどの歌六うたばかり出たり山東京傳が【大盡舞考證】に秦の始皇のみかりの時云々此一段加賀ぶし上るりの文句をとりにて作りたるものなりと云りこれ今ときはづ節にかたる老松の文句なりがぶぶし上るりとは件の端歌

めりやす

めりかり

のかぶぶし上るりにはあるべからず宮古路豊後が弟子にて脇をかたりし加賀太夫がことにはあるべからず元禄十四年板【諸藝太平記】に此文句にふし付したるが出たり
○今歌舞伎芝居にめりやすといふはおもふに江戸らうさいの移りたるもの歟(澤標)に明曆中都島原にてなげぶし江戸よし原にてつぎぶしといへるもの大にはやり萬治年中大坂新町のまがきぶしといふ元禄寶永の頃迄これを相傳してありし正徳年中より中絶して古ほど行はれず今も當津廓の内にこの唱歌に妙を得たるものありそれに聞侍りしに都嶋原のなげぶしと江戸半太夫ぶしとの間のものにて幽玄にて面白き歌なり云々
○手覆のめりやすは手の大小ともに合ふなれば其義をとりて此歌狂言の合方によくかなふとの心に名付たりといふは非なりめりかりは音聲の甲乙をいへり上下輕重の差別なりかりを俗にかんといふある音なりめるはさがる聲なればめるは易きといふ義なるべし(手覆のめりやすのことは服飾部に出たり見合すべし)俗にめりかりのきくといふことはこのめりかりの省きたるなり豊前の國なる和布刈の神事のこととするは非なり
○原武太夫が【斷絃餘論】は元文年中三絃を弾ことをやめて年經て此論を著せり昔の上手はさのみ達者を好まず種々弾かたに趣段ありてひきしめゆるめのびちとみおこづきとび込さまの間の拍子手くだか有て歌も聲よろしきばかりをば管翫せすかたり味に工夫せし故面白き手くだか感應なることあり今に其歌のこりやんことなき席高位の聞にもふつとかならず歌の文句もやさしかりしが今はめりやすといふことはやり野鄙なる文句歌のさまもいやしく成ていつとてもむけんとしゝとのかたちめつたむしやうに打つけたゝきつけてひくを達者とやらいふよしなり【めりやす豊年藏】に長き歌あるを件の説に合せ見れば歌の長端にはよらず【歌舞伎事始】(二)に扱又一部の内毎事樂屋にて三絃をならす是を

めりはり

めりやすと云ふ【甲陽軍鑑】にも出たるめりやすきと云ことを下略して是を名付る同書(四)或人云めるははるはるはめると云ことあり藝をなすものせりふをはり突こみてする時は見る人めるなり仕打骨髄になす時は見る人はるなり因てめりはりの大事なりこれらによりて見れば樂屋にてひける三絃をいへるかもとにてそれに合せうたふ歌をもめりやすといへるなるべし

○山崎久卿云【女里彌壽豊年藏】といふもの寶曆年間の刻本にしてめりやすを集たるものなるにその中に長歌これかれを載すさればその頃は長唄をも概してめりやすの内に入る是をもてみれば長唄はめりやすの長くなりしものかといへりいかさま原夫がいつとも無間と獅子との形たゞき付てひくなどいへるは今いふめりやすのみめりやすといふにあらざれど【松の葉】長唄あり其歌とも今も上方歌の中にあり然らば狂言に合せ作りたる芝井歌は大かためりやすなるべし寛保のころ佐野川千藏といふ女形聲よくて初めは豊後ぶし淨るりなどを出語りにしたりしが頓て富士田吉次楓江と名をかへ歌うたひと成て大に行はれぬこれより歌舞伎唄を世に慨こと盛なり後安永頃荻江露友よくめりやすをうたひたれども楓江には及ばず

土手ぶし

○土手ぶし【洞房語園】に尾高如醉齋といふ隠士あり寛文の頃鶴鶴組吉屋組等の男達のうたひはやりし土手節といふ小歌は此翁の作なりといへり同卷に醉翁作とありて土手ぶし「かゝる三谷の草深けれど君が柄とおもへばよしや玉のうたても(うてなか)おろかでごさるよ所のみるめいとはぬ我じやにおわらひやるな名のたつに」其頃吉原へかよふもの往來にうたひしなり(或人云【吉原雀】は富士田吉次がうたひし唄なり市村羽左衛門吾妻藤藏所作をしたり其唄にそれあみ笠もそこにおけ二階さしきは右か左かおくさしきでごさりやす云いへるは土手節を其儘とりたるなり(此歌三絃の手は原武が作なりとぞ【京鹿子】も同人の手付なりと云り)

大盡舞

○大盡舞は俳優二朱判吉兵衛が作の小歌なりといへり吉兵衛小唄の上手なるよし【吉原徒然草】に見えたり吉原にふるき小歌の残りたるは是のみなりとぞ吉兵衛は俳名を一共と云ふ小男なれども藝の位上と吉に至る其頃乾金の二朱判は小くて位よき金なれば准へて異名により明和二年八月十六日享年八十餘にて死すと云り(醒齋が【大盡舞考証】の説もかくのごとし)其文句は一人の作にはあらじ平澤氏が【後は昔物語】に我父の友に小久保萍也といふ老人ありこれも乙卯の生れにて我に六十とし上にて此老人の咄に几帳といひし傾城は紀伊國屋文左衛門に請出されたる女郎にて有けん此几帳になじみたる士は此隠居の覺えたる男と聞えしが名も忘れたり几帳紀文に請られて力を落せしを餘の人半太夫ぶしに作りて語りたりとて隠居も語りき「舟の着たるサア起されふつゝりはつたり寐入らぬ儘につく」と宿の首尾のみ案すれば我黒かみもしらがとなり樂しみ盡て悲しみのなんだ袂をうるほせり几帳にはだまされて二枚五番の小脇差純子三本もみ五正綿の代迄とり揃霜月半に送りしに終にそれとてみせもせず今は文左が寶もの」と云ふ文句なり云いへり【松の葉】あづま淨るりの部半太夫節にきてうといふ歌即是なり少し異同あり此老人の覺えたるは本の儘にて文左など名も出たりそれを二人が中とかへて廣くうたひしなるべし大盡舞にはこの贈りものを紀文がことにしたりさにはあらず

半太夫ぶし

かちるといふ事

○今俗何藝にてもすこしばかり學びたるをかちるといふはもと三絃にのみいひし事なり【伊呂芝居】といふ草子に當世女の子をそだつるやうをいふ所何市くらゐの座頭藝は上手なれど隙などいふを聞出し此わろにかけて時行歌よしの山は鼠がかぶらふとも二上り三下りにあたまから仕込てらるふ云々【色競馬】けいせい吉野人の琴ひく所爰を通る熊野同者手に持たる柳の葉笠にさいたま柳の葉といふ歌を今の目から見れば鼠のかぶるやうに琴かきならせば扱もこの幾筋もある糸を一時に指は唯三本にて引ならし給ふは名譽なりと聲そろへて譽たてけるこれ近代なげぶしといふはなぎぶしのかはりにて籠

なげぶし

の鳥かや恨めしやと『好色大鑑』の作者が作りかへたる唱歌の根元なりといへり投ぶしをなきふしとす
るは非なりその歌『大鑑』の作者箕山が作も有べけれど悉くさにはあらず

よしの山

小倉節

○よしの山は岡崎よりも古き歌にや『東行話説』(安部泰邦卿寶曆十年記)岡さきにかゝる云々我娘と
もの筑紫琴を習ひし時花のふゞきの歌上げて後岡崎女郎衆と謡ひしを思へばさそなむと左右を顧れと
もさやうのものなし云々花のふゞきはよしの山の歌なり昔は初めに是を教へしなり『春臺獨語』に小
倉よしのなどいふは詞やさしく云々いへるこれなり小倉をどりは「をぐらの野への一もとすゞきいつ
かほに出てみたれあをおたまこがれて秋こがれつ」といへる歌なり『卜養集』に八月十五夜の月をみ
つまたの波に船を浮べて云々世の人も酒もりをすたれふねなどにて小倉節といふ事をうたふその頃の
歌に「さすやうでさん／＼さゝぬはしのお夜のつまとおたまこがれて秋こがれつ」と云々『紫一本』に
宵國川納涼の所に當世風流伊勢音頭さすやうでさゝぬは人まつ宵のから木戸(延寶己年より伊勢をど
りはやるといへり小倉節のかへ唱歌を伊勢音頭にうたひしか)

川崎音頭

間の山

伊勢音頭

○川崎音頭の始は間の山節なり『一代女』(六)神風や伊せの古市中の地藏と云所のゆさん宿に身をな
して所からとて間の山節あさましや往來の人に名をながすといつれがうたふも同音にしておかし云々
伊勢兩宮の間なれば間の山と云ふ今も淨るりに加はりて間の山と云ふ音節残り『伊勢名所圖會』に
古市は昔の市場なり古市も間の山の内にて間の山ぶしをうたひしものなるに物あわれなる節なる故い
つの頃よりかうつりて川さき音頭流行して是を伊勢音頭と稱し都鄙ともに華巷のうたひものとされり
古き文義は甚雅なり今も年々新作出といへり川崎といふも其わたりの里なり舊名川崎の里と云ふ又按
に小倉の歌におたまこがれてとある此歌を間の山にてうたひし故お杉お玉といひはやしたるにやお杉
といふもさる類にうたありしなるべし

琵琶法師

平家物語

地神經よみ

天夜尊

都方城方

雨夜の城了

城をいと訓しこと

○盲女 御前腹とり(按摩 足力)

平家物語

樂はすべて瞽者の業なるべきを唯琵琶は蟬丸よりこのかたむねと盲人の業とす故にびは法師と稱する
事古より聞ゆ『源氏物語』明石の巻入道びはの法師になりていとおかしうめつらしうてひとつふたつ引
出たり【抄】云小右記寛和元年七月十八日の條を引て云召琵琶法師令盡才藝給少録云々あり後世【平家】
出きてより専ら是をうたふ【平家物語】作者のこと數説あり普通には【徒然草】に後鳥羽院の御時信濃前
司行長遁世して慈鎮和尚の扶持をうけ平家物語を作り生佛と云ける盲人に教て語らせけり武士の業は
生佛東國の者にて武士に問聞てかゝせけり彼生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師は學びたるなり【參
考】云行長入道慈鎮和尚に扶持せられし故にや平家のふしもおほくは台家の聲明のこゑに似たる所あ
り【六道講式】のはかせ及び叡山大會の時などよみあぐる聲明のふし今の座頭のかたるによくうつりの
まがふ所多し又頓寫の時是をかたるも台家より始めりといへり【和事始】に云【臥雲日件録】むかし爲
長といふ者平家物語十二卷を作る留めて播州にあり後性佛といふものこれを音曲にのぼせて歌詠すと
いふ是瞽者平家物語をうたふ始なり性佛の後を如一掄技と云ふ如一如が弟子二人あり一を覺一と云ひ一
を城一といふと有り【一枝軒隨筆】には如性城一其弟子城賢恕一其弟子明石角一高師直に鶴語り聞せ鹽
冶が事起る云々といへるは當道記録の説にかなへり角一は【太平記】に覺一とあり
○法師の平家を傳ふるもの一部十二卷に通ずるを一部平家といふ其外に鏡劍の卷と云ことあり(今こ
の劍卷を【太平記】に附るは誤なり平家物語に屬べきなり)是を大秘事として謾りにうたはす故にその
文段をしらす世に傳ふる古寫本多く異同あるは瞽者の口授其儘しるしし故なり瞽者の用るはかたり平
家として印本とは異なりとも云り【長門本】十二卷【東見記】云長門國赤間關に平家物語あり常の平家よ

り多し阿彌陀寺は安徳天皇の寺なり)常の平家物語とはいたく異にして【源平盛衰記】の異本といふべきものなり毎卷長門國安徳天皇儀奉納信濃前司行長以自筆本書寫畢と記せり又【八坂本】十二卷奥書云寛永三年春の頃藤田檢校城慶加賀國にて筑後方檢校城一用ゆ雲井の本と奥書侍る平家物語を求め侍りき此本則雲井と奥書侍る故に藤田檢校城慶此本を用て八坂方の平家と號す【平家物語抄】廿四卷は作者詳ならず十二卷を上下に分て廿四卷とす本文を記し其頃に註釋を記すその中抄傳記圖經等の説と載す【平家物語考證】十二卷松堂閑人四醉生編、洛陽後學源道格集、羽林中郎將藤原定俊補、とあり此書物語の本文は要をつみて全文をのせず諸書を引用して註す事甚詳なり)

○【醍醐雜抄】云平家作者事或【平家雙紙奥書】云、當時命世之盲法師了義坊實名如一之説云、平家物語中山中納言顯時子息左衛門佐盛隆、其子民部權少輔時長、作之、又【將門保元平治】已上四部同人作云々、此時長先作平家廿四卷之本、籠伊勢太神宮訖、是佐渡院之御時也、順德帝是也、後嵯峨院御在位之時、吉大貳入道輔常作之、平家物語、民部少輔時長書之、合戰之事依無才學、源光行誂之、十二卷平家資經卿書之、同書又云、又【鵲談集】第七云平家のものがたりは民部少輔時長かきたりける合戰の中をばさいかくなしとて源光行にあつらへたりけるとなむ十二卷平家と云もの資經卿書之

琵琶法師
參院の事

○びは法師參院事【薩戒記】應永卅二年六月廿七日、云々、藏人中務丞源重仲來密談、曰近日主上上皇御中不快、其故召琵琶法師、可開召平家物語之由、自内被申院、無先例不可然六由有御返事、同閏六月廿一日己丑、天晴、依召參院琵琶法師參人、語平家物語

○【貞徳文集】(卯月四日條)今朝都方城方檢校衆勾當列座平家聽聞申候云々調子甲乙明に相交白聲又は二重三重被線上候面白事無申計候また(九月十六日の條)夜前平家殊勝之由檢校衆被感候云々指聲白聲口説中音三重自由自在誠に普覺都も可被及難候物語節は書寫寺聲名之聲句被摸山候必定候哉云々【雲日件録】に爲長平家を作り播州に留むと有によりて書寫寺の聲明を摸せりといふ説もあるなるべし白聲とは今かなきり聲と云是にや歌舞妓女方玉川千之丞聲よくて高安通ひの小歌をうたふ狂言大にはやりしを【花洛六百句】に近江萩武藏調布千之丞聲かなぎつて伊せの濱萩と云句あり前句は玉川の名物をほめたり脇にいせと云へるは此もの後に伊勢に退きたればなり扱このかなぎつてといへるを【西鶴大鑑】に千之丞が風吹はおきつ白聲にて諷ひ出して家體の御簾をあげての面かけ云々いへるにても知べし【俳諧懷子】(十)ことばの色もやさかたにして平家きく人引とむる琵琶法師(松安)やさかたを在名八坂を取なしたり

地神經よ
み
くわうじ
ん

○一種盲人琵琶を鼓し地神經を誦して竈神を祭る佛説地神經一卷あり鄙俗の文字にして藏中になきものといへり(くわうじんは障碍神にて如來荒神鹿荒神忿怒荒神の三身を三寶荒神とよべり无障礙經に出たり竈神を荒神と稱し祭る佛説になき事とぞ)この竈神をなすものを今はひばほうしと呼で當道の替者は賤しめて部類を異にするものなり古へびは法師といふはすべてびは彈て平家かたる者をいふなり賤きびはほうしも古くありしなるべし直幹中文の書卷物に地上に菰を敷て居りびはを彈て錢乞ふさまの盲人をかきたり(享保十三年戊申九月十九日地神經讀盲目官位院號袈裟衣御停止之儀先年被仰出候處遠國にては猥に成候と相聞候間向後在々所々に至迄猥に無之様急度可被申付候云々)

天夜尊

○【當道大記録】(盲人傳書)祖神天夜の尊と申奉るは仁康親王の御事なり抑此尊は仁明天皇第四の皇子光孝天皇御同腹の御弟なり(當道式目)には光孝の御子なりとあり(御兩眼しむさせ給ひ貞觀十四年壬辰二月十七日御歳四十二歳にして薨じ給ふ御法名法性禪師と申す云々【當道式目】には洛中の盲人を集め御伽となし御母公の御いたはりに依て奏聞有てかの盲人等に勾當の女官を賜また尊へ大隅日向薩摩三ヶ國の[]檢校の官位の内を以て御領に賜り年々貢物を船に積山城國鳥羽の湊に漕入綱引す

名字の最

初

筑紫方

八坂方

飯東方

總檢校

紫衣勲許

一方

八坂方

綱引

漕入

涼の塔

尊の憐愍有て盲人是を配分す其後停止其代として〔たまふ〕

○當座名字の最初は後宇多院御宇城一檢校在名筑紫方是は菊地某庶流にて其頃筑紫に住居たるが故に號す城一の弟子在名八坂なり伏見院御宇久我殿の御舍弟にて八坂塔の邊に住居たるにより八坂と號す一方の初は如一檢校是は城一弟子在名坂東其頃坂東に住居たる故坂東と號す一方中興は覺一惣檢校是は如一が弟子在名明石其頃足利家の庶流にて播磨明石に住居たる故なり是職役惣檢校の始なり云々
○檢校へ紫衣を勅許の宣旨蒙りしは百三代後花園院御宇竹永惣檢校なり平家琵琶の最初は性佛檢校なり是は四條院御宇攝政家道公御孫なりといへり【當道要集】云四條院御時性僧とて佛あり比叡山檢校なりしが俄に盲人となり山王の示現に依て平家物語をかたる云々城一檢校在名筑紫城一弟子二人有一人は如一檢校とて一方の最初在名坂東一人は城玄檢校とて在名八坂八坂方の最初この時一方八坂方兩派に分る今の綱引(正月九日)漕入の儀式是より始る又は石塔とて毎年二月十六日當道出仕かの尊の祭儀をなす又一萬卷の心經を讀國土安穩を祈り卷數禮物相添久我殿へ納む云々二月十六日石塔とて都鄙の檢校勾當末々の座頭迄出仕綱引とて職祝儀の平家を語り始其後頭人延喜聖代を語る六派より五句の平家を勤同十七日未明東河原に出仕諸道石塔を積是は天夜尊の御吊と號す三月二十四日に御經流しとて法華經を書寫し兩職事檢使にて加茂川へ流す事是は安徳天皇の御吊と號す趣意は平家を語るを以て當座の家業とすればなり六月十九日涼之塔出仕石塔におなじ今は石塔に河原には出ず佛光寺高倉にて清壽庵といふを設てそこに天夜尊其外あまた檢校の位牌あり爰に詣づるなり久我殿より警固の人來る又右等の會集に一老は出ず二老より出席あり座次は三升の紋のやうに居る衆分は中座なり是世諺にいはゆる座頭の中さしき也とぞ石塔のこと【雍州府志】陵墓門に見えたり清壽庵を清聚庵とあり【望一后千句】涼みによりてひくびはの音大瓶をくみはじめぬ職の前これ六月の集會をいふなり今も大瓶に酒を盛て出すことなり

雨夜の城

○天野氏の【鹽尻】に昔朝家盲人を憐み玉ひ上加茂封境の内に田疇を置て歸する處なき盲人を扶持し玉ひ又日向國に官稻有て衆盲の食に充給ひしと云々は又療病院の類なるべし(中世大地の寺に敬田施藥療病非田の四つの院を建貧窮及び重病のものは此内に養ひ其勇壯になりし者には業を授け生を遂しむ凡此四院の内敬田院のみ僧侶の舎にして残る三院は多くは惡疾穢火の者聚り或は一且食せしものもあればそれより準じて彼三院より出たるものゝ末は乞食の部類と呼なり云々)
○昔天王寺の四院は攝河兩州の内に官稻三千束を費用に賜りし古記に見え侍る然れ共生佛已來如一覺一等が如きは又別にや殊に覺一は明石檢校と稱し尊氏將軍の族なりし是より盲人世に感ありといふ又城了が聞雨の歌「夜の雨の窓をうつにも暗ければ心はもろき物にぞ有ける天聽に達し夜雨と勅號を下されしとかや(後小松院勅賜なり)盲人の事かける物に光孝天皇の皇子明を失ひ給ふて雨夜の御子と稱せしと云々帝紀を考ふるに光孝三十三子にして雨夜といふ皇子なしおもふに雨夜の城了が事を傳へ誤れるにや光孝帝を小松の帝と稱し城了に號を下されしは後小松帝なり故に事を誤り記を作りかくいふにや例せば或書【黒谷上人九卷傳】光孝帝の姫宮玉判加陵風芳といふありし是江口神崎室兵庫等遊君の濫觴なり或云八人の皇女を七道に遣して君の名をとめなんと傳ふ按ずるに光孝帝にかゝる御名の皇子ましまさずすれば當時天皇狐獨の窮民を愍み所々に田を置て恵み給ひしを後世誤りて皇子ぞ姫君ぞといひ傳へ侍るなるべし蟬丸を延喜帝の皇子といひ又乞食の祖といふもこのたぐひかといへり
○城字都字のこと【庭訓往來抄】びは法師中頃は盲たる者入道して鼠色なる衣を着てびはを袋に入れて廻なり云々近代公家に或公達の盲目ありしを直垂をきせて京中ばかりを經廻られしなり餘りに平家面白かりしに依て禁裏へ被召琵琶を弾じ物語をせしなり其恩賞に城といふ字を賜るやさ方は上につくい

城を一と
調しこと

ち方は下につくなり何れも城字なりといへり此こと正否はしらず城字を一とよみしこと都の字用るが如くなりしことあり【醒睡笑】(推は違ふたといふ咄しの内)和泉の堺市の町に金城といふ平家の下手ありといふ金城にキンイチとかなを付たるは前説に合へり市の繁昌は都城にあれば義を假りたるか心得がたし【五元集拾遺】凡蟬丸より官をつく座頭の都とはいかにといはれて「三味線に引てのこりし四ッ緒の一はめくらの名になりけり然らば城とはいかにといふ時「幸に成あかりたる土めくら城といふ字のかきのぞきせよ【古記録】には檢校を建業とも書たり【二水記】永正元年五月七日云々福一建業語平家云々(これ記録がきの假字なり)

盲女

○盲女は【甘露寺職人歌合】に琵琶法師と女盲と番ひたり其繪髪をさげ眉作りたる盲女赤き衣きて上に白き衣打かけたるが鼓打て歌うたふさまなり繪の旁に宇多天皇に十一代の後胤いとうか嫡子にかはづの三郎とて詞書あり【曾我物語】などうたへるにや其歌及び判詞に大鼓かしら打といふ事あれば舞まひの類なるべし(舞まひは此【職人盡】の内曲舞まひ白拍子と番ひてありことに盲女は舞ふべくもあらず但大かしらは鼓を打故なり【謡曲外百番】小林と云曲ありごぜども八はたに詣て内野合戦山名が臣下小林の上野介がことをうたふ處惣じてごぜ達の謡には女御更衣帝王の御事をも謡に作てうたふは習ひ云々これ【職人盡】の女盲と同じものとみゆ)

ごぜ

○今女盲をごぜといふもと御前は貴人の邊なり故に人をうやまひていふ詞なり物語草子などに多く見えたりおまへたちといふは御前に侍る人をいふなり今も音にて呼ながらごぜんといへば重き詞なり物語などに殿は男を申し【源氏】玉かづらの内侍をかんのとといひたるもあれどそはまれなり(お前といふは女を申すならひなり(名物の琵琶に殿お前と云があり【胡琴教録】に殿お前の琵琶の繪のことをいひて其人の形男をかけるを殿と女をかけるをばお前と號す)盲女もやむことなきおまへに侍るよ

りごぜとはいひ習へるにや又は替女の音などにや【落穂集】に我等若年の頃迄は躍子杯と申者は縦令いか程高給を以て召拘申度と有之候ても御當地町中には一人もなく三味線と申物をば盲目の女より外にはひき不申事の様子に有之云々去に依て其節は大名衆奥方には替女と名付たる替女を二人三人も拘置お慰など、有之節は三味線を鳴し小歌やうのものも諷ひ座興を催申事に有之候當時は件のごぜ杯と申者沙汰もなく躍子三味線ひき計りの様に罷成候は元祿之始已來の義にても可有之哉とあり【人倫訓蒙圖彙】に女盲が男に三線教る所をかけり其條にお前は光孝天皇の御子雨夜の前にはしまるといふ説あり是もれきくのおくがたへも出入又はいとけなき娘子に琴三線を教へ侍れば身持きやしやにありたきものなりといへり此草子には座頭の條には雨夜の御子の事れ子なく却てこの處に雨夜の前と女御子としたるもおかし

○漢土には【陽谷漫錄】(宋人)京都中下之戸、不重生男、每生女則愛護加捧壁擊珠甫、長成則隨其資質、教以藝業、用備士大夫採拾娼侍、名目不一、有所謂身邊人、本人事人、針線人、堂前大劇雜人、折洗人、琴童、棋童、厨子、等級、裁乎不素、就中厨娘最爲下、云々

陶眞
按摩

○【堯山堂外記】曰杭州男女替者、多學琵琶、唱古小說平話、以覓衣食、謂之陶眞、云々
○次にいふ按摩は【令】の典藥寮條下に師二人博士一人生十人と見えたり接骨もこのわざなり【榮華物語】(布引の瀧)み奉らせ給てなかせ給ひければおと、(宇治殿)はなになくいたきところやある(東宮の給ふなり白川天皇なり)はらとりの女にとらせよかしわれもさこそはすれと有はらとりは按摩なり【續五元集】あんまとり貴人頭上もはりまはす座禪の影を正うつしなり【松の葉】あくしよ八景「かふるやり手にたいこ持ごぜやさとうにあんまとり

腹とり
按摩
笛を吹く
事

○按摩とり笛をふく事【太平樂府】に河東夜行、按摩痲癬吹笳去、溫飽齋麴焚火行(是明和六の撰なりこ

の頃めづらしきことどもいふにや) 江戸は其後天明七年【狂詩諺解】に按摩の笛を吹は近ごろの事なりといへり【甌北集】に兒童蔽背詩あり兒童娛我度良宵、如蕨拳輕把背蔽、一个西瓜分八片、阿翁大費爲酬勞次に云【雲谷臥餘】に朱少章名辨と云もの建炎年中金の國に使に行て灸二百餘壯をすへたる中に排律二十韻を作りその内の句に煙微初灸手、氣烈漸鑽皮、こゝにて世俗初めの三壯を皮きりと云是なり

○足力【福富双紙】に姫か夫の腰を踏む處あり

薦僧 (尺八幕露、俠客尺八を吹、こもの躰古今異なり) 鼓弓 (らへいか、提琴、胡琴) 四ツ竹

(歌板) 木琴 (擊甌) 風樂 (オルゴール) しやぎり (風鈴) 音律の妙 (鸚鵡石、山びこ)

薦僧
幕露
馬ひじり

薦僧は【甘露寺職人盡歌合】に幕露とあり、其歌に馬ひしりともいへり【徒然草】にしら梵字といふ幕露師の仇なるいろおし坊と云幕露とかたみにつらぬきあひて死たる物がたり有てぼろ／＼といふもの昔はなかりけるにや近き世に梵論字梵字漢字などいひける者其始めなりけるとかや世をすてたるに似て我執ふかく佛道をねがふに似て鬪諍を事とす放逸無懶の有さまなれども死をかくして少しもなつまさるかたのいさぎよく覺えて人のかたりしまゝに書付侍るなりといへり幕露といふものその所行右のごとく其形状は【ぼろ／＼の草子】(明惠上人の作なり)に兄弟の出家あり兄を蓮華房弟を虚空房とぞいふ兄は念佛修行に諸國を廻り弟は活僧の風を學び頭髮を半にきりて繪がきたる紙衣をきて一尺八寸の太刀をはき八尺の檜木の棒をつき諸國を行くといへり(尺八はこの腰刀の寸法なれば後にこれにかへたるにや) 此さま【職人盡】の畫にかなへり髪は散亂るゝ故に鉢巻をなし刀をさし黒き袴に白き衣着たるは紙衣なるべし兼好が物語の幕露此さまにこそ【沙石集】(八)ある入道法師云々所領得替の後はひたすら幕露々々の如くにて惟に紙衣をきてねるその頃いまだ尺八をふかず其後薦といふはむしろをも負てありければなり

こも僧尺
八を吹事

○【三十二番の職人歌合】に算おきと薦と番ひたり題は花と述懐なりこもの歌「花ざかり吹とも誰かいとふべきかせにはあらぬこもか尺八」さし入もみるや酒やのかすほうし聲をかへてもこふは茶がはり判詞に薦僧は三昧紙きぬ肩にかけ面桶腰につけ貴賤の門戸によりて尺八ふく外には別の業なきものにや云々こも僧の歌糟法師に乞食の愁吟をゆづりてわづかなる竹のふしに世をわふる聲を切いたしけむもわりなき方便とこそおぼえ侍れみそにも酒にもはなれぬ詞にて此かす法師いひしりて聞ゆとあり其こもの畫大概前に引る【職人盡】のさまと似たれども鉢巻せず紙きぬは袖なくて放ちて着たり腰に面桶と薦の巻たるを付たり薦は野外露宿の用意なり今宿なしの乞食をこもといふとおなじぼろ／＼とは【徒然草】に梵論と云名のぼろ見えたれどそれよりの名にもあるべからず今もいふ詞にて物の朽やるゝやふのことにいへるこれなり【今物語】に門の下に法師のまことにあやしげなるがかしらはおつかみにおひてかみきぬのぼろ／＼とあるうちきたる幕露と書はかななり

普化禪師

○こも僧尺八を吹ことは傳ていふ法灯國師漢土より居士四人をつれ來り播州鷲靈峯に居る或人海上を船に乗り通りければ異音の聞ゆるを怪み尋ね求めて山に入ば一人の居士尺八を吹居たりよりて其術をこひ弟子となれり霧海篋は其時の曲名なり禪語に霧海南針と云事あるによる是より其者名を虚竹と改め諸國に遊行せむとす居士語を書て贈るこれ臨濟が録の内に普化鐸を振て市中を唱へ歩行く其詞に明頭來也明頭打暗頭來也暗頭打四方八面來也旋風打虚空來也連架打云々師曰我嘗疑着此僧といふ語なり(師は臨濟なり)是今かの徒の本則と稱するものなり此語書たるを本寺より許され得て遊行し物を乞ふ事なり(江戸には鈴法寺と一月寺の二派本則を出す鈴法寺本則は鈴鐸話普化禪師也常入市振鈴云々ありて疑着這漢といふ處迄書その次に凌霄峯頂看雲人普化堂中第一祖、武州多摩郡青梅嶺山虚空院鈴法寺印現住某印月日與ふる人の名とありまた一月寺本則は普化常於街市搖鈴曰云々疑者這漢とあり

て、尺八、夫尺八者法器之一也謂尺八者大數也取三節之中定上下之長短各所表三節者三才也表裏之五竅者五行也此是萬物之深源也吹之則萬物與我融冥而心鏡一如也、天蓋、夫天蓋者莊嚴佛身之具也故吾門準擬之也靈山一月影輝萬派普化孤風德覆三州、下總葛飾郡風早庄小金龍山梅林院一月寺印院代某印と有り)また虚空といふ曲は右の虚空來に本づくかの輩をほろんじといふは尺八に五穴ありこれを五智の如來に表す其内笛の背にある一ツの穴をボロンに充その梵字派かくの如し佛の種字なりといへり此説うけがたしぼろんじが後に至りて尺八を吹たるなれば尺八よりぼろんじといふ名起るべきにあらず(又俗説に普化の時空中の鐸音を學びて虚空の曲を作れりともいへり)

○【塵尻】にこそ僧の尺八を業とするは良菴といふ禪僧より起るといふと有り良菴はいつころの人にか【狂言記拾遺】の内にもろあんしの尺八の書といふことみゆもしこの良庵か【雍州府志】吸江菴中世有異僧、號朗菴不知何處人也、慕普化振鈴之作略、常好尺八、自號普化道者、尺八一枝之外不携一物、有人問佛法、則吹一吹而去、與大德寺一休和尚善友、有一壇越、建圓音寺於宇治川邊、請之寺中汲江菴其所常住也、居無幾不知其所終、此寺始在橫島良隅、云々後逢祝融變、近年再興黃檗邊、今黃檗派僧住焉、一説虛無僧之爲祖也、非普化而風穴延沼也、風穴好吹尺八、因爲祖者也、

○【都名所圖會】普化慕黃檗門前の南二町にあり傳云中頃虛無僧の祖普化良菴と云もの、墳なり古へ此地は竹林にして都鄙の虚無僧等此竹を争ひ截て尺八に作る故に今荒廢す原普化禪師は異國の人也此良菴と云もの其宗風を慕ふてもつはら尺八を愛し四方に遊ぶ世人これを呼で和朝の普化と稱す【博物志】に云明暗寺京三條より十三町も僧の本寺關西三十三ヶ國の支配釋朗菴一休と常に尺八を吹みづから風空道者と稱す到る處ともむしろに座す依てこそ僧と云ふ

尺八

○尺八は【和名抄】に長笛の次に擧て【律書樂圖】云尺八爲短笛タテマツ縦向吹者也とありて和調なし【容齋

隨筆】に【逸史】云開元末、一狂僧住洛南回向寺、一老僧令於空房內取尺八來、乃笛也、謂曰、汝主在寺以愛吹尺八、謫在人間、此常吹者也、汝當回可謂此付汝主、僧進於玄宗時以吹之、宛是先所御者、云々【呂才傳】云貞觀時、祖孝孫、增損樂律、太宗詔侍臣舉善音者王珪、魏徵盛稱才、製尺八凡十二枚長短不同與律諧契、太宗召才參論樂事、尺八之所出見於此、無由見其形製也【爾雅釋名】亦不載と見え【通雅】に馬融所賦長笛空洞無底刻其上孔五孔一出其背似今之尺八云々こゝにても此器絶て久しく用ひざりし事にや但し【源氏】(末摘花)公達集りて云々大ひちりき尺八のふえなどの大聲を吹あげつゝたいこをさへかうらんのもとにまろばしよせて手づから打ならしあそびおはさうす

(上文に例のおあそびならずとありこの賀儀格別にて常に用ひざる物をも取出しにや)

○【續世繼】保元三年内宴に此笛を再興の事あり是も今ある尺八には有べからず【吉野拾遺】つくしのみや(此宮は後醍醐の皇子中務卿懷良親王なり)おとしもゆかせ給はざる御時尺八をめてんせい妙を得させ給ふよしの川の御幸にふかせ給ふにぞみなれぬうろくづ敷しれず水よりをどりあがりうへにもめづらかに興ぜさせ給へばたぐひなき御事とぞと有りおもふに今の尺八は後世の尺八を禪僧の將來したるより弘まれる物なるべし(曲尺の一尺八寸なり)【古事談】に慈覺大師音聲不足の間尺八を以て引聲の阿彌陀經を吹傳しことをいへり

一節截

○一節截はまた其後に出來しなり東大寺【三倉寶物圖】の内に古代の尺八あり(一尺四寸五分と有り)尺度の考となるべきものなり又法隆寺に洞簫あり同物なるべしともいへり一節切傳來は宗佐高瀬備前守三井寺日音院近江の安田の城長大森宗薫といへり宗薫が傳は【日本人物志】に出たり尺八を吹しものはみな吹事なるべし一節切の抄【洞簫曲】に書目あり(三)いかのほり其外【糸竹初心集】などにも一節切の譜あり貞享元祿ころまでもはやりて琴三絃の合せものに多く用ひしなり【人倫訓蒙圖彙】に一よ切

は尺八より作り出すものなりさまぐの手あり委は【洞簫記】に見えたり當時吹手は相國寺の内原田是齋寺町通三條上ル町今西一音とあり

○【守武千句】にまへは四ツうしろはひとつやくをみよなだのしほやの尺八の穴また【貞徳自注白韻】に鎌倉の海道遠きさめがゐにおとす尺八何としてまし(注)尺八の手に海道下りと云ことありといへり【新竹齋】に五月五日三十三間堂の處此ほとりほろ／＼の住所なりと云につけて古き發句を思ひ出「口によるや尺八ほどなちまき又鉢扣をも暮露といへり【榻鳴曉筆】に夕がほは暮露人といふ者にかとはれて人の家ことに頭をたゝかれし有さま云々あるは空也流の鉢扣をいひしにや仙臺の人の語りけるは奥州のかたにては今もこも僧茶筌を賣ありくといへり然らばこも僧空也流をも學べる歟とも放逸無慚にしていさみある者故に後世遊俠を好む徒尺八を習ひて吹たり【見聞集】に大鳥一兵衛といふもの士農工商の家にもたづさはらず當世異様を好む若黨を伴ひ男のけなげだてたのもし事のみ語り常に危き事を好て町人にもつかず侍にもあらずその者武州八王寺酒屋にて古無僧と争ひして尺八を尻より吹たる物がたり有これ男達といふものゝ尺八を吹始なるべし【江戸枝折】に尺八あはさがらすの鳴ならむ彼五人男などいひしたぐひのわるものを云なるべし大坂新町廓の内に新京橋町新堀町二丁目古へ阿波座にありしを慶長年中此處に移さる因て此をあはざといふ)又この類のみにあらず寛永頃尺八はやりしとみえて【目覺草】(寛永二年の板)獨すみなどの徒然送るはさらなり調子を習ふに用もありといへどもたゞすきのものゝ集り日毎に吹たるおこがまし(其ころより延寶頃の畫などに尺八ひとよ切を弄ぶ圖多し)などいへり此伎に名ある人多くあれ共宗勳はことに高名なり【日本人物志】大森策翁宗勳は其先彦七より出幼より音樂を好み尺八に妙を得たり一日宗勳樓に登り曲を吹しに鶯來鳴て是に應ず後陽成院詔して五調子の尺八を作らしめ給ふ是より其名ます／＼高し今に至る迄尺

俠客尺八
な吹

名ある人
々

こも僧の
體古今異
なり

鼓弓
らへいか

八は宗勳を法とし學ぶといへり(本書漢文今かな書とす)貞享の初宗三といふ者一節切を吹に高名なり宗勳が流なるべし【雍州府志】尺八所々造之其内宜竹之作を妙とす近世指田某が作亦よし笛を吹もの數流あり牛尾流一舛流守田流等なり近世兩流あり宗左流西實流といふ宗左が弟子理庵宗勳といふ者世に稱美せらる其次を宗措といふ今西實流は絶たり云々【萬寶全書】(八)横笛付一節切宜竹は一代に三十管を作る寒竹なり但し裏のせみに法橋と印あり指田二代今も家あり大森宗勳京の住人二代あり但し名判ある物なり同原紹參三代目なりもろすの竹よし原是齋延寶の頃なり尺八に角の内定の一宇あり京逸竹これ又延寶の頃云々(享保十八年板本【江戸名勝志附録】慶長十七年壬子大鳥逸兵衛并其同類數多江戸にて誅せらるこれけんくわを好み辻切をなす惡黨なり)
○こも僧の體も移り變りて今はむかしといたく異なり承應明曆のころ野郎あたまにはあれど散髪にて常の編笠をかぶり白布のひとへを上に着たるはそのかみの紙衣の遺意なるべし此體元祿の初め迄もしかり其頃より袈裟を着たり笠は其後迄も淺く開きたるなり其磧が【賢女心粧】(四)俄に尺八をけいこして袖を鼠色に染させ綿厚に仕立て摺鉢を見るやうなあみ笠をとゝのへ云々いへるがことし寛延の頃に至りて大かた衣服も今のやうに丸ぐけ帯などになりしが笠は下の方廣き窓ある編笠なり(今半人乞食杯の着る笠なり)錦の笥袋を腰にさげ笠も苔める形を用ひて(今の笠にくらぶれば少し淺きかたなり)だて風俗になりしは明和以來なり
○鼓弓は三線と同時に琉球より傳ふ琉球には毒蛇多しラヘイカといふもの有て蛇を食ふラヘイカの鳴聲小弓の音に似たる故に蛇これを怕る其小弓の製糸三筋なり石村檢校之を傳へて三線を作り出せりと【糸竹初心集】に見えたり三線を鼓弓によりて作れりといふは非なるべけれど鼓弓もと糸三筋を用ひし事はさもあるべし寛永ころの繪にかけける鼓弓三絃にて槽圓く弓いと小さし鼓弓も此檢校能手にてあり

しにや【竹齋物語】に又あるかたを見てあれば遊女ゆふくん集りて若き人々打まじりしやみせんこきうにあや竹やしらべそへたる其中に石村けんげう参られて歌のてうしを上につけり云々此器かの蟲の鳴聲に似たる故うへイカとも呼りと見えて神田貞宜が【淺草舟行の記】に琉球にて三線は蛇皮小弓はうへイカといへりとしるせりうへイカは何にかあらん蛇を食ふ蟲はむかでないむかでは鳴よしをきかず【宋書】玉素傳山中有蚊蟲聲清長聽之使人不厭而其形甚醜素乃爲蚊賦以自況といへり蚊は馬蚊にてやすくと云ふ虫なり【本草】にも夏月木に上りて鳴と云り又鷄犬に毒なる事はいへれども蛇を避る事はみえず○【中山傳信錄】また【琉球國志畧】に蝮虎尤多作聲如雀冬夏皆然とあるは螢の類か薩摩大島にへヒリといふ物はなりといへり蛇を食ふやいかゞ【季吟獨吟百韻】に神代よりこそ伊勢をどり歌あまてらす月はこきうの弓張て【春臺獨語】に胡弓といふものは三線のたぐひなれども其わざことにいやしげなる故にや好むものも少く唯めくら法師非人の所作にてやみぬれは風俗を破るほどの事なし【和漢三才圖會】に鼓弓始於南蠻といへり南蠻とはいづくをさすとも辨へがたし唐がらしを南蠻胡椒といふ類にや然らば廣く異國をいふなるべし此器も三味線に種々の形あるが如くその形さだまりたることもなきにや今新渡にあるはすべて竹にて造り槽はさしわたり二寸計の竹を長さ二寸五六分計に截たる面に蛇皮を張たるものなり柄は細きこま竹を用ひたり弓は柄の長さほどありこれを清の人は提琴と呼ぶ古畫に見えたるとはいたく異なれども馬尾にて糸をする其音かはりたることなし又一種槽を木にて作り形は面は方にして裏は圓くこれは蛇皮を面にばかり張りたり其さま圓腹如半瓶楯とも謂つべしこれは馬尾をも用ひ又は細き竹にて磨る【藝苑日涉】潘之恒【絃子記】曰余與吳門張聘夫交、其父子于三代之間、每爲醉心焉、祖野塘以琵琶標特、父小塘以提琴擅譽、今聘夫以三絃鳴、と有り提琴これなり【秋坪新語】(十一)拉胡琴唱奏腔(こは鼓弓にや古より琵琶をのみ胡琴といへども例をもちいはれは是又胡琴なり)

提琴

胡琴

四ツ竹

歌板

り
○四ツ竹此器は今もいと賤きものにて誰もその始など尋ぬるものもあらじ其起りは承應元年その頃長崎より一平次といへる男來て四ツ竹といふ事を始めて手拍子に打世に此を持はしたりと西鶴が【大鑑】にみゆ犬うつ童までも玩しかども貴人の御手に觸らるゝ物にはあらずといへり【人倫訓蒙圖彙】に長崎の一平次といふものはしめ有徳なる者にてありしが藝は身をたすけぬ籠のうづらとやらんにて四ツ竹故に大坂にのぼり芝ぬはられたりと有り【中山聘使略】に相思竹(ヨツダケ)とありて圖を載せ傳へ聞琉球にて是をならしながら踊ることありといへり是又清俗に倣ひしものなるべし彼國の南京繪に女の手にこれを握り鳴して踊るさま畫きたるもの有り漢土にては歌板といへる物は是ならむ【秋坪新語】(八)蘇州に一乞人詩を賦して死す官拾屍得其所書、乃七律一章曰、心性從來似野牛、偶携竹杖過江頭、鉢籃帶露宿殘月、歌板迎風唱晚秋、兩脚踢開塵世事、一身歷盡古今愁、從今不倚人門戶、喫犬何勞吠不休、官憐之爲其棺斂葬之、義塚立石表其事、かく乞丐などの業にて賤きものなれども樂家に用る笏ひやうしも雅俗はことなれど其用は同じ【輟畊錄】(十二)南方或謂折花、曰拗花、唐元微之詩、試問酒旗歌板地、今朝誰是拗花人、また【古杭夢遊錄】(宋耐得翁)に舊教坊用るところ色部のことをいふ内に策部大鼓部云々方響色歌板色などありこの教坊は紹興十一年省よりこれを廢すと云り故に舊といへるなり【金瓶梅】(二十四回)一般兒四個、家樂在傍、櫛箏歌板、彈唱燈詞、(西門慶が家僮女四人歌曲を唱ふる所)また【因樹屋書影】先大人常作觀宅四十吉祥相、有益於世道人心、云々、不在席上接優人曲不以筋并足代爲擊板、その小註に擊板接曲去優人幾希これらは板を筋などにて擊拍子をとると見えたりおもふに歌板にも種々の製あるかこゝにてもさゝらあや竹などのことく用ひて拍子をとる【二代男】(貞享元年)枕踊四ツ竹の拍子に合せて其頃の時花うた唐人の戀するはきつくりきつちやなんどゝわけもなき事のみ云々又

比丘尼が四ツ竹をうちしこと【一代男】(貞享三年板)耳かしましき四ツ竹小比丘尼が定りての一升びしやく勸進といふ聲も引きらすはやりふしをうたひ云々ありこれはあや竹を四ツ竹にかへたるなり(古き畫に比丘尼二人むかひて各右の手に竹を持左は空手にて膝を打ところあり【丹前能】(五)伊勢の處びくにあやをりといへる是なりあや竹は放下の條にいふべし

木琴

○音楽にしやうちやくきんくことつらねていへるは【玉造小町子壯衰書】に蕭笛琴笙候其音純宜々その内に蕭笙候はこゝにて用ひざるものなれど唐土の賦の體にかくつらねたるのみ今は出處も定かならぬ鳴器種々あり須磨ごと(一絃なり)蝦夷琴木琴(木の數十四枚板の裏さまんく)に彫てあり板狭きほど其音甲なり【長崎歲時記】に出島の内酒宴には蘭人黒奴筋を吹木琴をうち國風を唄ふことをいへり)オルゴル等なり按るに【樂府雜錄】唐大中初、有調音律官、大興縣丞郭道源、善擊甌、用越甌形甌十有二以筋擊之、其音韻妙於方響、また【事物紺珠】八缶如水瓊、凡八置之卓上擊之、後唐司馬滔作、とあり朱琰【陶說】按擊甌之風盛於唐、其法、甌中用水加減以調宮商也、習於音而聽者能之、甌取質堅而聲清、此非如點茶佐酒、其憲法佳否上手立驗【溫尉集】中有郭處士、擊甌歌、即道源也、又有馬處士者、善此技、建擊甌樓、張曙有賦、武公業妾步非煙、亦以此名、見【非煙傳】此本因于擊缶、以十二甌主音律、則擊甌變法、後唐司馬滔、以八缶置卓上擊之、又以擊甌、新意參擊缶古風也、楊升庵云今人水瓊本此、おもふに木琴は擊甌と方響歌板とをまじへて作れるものゝ如し今飲席に木琴を學びて瓷器の鉢皿を筋にて打ならすは却て擊甌の古風に近し【長崎歲時記】に出島の内酒宴には蘭人黒奴筋を吹木琴をうち國風を唱ふことをいへり

オルゴル
風樂

○オルゴルは【廣東新語】澳門條下に、寺曰三巴、高十餘丈、若石樓、彫鏤奢麗、云々、有風樂、藏革櫃中、不可見、內排牙管百餘、外按以囊、嘘吸微風入之、有聲鳴々自櫃出、音繁節促、若八音竝宜、以合經唄、甚可聽と是なり又【輟耕錄】に興隆笙、在大明殿下、其制植葉管于柔草、以象大匏土鼓二草葉、按其管則發鳴、笙

しやぎり

首爲二孔雀、笙鳴機動、則應而舞、凡燕會之日、此笙一鳴、衆樂皆作、笙止樂亦止、この笙も似たる物なり
○しやぎり今歌舞伎にて打だしの太鼓をしやぎりといふ【吾吟我集】祇園會の歌に精舎には諸行無常となるかねのしやぎりしやぎりにかはる祇園會是歌かねのしやぎりとつとけたるはかねにもしやぎりと云と見えたり又【松の葉】長歌富士詣に兩國川の氣色をいふ所遊さん船がさはぎ集りてしやぎりのをと(合手)おひやりこひやり／＼こ云々あるは笛の譜なり同草子端歌部つしま祭「津島まつりにうかれ出て云々しんがらにちやんきりしつきりふなあそび云々このちやんきりと有はしやんきりの誤なるべし皆しもじをいふ文句なればなりしやんきりは即しやぎりなりこれに因ておもふに突拍子を今ちやんぎりといふもしやんぎりの訛言にや猿樂狂言に金鼓の音を學びてしやまう／＼といへり【松の落葉】あつま上るり(露の前舟路)ふりあをのけば入舟のめあてにたつるみあかしの上のお寺のさいかい寺しやぎり／＼づでんと／＼うつやたいこの音のよさよ云々【歌舞妓事始】(二)小舞唱歌(上の寺)いつもよりけさうつ太鼓の音のよさよ上のお寺か安國寺か云々せきり／＼ずでんどうとうつたる太このねのよさ(このせきりもしやぎりの誤なるべし)【續五元集】しやきりを打てのり出す舟吉原にあたな娘はなかりけり

護花鈴
鳥おとし
風鈴

○護花鈴などは引板なる子の類にて鳥おどしの具なり其他風鈴は風を知る爲のものにて音を弄ぶ具にはあらず然るに【圓光大師傳】(四十八)上人の弟子法性寺の空あみだ佛は極樂の七重寶樹の風の響をこひ八功德池の波の音を思ひて風鈴を愛してとこしなへにつゝみ持て至る處ごとに必これをかけられけりこれ多念念佛の根本なり云々あり其圖をみるに「薄き板金を」花がたに小さく刻みたる物を糸のさきにつなげるを幾筋も集めてさげたり

○陸放翁枕上聞風鈴詩に流汗沾衣熱不勝、饒蚊乘勢更縱橫、夢回忽覺南風起、時間錚然一兩聲、また枕上

音律の妙

の詩に冥々梅雨暗江天、汗浹衣裳失夜眠、商略明朝當少霽、南檐風佩已鏘然、その會注に都下新作藥玉風響如古佩玉珩瑤瑤悉備とありかの【圓光大師傳】の古畫の風鈴も是なるべし

調子を聞て占ふ

○音律に委しきもの種々奇特あり【閑際筆記】に瞽者城松といふものよく尺八を吹瀧に向ひて吹に笛の聲ばかり聞えて瀑の音せず慶長の初ふと人にいふやうけふ風水に異聲あり此里に禍あらんとて愛宕山にのぼりて是を避けるが果して其夜地震つよくして畿内に死る人多かりしとぞ又【塵滴問答】(五)十二徒の調子を聞て占ふ事あり近代も伊勢の望都と云る座頭など此術を得たり又【歌舞伎事始】に元祿中岸野次郎三といふ歌舞伎の三線ひきありまたそれに劣らぬ山本喜市といふものあるとしの秋虫の鳴聲を聞三絃の調子細めてそれに合せて弾ければ忽むしの聲止たり暫くありて虫また鳴出す時調子を高くして引けれどもそれにては虫鳴止す是より工夫して種々曲節を作れり次郎三は其身芝居に行ずして三絃をならし其日の見物人数多少をしれり鳴神と名付る三絃を秘藏して常に是を以て音律を論じたりといへり(按に鳴神は古近江が作のいかづちなるべし)又寶永頃に岡安の門人にて原武といへるもの(原武太夫を世人原武と稱す)品川に行て三絃を弾けるに常に異なるを怪み沓潮の來へき事を知れりとなん【耳袋】に近きころ名人紫しらべ賜はりし新九郎いまだ權九郎といひし頃日々鼓を出精しける召仕の老婆毎朝茶を持來るが或時主人のつゞみ上達せりと申を權九郎おかしく思ひ其知れる譯を尋ねければ老婆答るには我鼓をしるべきやうなし先の新九郎の鼓を數年聞けるに朝々煎じける茶釜へ音ひゞき聞えける是まで權九郎打るゝ鼓はその事なかりしが此四五日その音茶釜へひゞきける故さてこそ上達を知侍るといへり年久しく聞なれて自然と微妙に善あしも分るにやと權九郎も感じける

○按るに尺八の瀑布の聲に應じ三絃の鳴虫の聲に應ずる各その調子よく合へる故に水の音虫の聲止むが如くなりしにやこは異ながら響石などには笛の聲金の聲は應ぜずといへり【繪軒小録】に伊勢宮川

鸚鵡石

響石

の源なる鸚鵡石を觀たるよしを記して云ふ其岩の上に居て言へばかの石も亦人の言ふごとく對ふ語をうたひ鼓を打三絃など彈ずれば石も亦それゝの聲をなすさゝやけばさゝやく聲をなすわめければわめく音をなす屏風障子のあなたにて人の言ふがごとし一行の内に笛を携て來る人あり試にふきけれどもかつて對へず不審なる事なり云々又奥田氏より言來る志州の海邊安樂島と云所ありその處に又一ツの響石ありて鸚鵡石のごとし其地海畔にて風景尤宜しき所にて同言石と云となんあり(【本朝俗語志】新鸚鵡石志州答志郡磯部にあり長三十間ばかりにして大巖なり音曲管絃ひゞき答ふること一の瀬のあふむ石にかはらず近年きゝ出せしことなりといへり)予も先年磯部村伊雜宮に詣し道に鸚鵡石を一覽したり小き出茶屋一軒あり旅人爰に休らへば其婦三絃を彈て響を聞しむ石よりも十四五間もはなれて三線を彈を聞人は石に近き所に居て聞なりいとめづらしき聞ごとなり試に石に近くよりて手を拍ものをいふにもよく應ずれども少し隔りたる方應對のあやよく分れてよし土人いふ物の音何にても移らぬはなし唯金の聲のみ對へずとかたれり此石山を和合山といふとなんこの石より後人の付たる名にやしらず(此ひびき移ること并戸をのぞきて物をいふも同じかるべし山彦といふ是なり【萬葉集】には山響と書たり予ある時濱町山伏井戸といふ處左右屋敷にて路のかぎの手に曲りたる處にて門立のものもらひ二人して三絃彈來るに逢へり其聲屋敷の曲り角に對ふること彼あふむ石のごとし後に人の話を聞に京師東山の邊に物の響應する處有り俗にあふむが辻といふとぞ【五雜俎】に靈谷寺有琵琶谷拍手輒鳴作琵琶聲其處の形によりて對る聲も異なるにや

山びこ

鸚鵡か辻

○【夢溪筆談】(五)高郵人桑景舒、性知音、聽百物之聲、悉能占其災福、尤善音律、舊傳有虞美人草、聞人作虞美人草曲、則枝葉皆動、他曲不然、景舒試之、誠如所傳、乃詳其曲聲、曰皆吳音也、他日取琴、試用吳音、製一曲、對草鼓之、枝葉亦動、乃謂之虞美人操、其聲調與虞美人曲全不相近、始末無一聲相似者、而草輒應

之、與虞美人曲無異者、律法同管也、其知者臻妙如此、景舒進士及第、終於州縣官、今虞美人操盛行於江吳間、人亦莫知其如何者爲吳音、同書(六)予友人家有琵琶、置之虛室、以管色奏雙調、琵琶絃轆有聲、應之、奏他調則不應、實之以爲異物、殊不知此乃常理、二十八調但有聲同者即應、若徧二十八調而不應、則是逸調聲也、云々【北窓瑣談】に我友源子和が家に常に用る茶碗あり管を吹て双調に至れば茶碗おのづから鳴る子和が父長昌此茶碗を双調双調と呼し

○【湖壻雜記】棋盤山條下に一池石壁高廣、云是龍湫、游其間者、小諾小應疾語疾應、譁然叫笑、答響滿野、人或曳履而趨、中亦若有曳履者、躡其後也、孤坐其間者、每生疑懼、斯境亦佳、然以湖上可遊之地甚繁、屐往々不及、

○【笈埃隨筆】(十二)勢州あふむ石の條嘉粟云智恩院古門前細川侯のやしきの邊りより西に向ひて呼べばしばらくありて答ふ是はじめのひゞきは喰ちがひの壁にあたりてこなたの言はなたぬ内に答へそのひゞき細手西側の家にあたりて答ゆるなり夫故しばらくの間あるゆゑにはつきりと聞ゆあふむが辻ともいはんか又南都東大寺のこだま塚も門一重越て本堂にひゞく故かくの如く同じ又江州八幡の人ありていひけるは長命寺に八幡より行途中に山陰を通れば人の聲よくひびく處あり作事に通ふ路なれば農夫の通ふを憎み如に垣ゆひて人を入しめず

八人藝 三絃曲びき 八撥 羯鼓 八からかね

三線の曲びきは江戸に鳥羽屋三右衛門といひし者三線にて種々の曲を盡す左の手に撥を持そへ太鼓をならし右の手に撞木をもちそへふせがねをならし三絃の曲を弾三人してはやすが如く是を分ちて曲を盡せりと【歌舞伎事始】にいへりこれ今八人藝といふ者のするわざなり八人藝の始りは【一代女】(貞享三年) 萬治年中駿河國阿部川のほとりより酒童といへる座頭江戸にくだり屋敷がたの御恩に紙帳の

八人藝
三絃曲ひ
き

内に入て鳴物八人の役をひとりして間を合せける云々(五雜俎(十二)京師有替者、善琵琶、能作百般聲音、匿屏幃後作之、初作老嫗喚伎者聲、繼作伎者稱病不出、往復數四諄詭勃谿、遂至擲器破鉢、大小紛紜或罵或哭或勸或助、坐客驚駭欲散、徐撤屏風、則一替者、把一琵琶而已、佗無一物也、又有以一人而歌曲擊鼓鉞拍板鏡鏡、合五六器者、不但手能擊、足亦能擊、此亦絕世之伎、惜乎但爲玩弄之具、非知音者也、また【虞初新志】にも八人藝のことあり其文長ければ記さず又蘭書の小冊繪草子の如きものを(書名しらす)見し事あり其内に放下師などにや腹に鼓をかけ胸に笛あり頭上にも鳴器あり足のくびすの上に小き鉦を付片足には撥を付たり歩行ながら打ならすさまを講けりいづこにも似たる事有り寛文年中はやり物を種々いひたる短歌に八人座頭のみせ物に仁王之介が大力と云ことあり此酒樂が事なるべし

○【述異記】(三)揚州郭猫兒善口技とありて於席石設圍屏不置燈燭郭坐屏後主客靜聽この下八人藝の如き事を語る其中犬のさま／＼哮るとききの鳴聲鶏の聲さま／＼の物の聲などをなす前句付廣原海(一倍になる)身すぎ憂や八人藝も手足四ツ【江戸名物鑑】に(八人藝)月こよひ將門にげよ藝座頭このわざ其後は聞えたる者なかりしが天明の末に川島歌命と云ものあり(其弟子歌遊なり)寛政の頃より赤坂に川島歌遊といふもの巧手にて此伎をするものみな是を學ぶ文化の初にや此輩このわざの祖長崎聖理と云もの、百年忌を吊ひしことあり聖理が事いまだ外に所見なし

○八人藝は座頭はみな川島流で歌柳歌曉などいふ徒あまたあり文化の末のころ牛島の者にて桶を作りて業とせしものとか八人藝をよくして牛島登山と名のりてこれを興行せしかば彼盲人の方よりこれを尤めてさせまじき山をいへりしが登山はそのかみ花房夫山といへるものより傳ふることを云て其儘に興行することとなりぬ夫山替者にはあらず登山は一眼なり

○八撥は【撮壤集】に八撥毬打玉樂とみえまた【尺素往來】八撥曲舞などみゆ八は數の八あるにはあらず

八撥

羯鼓

彌ツの義にて必しも定りたる數にあらずすべて物のかさなることをいふ八撥は羯鼓をうつに兩頭を擊ゆゑに名つくるなり【杜氏通典】に羯鼓正如漆桶、兩頭俱擊、以出羯中、故號羯鼓、亦謂之兩杖鼓、とあり兩杖は即八撥なり【唐書禮樂志】に帝又好羯鼓云々常稱、羯鼓八音之領、諸樂不可方也、とみゆ帝は玄宗なり開元二十四年に胡部を堂上に升せてこの戎羯の音をいみじくもてはやせり故に天寶の樂曲に涼州甘州伊州の名あるはみな邊地になすらへたるものにてそれらの胡舞ともに羯鼓を用ひしなり八撥を打たびの數と心得るものは非なり【安齋隨筆】に小笠原刑部大輔信綱の【乘馬方事】といふ書に手綱を長く取候て肘の後へまはるをば八ばちたつたと云てわろき事に申す云々八鉢を八からかねともいふものもらひの童のすることなりと有り八鉢と文字にて書たるより安齋の説なるべし八からかねを八鉢といふこと見及ばず羯鼓を頸にかけ胸につけて撃ときは肘後へ廻るべきなりされば是も八撥手綱と心得べし八撥は右の如く羯鼓の兩杖なるを後は大鼓うつにもいへるは曲打することなり(本義にあらず)【麗筑波集】八ばちをうちて踊れや十六夜また十六になる袖のやさしさ八撥を二度までうてる子供達【俳諧懷子】(十)時しもはりずほろゝうつ聲つれゝの春日なくさむ八ばちに(玖也)【古今夷曲集】に八撥をうつをみて(二笑)橋ならぬ蜘蛛手の曲の八ばちや大鼓うつゝに世をわたるかな

八がらかね

○八がらかねは【訓蒙圖彙】に八打鐘これも歌念佛のたぐひなりもとは念佛申て一心不亂に踊けるをいつの頃にか只一筋に廻りはじめしより口に唱る念佛をも略し無二無三に巡るを手がらにするなり余がにくるしき世わたりなり其圖は若衆の鼻鐘に緒つけたるを多く首にかけ打鳴しつゝ巡るさまなり余が幼き頃の古板の道中雙六には此圖ありき前句付に(早いことかな)ひろがれば風車なりやからかね【芝居役者伎藝古實】に市村羽左衛門(九代め)所作事の妙をいひて此外八ッ鉦の拍子事ありといへり芝居にても學びつるは其節行はれしを知るべし)

寒聲

○【耳袋】といふ物に寶曆頃迄(存命のかぶき役者海老藏長十郎羽左衛門等或屋敷方へ呼れ其藝を望みけるに羽左衛門家に四ツ竹八ッ拍子といへることあり三絃三挺にて羽左衛門麻上下にて扇を二本持て藝をなしける面白きことの由勿論けやけきことにてはなし仕舞をまひ候やうなる趣にて其拍子はえもいはれずとなり彼八ッ鉦の拍子といへる是にや

○寒聲正保三年神谷季貞が【江戸町名俳諧】徳元判「寒の中は手足にきるゝひゞや町出で聲つかふ橋本の町【俳諧懷子】寒ける月に聲つかふ人夜軍を引る勢の下知をして【諸艶大鑑】(五)厚ひんの若き男松はやしのためにとて寒聲をつかふ【好色つれづれ】草【年のくれ果て家毎に寒びきするころぞまたなくあはれにひもじさうな聲にてきく人もなきすかゞきに手もこゝへ云々古き【前句集】立にけるかなゝゝ寒聲や橋のつまがき二十九夜【六玉川】(初篇)金にする聲はあはれな寒の内又入もせぬ聲もよくなる寒念佛

説經 淨るり 祭文 門説經 門談議

説經は説法におなしもと佛事を供養するに法師を招て聽聞するものなり【宇治拾遺物語】に山の大家日吉の二宮にて法華經を供養しける導師に仲胤僧都をしやうしたりけり説法えもいはずしてはてかたに地主權現の申せとさふらふはとて此經難持若暫時者我即歡喜諸佛亦然といふ文をうちあげて誦して諸佛といふ處を地主權現の申せとは我即歡喜諸神亦然といひたりければそこら集りたる大衆異口同音にあめきてあふきひらきつかひたりけり(此間にある僧そのまねをして講席に其句を誦しゝこと有)云々仲胤説法をとりて此ごろの説經師はすれは犬の糞説經といふなりといひけるとあり猶此書にもまた他書にも説經師のことは往々見えたり【枕草子】(二)心ゆく物説經師はかほよきいとまもらへたるこそ其説ことの貴さも覺ゆれ【今昔物語】(二十八)教圓座主物可笑く云て人咲はする説經教化をなし云々説經師とて一業たつる者の初は詳ならず【徒然草】に或者子を法師になして學問して因果の理をもしり説

經などして世わたるたつきともせよといひければをしへのまゝに説經師にならんために先馬に乗ならひけり輿車もたぬ身の導師に請せられむ時馬などむかへにおこせたらんにもじりにて落なんは心うかるべしといへる事を載たりこれらは専ら説經を業とするものなり諸抄共に註釋なきはいかにぞや是もとうたひものにあらずうたひものとなりぬるは和讃より起れり【志保之理】に諸の講式より和讃は起りて後世極樂院の鉢扣が和讃變じて説經といふうたひものに落丹波金やき地藏善光寺かるやき堂の故事本縁など俗傳を作り淨りとなりし（此間にお通が事をいひて）矢作寺藥師の本縁を作りし以來戰場のさま佛神の靈をさま／＼年を追て作りし近世の如きはひたすらたはれてよしなし事を作りて昔のすがたなく中ごろの體に異なり況や佛法は跡なくなりしといへりされども此説淨るり牛若の事の作者をば普通の説の如く心得たるは誤なり（此事後にいふべし）其余はさもあるべし今も何くれの本地といふかな書本のあるはみな説經師のかたりし物なるべしより思ふに淨るりはもと藥師佛の本地とかたり後に牛若の事は作り出たる物ならむ説經より淨るり起りたる事は疑なし【橋窓自語】にも上るりと云ものは説經より出しものなるべしと云り余思ふにさはかりにも非ず平家をも取しものなり後の説經はまた上るりとれるか

鉢扣の歌

○鉢扣の歌は空也の教へたる法語となむ諸法實相と聞ときは岑のあらしも法の聲萬法一如とくわんすればはまの蝶蟻も佛なり佛は三世にましませどかゝるひぐわんはたのみなしひくわんきやうしゆの釋迦だにもねはんの雲にかくれますましてや凡夫の愚にていかで無常をのがるべき無常眼の前にきて火宅を出よとすゝむれど名利の心つよければ聞て驚く人もなし人は男女にかはれとも赤白二ツに分られて生ずるときもたゞひとり死するやみちに友もなし東信前後の夕煙北嶺朝暮の草の露おくれ先立世のならひ只何事も夢ぞかしとなふれば佛も我もなかりけり南むあみだ佛なむあみだぶつくりや上人の御

法事

○鉢扣さゝら摺は別に條あり見合すべし説經者も又さゝらをすりたり【和訓栞】に説經は【藝苑供奉志】にみゆ（筠庭按るに【古枕夢遊錄】に説話に四家あり其内に説經は佛書を演説するをいふとあり演義を唱するなり）もと法師の中に妻を帶たる説經師と云ものありて佛法の貴き事どもを詞につゞり世の無常なる昔物語をのべてふしをつけうたひし元祿頃の事なりとぞ安居院の澄憲三井の定圓などを祖とすといへるはいたく誤れり（始め説經師とて定りしものなかりしに一業を立るもの出來たる後和讃の如きうたひものとなりさゝらに合せたりそのは淨るりと變れり以上三變なり）【醒睡笑】に途中にてひとりの姥やすらひものあはれさうに泣みたり行逢ふたるもの何事のかなしみありてそちは涙にむせぶぞやといひければさればとよあれへ行男をみればかちんのかみしもをつけ傘をうちかたげてふところこゝらのやうなるものゝ見えたるは疑ひもなき説教さきなりあの人のむねの内にかほどあはれにしゆせうなる事のあらふすよと思ひやられて袂をしぼると（かちんの十徳に大なる紋つけたるを着て上帯したるなど古畫にみえたれどもかちんの上下着たるはめづらし又説經ときともいへりみな長柄の傘をさし人の聚る路傍に立て居るなり）

○俳諧には【守武千句】さゝらをや若紫のすりころも袖うちしほれとくはしやうきう【千集】聞せつ經のさゝら上手や（貞徳）自然居士出舟を早く追かけて【半井ト養千句】からかさをもたて立よる木の下に説經ときも花やみるらん【鷹筑波集】傘を物すきにしも拵へて赤糸ほしきつゝとくはせつ經【正章千句】秋風のさゝらは何と摺ぬらん門説經の聲ぞかれたる（門立して物乞ふもあり）【秀吟獨吟】せつきやうを聞ばかならず泪落棧敷の上であくびをぞする【五元集】竹のせみさゝらにしほる時もあり（さゝらするにしほるといふ手あるか但し聲をしぼるといふにや【枕双紙】すさまじき物の條けん者の物のけ

てうすとて云々せみ聲にしほり出しよみわたれど云々此文よりこの句は作れるなり)

○【春臺獨語】に説經といふものはもと法師の内に説經といふ者有て法師の説法に因縁物語する類なりその物語は偽説にまかせたしかならぬも多けれども詞はむかしのことばにていやしき俗語を交へたる中にやさしき事もすくなからず其上幸若の舞の詞の如くむかしより定れる數ありていつも古き事のみをかたりて今世の新らしき事を作り出さず其聲も唯かなしき聲のみなれば婦女是を聞てはそとろに涙を流し泣ばかりにて淨ろりの如き聲にはあらずさみせん有てよりこのかたはさみせんを合する故に鉦鼓を打たるよりも少しうきたつやうなれ共甚しき淫聲にはあらずいはゞあはれに傷るといふ聲なり淨ろりにくらべてはすこし勝れるかたならん【口宣受領】(是は官府のひかへ書とぞ)の寫しをみしに説經者山緒關清水大明神蟬丸宮(別當近松寺)山城國愛宕郡日暮小大夫(名跡唯重)右以唯重依願繼目所補大夫妻號仍如件正徳二壬辰九月廿八日 説教者 日暮小大夫唯重、正滿講師、淨密講師、淨榮講師また同ころ【四條河原淨瑠璃名代改帳】に 説教 日暮小大夫右小大夫と申名代古來より蒙御免所持仕候處三拾六年已前親より譲り受相續罷在候とあり(これ後のものながら小大夫は古き名代としらる)【京雀】(六)日暮小大夫がやぐらに抱き栢の紋を付たり又日暮八大夫といふ名代ありこれもかの【名代改帳】に同じ文言にしるせり【口宣受領】にも日暮八大夫名跡本久とみえたり【歌舞妓事始】に説經讚語名代とありて日暮八大夫右八大夫名代前々より免許云々日暮小大夫今はなし又云慶長のころより説經語與七郎七大夫といふものありて後名代御免にて興行すといへり(大坂七郎大夫といふがあるは與七郎か七大夫が末か後に見えたり)

歌念佛

○もと歌念佛を日暮と稱す西鶴が【一代男】(三)西の宮のえびすまはし日ぐらしの歌念佛といへり又日暮といふよしは【永代藏】にむかし伏見の御上代の時諸大名の御成門軒をならべて輝き金銀珠玉を鏤め

云々この清らなること言葉にも述べたし彼京の鉦たゞき孟蘭盆の頃勸進にまはりしが朝日かけ御門にうつろひしに是に氣をとられて詠めけるに實に秋の日のならひにてはや暮て驚き願以此功德空袋かたけて都にかへるをみて人申ならはして日暮坊と其末々今に名高しとあるはいかゞあらん(恐らくは彼日暮の門と日ぐらしの歌念佛とは事ことなるをかくいへるは西鶴が滑稽なるべし今も童謡に鴉は熊野のかねたゞき一日扣いて米一升といえる是鉦たゞきが日暮の義にやあらむ)【竹豊故事】京都に二十日は淨ろりはやらす説經與八郎歌念佛日暮林清同弟子林故林達等を瓶べり

○歌念佛【釋氏要覽】(上)昔陳思王曹子、建遊魚山、忽聞空中梵天音、清響哀婉、其音動心、獨聞良久、乃撰其節、爲梵唄、撰文製音、傳爲後式、梵音茲爲始也、此全文は【法苑珠林】(四十九)に出づ【笈埃隨筆】(九)洛北大原の來迎院を魚山と號すること唐土天台山の支山に大原魚山と稱する地あり陳思王此山に在て瀧水自ら律呂を調し水音に曲譜を合るを沈思し始めて梵唄聲明を創造す慈覺大師入唐傳來し山門に傳へ給ふ良惠上人これを中興し當寺を開基の後今に嗣て大原は聲明の本山たり故に地名も大原と云といへり但し慈覺大師の傳へしは引聲あみだ經なり引聲阿彌陀經跋に云、引聲阿彌陀經者、在昔慈覺大師、於五臺山傳此曲節、云々ありこれを傳てより今の聲明は始めり其流種々分るそのこと【魚山靈芥集】に見ゆ此こと諸書を引て友人山崎しるせる物あり【徒然草】六時禮讚は法然上人の弟子安樂といひける僧經文を集めて作つとめにしけり其後大秦善觀房と云僧ふしはかせを定て聲明になせり一念の念佛の最初なり後嵯峨院の御代より生まれり【圓光大師傳】四十八人の弟子に法性寺の空あみだ佛はいづれの處の人と云ことをしらす常に四十八人の能聲をとゞのへて一日七日の念佛を勤行す所々の道場至らざる處なし念佛の時の終ごとには上略婆娑に念佛つとむれば淨土に蓮ぞ生ずなる云々願はゞ必生しなむゆめ／＼怠ることなかれ光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とぞとなへられける念佛の間に文讚をいへ調することみなもと此人より始めりこれらの流れ後世歌念佛となれりさて和讚をうたひ説經とな

歌説經

りしなるべし【櫻陰比事】むかし都の町に時花念佛さかの安樂房とて聲細長う節を付てつねとは格別世
 界の人心後世の畫となりぬ折ふし十夜なれば僧俗共に扣がねあけがた迄ひゞき渡り云々【人倫訓蒙圖
 彙】夫念佛は萬徳圓滿の佛號なり然るをそれに節をつけてうたふべきやうはなけれども末世愚鈍の者
 をみち引せめて耳になりともふれさすべきとの權者の方便ならんそれを猶誤ていろ／＼の唱歌を作り
 是をかねに合てはやし淨ろり説教のせずと云ことなし末世法滅の表しなり哀べしなげくべし
 ○又歌せつきやうともいへるは【二代男】(一)江尻宿の處にたれとはしらず顔かくしてつれ節に歌説經
 あはれに聞ゆとあり柳亭子云攝州大坂説經與七郎正本山莊大夫のもぢり末に年號なけれども寛永八年
 とある説經かるかやと同じさまの本なり與七郎は代々名をつけて近く【難波丸】にも見えたり爰に八太
 夫が座は【江戸惣鹿子】に説經座堺町天滿太夫 脇權大夫市大夫(江戸圖鑑)には權大夫なし(靈巖島あづ
 ま新四郎 脇庄大夫 堺町 江戸孫四郎 脇長大夫(元祿二年【江戸圖鑑】には座敷説經江戸孫三郎武藏權大夫
 とあり此時座はなきにや)とありて次に座のなき大夫をしるして いなば町 村山金大夫 南鍋町 大坂七郎
 大夫と有り是貞享四年の刊行なりかくさかひ町に二座有しはやはりし事知べし(活涼が【江戸砂子】に
 は此芝居見えす其頃すたれて座はなくなりしとみゆ)【元祿會我物語】に十文字薩摩が景清門破天滿八
 大夫がかるかや道心をこゝろならず聞てやる云々其淨ろりみな六段にして正本まれ／＼世に傳はるも
 のあり天滿八大夫が正本の阿彌陀の胸割といふものゝ奥書右者天滿八太夫直之正本を以うつし令開板
 者也(大傳馬町三丁目)鱗形屋孫兵衛とあり佐渡七太夫は正本種々傳はれり小栗判官熊谷三庄太夫志田
 小太郎法藏比丘伏見常盤こすいでん【みな六段ものなり】右のこすいでんといへるものゝ初めに享保三
 戊戌初春(丸の内につたの紋)佐渡七太夫豊孝と記せり【風俗文選】許六が鎌倉賦に小栗の説經は横山が
 強盜を語る【丹前能】にわしくまたかにさも似たりとふるい小栗が説經てるの前が長がうばにりんきし

られ青松葉にてふすべられし顔などいへり正徳二年辰二月十八日葺屋町説經座四郎兵衛今度類焼に逢
 ひ不勝手に付大坂より上るり座手づま入形五郎三郎を差加芝居取立申度旨去十四日御願申上候處今日
 右願之通被仰付八月四日せつきやう座四郎兵衛山本五郎三郎手づま入形あやつり芝居彌近日取立候段
 届来る活涼が【江戸砂子】又【世事談】等には説經座の事みえず享保の末になりては全く絶へたるにこ
 そされども寶曆十年冠付【風俗陀羅尼】いたはしや浮世のすみに天滿ぶし寛延三年刻【六玉川】(初篇)に
 説經の上手が島に生て居るとあり彼靈巖島なるあづま新四郎 脇庄太夫二人の内をいふなるべし生て居
 るのみにて其伎世に廢れ語ることなどもなかりしとしらる又かの淨ろりにかたる小栗の事は【鎌倉大
 双紙】に見えて誰もしれり蓮谷が山良湊にて「上るりに泣ところなり濱千鳥この三莊太夫の事は【志保
 之理】に奥州岩城山權現は津輕弘前の南にあり社領四百石供僧百澤寺祭神安壽女なり厨子王が婦安壽
 は白河院の永保二年正月十六日丹後山良庄にて殞命厨子王後に婦の靈を祭る元祿年中重修とみえたり
 (恐らくは此山の祭神を安壽女とするは俗傳なるべしおもふに安壽女が事は古き作り物語にや其名三
 庄は山莊にて下屋しきなり安壽は延壽にて禪家に行堂といふか【撮壤集】に禪院部延壽堂行堂とあり
 て是をあんじゆと訓り厨子はもとより戸棚にて又居所にもいへり

○其積が【咲分五人娘】(享保二十年序文)往昔日暮小大夫が水調子の三味線に乗せ歌念佛の林聲が鉦に
 合せて語りたる五説經の中の其一ツ聽人涙に咽ひたる山椒大夫が安壽對王の兄弟に邪見にあたりし物
 語を近き比浪花にて當風に改め節をこめて竹本が淨ろりに語し趣向を元にして云々

○かるかやは謡曲外百番の内に刈萱ありまたおなじ中に千手寺といふは安壽がことを作れるなるべし
 今これらの事を門戸に立てかたるもの來る是を祭文と呼ぶ按るに【松の葉】にさいもんあり是歌祭文な
 り【訓蒙圖彙】に祭文は山伏の所作祭文とていふを聞は神道か佛道か其本據さだかならず伊勢兩宮に四

江戸祭文
門説經

仙臺淨

十末社百二十末社なといふ事更になきことそれさへあるを江戸祭文といふは白こゑにして力身を第一として歌淨るりのせずといふ事なしかゝる事を錫杖にのするはさてもかなし又この草子に圖したる門説經はさゝら胡琴三絃を三人にて彈ありく體なり其注に小弓引伊勢會山より出この所ふし一風あり物もらいに種なしといへども小弓引さゝら摺はわきて下品の一屬なりなどいへるは何の分別にか
○仙臺淨るり奥淨るりと云ふ江戸馬喰町繪草子屋西村屋與八郎が許にあみだの胸割きりかね曾我熊谷の類の古淨るり六十種元祿寶永のころ再刻したるすり板傳はりをり今に至るまで每春本にしたてゝ奥州へ下す故仙臺淨るりと稱へ又は正本と云ふ彼地には今もこれらの淨るりを語る者あり三線はなく扇にて拍子をとるのみなりとぞ寛文年間【八俳枕】と云ふ集に【調和】奥淨るり緒絶の橋や古扇また元祿三年刻嵐雪が【其袋】に【鋤立】みちのくの三絃きけば扇かなかりれば昔より三味線はなかりしなり【あみだの胸割】に天滿八太夫の名ある本あり是説經淨るりの太夫にて【江戸名所記】寛文二年の刻【堺町の畫に大さつまが芝居に並びたり奥州には此の天滿節の傳はりしなるべしといへるは非なり或説經かたり奥州に行てしばらくこれを興行して有しもの語を聞しに彼所には常盤津ぶし長唄などは皆あれども説經かたりなし其所にて音曲などして人を集むるにはまづ座頭的首領黒澤けんげろとやらん云ものゝ許に至り門人の分になりて興行することなり此者もしかせしに其時座頭も多く居たるが其中の一人淨るりを何やら少し許かたり聞せしが聞にもたへぬものにて其處にはこれをお國上るりと云ふ是即仙臺上るりなり三線に合せかたる又云ふ奥より南部の方には祭文を多くかたると其正本を仙臺にて翻刻して下すと云へり昔上るりすべて扇拍子をとること説經にかぎらず西村屋が六十種の正本と云は説經のみに非ず土佐上るりなり説經は番數多からぬものなり祭文にはさまゝあり重太夫と云ふものあまた正本を刻せり板元清水屋と云ふ故これをしみつ本と呼ぶ

○説經世にすたれて久しくなりしも山伏の祭文かたりこれを傳てありしが寛政中小松大けうみのわ大けうとて二人の山伏同名にてよくこれをかたれり故にその出處住所を冠らせ呼で分てりそれらに次で俗人にて語るもの江戸の端々にひとりふたりすべて五六輩にすぎずもとよりなぐさみにして職業にあらずそれ故師弟と云こともなく只兄弟ぶんなど云がごとしなりものは錫杖とさゝやかなるほら介にて合するなりこれを弄ぶもの無頼の風俗にて大廣袖ほそ帯新しき手拭をみえとなす只江戸のはしゝに合はれし故近在田舎に庚申十夜などにはまねがるれば江戸中五六人のものども伴ひ合せて行てかたることにてありし其頃本所四ツ目に米屋にて何と云ひしか米千と呼ぶものこれをこのみかたりしが隣家盲人のあんまとりこれが語るをきゝて三絃に合ふべしと工夫してこれを合てかたるそのころいまだ人集する家後によせと呼處なかりし故水茶屋の二階などかりてかたりける初めは他の者ども此ごろ米千が三線に合せてかたると云をろがましきことなり逢なばなぶりてくれんなどそしり合へりしがそれらも中にはめづらしく思ひて其ふし學ぶ者もやう／＼出來たり錫杖にて語りしはゆくり數多く定まらざりしを三線にては定まりきまりよくなれり盲人は京屋五鶴と名のり米千は若太夫となりぬ又久米といへる座頭京屋が弟子となりよくひきたり若太夫門人あまた出來ぬ島太夫千賀太夫音羽太夫榮喜太夫染太夫等なり島太夫は松島町に住で堺町芝居へ立入者なりしかば若太夫をすゝめ薩摩座の名題を以て説經芝居を興行せしは享和のころのことなりき若太夫は文化八年没す今の若太夫は千賀太夫なり是に依て今にさつま某太夫といふをか

門だんぎ

○又門だんぎあり【訓蒙圖彙】に法師の柄長き傘をひらきてかたげたるなり注に片言まじりの法文一から十不淨の説法也うけがたき法師の身となり法によつて地獄に落るはさてもあさましき境界かな(右にいへる門説經そのかみとはいたくかはれるものなり)【本朝文鑑】(渡吾仲)涼賦に辻談義あり放下師

色祭文

あり歌祭文には女中をなかしち云々寶永五年板本【伽羅女】「京うた祭文あり其圖一人三絃ひき一人錫杖ふりて唄ふさまをかきたり世の風説はやりごとなどを作りて唄ふことゝ見えて【入子枕】おそめ久松情死の條其頃萩野八重桐が初狂言に仕くみ世にあはれを追善の歌祭文に年は二八のほそ眉ときくも思ひの種油云々また【娘容儀】に瓦橋とや油やのひとり娘のおそめとて云々開帳ばの歌さいもん【松落葉】加賀椽上るり【四條川原涼八景】神はうけずや色祭文拂ひきよめ奉る色のさかりはあづまなる八百屋のむすめお七こそ戀ぢのやみのくらがりによしなき事をし出して云々これらを合してみれば説經またく三くさに分れたり八百屋お七戀の白玉といふ歌祭文正本結城重太夫直傳ワキ結城伊預太夫三絃柏木八百市柏木儀泉末に元祖結城石見椽藤原一角結城重太夫直傳(印章保高)天明四年甲辰初春校合作者松山堂計石正本所江戸本芝三丁目清水治兵衛とあり桐の紋をつけたり

淨瑠璃(薩摩) 淡路 女太夫 左内宮内 喜太夫(虎屋) 土佐外記 半太夫 河東 角太夫

一中文彌 宮古路 (常磐津) 新内 宮園 嘉太夫 義太夫 豊竹 肥前

あやつり 小平太 飛彈 おやま のろま 出づかひ 辰松 淨るり作者

淨瑠璃

淨瑠璃は平家をとり説經を學びて作れるものとみゆ世に傳ていふ信長公の侍女小野お通といへるものゝ作りたる十二段の物語に始れり(筆のすさひ)に小野おつう母は室町松本町に住せし人なりおつうが女は眞田河内守といへる人の妾となりて信州松代へゆく後におつうを手元にて孝養したしとて迎ひの人を登しおつうを松代へ引とるおつう松代へ下る路にて姥捨山の近きあたりを通り姥捨の山にはいらし名を聞て車を返す人もこそあれとよめり此事の始末詳に記せしもの松代の長國寺にあり河内守といへるは眞田伊豆守の實弟にて七千石を分ちて部屋守みのよしなりと有り此おつうなるべし)さて彼十二段の作者この通ならんには時代かなはず(その物語の内【枕もんだう】の處つるなき弓にはぬけ

薩摩

鳥とはたつもたゞれずゐるもゐられぬとの仰かやとあるは宗鑑が【犬筑波集】にゐるもゐられずたつもたゞれず羽ぬけ鳥弦なき弓におどろきてと云るにおなじきは何れよりとりたるかと疑はしき【守武千句】にいとゞだに座頭まがひの杖つき乃淨るりかたれともし火のもと今宵はや時はうし若ふけはて天文九年にかくつらねたり又【宗長日記】享祿四年九月十三夜月見の條旅宿にて小座頭あるに上るりをうたはせて酒もりする事あり又猿樂狂言【昆布賣】に上るりふしに賣れといふこともみえたりされば其始普通の説はいたく誤れりまたその物語の内枕もんだうの處云々羽ぬけ鳥の謎は連歌のかたもとなるべし其故は【犬筑波】はすべて古きも新しきもかき集めたる物なればいと古きも有と知べし此物語師の十二神によりて十二段とするにはあらず平家物語十二卷に倣へるものなり淨るりを語ることに専ら行はれしは了意が説を正しとせむか【東海道名所記】に淨瑠璃はその頃京の次郎兵衛とかや【その頃とは文祿より寛永の間なるべし【江戸物産子】には今の薩摩三郎兵衛四代さきの外記といひしもの琵琶法師瀧野檢校より是をならひて西のみやのくわいらいしをかたらひて人形に能をさせて一日に五番つゞしけるに淨雲といひしもの外記が座に入一段ツ、あひの狂言の如くにかたりければ聞人かへつて能より面白くおもへり自ら能は人よせになりて淨るりをほんとせり外記がなれば今の土佐なり淨雲が末は伊勢大椽なりとかやとありて其末當時座のなき太夫の内りうかん町江戸次郎右衛門と有はいせの大椽か(淨雲外記か座に入といひし此説誤なるべし)【雍州府志】に及慶長監物某并次郎兵衛某招攝州西宮之傀儡師相共經營之云々河内介是淨瑠璃太夫受領之始也次郎兵衛後稱上總介自茲左内宮内相續盛行とあり河内介といへるは誰なる歟不明なる書さまなりもし河内左内か事なるか按るに【口宣案】に慶長十八年正月十五日藤原吉次宣任河内目とある是にや【世事談】には正保の頃さつま太夫次郎右衛門といふ江戸上るりの祖なり法躰して淨雲といふ其子を又薩摩太夫次郎右衛門と(次郎兵衛後に次郎右衛門)

淡路

左内

と改名したるか又は二代めの名にまかひしものか)いふ者後に淡路之丞と受領せし西宮の夷子かきをかたらひ(貞徳が狂歌に住吉や霧にまじはる淡路とてたてる小舞のおもしろき哉とあるは淡路之丞か事にや【四條河原歌舞妓名代改帳】に淨るり薩摩延寶六年十一月二十八日口宣頂戴仕源之丞所持仕候右さつまと申名代甚太夫と申者へ譲り申度旨正徳二辰年七月十一日攝津守様へ奉願候處同二十八日駿河守様御所にて願之通御赦免被成候口宣案に橋常信宜任薩摩椽延寶六年十一月云々とあり今も淡路に源之丞と云ふ人形座元あるはさつま源之丞とは殊なるかいづれも淡路之丞が後なるべし)四條河原にして鎌田政清か事をかたりて人形をあやつり(舞にかまだ有り彼十二段も人聞ふりたれば舞の文に節を付て淨るりにかたり故に貞徳が狂歌に淡路が小舞といへり)その後かうの始あみだのむねわりなといふことをかたりける次に河内左内といふ者たり女にもなむゑもん左門よしたかなどて淨るりをかたりけるを歌舞妓と一同に女はとめられぬ(【古郷歸江戸土産】に六字南無右衛門といへる女太夫かたりける時十二段はふりてめづらしからずとて舞にまふやしま高だち曾我などを彼ふしにかたりける故淨るりに八島高だちをかたるといひておのづから其名になりたり夫より左内宮内などいふ太夫打續いて四條かはらにて語りける故にはらぶしとて座頭よりはいやしめけるとかや【人倫訓蒙圖彙】に人形の首を左右にはたらかすは宮内左内よりはしまるといへり)ちかき頃江戸より宮内といふもの上りて左内とせり合いろくめづらしき操をいたしけるほどなく宮内は死けり左内もなくなり今はその子とも打つゞきて操をいたしめんく受領してかたり續き(宮内は伊勢島といふ正徳三年【四條河原芝居名代改帳】に上るり伊勢島佐太夫古來より伊勢島宮内と申淨るり名代蒙御免所持仕居申候今江宗壽と申す者より佐太夫讓受申度旨奉願元祿八亥年十一月十一日御赦免被成只今伊勢島佐太夫と申候○近き頃といへるは承應明暦のころをいふなるべし【竹屋故事】には宮内は虎や源太夫が弟子なり又云

喜太夫

虎や

京都に昔上るりはやらん寛文年中に江戸より虎や源太夫上京有てより淨るり繁昌し定芝居も出来たりといへり宮内がこと嘉太夫の條にいふを併見べし【外題年鑑】に伊勢島宮内淨るりも江戸の大薩摩など同前に五段續の外題を聞すとはいへるはいかゞ大薩摩六段物正本を見しに和田酒盛天下第一さつま太夫二條通正本屋九兵衛板寛文四年正月と有○慶安二年丑三月晦日踊子役者の類何方より呼るゝともあんだにのせ申間敷手形の内堀町上るりさつま同七郎左衛門同外記同源太夫同五郎右衛門同茂兵衛とあり)中に喜太夫といふもの上總椽になり太平記をかたる(同書に又云六挽町のかたへ行たれば喜太夫が淨るり其外色々とも記せればこれ江戸のことをいふとしらる【古郷歸江戸土産】にてはそのかみ芝居町にて座をはりかたる其後中橋へ移りぬ其頃は大きつま小つま四郎與吉七郎左衛門とてかたる中ごろ虎や源太夫油屋茂兵衛鳥屋次郎吉南北喜太夫杯といふ太夫有といへり喜太夫はこの南北喜太夫なる歟【四條河原芝居改帳】に淨るり虎や喜太夫明暦四年七月十三日口宣頂戴仕虎や上總椽と申候上總病死仕悴五郎兵衛名代相續之儀奉願寶永六丑年七月二十九日虎や喜太夫と名代御赦免被成候また口宣案に明暦四年七月十三日宣旨藤原正信宣任上總目と見え寛文五年板【京雀】(六)天下一上總藤原正信とありてやぐらの幕に虎の紋付たり【雍州府志】に治郎兵衛後に上總介と稱すといへるは恐らくはこれをまがへるにや又おもふに伊勢島また此喜太夫は竹本などの淨るりの出たる根元なるべし下にみえたり)その曲節平家とも舞とも謡ともしれぬ鳥物なりといへり(已上【東海道名所記】なりそのかみの俗語に出所の詳ならぬを鳥ものといへり唐繪の風のかはりたるを鳥繪と稱する類なり)

○慶長年間の古屏風四條河原の繪に女太夫の上るり芝居有り三絃弾も女にて太夫扇を持って出がたりなり人形つかふ處より一段高し人形は上るり語の目の下にあり人形は戦場の體にて城廓倉等の作り物あり人形の足又人形つかひの首手などは見えす芝居の表やぐら下の札黒ぬり緑朱ぬりにて金かなもの

女太夫

中の文字金粉にてじやうるり内記と記す内記といふ淨るり女太夫の名ものに見えずなむゑもん左内よしたか杯が内なるべし外記に對へたる名と聞ゆ幕の紋は丸内に三枚笹と又一つ花おもだかなり

○其角が「焦尾琴」に予童謡歌舞のいにしへを思ふに明暦年中の双紙に登り八島下り八島といふはやりかなることども十二段に分たるあり六字南無右衛門正本と奥書し侍るこそ數奇ものゝ名にふれたる雅なうべけれといへるをみれば淨るり板本は皆明暦已後出來しにやに思ひしに柳亭子に近ごろ真向に行たる人のもて販りて贈りたる由にて小大の淨るり本あり山城國住人六字南無右衛門正本寛永十六年正月吉日八島道行一段目と端にしるして一冊に四段あり三冊にて十二段なりわくの内立五寸貳分横三十分文字十四行にて間々に半丁づゝ繪あり末に二味通御幸町西へ入町上るりや喜右衛門開之とありこれつるや喜右衛門なり此家あるによりて此處をつるや町と云となむ「焦尾琴」にいへる上り八島下り八島即これなり寛永より板行あるを明暦を古しと思へるは寛文頃にはもはや古板稀なりしにや其角は寛文中生れたり

と淨る

○土佐淨るり六段物板行は大江山酒香童子、風流和田酒盛、名古屋山三郎鹽屋文正、現在松風、大職冠二度玉取、新撰紅葉狩、楠湊川、色小町、光源氏袖鑑、津の國難波物語、源氏十二段、當世薄雪、融大臣、賴朝遊覽摘、新道成寺、定家、土佐日記、一の谷八島、和國女眉間尺、中將姫、三世二河白通、大塔宮熊野落、小野道風、遊女源氏全盛鏡、蟬丸、周防内侍美人櫻、源氏花鳥大全、京四條於國歌舞妓殿飾、なには鑑、萬歳頼政、博多露左衛門、寛潤洛湯壽、蓬來源氏、源氏六條通、同續、源氏柏木右衛門、古今集、泰平篇三世往來以上三十七番なりこれらの正本往々あり寛永五戊子初秋土佐少椽橋正勝印小傳馬町三丁目木下甚右衛門刊とあるもあり右土佐名乗延寶天和のころも同外記は薩摩外記藤原直勝又薩摩椽外記藤原直政としるしたるもあり東山三幅對と云ふ六段にもあり古淨るりみな十六段なり正徳頃の「前句付」に「早い

土佐外記
薩摩外記

こすいで

ことかなく一段につまるこよみの十二段六段淨るり一段を上下として十二だんなり後さつま座茸屋町にありて又堺町へうつれること見ゆ正徳五年五月二十一日上るり座外記太夫祇今迄茸屋町にて相勤申候處此度堺町庄次郎地面へ所替仕度旨奉願候處願之通今日被仰付普請出來次第御見分可被下旨被仰渡候依之外記名代藤八申來る

○こすいでんと云は能野の本地ごすいでんと云ものなり何くれの本地と云ふ草子多くありおもふにこれそのかみの説經に用ひたるものなるを淨るりにもかたりしなり二河白道なども同類なり

小ざつま
大ざつま

○【色音論】(寛永中板)にさつまとらや(喜太夫なり)があやつり土佐が能と見えたり此さつまは次郎右衛門なり又さつま外記は京師の人次郎兵衛にて其子孫江戸に下りさつま三郎兵衛といふ是を小ざつまとも下りさつまともいひしにや故に次郎右衛門が方を大さつまと呼り三郎兵衛が座は後までもありしに次郎右衛門が方は早く休座したりと見えて延寶ごろ其芝居なし(江戸鹿子)(貞享四年)堺町に座元さつま三郎兵衛太夫土佐少椽小太夫庄太夫吹屋町に和泉太夫脇長太夫虎屋源太夫また無座の太夫は吳服町虎屋永閑人形町近江語齋本大坂町肥前太夫龍閑町江戸次郎右衛門新乗物町對馬五郎右衛門とあり【江戸圖鑑】(元祿二年)堺町土佐少椽橋正勝(南側にあり)脇小太夫庄太夫堺町北側丹波椽和泉太夫脇長太夫源太夫座元さつま三郎兵衛太夫虎屋永閑脇小源太夫また無座の太夫人形町近江語齋本大坂町肥前太夫橋町さつま小太夫富澤町式部太夫龍閑町江戸次郎右衛門新乗物町對馬五郎右衛門とあり)延寶九年堺町の古圖に北側中村芝居の西隣土佐椽虎之助あり同南側に和泉太夫とさつま小太夫並びてあり(土佐は虎之助といへども幕の紋は龍を付たりと見えて蝶々子が點の【前句付】押つおされつ)土佐が幕いはゞ虎屋を猜む龍とあり虎屋はさつま三郎兵衛座をいふか永閑は虎屋源太夫が弟子なりとぞ【世事談】に淨雲が弟子丹後太夫長門太夫丹波太夫源太夫の四人あり是を其頃淨雲が四天王といふといへり丹後太夫は名を何といひしか【洞房語園】に慶安の頃江戸町二丁めに傾城屋甚之丞といふ三絃

語齋

の上手あり京町二丁めに勘兵衛といふもの有り其頃流行の丹後が淨るりを聞とり語りしが甚之丞すゝめていふ丹後がしりまひせんは口きことなり一流をかたりかへ然るべし此前四郎與吉が語りし淨るりの風面白かりしとて語りきかせ指南しければ勘兵衛波丹後と四郎與吉が風を合せて一流かたり出し後に近江太夫語齋と名をあげたりといへり此勘兵衛を印本【洞房語園】には岡島吉左衛門三線甚之丞を師とし淨るり一流かたり出し明曆中に受領して近江大椽といひ後剃髪して語齋といふとあり長門太夫が弟子に肥前太夫あり丹波太夫は和泉太夫が事なり強勇の男にて【關東俠客傳】に見えたり櫻井丹波和泉平正信それが子を長太夫といへり丹波は二尺許の鐵棒にて拍子をとる元祖市川團十郎が荒ごとは此太夫が節付いき方を學べるなり【俳諧世々かひこ】親丹波毎日岩を打碎くといふ付合ありしからは長太夫も後に親の名をつぎて丹波といひしなるべし肥前太夫は伊之助といへり

○延寶八年庚申四月十日酒井雅樂頭於二御丸御茶被上爲御馳走堺町みせ物上覽上るり酒香童子操太夫土佐少椽初段すまふ貳段春の茶湯三段しのだ女四段有馬やつこ次郎三郎五段めてんく包丁次郎三郎白銀五十枚吳服一重一種一荷土佐太夫白銀三十枚一種一荷次郎三郎

半太夫節

○【昔々物語】に昔は堺町の繰さつま太夫筑後丹後近江肥前永間繰の上るりは酒香童子或費花車等云々
○半太夫ぶし【世事談】に江戸半太夫幼名半之丞といふ修驗者何院とかやの子なり始は肥前太夫が門に入後一流をかたり出せり【江戸鑑】などに式部太夫とあるは半太夫が始の名にや【關東血氣物語】に半太夫式部といへり【江戸節根元集】に半之丞始めは説經祭文の名人なりしといへり塚原市左衛門といふ者半太夫座の淨るりを作る半太夫剃髪して坂本梁雲といふ東武近世の名人なり【我衣】に元祿年中宇左衛門芝居の向ふへ操芝居出したり是は肥前弟にて永閑につゞきたる弟子なり(半太夫が門弟の内に萬太夫といふあり【俳諧わくがせわ】に田舎もの故いな事に念半太夫弟子に相違な萬太夫(美角)また

【六玉川】(三篇)蚊ばしらの顔へ崩れる半太夫とはうなる聲をいふ成べし【娘容儀】終日酒きげん半太夫ぶしに頭をふつて語寐入にする云々

○半太夫の紋丸の内に三ツ引なりこれ三浦屋が紋にて由ありてこれを用ひたるが【原武が筆記】に云ふ三浦三軒は三げん家と名付鎌倉三浦介義澄が子孫故のうれんにも丸の内に三ツ引を付ざるに由て此家によしずみと云ふ名絶ることなく孔雀しほり着るは三浦に限りてのこと高尾薄雲小紫三國半太夫此名絶ることなしといへり但し半太夫といへる名は古き細見に見あたらす

河東ぶし

○河東ぶし【我衣】に享保年中河東といへるもの出たり半太夫が弟子なり品川町出生にて親は天満屋市十郎といふ備前松平大炊頭殿出入の魚屋なり本の名は東十郎といふ河邊氏なれば河東と云ふ紋は丸の内三引なるを中をくづしたるなり【江戸節根元集】に河東は小田原町御納屋天満屋藤左衛門伴藤十郎半太夫門弟なりしが一流かたり出し藤十郎代となり御納屋を外へ譲り母の里淺草御藏前に在しが此名字河部氏と申彼家に同居せし故河の字をとりて河藤と呼しなり後堺町に佳風と云ふものあり藤を改て東と書て河東とす又十寸見堂と號することは此上るりよく移せばよくうつり悪くうつせば悪くうつる十寸鏡の如しといふ意なり河東ぶしの文は多くは竹婦人作とあり是は其頃の俳諧師岩本乾什なり乾什初め竹婦人吳丈といへり浮む瀬は奈良茂が爲に作りの字扇は享保十九年俳優調子がために作る水調子は玉菊追善花かたみは河東追善其外繪蓬萊江の鳥禿萬歳有馬筆猶あまたあるべし皆竹婦人作なり又河東ぶしの正本に【鴉鳥集】(五)【鴉鳥萬葉集】(二)【鴉鳥紅葉集】(一)【鴉鳥後選集】(一)【鴉鳥太々神樂】(二)猶【鴉鳥新撰】などの類多かり鴉鳥の字を冠らせざるは【夜半樂】【十寸見要集】の二部に過す號は息長くして水に入るものなればこの曲節の音の長やかなるにたとふるなるべし【鴉鳥後選集】は誤脱なしその奥書御座敷上瑠璃江戸太夫河東ワキ 河常金次郎三味線岡島小三郎筆梗近藤助五郎清春板元湯島

十寸見堂

嬉遊笑覽卷之六上 (音曲)

天神女坂下相模屋與兵衛とあり河東は享保十年七月二十日四十二にして死す築地本願寺々中成勝寺に葬る法名清西といふ【續五元集】(中)井の蓋を敲は氷る空の月納屋は寝聲にかたる上るり(晋子)是元祿六年の作なり河東いまだ十歳なればそれをいふには非ず

角太夫

○京都山本角太夫は虎屋源太夫が弟子なり正徳三年【四條河原芝居名代改帳】上るり山本土佐延寶五年後の十二月十一日口宣頂戴仕始は山本相模椽と申候處差合之儀御座候而御斷申上山本土佐と改申候土佐義平辰年相果悴源助只今所持仕候(その正本傳ふるもの稀なり瀧口横笛紅葉之遊覽といふ正本奥書延寶四丙辰年霜月角太夫正本寫云々)と見えたり松本治太夫都太夫一仲間本文彌(後出羽椽となる)宮古路國太夫等みな是より出たり

都一仲

○都一仲は山本土佐角太夫が弟子にて須賀千トといふもの都一仲となる【江戸節根元集】に都一仲元祿の頃追々はやれりといへるは京師にてのことなり【春臺獨語】に寶永のころ京より一中と申者來りて上るりをひろむ云々(是又ふるき正本傳ふるもの少し助六心中蟬の脱がらといへる六段もの、奥に右此本は都太夫一仲直之正本を寫し令板行者也享保丙午十一歳正月吉日淺草見附前同朋町いづみや權四郎板元と有り又一仲ぶしに京都本あり一仲ぶしの文句を長唄豊後ぶしなどにとれるもの多し長うたの二人椽久は一中ぶしの椽久道行の文を其儘とり常盤津富本などにてかたる淺間の上るりは一中の夕霞淺間嶽の文なり初一葉ほどは一二字の異同あるまでなり又きよすといふめりやすは一中の根引の門松といへる文を略したるなり其外にもいと多かるべし文政四年辛巳六月近來世に行はるゝ故新に一中ぶし文句を刻し題して【都羽二重拍子扇】といへり但し段ものにはあらず景事のみ十種を集めて一卷とす)一中は上るりの外に楊弓の名手にて一表二百のこらす的中したりとかやされば一中といふ名はもと楊弓のかたに付たる名なるべし【竹豊故事】に一中は元來本願寺派の僧なり山本土佐椽松本治太夫等の流

を和らげ一流かたり出せり亂髮にて十徳を着白き長袴をはきて出がたりしたりとなむ其子都和泉椽一中と號す

岡本文彌

○岡本文彌(常盤津師範の系圖には伊藤出羽椽とあり(これは座元の名なり二代め又岡本文彌といふ)是また角太夫が弟子なり【外題年鑑】に岡本文彌同阿波太夫松本治太夫一中等はいづれも先師土佐椽又は井上氏の淨るりを多くかたられし故新作多からず(これをみれば一中ぶし上るりなどもそのかみよりの古上るりなり)云々また阿波太夫は難波にあり後岡本鳴戸太夫是なり(是文彌が弟子なるべし)

阿波太夫

○阿波太夫は愁ぶしの上手なり享保二年の草子【娘容儀】に出羽しほのあは太夫がうれいぶしに打ちみ四十八願記の三段目を覚えてひとりなぐさみて語て泪をこぼす云々

宮古路

○宮古路國太夫【竹豊故事】に後豊後太夫に一中の弟子にて初め半中と云たり後に國太夫又豊後と號せり他流とちがひ五段物時代事などは語らず世話ごとを専らかたる門人可内辨中等名をあらはす【江戸節根元集】に云京都に宮古路國太夫節芝居にて所作によくあひし節にて今に廢らず其弟子に文吾といへるものあり元文中東都へ下り宮古路豊後太夫と名乗三線相方は鳥羽屋三右衛門が弟子佐々木市藏三線手附は三右衛門なり國太夫ぶし三絃の手は甚せはしく東都にむかず故に子供にも能彈るゝやうに手を付る其後加賀太夫數馬太夫杯とて門弟有てわき語りに至る迄はやりしなり【常盤津師範系圖】に都半中事宮古路豊後椽とみゆ初め一中が門弟なりし歟【春臺獨語】に云ふ享保の初に又難波より竹本といふ淨るり師來りて廣む江戸の人は是を好みあへりしに其後又宮古路といふ淨るり師難波より來りてかなしき聲に淺ましく賤きことを語り出す江戸の人亦これに移りてめではやすことかぎりなし【江戸節根元集】に宮古路淨るりはやる故所々にて色こと心中缺落もの等多く有ゆゑ豊後節御停止御觸被出相止けり其年中國米は兩に八斗貳升にて殊外世中も詰り困窮の者多かりしと其時落首に豊後米八斗貳升

竹本

豊後節

常盤津文字太夫
宮本

とふれられて菰をかぶるか宮こちきめら老人云傳へり夫故豊後ぶしも久々打絶しが後に京都寺町位牌屋文右衛門といふもの義太夫節もよく覚え語りしが東に下り名を學むとおもへど名人ども多く下り中々渡世なりがたく困り居けるが工風して佐々木市藏を相手とし豊後ぶしを中興す古今の名人とて又はやり出し脇志津摩太夫酒造太夫其頃は常盤橋邊に住居ける故常盤津文字太夫と名乗しなり此ふし芝居にて道行ごと其外ないかいなの節所作によく合し故今に繁昌す今の豊後ぶしかたりは勝手次第の苗字をつけ宮本豊名賀吾妻元來はみな宮古路なりし是を名乗がたきは御觸を恐れ且はみやこちきめらを恥しならむとみえたり【教訓下手談義】に宮古路は享保の始犬の病と連立て來て世人の骨髄に通じ終に治し難き沉痾となりぬ此淨るりを禁めざる家には不義放埒のさたなきはなし云々こゝに享保の初め江戸に來るとするものは誤なり【春臺獨語】によるに其時下りしは竹本が淨るりなり【賤の小手卷】に豊後ぶしの流弊次第に嬌風にうつり遊士俗人の風俗あらぬものになり文金風行はる(時世粧の條見合すべし)又云豊後ぶしも次第に高上になり文句は昔よりは風流にかざりて芝居の所作出がたりはいつも常盤津文字太夫とて男もよく聲もよく上手にて其狂言當りたり其頃素人藝者にて名を貰ひて女は文字江文字松などゝて女客などの馳走に雇れてありきたりといへり【江戸名物鑑】豊後節泣ぬ日とては波の立居の浮寐鳥(舊馬)文字太夫が弟子宮本豊前太夫寛政九年の頃横死せし兼太夫吾妻國太夫といへりまた清元清水などは宮本より出たり【諸藝太平記】は元祿十四年の作なり四の巻に今常盤津にて老松といふ淨るりふし付したり是かゞふしなとにや

新内

○新内は江戸深川扇ばしの邊に住る御家人にて苗字は何とかいひけん名を新内といふ宮古路豊後掾が弟子となり加賀八太夫といふ寶曆の頃一流をかたり出し本姓敦賀を鶴賀と改め新内と名乗たり後受領して若狭掾となる狂歌を好みて濱邊黒人が門人にて大木戸の黒牛といふかたる處の淨るりみな自作なりとそ専ら近時の心中事を作れり其正本綱五郎花さき二重衣戀占猪之介若草仇比戀浮橋伊太八尾上師咲名殘命毛時次郎浦里明烏夢泡雪などの類あまたあり淺草中田甫幸龍寺に墓あり辭世は碑石にしるしたり「生てゐる内は何かと神佛ひじりもいかい世話でござつた(天明六丙午年三月二十二日)鶴賀の二字も是より許し出すとゞ若狭が弟子若狭太夫あり又鶴賀加賀八太夫は(初新内と云ふ)其生年七十歳娘を鶴吉といふ近ころ新内が名は其家に預り弟子加賀吉新内となれり其次新内も加賀八弟子にて初加賀歳といへり

鶴賀

りとそ専ら近時の心中事を作れり其正本綱五郎花さき二重衣戀占猪之介若草仇比戀浮橋伊太八尾上師咲名殘命毛時次郎浦里明烏夢泡雪などの類あまたあり淺草中田甫幸龍寺に墓あり辭世は碑石にしるしたり「生てゐる内は何かと神佛ひじりもいかい世話でござつた(天明六丙午年三月二十二日)鶴賀の二字も是より許し出すとゞ若狭が弟子若狭太夫あり又鶴賀加賀八太夫は(初新内と云ふ)其生年七十歳娘を鶴吉といふ近ころ新内が名は其家に預り弟子加賀吉新内となれり其次新内も加賀八弟子にて初加賀歳といへり

岡本

○又岡本都太夫より岡本を名のるもの多し其外東洛左文富士松ぎんてうさいこれに初めおさな坊きみ八と云按摩取なり又豊永歳太夫など各々さまん名のことば鶴吉といふ老婆家もとにて鶴賀名字をゆるさざる故なり後に新内と云へるは岡田新内なり岡田は元祖新内が實苗字にや

宮園

○宮園は宮古路園八にて國太夫が弟子なり其次園八中頃豊前といへり鸞鳳軒と號す【宮園新曲集】の序になまなかき淨るり興さむる事あり故に【新曲短篇】を作りてかたるよしいへり

義太夫淨るりの始

○義太夫淨るりの始は萬治寛文の頃にや難波人井上市兵衛といふもの誰が弟子なる事をしらすおもふに虎屋喜太夫なとより出たるにや遂に一流をかたり出し操芝居を取立受領して井上大和掾藤原要榮と名乗しが後に播磨掾と改む世に播磨風と稱す諸人これをまねんとするに其頃床本はかたく秘して弟子にも示さずやう／＼聞書して一行二行づゝ覺えて口まねをせりいまだ大坂に淨るり本屋なく便りに求の替り淨るり出れば前の淨るりを乞て京にて是を板行にするといへども細字に五段を書一段ごとに繪を入れ小兒の翫としてひろむ其後心齋橋筋寫本を商ふ井上彌兵衛と云もの播磨かゆかりのものにてかたり本の内道行四季神おろしなどを乞請て寫本にして稽古人の助となしぬ播磨みだりに弟子をとらずと【操年代記】にいへり竹本豊竹等みな是より出貞享二年丑五月十九日京師にて死す法名夏月了音日弘

長明寺に墓ありとぞ招碑に天下一播磨藤原要榮と記す幕の紋井げたに立花櫓の紋丸に九枚笹なり延寶三年印本【難波名所芦分舟】卷(三)に出づ(其弟子石屋三右衛門井上市郎太夫とて芝居を續しがはやらずして止また大坂には清水理兵衛と云ふ弟子あり諸人今播磨と稱す後に剃髪して伴西と號す)

○【操年代記】に近松が新作上るりを義太夫かたりさかりし頃を云て其ころ歌舞伎芝居あたり多く殊に出羽にはさま／＼のからくりなどし見物諸方にわかると云へり【竹豊故事】には元祿年中京都山本角太夫土佐掾の門人岡本文彌伊藤出羽掾(天下一出羽藤原信勝)芝居にて一流をかたり弘め大坂中文彌節とてもてはやしぬ殊更山本飛彈掾手妻人形の所作事操など取まじへ見するに見物喜び大坂中は云に及ばず遠國まで名譽あらはる云々西國順禮も京にては内裏さま大坂にきては出羽掾の芝居を見て歸らねば西國したる甲斐なきやうにもてはやしける今にては其名代さへなく成ぬ勿論冷泉網戸平家説經歌念佛歌祭文杯云ふ物は聞しりたる人もまれ／＼にて只兩竹氏の流義のみ諸國一圓に流布す云々

宇治嘉太夫

○宇治嘉太夫は紀州和歌山宇治といふ所の人なり播磨風に入しが延寶の末京に登り伊勢島宮内が名代を以て宇治嘉太夫と名乗り芝居を立年經て受領し加賀掾宇治好澄と改む(けいこ本八行を四條小橋つぼ屋にて板行させ淨るり本に謄本の如くフシハカセを付初めしは此太夫なり)

○【世事談】には伊勢島宮内に并ひ宇治嘉太夫と云とも見え米仲が【輕隨筆】(一)いせ島宮内は江戸虎屋源太夫にて宇治嘉太夫の師なりともいへり又【竹豊故事】に虎や源太夫門弟伊せ嶋宮内其弟子佐太夫云々宮内の弟子嘉太夫とありこの説然るべし正徳三年十二月四日【四條河原芝居改帳】に宇治嘉太夫延寶五年後十二月十一日口宣頂戴仕寶永八卯年八月二十一日加賀掾相果孫久五郎名代相續仕度旨云々みえたり行年七十七歳とぞ(寶永八卯年は是正徳元年なり)貞享三年難波に下り西鶴作の淨るりをかたる程なく故有て京に歸りぬ花洛に在ること三十餘年にして終れり法名を自證院本淨道融といふ

竹本義太夫

○竹本義太夫は攝州天王寺村の農家なりしが若年より播磨淨るりを好みて修行し延寶の頃難波にて虎屋喜太夫芝居をつとめ(【操年代記】に播磨の弟子清水理兵衛か脇をかたる播磨初め此芝居にありけるか)天和年中京都へ登り(京に上りし時四條河原芝居にて清水理太夫と名のる)加賀掾が脇をかたれり貞享二年に大坂へ歸り(【外題年鑑】にはかくのみあれど【操年代記】を考ふるに宇治嘉太夫京に上り竹屋庄兵衛をかたらひ芝居を興行せしに後庄兵衛と藝の筋にて中あしく立分れて庄兵衛は一座を立て五郎兵衛を太夫にして西國に下り宮島の市を仕舞大坂に登り今の竹田外記芝居をかり天王寺五郎兵衛といふ名を改め竹本義太夫となる幕の紋まりはさみの内に笹の丸を用と云りこれ竹田か紋にやおもふに義太夫と云ふ名は虎や喜太夫が名に似つかはしく付たるなり竹本と云しも竹田が芝居をかりし故にもよるべけれど是又虎に縁をとりたるなり角太夫が弟子に松本治太夫と云しものは竹本義太夫に對ひたる名かからくり師に竹田名高なるを羨み松田といへる放下師ありし類なり)道頓堀にて自分に櫓をあげ常芝居を興行し其後筑後後掾と受領す貞享三年二月【出世景清】といふ新淨るりは近松門左衛門竹本義太夫が淨るりを作るの始なりとぞ(是迄は嘉太夫が古淨るりをかたりたるなり宇治嘉太夫加賀掾上るり本に出づ)蟬丸は筑後後掾藤原博教と受領したる弘の淨るりなり(時年五十一)【曾根崎心中】は元祿十七年五月七日これ世話淨るりの始めといへり(【外題年鑑】これを十六年とするは非なり雷風庵蓮谷といふ俳人曾根崎にて(數珠かけて一羽とふ鳩の寒さかなと此情死を吊へり)正徳四年九月十日行年六十四歳にして身まかれり(法名釋道喜天王寺念佛堂に對ひ石塔あり豊竹上野か建る處なり貞享二年乙丑より正徳四年甲午まで三十年淨るり九十四番に至れりと云ふ)

豊竹若太夫

○豊竹若太夫は大坂南船場の産若年より竹本流を學び初め十八歳にて竹本采女といへり道具屋吉左衛門永島重太夫など其頃この門弟なり元祿十七年長門九郎兵衛舞の芝居に相座元にて豊竹若太夫と改名

す又出雲が芝居にて筑後と同日語りしに聞人筑後とまがふ程なりとかやゝがて上野少掾となり藤原重勝と云ふ又越前少掾となる(寶曆六年の頃隠居して齡八十に近し)

豊竹肥前

○江戸豊竹肥前掾は難波の人越前掾が弟子にて新太夫といへり享保十九年江戸に來り四五年の間は若松丹後掾といふ名代にて芝居興行し其後辰松か芝居に出しが元文三年自分芝居を求め豊竹肥前掾藤原清正とやくら幕にしるしたり淨るり芝居其頃薩摩辰松などは休の時もあれど豊竹座は絶ず興行せしとぞ古來名人ども有といへども芝居主座元太夫と三ツを兼備せしは京都に宇治加賀掾大坂に豊竹越前掾江戸にこの肥前掾三人のみなりといへり世に古淨るり絶果て竹本豊竹二流繁昌す其他半太夫國太夫等の流ありといへども是等は唯座敷の一興また歌舞伎の所作道行の合方舞子の地にかたりて段物操芝居には用べからず

あやつり

○あやつりは【續日本紀】に挑文師みえたり綾の紋を取ものなり【新猿樂記】に掀營をあやつりとよめり又【撮壤集】に操物物真似と出たり木偶の機關もその義なりこれを淨るりに合することは傀儡師に始めりといふ(傀儡師のことは委しく考へて【覆篋録】の内に載たり【羅山先生文集】に傀儡を見るといふ文あり江戸第一僂師小平太といへり【東海道名所記】に後に淡路之丞と受領せし夷かきといひしとは異なるか)然るを【事跡合考】に紀州浪人小平太後淨雲と云ふ此小平太西宮の傀儡師源之丞といふものに人形を舞さしむと云へるは誤なり小平太は人形舞しにて淨るり語り淨雲とは異なり(又薩摩と稱せしことのよしをいふに島津家にまねがれ彼處にて江戸中に唯一家鶴屋といふ人形屋有しに木偶を作らせ又家紋付たる幕を用ひしが事終りて後には是を小平太に與へられしより世に薩摩太夫と稱といへるもひがことゝ見ゆ薩摩は彼が受領の名なるべし)【四條河原芝居改帳】淨るり薩摩延寶六年十一月二十八日口宣眞藏仕(口宣案橋常信宜薩摩掾とあり)源之丞所持仕云々是淡路が後とおもはる

操道具

○操道具も其かみは鹿末なることにて【雅州府志】に其始繼張幕於兩楹之間舞人形於其上といへり【竹豐故事】に大方は黒幕と山簾とにて人形の衣裳鎗泥のすり込摸様女人形は紅の表に淺黄裏杯にて事足りぬ元來足付人形は曾てなかりし(竹本豊竹兩座となりて互に競ひて作者さまの趣向を工み出し道具立人形美麗を盡し詰人形の外は皆足付となり出つかひの外は介錯つかひ立かゝり歌舞伎役者の所作に増りてみゆといへり)

石井飛彈

○【人倫訓蒙圖彙】(元祿三年上木なり)土佐掾が芝居の處あり人形いづれも足なく裾より手をさし込てつかふ三絃ひき座頭にてゆかは今のすゞみ臺床机のごときを土間に居て其上にてかたる(俳諧温故集)人形の手にもなしたり角頭巾(介我)古きかぶり付「氣を付りや人形の手は人の手ぢや」佐渡嶋日記】に人形芝居にては大坂石井飛彈といへるもの尊まさればならぬことなり元來操人形は首ばかりにて着物を打合せ手も足もつかひ人の手にて仕たるもの近來迄子供の翫びにデコノボウといへるもの是なり石井氏其見苦きを工夫して手をこしらへ足を付たりそれより手の指を動し眼をつかひ眉を動かすなど近來はさま／＼自由に作る是石井氏工夫の根元なり今は飛彈の名は濱芝居の名代はかりに残りたり【四條河原芝居名代改帳】からくり淨るり山本飛彈云々口宣案元祿十三年十一月源清賢宜任飛彈掾云々)

○【昔々物語】昔は堺町のあやつりさま太夫筑後丹後近江肥前永閑あやつりの淨るりは酒呑童子或贅花車等云々人形の拵やうも先大將は立派ぼし直衣をさせ郎等にはゑぼし素袍をさせ女の主人には髪をすべらかしかつら帯かけて召仕まで髪をすべらかしかつら帯ひたひにかけ御臺所には十二一重の小袖をさせ男女共に規式正しくこしらへ淨るり初る前に先式三番を能の如く濟し其次に人寄とて和田酒もり一流前淨るりにしてすまし其跡にて其日の本上るりを始る云々近年のあやつりは大將も大廣袖だて

小袖もやう至極のだてを盡し人形面體浮氣に拵へ相伴ふ郎等もみな廣袖の小袖大白衣はさげがみ女の
人形は御臺所といふも皆妓形なげ島田のかみにて小袖も伊達を盡し淨るりは始より終まであるにもあ
られぬ好色を作り不届千萬なる仕組其上木に竹をつぎたるやふに時代ちがひ云々

○【新著聞集】に泉州堺の眞言宗の僧辭世の歌「世中はしやのしやの衣つゝてんく〜てくる坊主に残る
松風」傀儡師をいへり

でこのぼ
うこの
ぼう

○でこのぼうはもとだうこのぼうといへり【埋草ト養千句】石臼に何やら入てまはすらんだうこのぼう
はこまかなるべしといへる是なりだうこのぼうのことは別に考ありこと長ければこゝにいはず

○【操外題年代記】に正徳六年【國性爺後日合戦】のとき大幕の上に小幕を引初む享保六年八月信州川中
島合戦に山すだれをはりぬきの本山に作る同十三年五月【篠原合戦】に初て正面の床を横へ直す同十六
年五月國性爺三度め天満のひゞき組より芝居の表に幟を立てる同十八年四月【車返合戦櫻】大森彦七人形
指先の働を仕始む同十九年十月【蘆屋道満大内鑑】與勘平人形腹のふくるゝやうに作る延享二年七月
【夏祭浪花鑑】人形帷子衣裳を着す右いづれも竹本筑後芝居にてなり又豊竹越前芝居にては享保十五年
八月【楠軍法實録】和田七人形眼のはたらきを仕始む同十九年正月【北條時頼記】正面の床を横へ直す元
文五年九月【武烈天皇嬪】佐手彦の人形眉毛動くを初む元文五年【花和讀新羅源氏】の切に操大躍いせ音
頭茶屋掛あん灯雀をどりの仕出し珍し右かしくの趣向は三月十八日十九日の事なり廿日に外題を出し
五六日の間に出来作者並木文助及惣役者中の働前代未聞といへり

おやま
人形

○【江戸圖鑑】(元禄二年)操狂言太夫通油町おやま二郎三郎高砂町とんつう與惣兵衛と出たり【世事談】
に小山次郎三郎といふもの女の人形をよくつかふ遊女傾城の類をおやまといふにより是をおやま人形
といふといへり紛らはしき書やうなり思ふに上かたにて遊女をおやまといふによりてとなへしならむ

○【竹豊故事】におやま治郎三郎此道の達人なり京都には貞享元禄の頃おやま五郎兵衛同五郎右衛門大
藏善右衛門などありといへり治郎三郎が弟子なるべし但し歌舞伎にて女がたにいふは後の事と見え
てそのかみは女がた太夫くわしやがたはみゆれどおやまの名なし(をやまは何の義にか小野頼風が妻
の女郎花になりたる古事は男山に名高ければ艶色の義をとりていふ歟又さまざまあらず唯女人形の名
なるべし京師賣色に山猫と稱するよりの名にはあらじ)おやまは人形の名なり一説に思へらく眉墨を
付ること遠山の如くすこれを以て名く今妓婦の通稱となるといへり延寶八年次郎三郎人形上覽ありお
やま二郎三郎なるべし

○元禄十四年五月三日和泉太夫おやま次郎三郎兩人參昨日紀州様へ御臺様被爲入候に付被召寄難有奉
存候由申候江戸半太夫も届け參候

淨るり座
看板の圖

○天和貞享頃の淨るり座看板の圖土佐少掾にたんぜん新ぞう與太郎ふく太郎若女彌藏端歌三味線、【薩
摩外記】におやま與九郎太郎滿助手惣つま方けんさい小歌さみせん、丹波少掾にけんさいとる平やつ
と彌藏おやま小歌さみせん、金平せつきやう石見守座に能人形どんつうどん七ちや平おやま小うたは
うたさみせん、とあり小歌さみせんは其役を勤むるにて人形の名にはあらず思ふに同じ人形にても其
座にて名もあるべしけんさいは賢才にや女形をおやまといふと同一人形の名なり

形のろま
人

○のろまは江戸和泉太夫芝居に野良松勘兵衛といふ者頭ひらく色青黒きいやしげなる人形をつかふこ
れをのろま人形といふ野良松の略語なり又鎌齋左兵衛はかしこき人形をつかひ相共に賢愚の體を狂言
せしなりそれより鈍きものをのろまといへり其後そろまむきまなどいふもの出来たりと【世事談】に
いへり【竹豊故事】に野呂松氏を祖として京大坂の棹芝居に鹿呂間そろ七麥間など名を付道外たる詞
色をなし淨るり段物の間の狂言をなしたり近來はかやうなることは捨り知れる人も稀になりたり又按

そろま
むきま

るに西鶴が【諸艶大鑑】に越後町揚屋のことをいふ處外記が平安城の道行かたればおやま甚左衛門が仕出し人形そろま七郎兵衛が二王のまねなどみゆさて野呂松は氏にはあらずのろまは鈍きをいふそのかみの俗語にて愚なる人形の名に呼しことしるし其他の人形の名を見て思ふべし【なるべし】にとろくけんさいといふ倡人は唐勅景差なるべしといへるはうけがたし【葛藤】(下)一むかしつもる咄は無量劫まねる腹からのろま米平又【六玉川】(五)人形の中のろまは毒らしき又(七)のろまつかひも蠟燭で喰平澤常富が【後は昔物語】老人の咄しをしるし處土佐ぶし淨るりの間々にあひの狂言といふあり是近來とり出たるのろま也のろま米平など人形の名にてのろまは治兵衛といふ男の人形米平は甚右衛門といふ男の人形なり又云土佐ぶしの人形は裾より手を入れてつかひ足はなく手摺の下より人形ばかりみせてつかふ人の容はあらは見せざりしもとよりさしがねにて左を別人のつかふこともなかりしなり後に至り臺事とて碁盤人形の如く出つがひも有て其時は足をつかひしこと也あまり働かぬ人形をば胴串とて今の手遊のごとく如此にて遣ひし也働く人形ばかりつまみとて是も短くしてつかひしと云ふ

出つかひ
辰松

○又云出つかひは辰松(八郎兵衛)に始る人形の動くに隨ひおのれが身をものそさまにうつすもの故見ぐるしきを恥て黒きとばりのかけに黒き頭巾を被るなり【雍州府志】に人形を上下の幕の間に出しつかふ上段の幕を顔隠といふ人形遣ひの顔をかくすなり幕の内を幕屋といふ近世舞樂の樂屋に准じてかくやと云ふ辰松は人形に手煉し上下を着し手摺をはなれて無量の手づまを遣ふに全身少しも亂るゝ事なし古今の妙手といへり辰松幸介これに亞ぐ各現在大坂藤井小三郎近本九八中村彦三郎みな出遣ひをなすといへり(辰松八郎兵衛出遣ひの初は元祿十七年曾根崎にておはつ徳兵衛が心中の淨るりなり殊の外はやりて其稽古本今に傳はれるあり其圖に辰松が上下をきて出遣ひの處あり衣桁の如き手すり

淨瑠璃作
者

有て座て居ながら人形を手すりの上に出し遣ふ手すりに幕などはなし【竹豊故事】に辰松八郎兵衛京大坂にて譽れを取後に江戸に來りて益名高く操櫓をあげ芝居を興行せり是を辰松座といふ京には正徳享保の頃三升平四郎宇治久五郎三十郎與八郎等いづれも名を得し上手なり大坂には辰松氏藤井小三郎桐竹三右衛門等おやまの名人あり當時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人なり相次で若竹東工郎譽高しおやまは今藤井氏男人形には桐竹吉田豊松若竹氏の中に上手多し

近松門左
衛門

○享保四年亥十一月二十五日葺屋町操師辰松八郎兵衛幸助二の御丸御舞臺にて操仕候事
○淨瑠璃作者江戸には【世事談】に北條宮内岡清兵衛(金平)などは此人の作といへり塚原市左衛門(半太夫節の作者)等あり頃日は聞えずと云り【關東俠客傳】云凡金平といふ淨るり江戸太夫にさつま淨雲丹波(後か)太夫近江語齋太夫伊之助肥前太夫土佐太夫外記半太夫式部皆名人なれ共此太夫かたり得ぬ節に付しも丹波父子に不及虎屋永閑牧野備後守殿好にて金平入道武者修行に節付せし計なり丹波太夫本行節のよしといへりこはいつ頃のことか延寶頃一枚繪に金平入道武者修行あり)そのかみ好事のもの戲作すといへども其人しられず是を産業としたる者は近松門左衛門に始る百餘部の院本奇と稱すべし近松姓は杉森名信盛平安堂菓林子と號す越前人少き時肥前唐津近松寺に遊學し後京師に住す學醫岡本一抱子の兄なりといへり享保九年甲辰十一月二十七日七十餘歳にて身まかりぬ(存在の時自の肖像に辭世をしるし置り「殘れとは思ふもおろかうづみ火のけぬまあたなる朽木かきして大坂谷町法妙寺に墓あり法名阿釋院穆矣日一具足居士

井原西鶴

○【操年代記】に貞享三丙寅年京宇治加賀掾難波に下り京四條芝居にて西鶴作の淨るり曆といふを語る義太夫方には賢女の手習并新曆として兩家はり合遂に義太夫淨るりよく嘉太夫止め其次のかはりは凱陣八島これも西鶴作にて評判よき最中出火して加賀掾は京に登れり西鶴は井原氏俳諧は宗因が門人に

て一日二萬三千句獨吟してより二萬堂と號せり【五元集】に住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時後見たのみければ「驥の歩み二萬句の蠅あふきけり(執筆數人なれば此時其角もたのまれしならん)戯篇そこばく著して世人に悦ばる元祿六年癸酉八月十五日五十二歳にて終れり辭世發句「浮世の月見過しにけり末二年大坂八町目寺町誓願寺に墓あり仙崎西鶴といふ(下山鶴平北條團水)が建る處なり西鶴は寛永十九年に生れ近松は慶安承應頃(十歳ばかりもおくれしならむ)門左衛門が近松を名乗ること三井の近松院にはあらざる歟其故は【本朝文鑑】鳥追辭の注に昔説經者といひて蟬丸の流を汲て三井の近松院を本寺とす今の佐々羅といふものならむとあり似つかはしくなん)先輩に中川喜雲淺井了意が類ありといへどもよく世情に通じて滑稽をのべ盡すやうのことは西鶴が右に出るものなし八島其碩八文舍自笑等が草子一部の趣向はあれども西鶴が餘唾を拾ふに似たり淨瑠璃に於ては近松が如き者古今獨歩と稱すべし近松に亞でみゆるは紀海音なり筆才他人の庶幾すへぎにあらす其外竹田出雲西澤一風錦文流村上嘉助松田和吉長谷川千四並木宗輔安田蛙文爲太郎兵衛などあり後の淨りは合作のもの多く一筆なるはすくなく

南京あやつり 雨かへる おでこ からくり人形 ぜんまい 彌三五郎 竹田観からくり
し 硝子) 獨狂言 樽人形 笠人形 ござん人形 七變化

南京あやつり
雨がい

南京あやつりとて人形に糸を多く付て上よりつりてつかふもの有り【西鶴遺土産】四條のことをいふ處あまがへるの芝居なる小みせもの云々【歌舞伎事始】に芝居四條中島にありし時類焼し雨がいてといへる南京あやつりの小芝居一軒残り又別條にするして云ふ四條中島東門前北側に雨がいてといひし南京あやつり有り淨るりは角太夫節なり此雨がいてと云事はすべて小芝居にはやねなかりしが此芝居には板やねにて雨のふる時もいとほざりし故かく云りとあり(雨がいての説は非なり小兒の戯にあまが

南京と云ふこと

おでこ
と云事

からくり
人形

へるの家とて作ることもあり小みせもの、小屋の大きに准らへて云なり【伊呂芝居】といふ草子に人をつかふこと南京人形の糸さばくるよりもやすくと云るも是なり【竹豊故事】に南京糸操は寛文延寶の頃よりつかひ初めし山京都山本角太夫芝居に専らつかひしなり江戸には兩國橋廣小路に天明九年の頃始てあり風來が【放屁論】(兩國橋みせ物のことをいふ處)大魚出れば大蛇骨出硝石細工牽絲傀儡古きを以て新らしく田舎道者の目を悦ばしむなどいへり此操りいつも國性爺の淨るりなどをして有しが文化十三年に絶たり小きもの南京といふこと近世の俗語なるべけれど何のよしにかあらむ常にかはりて小く愛らしきをいふ殊なる物を唐といひ南蠻といふも同じきにや其内南蠻はことに異變なるをいふさて此南京あやつりは綾つりの義にはかなへるもの也三番叟の人形などに糸を付たる手遊は今にあり○南京といふはもと異様なるを云なり【花見車】に俳諧の風體をいふ處談林風の後或は南京流とてさぬきを敷と云て圓座になし三輪をひやすとのべてそうめん(成たる一體半年ばかりいひしらせ云々あり○おでこはでこと云ことにおもじを添ていひたる也でこのほろなり【此事別に委き考ありこゝには略す)其内一種おでこといふ人形あり古き繪双六にみゆ(此双六は前の双六の條にも云るごとくおでこの圖は後の繪ながら享保の末のものとはみゆ)享保元文頃ありしみせものなるべし放下師の人形箆籠を伏て明る度に其中の手遊さま(にかはる傀儡なり(この人形は今もあり)兩國橋廣小路なるおでこ芝居はもと是なり月成が【後は昔物語】に父が今日はでんづくでんの前を通りて杯といひしは芝居のことなり堺町を通りしといふことなりと云り(でんづくでんは即おでこでんなり芝居に鳴す太鼓の音をいひしやうなれ共こはされことなり)○からくり人形は傀儡なり漢土には周穆王の時に偃師といふ者木人を作りて歌舞せしむ是を始とすと【事物紀原】にいへりこゝには其始詳ならず【今昔物語】に高陽院の親王はきはめたる物の上手にて細工

に巧みにおはしけり京極寺を建給へりしに其寺の前の河原にある田は此寺の領なり然るに天下旱魃しける年此親王長四尺ばかりなる童の左右の手に器をさゝげて立る形を造り此田の中に立て置人來て其童の持たる器ものに水を入れれば盛受る時は人形の頸引かゝるやうに操り造りたれば是をみる人ごとく水を持來り器に盛興じけるまゝ京中の人群り市をなしければ其田焼ることなくして滿秩したりと云ことを載す又いと後の事ながら【甲陽軍鑑】に景勝より御曹司信勝公へ御音信に謙信弄物城攻のあやつりからくり物敵身方二千計の人数一間四方の城形進上云々また【老人雜話】に秀頼五歳の時京内參有伏見より行列をなす云々錢を箱へ入るれば廻る人形を興の先に持せ諸大名供奉す椋梨一雪が【獨吟百韻】に「四條に御成門の立春長閑めける大あやつりの作りもの水をあげ樋やかくる苗代と云るは右に云る古事どもを用ひしにや【似我蜂物語】に唐船の作り物に七八百の人形有を泉水に浮ぶれば人形歌舞管絃を盡したるはてに帆柱を立帆を揚れば一ツの人形火をうち鐵炮を放てばみなうちはらひて失ぬるからくりの事を云りこは作りもの語なめれどかゝる細工もあるへき也からくりの義はくりは操の意くり出しくり込などのくり也からとは巻ことをからまくからみからめる皆おなじ今刀劍の飾其外白かね細工など根がねを地板に貫き裏にて根がねを打廣げてとめ置をからくるといふ古き詞と見えて【十二番職人盡】銅細工の歌「離れゆく人の心はこはかねのからくりかねてねをのみぞなく(ぜんまいからくりと云は糸また鐵の細きを巻て有其形微の芽に似たれば云ふにや此ぜんまいと云名いと後の俗稱ながら何の義にか解し難し古くは【和名抄】にも微蕨ともにわらびと訓す後世微にぜんまいの名あるは蕨と分たんが爲也いんち鎗の中心の先巻返して目釘穴としたる處を俗にぜんまいと云などは微より名づけたるべけれど彼からくりのぜんまいは微よりさきの名にあらん押思てふにぜんまいは細きものゝ巻たるなれば織卷にや織羅荷など思ふべし又かのからくりは緩やかに巻たる物少しつゝ巻しむれば漸巻歎いづれ

とせんまいと云事

彌三五郎

とも定め難くなん其名とけい出來てよりの後なるべしとけいは【采覽異言】に慶長十五年秋新伊西把備亞の舟漂着す資糧を給ひ舟を繕ひて歸らしむ十七年其禮として來聘す献上の物の内に白鳴鐘一口あり此製是より有といへり【鷹筑波集】あやつりをからくる智恵や天下一昔の操芝居みな天下一を稱す【菱絨輪】に火の入あぶら妖ものゝ出端痰吐ぬぜんまい木偶の鳩尾先とあり

○からくり人形は山本彌三五郎世に名高し【佐渡島日記】に石井飛彈つかひ人形の手を付たる根元なり今は濱芝居の名にのみ残り【歌舞伎事始】からくり淨り名代山本飛彈是山本彌三五郎事なり元祿十三年御免有て今大坂へ引移り出羽といふ【操年代記】に其頃は歌舞伎芝居あたり多く殊に出羽にはさまくゝのからくりなどして見物諸方にわかる云々【五元集】鶏の句合(六十四)其盤もていざ函谷へ彌三五郎判詞云右は孟嘗君が手のもの未だ出ざりしに其手古しとて新しき手を盡したる鶏術三千の客を越たりさてこそ観覧人形の名をあげ飛彈搦と受領をも賜りけり昔のはかりことは聲をはかり今の工みは形をたくみ出たり和漢の通例を以て寶永の史記にも載ぬべしそれば鶴飛彈これは鶴飛彈なり云々(鶴飛彈は大工なり【享保二年日記】七月廿九日鍛冶橋御多門御普請御手傳小屋場中橋廣小路にて御渡御作事方御披官松坂源五郎殿棟梁鶴飛彈立會【江戸鹿子】に平内甲良と等しく大工棟梁の内に大鋸町鶴飛彈と出たりまた享保五年庚子十二月廿八日鶴飛彈に川船方一件御用仰付られ候事あり)ある事を見れば彌三五郎は観覧に備へし事もあるにやされどもからくりの名代は竹田を古しとす延寶八年【洛陽集】に玉兎の歩み竹田近江もなかりけり(竹子)とも見ゆ【歌舞伎事始】からくり物まね子供狂言名代竹田近江万治元年竹田出雲搦といふ寛文二年大坂にて始たり又享保十一年五月名を竹田近江と改む寶永の草子【伽羅女】に竹田が座敷からくり等も御慰みとて末社まかせ是より出雲の大社へ大盡入來云々(此時いまだ出雲にて近江と改めざれば戯文かく云廻せり【我衣】に寛保元酉三月より九月迄大坂竹田近江大

竹田

椽塚町勘三郎芝居の向にてからくり井子供狂言みせしむ貴賤群集して初日より三日の間あまり人多き故木戸を閉たりと云 (江戸に來りしは此時はじめなるべし) 江戸にもそのかみ細工人はありとみえて【貞享江戸鹿子】にからくり人形師井ぜんまい大坂町なんきん清左衛門人形町松屋庄兵衛くわいらい人形師日本橋南四町同丹後守さかい町横町竹岡豊前とあり (正徳二年辰八月葺屋町せつきやう座四郎兵衛大坂より山本五郎三郎手づま人形あやつり芝居を呼下し興行すこれ彼彌三五郎が弟子なるべし享保七年壬寅四月廿四日葺屋町にて播磨と申からくり芝居來月朝日より芝居仕候に付名主庄右衛門届來る延享二年五月六日堺町肥前芝居へ大坂より操師出羽呼下し操仕候處紫縮緬水引張候義井出羽呼下し候處御訴も不申上候段御咎にて先月晦日肥前義町内へ御預被成候處出羽呼下御訴不申上候段は先例もこれあり御用捨成下され紫縮緬水引張候段不届につき座元肥前義島目十貫文名主次郎兵衛五貫文過料の事)

覗きからくり

硝子を作る事

○次でに云覗からくりはいつの頃より始りけむ【職人訓蒙圖彙】などにもみえねばいと近き物なるべし西川祐信が畫ける圖あり今のやうとは少し異なり【本朝文鑑】涼賦に覗からくりの地獄極樂も都是一錢にて善惡を見すれば一錢千金の遊びの中に巾着摺はいかに見るらんと云り享保四年板【艶道通鑑】花見の人群集する處をいひて覗からくりをびいどろなしに大津繪を生でみるけしき云々【前句付】黄海に目をふさぎけりくびいどろの内の極樂すきて飴(からくり)をみせて飴を賣なり)また【本朝文鑑】地鼓煎の文に此頃人の覺えたがひて覗からくりのあしらひと思ひ云々あれば其頃よりも飴を用ひしことゝ見ゆ硝子をかけて物を見ることはもと西洋の法なりこゝにて硝子をふき作ることはいつの頃なるか【産業袋】に硝子はふき物なりとは知れ共其術は思ひもよらざりしにふと長崎人唐人に傳受し秘して是を製作せしがいつとなく他にもれて此頃は一向法會祭祀の場市中に於てその術をあらはに見せ萬人に奇異たらしむといへるは享保十七年のことなり見せものにしたるは珍らしければなり (風來)

獨狂言

樽人形

がみせものゝ事を云たる内硝子細工とあるは是にや)今も淺草に長島屋半兵衛といふ硝子師あり年七十餘なり此老父が祖父を源之丞といふ江戸にて硝子をふき初めたるはこの者なりといへり彼是考へみれば其始正徳の頃にやあらんのぞぎからくり西洋の硝子をも用ふべければこれにあづかりたる事にはあらねど高價なる物はかゝるものに用ふまじく思はる貞徳が發句かざりや興行に(と端書ありて)氷とくる水はびいどろながし哉とあるは西洋の硝子を粉にして七寶ながしなどせしをいふ歟

○獨狂言は貞徳が【油渣】にゆるりと爲ては又かしこまる主従者まねするひとり狂言に【昔々物語】に右近源左衛門は業平餅を買たまふ所を狂言に舞ふとありこれらの獨狂言は一人して狂言するなり【世事談】に神田多町わらや次郎兵衛といふもの上手也寛文延寶の頃なりといへるも上にいふひとり狂言にや又【伽羅女】(一)獨狂言人形屋あり是はひとりつかひの人形なり貞享四年【江戸鹿子】座敷獨狂言日本橋南二丁目松村休閑南八丁堀一丁目道具屋九右衛門塗師屋惣兵衛などあるは人形の獨つかひなるべし昔は遊人なぐさみに人形を舞す事はやれり【二代男】(五)人形舞してあそべと狭み箱より疊やたい取くみ上は幕つらかくし首おとし五尺に足らぬ内に金銀を彫め自由をしかけ六段なからのでくるぼろ動き出ける【諸艶大鑑】あの幕の内には一節ぎりのつれ吹人形まはし狸々呑をするもあり

○又樽人形といふは西武が【沙金袋】(明暦三年印本)かげうつせ人形樽のかどみ餅(康重)【寶倉】に花見の事をいふ處こゝら行かふわび人の人形樽につめ懐辨當におさめて花はいづれの情に見つるかしらねどもとりとりほこりかなる顔つきも實に春は春なれやといへり人形樽といふは今の柄樽の如きものにてそれを風呂敷にて包めば其頃の遺ひ人形のかたちに似たれば酒興にはこれを舞したり古き一枚繪樽人形の圖を見しに小き柄樽に衣裳着せ編笠かぶせたるをつかさまなり是飲席即事の興にせしものと見ゆ右の一枚畫は貞享又は元祿のはじめころのもの歟又寶曆の繪本【咲分櫻】と云にも同じく樽つか

笠人形

ふ人をかけりこれは菅がさをかぶらせり人は男の肌ぬぎたる醉狂の體なり

○笠人形は西鶴【榮花咄】に菅がさのうへに人形をしかけて顔つきにてつかふ事をいひて其圖もみえたりこれらは何ものかおどけたることを思ひ付たる一時のことにはあれど後また非人ものもらひ此を學びて遂に與次郎の名あり【屠龍工隨筆】與次郎人形のことをいひておんどれくとて此前與次郎といふ非人の足のうへにて舞して來たることありといへり

與次郎人形
恭盤人形

○恭盤人形前に引る其角が集に「恭盤もていざ函谷へ彌三五郎といふ句あるを思へばそのかみ飛彈掾が手づま人形ごばんの上に載てみせし事ありしなり臺を別に作らず恭盤を借用せしは古の意にひとし【源氏】葵卷の繪に紫のうへ恭盤の上に立檜扇をかさせる所あり昔は質朴の事にてありしを今は禮式のやうに成てさるべき姫君御髪みぎには恭盤を參らせらるゝとかやこのごばん人形の思ひよりしも是等にやならひたりけむ）正徳四年八月二十九日【日記】或人の振舞に參りおやま次郎三郎ごばん人形見物致候

○【佐渡島日記】は佐渡島長五郎といへる俳優剃髮して蓮智坊といへりしか筆記なり予五歳の時より親傳八所作事を教へ東武へつれ下り恭盤人形と名づけごばんの上にて我に藝をさせしにあなたこなたよりめされ春より九月までつとめたり去御方の御機嫌に入毎度めされける云々九歳に成たる時最早ごばんのうへに乗かぬる時節より傳八工夫しだして七げの曲といふことを案じ出し教へこみし云々是又からくり人形より案じ出しことゝ見ゆ（蓮智法師は寶曆七年丁丑七月十三日没す【歌舞伎事始】に幼少より此道に心をよせ凡修行三十年來なりといへり年齢いくつと云ことをしらせれども剃髮したるは六十ばかりなるべし然らば彼が恭盤人形は貞享元祿の間と知らる）

○又七變化所化をば元祿十三年水木辰之助市村座にて七變化秘曲を盡して七變化狂詩といふ一巻出來

七變化

金屋平兵衛板行し、世に廣むと【元祿會我物語】に見えたり（辰之助が七變化を始といへる説あれども非なるべし）

嬉遊笑覽卷之六下

喜多村信節撰

兒戲

あはく

かふく
ほうしご

鹽のめ

れろく

兒戲(翫好)しほの眼れろく(類) おくめん 隠れ遊 鬼ごと 耳ひき 指きり ちんくも
んがら 竹馬 鳩車 べかかう がこし 手々甲 てんがう うふめ もゝが もんぢい
【佐夜中山集】(付句橋本富長)さぞなともゑと夕なみの紋撫子は風にふかれてかぶりく(郡山千久)
河原によする水のあはく(また【廣筑波集】(鶴冠井良次)わらび手はあはくをするか山の口漢土の俗小
兒を哇々といふ【説文】咳、小兒笑聲【孟子】孩提之童、注知孩笑とあり【廣韻】哇、小兒聲とみゆかぶは
頭なり【日本紀】に句驚都々伊また頭槌劍ともありまた【隣女悟言】に嬰兒の頭をふるをかふくといふ
こと古き詞なり【神代紀】に頗傾也を加夫志と訓し【天智紀】に垂頭而熟をかふしてあからめりと訓す此
ころなり【散木集】稻のかたぶくを見ておぼつかなたが袖のこにひきかさねほうしこのいねかぶしそ
めけん信節云ほうしごは小兒をいふほうしごの稻とは實いりよくて頭のおもきを小兒にたとへかふす
ると作りしなるべし

○【正章獨吟千句】ににらむ目もとにまじる鹽のめ兩の膝に糺子ほんの子すへ双べれろく(は【和訓栞】
に遼來の轉語なり【蒙求】の注に江東小兒啼、怖之日遼來々々、無不止者とみゆ違は張遼なり此説びがこ
となりれろく(轉じてべろくともいふべろく)の神は正直がみよなどいふ何の故事何の義といふこ

ねんねん

との有べきべろとは舌の形容をいふなり

○【懷子俳諧集】(二)胡蝶もねんねこ眠る花の影(弘永)【風流つれく(草)おねんねやおころく(と御子
さまがたをすかすも上つがた乳母達のむつごとぞかしそれを下つかたにてはねろく(この子よといふ
なりねんねんほうしや小ほうしとすかし給へとあるもの申きむかしよりいひけることにや麻戸の皇子
いとけなくまし(し時后達のかく仰せられけるとぞ【太子傳記】にも見えたり又【四天王俗人櫻】(中
邑阿契作)といふ淨るりに槇の井が涙と共に添乳うた(ねんく(法師小ほうしや禰宜羅らが候ぞとすか
す聖徳太子御幼稚の時月増日増が子も歌傳へて今に云はやすなどあるはまことに狂言綺語にて子も
り歌の証にだにたちがたくや又子も歌に七里が濱の砂の數とうたふは【半井卜養落髮千句】わかき時
さへ秋のよすがら身もしむは子もちははのぶしほさはまのまさこの數ほどもいや【松の葉】裏組錦
木に七里おばまの砂のかすほどおもへとも有り

ていく
たいく

○ていく(又たいく)共いふ【續山井】餅つゝじたいく(するやわらべの手(攝州正次)蕨と童ととりな
すなり古くは小兒ならでも物を乞ふなどには用ひし詞なり【狂言記】(山だち)にていとおこさぬか(同
續集】の内にもこの詞あり)又【犬子集】に(貞徳)秋の夕の蚊のしんきさよていとこふとおさらぬ文は
露涙また【醒睡笑】(七)思の色を外にいふといふ條、當家の者あやまちて高き處より落さまに念佛をい
ひけるをいたはる人の云やう題目をば念せずしていかなればあさましく念佛をば申つるやと問されば
よ先の落さまにはていど死ぬると思ふた是をおもふに今てうどといふ言に似たるやうなれどさにあら
ず今ちやくとぶふ言は速なるを云ちやく(略してちやつとといひ又てやきくとも云是なり

○【耳底記問】(光廣卿)云コテンの詞と制の詞との差別如何答(幽齋)制の詞といふはテイと禁制するな

コテンの
制の詞

リコテンといふは制の詞にはあらで用捨あるべきことばなりなかくに我戀はなど古點なり○處々に
こてんと云こともみゆこれ主あることばなど云類なりさていとどは屹とあるひはしかとなど云ふ詞に
近しテイと【耳底記】日ぐらしの瀧の條、このたきは名所にてはなくて名あり此類多し此やうなをばて
いと日ぐらしの瀧と云ふやうには詠ぬものなりたとへばなにとやらして日ぐらしのたきのなにと云や
うによむものなり

人見しり

○小兒の人みしりするをおもきらひといふ古歌に世の中はいとけなき子のおもきらひみしがなきにぞ
ねはなかれける又【新撰六帖】わきもこがまだあさがほやつゝむらんかみふりあげておもがくしする

がてん

○【俳諧懷子】(萬治元年)釋氏任口が跋にあそこゝらの事を拾ひ書集めほゝに入云々あなおさなや敷
島の直なる道にはあいやをもせず筑波の正しき事にはがてんゝをせでかぶりゝをふらば誰かて

かふり

うちゝの手を打てあはゝと笑はざらんや又【古今夷曲集】(寛文五年序文)おさあいをあひやてうち川
水の阿晒和いな船の掉頭々々土佐の手々甲大和の元興寺隱期などやうのことをもてつらねかいらす

あわゝ

○小兒の詞に足をあんよといふはあゆむ事を教ゆるにあんよは上手といふ是なりこのことを漢字には
朶といふとみえたり【鶴肋編】(易正義)釋朶頤云、是動義如手之捉物、謂之朶也、今世俗以手引小兒、

あんよ

學行謂之朶、莫知其義、以此觀之、乃用手捉、則當爲朶也【類柑子】千里の濱八百日行通しるべせんと
てあんよゝゝとはやしもていざなはれ行云々

とゝ

○斗々【運歩色葉集】に倭國小兒呼魚曰斗々【類說】云南朝呼食爲頭、呼魚爲斗故(南朝は宋齊梁陳など
江南に都ありしなり)これ【北戸錄】に前朝短書雜說即有呼食爲頭(注略)以魚爲斗注に梁科律生魚若干
斗とあるこれなり【墨莊漫錄】云吳中魚市以斗計(一斗爲二斤半)などあるにて知べし魚のことを斗とい
ひしには非ず計ふるの法なり

隠れ遊

かくれん

ぼ

目かくし

めなしど

ち

○隠れあそびは【うつぼ】また【榮花物語】などにかくれあそびのわらはげたることをいへるは今のかく
れんぼなり今は目かくしとかくれんぼと二種なれどもゝと同戯なりめかくしをめんないちどり共いふ
【福富草子】にめなしどち軒のすゞめといへり一休の【水鏡】にめなしどちゝ聲についてましませとあ
る注にどちゝとは尋ることばなりといへるはわろしどちは友どちなどのどちにて同志の意なるべし
今めんないちどりと訛れるは雀といふがちどりになりしにはあらずどちといふが倒にちどゝなりさて
りもじ添たるもの歟又は前に一つの名にて目なきものゝ足もとをちどりにたとへたるにてもあるべし
佐野紹益が【賑草】に今頃はやよひの半なり軒の雀とて外の鳥よりは人近きものに侍れども人をおそる
ゝ事すこしもゆだんせず此ごろは常の如く早くは逃さらず家の内迄も入て餌をもとむ子をやしなひ侍
る故なりとあり是軒の雀の義なり【俳諧發句帳】親重が句雲に月かくれんぼうかかつらの(此句【犬子
集】にも見えたれどもそれには名をしるさず)【古今夷曲集】に題しらず(行安)小姫子のかくれごにさ
へまじらぬはもはや桂のはもじなるべし【風流徒然草】其譯知れぬこと侍りかくれんぼうにまじらぬ者
はちつちや子持やかつらの葉とは子供のいふことなりと有り行安が狂歌も是をとれるなり【吾吟我集】
山居せば奥よりおかくれんぼう跡をも人のたづねこぬほど【續山井】花見には人にかくれんぼうし
哉(一笛)かくれことするか葉かげの兒さくら(次長)小櫻もせよや風にはかくれんぼ(守昌)【季吟二十
會集】寛文十二年の卷あつまりて遊ぶ桂の里子供(宗英)かくれんぼうにまじらぬはなし(季吟)【崑山
集】(慶安四年良徳撰)つちやこぶしかつらの里にうつ礪(吉景)【後砂金袋】(西武撰)月うつるつちよ
こぶしよ桂の葉など見えたり(天竺桂と云もの桂に似たるものなりやぶにつけい是なり諸州方言多し
其内つゞと呼ぶさま肥前因幡等にてしか名く思ふにつけと云はこれにやもとつけと云しがつゞにな
りたるかいづれ此の訛言なるべし)さるを信田小太郎と云上るりにかくれんぼうにまじらぬものはあ

ふちやこふちやかつらのはぞうりかくしかたぐま足のつめたいちよこく走りと云るはつちと云こと分らぬ故さかしらにあふちと改めしなり【物類稱呼】かくれんぼ出雲にてかくれんぼ相模にてかくれか

んしやう鎌倉にてはかくれんぼ仙臺にてかくれかしかと云ふ
○此戲も一極めて鬼となる者を定むる事なり其時いふ言は江戸にては「かくれんぼうにとよふよなみのかさつくれんぼうとわりやそつちへつんのきやれ(又づんく)つめの云々中切てくちやむちやが鬼よともいへり)出羽庄内にては先幾人にて互に拳を握り出して是を順に數へる如くにいふ)かく

れぼちだてやなあなめちくりちんとはじきしまたのおけたのけ又「にぎりたぎりしよたぎりおけたのけとも云へり又江戸にては「いちくたくちといふことをもするなり【簞絨輪】に寵愛の餘り猪口迄おいとしぼいちくたくちくに毛だらけな腕(千雪)彼ちや子持もこの一極めといふ事をするにいへりし諺な

るべし漢土にはこの戲を捉迷藏といふ【瑯環記】に玄宗楊妃とこの戲をしたるよしみゆ此遊びとは異ながら芥かくし又草履かくしありいづれもおなじしかたにて一人尋る者に中りたるに隠せし物を求め出さしむ尋る者を鬼といふ明和二年【川柳點付句】朝のうちさうりかくしを廊下でし(妓女の禿をいへり)甲乙次第を定むるに草履をかたかた脱でこれをあつめ空に向ひて一度に投げ馬か牛かと云其伏

仰をいふなりたとへば象棋の金か歩かといひ碁の調か半かとするることごとし
○鬼ごと【物類稱呼】江戸にて鬼わたし京にてつかまへば大坂にてむかへば東國及出羽邊又肥の長崎にて鬼ごとといふ奥の仙臺にて鬼々津輕にておくりご常陸にて鬼のさらといふと有り子をとる子とるといふ鬼ごとは和州天の川辨財天の祭式にありとなむその原は【三國傳記】に惠心僧都闍羅天子故志王經をみて其心をとる童を集め地藏と獄卒と取むとられじとする學びを始めて比々丘女といふといへり後

京極攝政良經公の【作庭記】に凡石を立る事はにぐる石一兩あれば追ふ石は七ツハツあるべしたとへば

いちくたくち

捉迷藏

芥かくし

草履隠し

鬼ごと

子をとる

部のとてうくひるくめといふたはふれをしたるがごとしとあれば鬼は多きことししらる今するとは異なりさて鬼わたしといふ事もこれより變じたるにや【月令廣義】の打鬼戲また【帝京景物略】の替鬼などもこの類なり前句付【廣津海】目をふさぎけりくかくれんぼ聲はかさなるみほづくし或人の狂歌にやうくにつまめる髪の角たてまままくはふが鬼わたしする

○【帝京景物略】云、小兒共以繩繫一兒腰牽焉、相距尋丈、迭于不意中拳之以去曰打鬼、爲擊者兒所執、々々者闕然共提代繫曰替鬼、更繫更擊、更執更代、終日擊不爲代、則佻巧矣これは撃んとする鬼を執ふるなり又云、繩以爲城、二兒怕蒙以摸一兒、執蔽城中、輒蔽一聲、而輒易其地、以誤之爲摸者、得則蒙

□、蔽兒曰摸蝦兒これ又捉迷藏の類なり

○【浮世物語】(前に引り)鼠まひ小路がくれ云々あり(新井白石佐久間洞巖に贈る書に人の亡命したるを小路がくれの様のことにて云々いへり面なくかくる意にや)鼠まひは出んとして出ざるなり元隣が誰身のうへ(三)庄や殿の一人の子もちたれ共此子うちねずみにて我うちより外をしらすといへる是なり又出すは耳ひことは鬼になりたる者のいふ言なり【廢筑波集】(塚口重和)出すは耳ひくべき月の兎か【簞絨輪】(十一集)火傷ならず果報に引耳の睡とあり此らこと異ながら耳ひくこと種々なり

○又小兒いさかひなどして中なほり互に小指を曲て引かくるを心とけたる驗とすこれを指きりといふもをかし戀路に指を截るをいかに心得てしそめしか指きりは【西武獨吟】月の出てと又はやくそく指きりをするゆびくひが露涙自注に約束にゆびきりを付るなりゆびくひの女は【源氏】はききりの巻)にあり【後撰夷曲集】ゆび切や地獄の釜へほつたりとおちようと云は二世のけいやく(安勝)この歌行風が卒注に童口遊詞とあり又小兒約束をして遠へじといふ印油誼又と髪油の指に付て柱などに押ことあり證文の印肉よりおもひよれるにや

小路がくれ
鼠まひ
耳ひき
指きり

もんがら

○又ちん／＼もんがらは【松の落葉】(三)づんがらもんがら踊といふ小歌あり是なり(限取阿宅松)といふ芝居歌にちんがらこと云り【後撰夷曲集】いせ参りあこぎがうらにひく足もたびかさなればちんがら(ぞする)(廣通)

竹馬

○古の竹馬は葉の付たる生竹を弄べり古畫にみえたり又【福富草子】に童子の持たるは二本にして今の製に近く但し木にて作りたる物とみゆ【江吏部集】に七歳初讀書、騎竹擊蒙泉、九歲始言詩、舉花戲霞阡、古歌に竹馬を今は杖ともたのむかなわらはあそびをおもひ出つ、(此心にや【温故集】に蓮谷が句竹馬や杖になり行けさの奉)竹馬は友人醒齋が書るもの有おのれも【雜考】の中に載たるありそれらのことこゝには略きていはず中山三柳が【醒醐隨筆】に端午戲作あり劉木作刀紙作旗、揚々竹馬着鞭騎、兒童妄習陣勝陣、斯亦安中不妄危、また古き俳諧發句に竹馬に乗か小篠の轡むし【續山井】にはねちらす篠はこ雪の竹馬哉(如貞)松江重頼懷子の集を撰萬治三年卒業して若竹の馬つれやみな懷子猶あまたあるべし田樂の鶯足は一本なり又行人の鳥足といふは高足駄なり(古くは鐵にて鳥の足の如く作りし故此名あり)○【保元物語】爲義の罪名定むる處長徳の比花山法皇紅の袴をつぎのべさせて奉り高あしにめされ築垣に御腰を懸させ給ひよなく御遊事ぞありしをとあり按ずるに此ばけ物のまね遊ばされしと云ことはこの御門御畫をよくあそばされてさやうのさまうつさせ給ひしよし【大かゞみ】に見えたるをしか誤りつたへたるなるべし

高足

○高足は【洛陽田樂記】に高足一足などいひ又【古事談】永長大田樂に一足とありて其下に又高足とあるにても高あしは二本なること知べし前の田樂の條にあれば合せみるべし

○【列子】に以双枝長倍其身屬其尾、並趨並馳弄七劍、迭而躍之、五劍常在空中云々【口義】云、双枝屬於尾、今人所爲長脚之戲是也【因樹屋書影】云、双枝屬足、即今端高話之戲也、高踏之戲、習于童展、寸々

馬貝の戲

而上長倍身矣、亦能弄刀劍等

○又馬貝の戲は是を戲場にて所作ことにしたりし始は九代め市村羽左衛門明和二年乙酉の顔見せにしたるが始なりさりながらその戲は古くよりありしなるべけれど詳ならず【箋絨輪】繻珍どんすを狎の首玉黒駒でなし貝の駒御召領(鈔同)又【義山後覺】(此書文祿五年の跋あり五の卷)明智光秀が信長を弑せし頃織田源五郎安土へ逃奔れる事を謡に作り童共貝がらに綱付て遊び／＼是を謡ひしなりといへり(童謡は一時の事なれ共この遊びは常にしたる事とみゆ)こは馬介の事とたしかには聞えず(今錫杖のことく介を貫き集めて打鳴すものあれど綱付るとあるにかなはず又今も京師には大なるきさを緒に貫き弄ぶ故これを錢介と云ふ

鳩車

○【あら野集】次第／＼に暖になる(冬文)春の朝赤貝はきてありく兒(舟泉)

○鳩車は【潜確類書】云、鳩車高二寸二分、長三寸、輪各二寸二分、狀如鳩形置兩輪間、輪行百(百は而の誤歟)鳩從之、其禽背負一子、有紐置之前、以貫繩、蓋繫維之所也、按【況母道均一】、故象其子以附之、因以爲兒童戲、若杜氏幽求子、所謂兒年五歲、有鳩車之樂、七歲有竹馬之歡者是也、こはふるき手遊とみえて【官遊紀聞】に古器之名、則有鐘鼎云々、鳩車提梁云々之屬などいへりこゝにもふるき畫には直幹中文の卷ものに童の鳩車をひくところをかけりまた【博古圖】に漢と六朝との鳩車の圖をのせて曰按【鴨鳩之詩】以況母道均一云々前と同文を載たり

べか／＼

○べか／＼は【大鏡】の五卷花山院御繪のことを申す處あて御ゑあそばしたりしさまけうあり云々たかんなの皮を男のをよびことにいれてめかかうしてちごをおとせばかほあかめてゆ／＼しうおちたるかたとありめかかうば目眩うにや今いふべかかうなり其義は指にて目皮の下をひきて赤き處をいだすわざなれば目赤うの訛りともいふべけれと非なり後世は物を請ふを否と云に目の皮を指にて引てべかとも

ペイともいふされどこれも近時よりのことにもあらず【半井ト養落髮千句】くれもせぬ花一枝を所望してのぞいてみればべいか紅梅是くれもせずべかゝうしたるなり正三道人の【因果物語】(三)町の旦那べか犬をつれて来れりとありべか狗は其面めかゝうしたらんやうに目の赤き犬なるべし

○【續山井】(寛文七年撰)折る人にべかかうといへいぬさくら(友静)此句上にいへるべか犬をいへり又

【後撰夷曲集】所望する一えをくれぬのみならずこの目むきつゝあべか紅梅(正友)

がごし
わくりこ

○【見聞集】の跋に或時は顔をしがめてがごうしとおとせども問やます又【籠耳】といふ草子に小兒の啼

を止る時むくりこくり鬼が来るといふこと後宇多院弘安四年北條時宗が執權のとき元の世祖せめ来る

せまが
か

元は蒙古なれば鬼がくるとは夷賊を云なり蒙古國裏といふことのいひ誤りなり(筠庭云此説わるし

蒙古高句麗の二賊をいふなり【吾吟我集】に鬼ぐるみわがそこなひて手の皮をむくりこくりと身は成

にけり)顔をしがめてがごじといふは大和國元興寺の鬼の事【本朝文粹】に見えたり又手をくみ顔にあ

て手々甲といひて小兒をおどす事もあり予が幼き時乳母どもが姑獲鳥が来るといへば身にしみて恐ろ

しき夜多かりし云々あり行風が【古今夷曲集】の序土佐の手々甲大和の元興寺といへりさてこれらの手

々甲は即【大鏡】のめかゝうなること【籠耳草子】に手をくみ顔にあてとあるにてしるし又土佐といふは

彼處に元興寺の如き古事あるにもあらず唯邊鄙の國なれば鬼あるやうにいひ傳へしならん(おもふに

目に錢をあてゝさる戯れする事もあれば錢元興といひしにやもと手をあてゝすることなれば手々甲と

書たりと見ゆ)今も土佐國の小兒手々甲といふことをするはいたく違へり人をおどすわざにはあらず

小兒集り互に手をくみ合せ手の甲を互に打ながら向ひ河原でかわらけ焼は五皿六皿七皿八皿八皿に

おくれてづでんどつさりそれこそ鬼、袋着て笠きて来るものが鬼よとこれをいひつゝ手の甲を打なり

その終にあたる者を鬼と定むこれいづくにてもする鬼定めなり(思ふに皿かぞへの仕もの、説は是ら

より出たるか【諸國里人談】に世に知ところの皿屋敷のことをいひて其古井の跡廻町の内にあり又雲州

にも播州にもあり何れ一所眞なる所あらんと云り今も番町さらやしきと云には播州とまがひ易し必誤

りあることしるし本よりさらやしきは家居もなきさら地の屋敷と云しをこれに附會して皿を破りし女

の怪談を設しなるべし因に云これとはうらうへの物がたりにて然も寔録なるべし加藤左馬介嘉明南京

焼の皿十枚秘藏なりしを近く召仕ふもの取落して破りければ恐れてこもり居る由を聞て呼出しあやま

ちは誰もあるもの也苦しからず破れ残りたる皿を持来れとて自ら悉く打破此皿残りたらんには何の年

何某が破りしと其者の名もいはんことよからず我毛頭怒りてかくするに非ずとて其後は器物を愛せら

れずとかや)【後撰夷曲集】節分の豆なやうにと名付子はそれこそ鬼をかなぼうしなれ(ばん州池田氏

是誰)手々甲は名のみにして其實を失へり手々甲の如く聞ゆれどもさにあらず是はてんかうをかくい

うぶめ

てんかう

へるなりてんかうは手業なるべしてゝんかうといへり【松の葉】永閑ぶしくわんくわつ一休にけら

けいあんでがゝんうとあり又物など乞ふを否とてうけがはぬにもべかかうすることあり

○次に云【籠耳草子】の姑獲鳥のこと【和名抄】に孕婦をウブメと訓す産婦の義なり【今昔物語】に生兒を

抱きて人を誑かすものをうぶめといふ其義同し【本草綱目】云姑獲鳥産婦所化陰隱爲妖とあり【本草啓

蒙】に一名釣星鬼【外臺秘要】夜遊鳥【潜確類書】中國にてはうぶめといふもの夜中飛行して小兒を害す

と云て夜中は小兒を外に出さす此鳥の鳴聲兒の啼が如しといふ然れどもその形状は詳ならず今小兒の

衣服を夜中外に於て乾すことを禁ずといふも此鳥を畏ると京師にても傳へいふといへり【籠耳】に形

梟に似たり七八月の間よなよな出て鳴といへり【支中記】に是産婦死後化作、故胸前有兩乳、喜取人子、

養爲己子、凡有小兒家、不可夜露衣物、此鳥夜飛、以血點之爲誌、兒輒病驚癇及疳疾、謂之無辜疳也、荆

州多有之、亦謂之鬼鳥【周禮】庭氏以救日之弓救月之矢、射鬼鳥、即是也これらの小説を出所にてこゝに

もいひだしゝものと見ゆその實否は論ずるに足らず【北戸録】に陳藏器引五行書、除手爪、埋之戸内、恐爲此鳥所得、其鶴、即姑獲鬼車、鷓鴣類也、【嶺表錄異】にもこの説あり七草爪をとることはこの故なり【世説故事苑】に七種を搥事【事文類聚】に歳時記を引て云正月七日多鬼車鳥度家々搥門打戸滅燈燭禳之和俗七種菜ヲ打ツ唱に唐土鳥日本の鳥渡らぬ先にと云るは此鬼車鳥を忌意なり板を打鳴すは鬼車鳥不止やうに蟻也星の名て天鳥を逐ふ事は【周禮秋官】に見えたり【桐火桶】と云ものに正月七日七草は七星なりなといへるも【周禮】に本つけるなるべし

もゝがは【和名抄】に鼯鼠を毛美と訓す是なり又ムサ、ビ又モ、ガとも有り是も【本帥啓蒙】にモ、(土州)モマ(同州薩州)ソバヲシキ(西國)ノブスマ(畿内)バンドリ。ヌレデ(飛州)城州山中には産せず他國深山には多し古歌には春日山高圓山擲州の三國山等に詠せり今も春日山に多し形は猫に似て瘡紫褐色大尾身より長し腹下黄色喙頰雜白色四脚肉翅尾に連る翅を開けば傘を張るが如し常に木梢に穴居す夜出て能飛然れ共只高きより飛下るのみ高に上ること能はずとあり(筠庭云もゝんぢいといふは物に見えず今尾の生たるものをすべてしかいふ百歳の老父といふことにや又はもゝがのかをとゝかゝのかゝとなすらへそれにむかへてもゝちゝとは一きは勝りておそろしきをいふにや)

目くらべ

目くらべ 耳引かけ かけくら すみたふれ 紙つけ合 馬のり(はいま) 肩くるま 手車

道中籠 うなきの瀬のぼり(いも虫、鬼の留主のせんたく) 目白押 つばな拔(きつね)

【長門本平家物語】(九)清盛夢に鬪鬪を見る處たとへは人の目くらべをするやうにたかひにまたゝきもせずはたとにらまへてぞ候ける【太平記】(十)箱根竹の下合戦の條かやうに目くらべして鎌倉に集り居てはかなふまじ云々【異制庭訓】に遊戯を擧たる處目比頭引膝挟み指引腕推指抓この目比はにらめくら也指引は今見及ばぬやうなれと前條にいへる指ツきりなるべし但しもとは勝負するわざなるを後にあ

らぬ事となりしもの數

耳引かけ

○耳引かけしつべいは箕山が【色道大鏡】に常のかるたをうたんに賭を定めずしては不興なり但し定むる共耳引かけ敷竹篋がけをよろしとすべしとあり耳引かけは頼たすきの類なるべし竹篋は指しつべいもありそれは指の力を顯はすわざにて拳螺のふたなどを打破るなり

かけくら

○江戸にてかけくらといふは【枕双紙】藏人巡符の事をいふ處昔の藏人はことしの春よりこそなきたちけれ今の世にははしりくらべをなむする【望一后千句】尻をつほるは余所め恥かしおそらくといひしもまくる走くら後世俗に是を走りこくらと云ふ【古今夷曲集】に(行風)帆をかけてひいふうみつの浦風は走りこくらや足はやく舟其角が【花摘集】柴雪が句「野路の月はしりこくらに息きれてなど見ゆ

すみたふれ

○すみたふれ【安布良加須】に拭ふべき紙を手に持泣ばかりすみたふれにや負て腹たつ今戯れことに負たるものに墨をぬるこれにやあらん

紙つけ合

○又額に細き紙を唾にてつけぬれざる處目のあたり迄下りたるを息をもて吹落すことあり元祿頃の繪にかやうの童戲多く集め書たる物あり其内にも此わざ見えす猶近き頃の戲事か(或人云ふ英一蝶が畫にあり)【續山井】(寛文七年湖春撰)短冊は紙つけ合か花のさき(たんばすて)と云句ありこれ鼻の先に紙をつけ合ふ戲によりて作れるなるべし

アリヤリ

○次に云このごろ小兒走り行つゝアリヤリヤンリウとゝいへりヤリヤと云ことをかさねてリヤンと云より拳をうつ詞になしてリウトウはいひ出しやうなれどもさにはあらずリウとは物を振物を打つなどの勢ひを云【物類稱呼】に尾張にては走る時など猶豫なくけはしきことをりうくと云とあるこれなり又此ごろ富有なる人をいふにリウとしてと云ことはやれりこれ亦同じ詞ながら意はうつりたり

○江戸近在平井村あたりの小兒の遊びに馬を追ふ學びあり一人馬となるもの繩をもて首より背にかけ

馬のり

て結び兩手に杖をつき馬の足かたどる一人其つなを牽て行なり

はい馬

○馬のり【榮花物語】(木綿四手)おとゞも消入ぬ計にてふし給へるにや一のみやおはしましておとゞおきよく馬にせむとおこし奉らせ給へばわれにもあらずおきあがり給てたかばひしてむまにのせたまつり給てありかせ給へば一のみやまいよりうごかぬむまかなとて御あふきしてとくく打奉らせ給(おとゞは堀川左大臣顯光公なり其御女小一條院の女御にて其御子一の宮中務卿敦貞と申すおとゞは一のみやおしうとなり此時小一條院御堂殿の女にかよひ給へばなり)おさな遊びの今も昔も貴も賤もかはらぬさまみるが如し又【猿樂狂言】(外五十番)【手車】と云に乗物とも馬とも思し召身ともおもはれて下されいとあるは下に這て負ふにはあらずよの常のことく背に負ふなりそれを馬といふ今もしかり今はい馬といふこと【東海道名所記】にみかどより五畿七道におつかひをくださるゝ時出しける傳馬を驛馬と申す驛馬とだにいへば人おそれてたちのきけり今の世までもはいまといへば道行人もかたはらへ立のくは此事よりいひ傳へたる言葉とかやといへり【日本紀】に驛を訓り早馬の急語なりいとやと通す傳をハイテとよめるもこの義なり後世は傳馬とのみいへりとぞ【好古小錄】に驛傳古函の圖を載【俳諧錦繡】に宴りにさかなのなきは比興なる(肅山)迷惑ながら馬になる袖(彫棠)【蓍絨輪】に若子の抱守り袴きた馬といふ句もあり

肩くるま

○肩くるまは古くはかたくびといひたり【義經記】に奥州平泉寺見物の條ねんいち見たわとてめいよの兒ありはなおりて出たゝせわか大しゆのかたくびにのりてぞ來りける近くは萬治二年印本【私可多咄】に江戸葭原の事をいふ處あとよりかふるは肩くまにてきたる云々くらべこしふりわけがみの肩くまは君ならずしてたれかあぐべき

手車

上にも引る狂歌に手車あり又【伽羅女】といふ草子に或ものゝ奢りをいふ處すぐれし艶女二十五人此女の役めには二六時中の差別なく御隠居の仰に隨ひ皆々立よりお手車云々又【騎人傳】に享保のはじめ手車といふ物賣翁あり糸もて廻してこれはたがのじやといへばこれはおれがのじやとこたへて童部買て遊ぶとありかゝれば彼手車のはやしごとこれらより出しにや【正章獨吟】千句に少人どもの袖に集り手車の果ての後のどゞめぐり手車の手遊は今もあり戸車の中のくびれたるやうの物を上にて作り中に糸を結つけ巻て下れば廻りて上り下りするものなり

道中駕籠
うなぎの
瀬登り

○又幼き者を背に負て道中駕籠やかからかごやいきよりもどりは安いなとはやすことありもどり駕籠は乗る價のやすきは理りなれどさにはあらず安いなを早いなともいへりこれ空かごといふにかなへり
○うなぎの瀬登り【東海道名所記】にうなぎは川瀬にのぼるものなれば登魚梁といふ物にてとるなりみやこがたにてはいとけなき子どものあまた集りて帯にとりつきてながくならびたるせなかの上を一人のぼりてはひありくをうなぎの瀬のぼりと名づけてたはふれとす(此戲今も他國にはありもやせん江戸には似ることあれどもこの名残にやしらす古のさまに帯にとり付くしてかゞみ居てありく其はやしごとに芋むしころころひやうたんぼつくりこと云つゝしばらくありきて先に立たるものあとのくせん次郎と呼ふは最後に居たるものはなれ出て前に來て何用でござるといふ呼たる者手前今迄何して居た答棚から落たばた餅を食て居たそれならば雨がふるか鎗がふるか見てこよといへば見に行まねして雨がふる鎗がふるか問まゝにそむかず答ふ其時前がよいか後がよいかといへば前がよいといふそれならば前に居よとてそれを先の第一番に居らしむさて初めの如くはやし歩むなりはやしことは手遊の芋虫より出しなるべし此外にもおなしやうなることあり二人前と後となりて立並ひ手をひき合その手を高く舉いわしこいゝまゝくはしよといふあまたの子供その引合たる手の袖下をくゞり抜る時

芋虫
うなぎの
瀬登り

鬼の留守
に洗濯

手を引たる者潞りに来る者のかたに向たる者くどる者の尻をうつくどる者はうたれじとするなり又各着る物のつまを両手にもちて洗ふまねびして鬼どの留守に洗濯しよといひつゝ居れば鬼になりたる者糊を賣むといふ時着ものゝつまをかゝけたるにうくる鬼ひら手して力を入そのつま持たるを打拂ふ拂ひ落されたるは鬼にかはりてなるなり鬼の留守の洗濯といふことわざより出たる戲なり

目しろお

○目しろおし【鷹筑波集】椿原に油おしする目白かな【懐子】(五)おしあひてめならふ籠の目白哉【大倭本草】に繡眼兒常熟縣志曰最小而巧今按るにめしろの目ぶち縫るか如し故に繡眼と名く其羽色青褐色青ばとの色に似たり枝上にて同類と押合といへり脊の色雌雄ともに同じ但腹の毛の褐色なるは雄にて黄色なるは雌なり雄は鳴雌は鳴ず並び居て押合ふものなり是を學びて小童おしあふに申なる者推出さるれば端にゆきて又申なる者を押めじろが押合もその如くなり(諺に人こといはじめじろといふは右のことにあらず人のうへいはゞ目代ありとなり清盛が千人禿などの類壁に耳ありといふも同じ心なるを目代を付置て人こといふとおもへる説もあれどさにはあるべからず)

つはな抜

○つはなぬこ／＼鬼ことの一種に鬼になりたるを山のおこんと名付さそひつれて下にかゞみとも／＼つばなぬこ／＼といひつゝつばなぬく學びをしてはてに鬼にむかひ人さし指と大指にて輪を作り其内より覗きみて是なにと問へば答てほうしの玉といふとみな逃走るを鬼追かけて捕ふるなり此戲は即きつねの窓なり(別條に有り併せみべし)白茅和名にチといふ春新苗出る時葉の中に花を包みてありそれを茅針とも茅筍ともいふ即つばな／＼り小兒これを採て嫩穂を出して食ふ【綱目】の集解にも益小兒といへり夏に至れば穂長く出白き絮あり【信實朝臣百首】いとおしやまたかふるなるうないどもやけ野にあまたつばなぬくなりこの絮はくちとなす古き俳諧に芝居せはしとあらそへる袖といふ句におゝな

手にて豆
を作る事

きか打つれ立てぬく茅花とあり是を採學ひの戲狐のことある其よしありチの花出て絮となりぬるを狐といへり【俳諧懐子】(一)迷はされぬく野は狐つばなかな又(十)狐の多き芝原の中たくるまでぬかぬつばなのほいなしや茅の花のたけて狐となる迄ぬかさりしを惜むなるべしかゝることあるによりて此戲は起りしとしらる又綿に狐のまじりたるといふことも有それは色の黄なるが雜りたるなりこれも久しくいひきたることゝ見えて古きおとしの咄にあり又【産業袋】(五)わたほうしの條出來合にはうちへ唐綿を包みにして上綿ばかりをきせ作る日に透してみれば包みか眞わたばかり敷よくしれみゆるものなりきつね綿とは右の包のことなるよし【俳諧江戸枝折】狐が付て越後屋の損

○手にて豆を作ること【きのふはけふの物語】(下)長老さまへよ六太夫どのゝおかた御み舞にさせん豆をもちておこしある新發知長老さまへ申すやうよ六太夫殿の御内儀のこれを持てお参り候といふて指にてもものを作りお目にかくる長老御らんじてさて／＼にくいやつじや人のみる所にてさやうなることをするもの敷とあれば此こと近時よりするにあらず

爪をくふ

○爪をくふことはいと古し【源氏物語】(竹川)玉かづら侍従の君して薫に和琴をすゝめて弾しむる所にあまえてつめくふべきことにもあらぬをと思て云々注にはづかしくせんことにあらずと薫の心なりとあり童のはにかみ爪くふといふも是なり又小兒のわやくといふは【正章が千句】「俄にも七社の神輿ふりたてゝ待賢門の前にわやたく(たくは痛くの略の義くらうがはしきをこちたくといふたくと同じ)いたくわやくなりこのわやたくのわやくとなりしにや又【鷹筑波集】にわらはへのすかすもきかすやにいふてみるもあふなき松の木のはりといへるは脂のねはりてもてあつかひかたきにたとへていふ

わやく

ヤニチャ

か此をヤニチャともいへり延寶七年【俳諧富士石】いら高數珠西瓜のたねやゝにちや坊ヤニチャ坊とは小兒のヤニいふなり西瓜のたねの粘るにたとふそのたねを數珠によそへたるは坊を法師の如くいへ

だ

るなりやにちや今はやんちやんと云是なり
○今江戸にてだといふ地踏々なりこれもと小兒にのみいひしことに非ず【雨夜三杯機嫌】悪左禮會
に大盃催亂舞障者朶々言押者邪々袴又【物類稱呼】にしくむといふことを江戸にてはにかむといふまた
ひびるといふを東國にてしこむ又はかむと云ふ房總にてかなづうと云かなづうとは寄居虫のことなり
おのれが家より外へ出ることあたはず内にばかり居にたとへたり遠江にてまにると云ひ關西にてわに
る越後にてけすむと云ふ【萬葉】につのふくれにしくひあひけんともめりしくひはしくむといふにお
なじと有とみゆ按るにしくむは即しこむにて尻込なりこれを【萬葉】のしくひといふ詞と同じとするは
非なり右の内やにるはやにいふにてしこむとは別なり

卯榎 (卯杖剛卯) 打毬 毬杖 (ふりく) 飾り花 藥玉 (十二月かけ物) 菖蒲胃 (菖蒲

漫、削りかけの胃、しやうぶ刀、胃人形) 小兒山伏のまねひ

毬杖ふり
卯榎

毬杖ふりくの遊は打毬より起る但しその杖は曲杖とて毬杖ふりくは異なりよりておもふに毬杖ふりくは形は卯榎より出たるものとおもはる卯榎は【枕双紙】に正月ついたち齋院より后宮へお文來る處お文あけさせ給へれば五寸ばかりなる卯榎二ツをうづゑのさまにかしら包みなどして山たちばなひかげなどうつくしげにかざりて云々卯榎のかしら包みたる小き紙に山とよむをのひひきをたづねればいはひのつゑのおとにぞ有ける又【同双紙】正月十日そらいとくらう云々の條桃の木にわらはの登りずはえを切るに女の童のそれを請ふ處うつち木よからんきりておこせこゝにめすぞなと云て云々【源氏物語】浮舟) 正月初に宇治より匂宮の若君のおまへにととある處卯づちおかしうつれくなりける人のしわざと見えたりまたふりに山たちばな作りてつらぬきそへたる枝にまたふりぬ物にはあれど君がためふかき心にまつとしらなむ

またふり

卯杖

○【和名抄】に榎榎をまたふりと訓り樹枝をいふなり【花鳥餘情】に木の枝に山たちばなを造り花にして卯榎を枝につらぬきたるなりといへり【江次第】(二) 絲所進卯榎藏人取之、結付畫御帳、懸角柱、副立細木爲柱、榎末出五尺計、可用桃木、又四角可削、近代丸也失敷、とおもふに卯榎と卯杖は長短によりて名のかはれるにやおなじ程の物なり【延喜兵衛府式】云々其御杖楨榎三束(一株爲束)木瓜三束比々良木二束(中畧)梅木三束椿木六束などみゆ【夫木集】に色かへぬときは峯の玉椿君か八千代の卯杖にそきる【西宮記】卯杖春宮坊立案(蘇芳木)云々作物所供御杖四枚作御生氣方物形置洲濱上云々持統天皇三年正月乙卯大學寮獻八十枚【漢宮儀】云正月卯日以桃枝作剛卯杖厭鬼これもと漢家の剛卯にならひ給へるものなり御生氣の方の物形を作り風流の飾物さへ付るは後のことなり【源氏】の孟津抄に洲はまを作り物にて其上にいほの中に御生氣の方の獸を作りて卯杖にあはしむたとへは生氣東にあらば鬼南にあらは馬なるべし臺盤所に置る【新古今集】後冷泉院おさなくおはしましける時卯杖の松を人の子に給はせけるによみ侍りける(大貳三位)相生のをしほの山の小松原今より千代のかげをまたなん

剛卯

○剛卯はたゞ漢家のまじなひ物なり【天祿識餘】説文、𦉰、大剛卯以逐鬼也【廣韻】剛卯又謂之大堅、以邪也【漢書】王莽傳云、劉之爲字卯金刀也、其去剛卯莫以爲佩、注剛卯以正月卯日作、長三寸廣一寸四分式或用玉或用金、當中穿作孔、以綵絲茸其底、如冠纓頭蓮刻其上面作兩行書【北堂書抄】云漢家以五月五日、用朱索連五色剛卯止惡殺また【沈約宋書】(十四禮志)舊時歲旦常設葦菱桃梗礫雞於宮及寺門、以禳惡氣云々、桃卯本漢所以輔卯金、又宜魏所除也云々、宋皆省而諸郡縣此禮往々猶存とありかゞれば此にはさらに用のなき物から熱田の神事に卯杖舞をなすいつの程より有ることにか知らず【鹽尻】に正月十一日熱田の宮前にて宮人卯杖舞を奏し倍從竹川をうたふ尾張氏踏舞の頌を唱へて高巾子の神人鼗鼓を振り侍るさまいとく昔おほえたる云々いへりその歌曲に杖の舞翁子舞など委しくしるしたれども略

之さるを或人漢土の碌碌といへる農器より出たりといへるはうけかたし形の似たりとてこゝにはいまだ用ひざる物を漢籍より見出て兒童の戲翫に作るべきやうなし【野守鏡】にりうごのことをいふに「いまだよくもまはらぬさきになけあくればふりく」として落ることありこはたゞ投る時の形容の詞なり

打毬

○打毬は騎馬にてまり撃わざにて唐の代の戲なるを其頃こゝにも盛に行はれ【萬葉集】(六)四年丁卯春正月云々、右神龜四年正月、數王子及諸臣子等集於春日野、而作打毬之樂、其日忽天陰雷雨電、此時宮中無侍從及侍衛、勅行刑罰、皆散禁於授刀寮、而妄不得出道路云々といへることあり散禁とは禁足せらるゝなり【續日本後紀】仁明天皇承和元年五月戊午、亦御武德殿、令四衛府馳盡種々馬藝及打毬之態など見えたり又舞樂に打毬樂あり節會の馬藝おこなはるゝ時この様を奏すとなむ【平家物語】(十二)に後鳥羽院稚き御時打毬の玉を愛させ給ふ故文覺が毬打の冠者とのゝしり申せし事あり是を正月のもてあそびなりしよしは【袖中抄】に【十節錄】といふ物を引て黃帝取蚩尤頭毬之今毬杖是也以彼例漢土年始用件事國中無凶事仍日本國學其例年始行毬杖云々と出たりされどこはたしかならぬ俗説なり【源平盛衰記義經記】等に毬杖の杖を人の首になぞらへたることのみゆるはこの俗説によりて作りし事とおもはる【事物紀原】をみるに【宋朝會要】に毬杖非古蓋唐世尙之以資玩樂とあるに明らかなり【滑稽雜談】に俗に振々と稱して毬を拂ふもの有毬杖と云者にて杖のさきに付るものなり當代は古來の摸様に變り二三歳の幼兒に小き毬打を紙上又は薄板に帖し鶴龜松竹など作て是を毬打に限るやうに稱し其餘は玉振々と各別に呼ぶ大なる非也いづれも木丁と稱すべしと云々今玉振々と云は即昔よりの毬打にて腰物の目貫縁頭の繪様又は諸具の蒔繪にもあり其形狀玉は大戸に付る戸車の如く寶蓋の内の七寶と云物の如く彩る振々は木を八角に削り兩端を細く中ふくらにして細き方上の方左右に木瓜形の穴を穿ち此處に前件に云處の玉を付て懸籠金箔にてだみ其上に鶴龜松竹對峙等の繪を彩色にするなり用る時は

毬杖ぶり

玉振々

左右の玉を取はなし別にして是を擲つ玉とし八角の木の木瓜形の穴へ竹杖木杖の如き棒を貫き柄として是を玉を打毬杖とす略しては皆己が得物を用(己上)と云へり玉の形なども古今異なれども此説の如く毬打ぶりくはもと一物なり柄をさし緒を付るものゝ好によるべし(正徳の頃には古製うつりて今の體となれゝばかく云り)或は帯など用る處かける畫ありぶりく」と云ことは今ぶらくと云ふ言と同じ射藝に弓勢の強弱を争ふ爲にぶりくと云的ありうら板を丸くし白革にて縫くゝみ中に毛を入てふくらかにす安齋の【夏艸】歩射の部にぶりく」と云式はなきことなり是は圓物より出たることなりぶりくは上にはかり綱を付てつり置故矢あたれば的はね上り上の横串に巻つくなり其卷數多きをよしとすつよく卷つめたるをも數に入るなりといへり又太刀の柄の下緒のおもりの金ものをぶりくと云いづれも此翫具によりての名なるべし室町家のことをかける【年中定例記】と云書に正月の條に今日御毬打二玉二金まいるなりとあり【沙石集】(八)天狗の物語の處空より足ある釜ぶりくとして落つ貞徳が【油漬】にあぶなくもありめでたくもあり正月はありて町々玉うちて又掠梨一雪が【獨吟百韻】塵吹はらふ風は帯よぶりくもゝたで琥珀の玉打に春に北野へおじやれ松ばら(寛文元年の作なり)帯などにて玉うつをいへり

○【大麻】木やり歌(打ものゝ内)ぶりくにかい玉とありかい玉とはかひ遣るかい取などの詞と同くかい打玉といへるなるべし玉振々といへるは常なりまた玉毬打ともいへり元隣が【誰身のうへ】(明暦二年卷二上略)かさりわらべの玉毬打ぶりくふりし【佐保姫】に云々又ぶりくぎつちよともいへり【松の葉】京童といふ半太夫節に先正月は云々ぶりくぎつちよを手につれて玉をうち出のはま弓やなどありぶりくもとより毬打なれど紐を付て振る故にぶりくといふのみ今製の毬打は只祝儀の手遊なり順也が【俳諧五節句】に破魔弓玉毬打養君に乳母祝儀に遣す又ははねはこ板女の子へ遣す是みやこ

きつちやう

玉をきる

のならばしなり乳母なきは祖父祖母遺すと有今も京師には小兒生れて初めての正月母の親里より毬打を贈る(女子にも贈るは今は全く所用もなきかざり物故なり)次の年正月は男子にはぶり(女子には飾り花をおくるとなん此事古風をまもる者まれ)する事なりといへりされど飾花はもと五月の節物なり下總の千葉などにて玉をきると云て今も弄ぶ玉はけやきなどのかた木を丸さ宜しき程なるを小口より挽きりて用ゆ杖は木も竹も末の處を少し撞木の形に作るをよすとす凡二十間ばかりも隔て玉を轉しやりて打するなり玉は初め地に打つれば廻りて走りゆく甘間もゆく間には三四五度も地に付ては飛上り(してゆくものなり)こなたに居る者幾人にも並び皆彼杖をかまへて玉の來るを待てもと來し方へ打返す力まかせにすることなれば此時向ひ居る者の面などに中りてあやまち有り又江戸近き逆さ井などにもこれを弄ぶを見たりこれをはんまを廻すと云習へりこは濱弓のはまと名のまがへるなり

飾り花

○【枕の双紙】(五月五日の條)わかき人々はさうふのさしくしさしものいみつけなどしてさま(から)きぬかざみなかきねおかしき折枝どもむらごのくみしてむすびつけなどしたるめづらしういふべきことならねどいとおかし云々つちありくわらはべのほと(につけてはいみしきわさしたるとつねにたもとをまもり人にみくらべえもいはすけうありと思ひたるをそばへたることねりわらはなどにひきとられてなくもおかしむらさきの紙にあふちの花をあをかみにさうふの葉ほそうまきてひきゆひ又白き紙をねにしてゆひたるもおかしと有わかき女房ちごなど衣服に糸はな紙花にてあふちあやめなどを付るなり按るに【拾芥抄】に【證類本草】を引て是日俗人取撈葉佩之避惡氣とあるによりてあふちを帶るるべし古くより撈をあふちとすれども誤にてあふちは棟字にあたり撈はちやんちんといふ木なり【同】又紙春曙抄】卷二の頭書にくすだま【雲圖抄】には藥主とかけり【河海抄】に續命護命靈藥云々いへり

玉

みなくすだまの體なりと云々今女わらわ端午にもてあそぶかざり花なりといへり【雍州府志】藥玉の條下に端午のことを云て以彩絲作花枝貼白紙上掛之於女兒背後是謂藥玉古以丸藥交其間避穢氣長命縷之類也とあり是即かざり花なりおもふにその形は今の兒女子のえりかけとて花など縫たる物のあるそれに似たらん後には其用もなく只もてあそび物とするよりかざり花など呼るなるべし

○さつきの玉【夫木抄】(七)民部卿爲家花の色をさ月の玉にぬきとめてわかつをとめの姿をぞみる

○清俗も此日よもぎ菖蒲を用ること同じ【松亭行記】(重午の日還駕の處に)都城人家戸懸赤靈符菖蒲艾葉

菜莢

○藥玉は【河海抄】に御記曰延喜十三年五月五日丙午絲所供奉藥玉如常撤去年九日菜莢以藥玉懸替着御柱前例也【枕双紙】にくすだまは菊のをりまであるべきにやあらんされどそれはみないとを引とりて物ゆひなどしてしばしもなしとみえたり然らば重陽に藥玉を撤し菜莢を懸ること知べし懸ものに菜莢袋二様あり古製なるやしらす菜莢は藥種の吳菜莢にて食用の胡菘子にはあらず【雲州消息】(一名【明衡往來】)云今朝自或所給藥玉一流作以百草之花貫以五色之縷摸草虫形栖其花房云々みゆれば古くより虚飾多かり近世堂上に十二月掛物とて毎月に懸るものあり皆藥玉の如く五色の糸を垂て頭の方に其月々の草木の花また鳥虫などを作りものにして付たり古代なき物どもなり藥玉をもとにして作り出したるべし(或云これらの玩物大抵後水尾院東福門院の御意巧なりとぞ)【年中故事要言】民間にも五月五日女童の翫物に色々の作り花を糸につけ紙に張などして用るは藥玉を下に習てする事なりといふ

十二月か

○衣服には袂につけし事前にも見えたり又【爲兼卿家集】菖蒲露「引のこすあやめの草の袂にもさ月の玉のかくるしら露と有り

○菖蒲胃は【辨内侍日記】に建長四年五月五日の條女房たちにしやうぶかぶとせさせ花とも(脱文)あや

めかつらかけはけしきほどに云々辨内侍「黒かみのあやめはなきをひたひなるかぶとは(脱文)と人やみるらん(此時後深草院御年十四にやつきそひ奉る女房にせさせ給ふなり)これを「増鏡」に所々より御かぶとの花くす玉など色々多くまいれり朝餉にて人々これかれひきまきくりなどするに三條大納言公親の奉れる根に露おきたる蓬の中に深といふ文字をむすびたる糸のさまもなよひかにいとえむありて見ゆるを云々あるかぶとの花を後世の胃人形の如く紙にて胃を造り其上にさま／＼の花をかたどり作れる物とおもへるは非なるべしかぶとは云どもそれ程に頭にかうふるべき物にもあらずたゞかさしのやうにやあらん女房式正の時は垂髪して頂のうへに髪を瘤の如く束ねて是をかぶと名く其かぶに釵子をさすかくするを髪上げといふとぞこの如くかぶとの花は彼かぶとに挿む花なるべし【弁内侍の日記】なるあやめ胃も同じかるべし此所菖蒲を用る事古き例とみゆ

菖蒲綬

○【續日本紀】天平十九年五月庚辰太上天皇、詔曰昔者五日之節、常用菖蒲爲綬、比來停此事、從今而後非菖蒲綬者、勿入宮中と有る是なり又端午に諸衛府甲胃を着ること【延喜彈正式】に見えたり後に兒童のもてあそぶあやめ胃はその始【園大曆】文和四年五月五日條に今日加茂社競馬神事如例、彼是云今年天魔流行云々、童等結構菖蒲甲、即學合戰、所々催共興、童部親類已下、成人武士等相交、又傷殺害所々數輩云々、誠不可說事歟とみえたり是印地の戲なり幟を立木刀をもてあそぶ事もこの遺意なり【諸社根元記】藤森縁起、毎年五月五日祭禮、神幸之時、在地之神人等、鎧甲胃帶弓箭列騎馬、自爾以降、洛中洛外至邊土遠國、小男童兒帶作大刀刀等、以菖蒲飾之、稱菖蒲甲、是則當社祭禮供奉行裝也といへれどもさばかりにはあらず【寛永發句帳】にけふさは印地のしやうぶ刀かな【雄長老百首】さしまさに軒のをそひの名にあてゝ菖蒲刀のははをれにけり【紅梅千句】に持ちきるも輕き番やりばん具足五月五日もやゝくれにけり

削りかけの胃

○【洛陽集】に割ばさみいづれあやめぞ蓬ぞと(行正)【中古風俗志】に享保のころまでは所々の廣小路へ童集り菖蒲にて大きなふとき三ツ打の繩をこしらへ或は長竿等を持出往來の子供へしやがめ／＼といひて下座をさせもし下座をせざれば打かゝりなどして使につかはしたるは小裨布など重箱をこはされはう／＼逃かへりし事などありしが今は絶てなしといへりされど予が幼き頃までも童共人家の簪なるあやめを竹のわりばさみにて取あつめ三ツ打に組で持あるき他所の子供を見れば此繩にて地を打草履を脱で下座せよと云ふされども下座する童もなく又絶てさするに及ばず唯かくして遊ぶことなりき今も此戲する處もあるべし

菖蒲刀

○削りかけの胃は【俳諧懷子】(明曆二年)甲をみれば削りかけなり殊更にもる鹿茸や馳走ぶり(重頼)内田順也が【俳諧五節句】(貞享戊辰)大かた繪物師細工なり人形に武者あり舟あり平家物語の體有り龜相なる張貫もありしころに木をつきかんなにて削り短冊の長きやうなるを色々に染いくつともなくぶらさげるによりて削りかけの甲といひ賣にや又けづりかけにあらぬも有り此頃は宮殿寺社兒法師女さま／＼の古事どもあり江戸にては張良辨慶など名ある武者を只一騎作て張良々々辨慶々々と賣り胃とは賣りかぬ也【日本歳時記】(正徳五年板)菖蒲胃太刀等の事をいふ處に此ことむかしは厚き紙に人形をほり付薄き板を胃の形にこしらへ或は菰の葉にて馬を作り或は木を長刀の如くにけづりなどして戸外に立侍りしが近年は風俗美巧をこのみて木をもつて人馬の形をきさみ又はりこにして彩色をほどこし或は甲胃をきせ劍戟をもたせ戰鬪の勢をなさしめ戸外に立侍る是を胃といふ

○【鷹筑波集】(三)安井正親けづりかけの胃のだしは鯉節これ彼厚紙にて作りて胃の上に付たる物なだしといへり江戸にて今神祭のだしといへるものもうへに付たる人物草木何くれの作り物をいふ名なり此句は右の作り物と鯉節のだしとをかねていへり又【世話盡】(三)明曆二年刻夏の胃をかさはむる

曹人形

窓檜物師の軒もあやめの節句にて是も削りかけとはなけれ共檜物師といへるにてしるべし
 ○正保慶安の町ぶれにも前々より小旗之義絹布一圓仕間敷候と仰付らるゝ萬治二年四月十六日毎年如
 申觸候五月節句の甲結搦に仕間敷勿論作りもの作り花糸類金物金銀の箔漆につけ商賣堅まじく候い
 かにも龜相なる人形一つ二つより外付申まじく候寛文七年十一月朔日町觸の内五月のもてあそびの甲
 古へのごとくかぶり候やうに拵へ人形ほり物可爲無用但甲に立物は不苦候すべて結構に不可仕事此頃
 かざり物をむねとしてかぶられぬ曹を作れるとみゆ今の上り曹といふ物麻を垂たる木の削りかけにか
 へたるなるべしもとうへに付し人形を後には別に作ることもなりても猶曹人形とはいふなり 上り甲
 とはやことなきあたりへ奉るの義なりひなにも此名ありしとみゆ【類柑子】廣蓋を車大路やあかりひ
 な(適山)ひなは小きものなればなり

○【世説故事苑】(寶永七年板)曹及人形を造り門戸にかけ紙に畫きて門に出すといひ【五元集】に五
 月雨や傘につる小人形とは雨日には傘を共うへにさしかけたるを傘につると作れるにや又菰の葉にて
 馬を作り戸外に立と【歳時記】にいへり【好色つれ／＼草】七夕のことをいふに百姓は麥わらにて馬
 人形を作りて高き木のうへにかけならままつりとす今も信州松本にて七夕には町々繩をもて家と家と
 の軒にかけ路を横ぎり木にて人形をいとおろそかに造り紙衣をきせいづくとなかかの繩を吊おくと
 なり

○越後鹽澤わたりにても七月朔日より七日の夕まで家々の軒に繩をひきはへ人形はすげにて作り五色
 の紙衣させ大小刀鎗長刀などを竹にて削り鑿また鎗の鞘等はかるたなどの厚紙をきりて作りすべて大
 名行列のさまなどうつし吊おき七日の晩方にとりて川水に流し捨となむおもふに牛は七夕に因おれば
 靈棚に牛馬手向る事の七夕に移りさて人形などさま／＼吊ることは端午とまがひたりさりながらこの
 さまをもて昔の端午のやうもおもはれぬ傘につるといひしも其とをりにて言を設ていひしにはあらぬ
 にや

ちまき馬

○【散木集】の連歌にをさなきちまのちまき馬をもちたるをみて承源法師ちまき馬はくびからきはぞ似
 たりける(附る人もなしと聞えしかば)きうりの牛は引ちからなしとあり又【著聞集】(草木部)黍
 法印五月五日人の許へ菖蒲をつかはすとて讀侍りけるわりなくぞあやめのふちを心さすちまき馬をや
 ひきいだすとて此歌粽を請へるにやあやめのふちは穂の形鞭に似たるをいふ又元祿比の畫に見えたる
 端午に門に立し人形の體甲冑きたるも廣袖にて手なく又其ころのあやつり土佐の芝居などの人形に似
 て下はみなはかまのみにて足なし茅卷馬など古は兒童のもてあそびにて常にも造れるなるべし

小兒山伏
の學び

○この日小兒山伏の學びせし事【日次紀事】(延寶中の撰)以柳木作大小刀是謂菖蒲刀、男兒横之於腰、
 着頭巾倣山伏體【むかし／＼物語】(享保十八年)六七十以前までは五月の初とときんすゞかけほら菖
 蒲刀を賣てありくそれを子供もとめて五月四日に子供しやうぶにて鉢巻しときんをかぶりたすきをか
 け菖蒲刀をさしほらを吹ありくといへり【俳諧懷子】(明曆二年撰卷十)すゞかけも頭巾も脱てゆかた
 びら端午の暮をおしむわらんべ(致也)これ男兒が山伏の装ひいかめしきを好めるのみにはあらず頼
 光大江山入義經辨慶大塔の宮などの似せ山伏の體をよろこび學びしなるべしそは彼曹人形にも多く作
 るればなり又小兒のみにもあらずたま／＼武人のこの装ひせしこともあり【北條五代記】に北條家の
 武士主家没落して後大家の招きに逢へるが其君の命によりて馬上のはたらきをなす時兜巾をかぶりけ
 さをかけたなりこれ何の爲なることをしらす小兒の戲におなじ【北條五代記】結城秀康卿北條の舊臣等
 を扶持せらるゝ内朝倉能登守入道犬也に命じてむかし軍陣のはたらきを學びて見せよとある條犬也つ
 きげの駒に黒糸おどしの鎧を着ほし甲の上に頭巾あて白袈裟をかけいぶせき山臥のすがたに出立弓を

射鎗をつかへることありおもふに此者法體なる故をもてかく装へるなるべしそのかみ甲越の兩將みな法師にて戎服の上につけ掛たり當時のならひと見ゆ

羽子板(こきのこ) 踢毬

羽子板(こきのこ)

内裏羽子板

○羽子板(こきのこ)【下學集】(文安元年)羽子板(正月用之)と出たり【年中定例記】(室町殿の頃の年中行事書し物なり)正月十一日の條比丘尼御所の御參云々御所へ御みやげはこきいたこきのこ勾貝已下云々また【端囊鈔】(六)爆竹の條に羽子板の名出たり初春に用ひしものを爆竹に焼ことなれば羽子板もそのうちに入ることならむ【誹諧水鏡】にさぎちやうばねとあるは【埃囊】によりたるにや爆竹の畫を板のうらにかきたるもそのことによれるに似たり【世諺問答】にこきのこつく事は蚊を避る呪なるよし見ゆ早春より夏日の虫を呪はむこといかか附會の説なるべし扱田舎のはご板處々にて小異ありといへども殿さまかみさまを畫けるは奥州三春にて作れるも同じ(信濃はご板は夫婦の體はかりにて子供などはなし)内裏羽子板といふは此繪あるによる【寶藏】(二)ひさうなき家どうじをぐし見さまよろしからぬ子どもなどあまたつれてはご板の繪のやうにむかひひたるもみづからはたのしと思ふらめ【一代男】(三)はご板の畫も夫婦子あるをうらやみ云々【諸國咄】(貞享二年板)この女袖より内裏羽子板をとりに出して獨はねをつきしにそれは舞突かと申せば男もたぬ身をよめとは人の名を立給ふと切戸押あけて走りいる(殿さまかみさまの畫ははご板のみにもあらず【洞房語園】便面記に寺院より壇主へ贈る扇の事を云て年玉に殿さまかみさま畫きたる黒骨の女扇はやば扇とて古めかしと有り)云々このよめつきと云は數をかぞふるをよむといへばよみつきの轉じたる歟又は今も一とごに二たごみわたし四めごとかぞへいふ是によりて娶づきか【俳諧懷子】(十)かぞふる春の日なみもよしや伴ひてはねつく胡鬼の子供のとも(重頼)是つく數をかぞふるなり同集(一)つくはねの數よむこのもかのも哉(龍賢妻)

京羽子板

つくはね

毬

數つくや鳴の羽音百羽かき(山田女)又二人より四五人聚りて羽子つくを追はねと云ふこれには男も雜る享保中の前旬付に羽子板に男の髪はうなつかす【胸算用】江戸のことを云處十二月十五日より通り町のはんじやう云々正月のけしき京羽子板玉ふり／＼細工に金銀をちりばめ云々京羽子板とは内裏はご板なるべし【安齋隨筆】に日光山より出ることといふ葉はこきのこの形なるを後水尾院の戯れ賦によませ給ひしにもつくはねのそれにはあらぬこきのこのとよませ給ひし今も都にはこきのこといふにこそといへり此木の實比叡山などにもありそこにてはたからまんと呼とぞ江戸にて今はつくはねとのみ稱す漢土にも羽子に似たるものあり【廣東新語】(九)廣州時序正月條に畫則踢毬五仙、觀毬有大小、其踢大篋者市井人、踢小篋者豪貴子云々又同書(十一)土言の中に以鴿鴿貫皮錢、踢之曰踢毬、々亦曰燕また【清朝探事】に毬子とて鷄の毛を結び束ねて錢に貫き蹴あくる遊びあり【又清俗紀聞】正月の條兒女共に見鞠とて鷄毛三本又五本錢に挿み絹にて包み是を蹴とすと見ゆ(匿と毬とは音近く同物なり見鞠の見も毬の音なるへければ恐らくは語倒ゴトヘサカシマにて踢見とあるべきにや)この羽子何鳥の羽にて作るべけれど昔は雉を用ひしにや 重頼が【獨吟百韻】はなれかたのは雉子のめん鳥折を得て胡鬼の子供がつくばかり

○【咏物詩選】蹴鞠の詩の次に踢毬、明馬如玉、腰支孃々力微々、滾々紅塵拂羽衣掩月鬢邊星獨墜、石榴裙底鳳双飛、とあるはしうきくとことなるべし

○【帝京景物略】云童謡云、楊柳兒活抽陀螺楊柳兒青放空鏡楊柳兒死踢毬子楊柳發芽兒打板兒この毬子即けんてきなり板兒は小兒以木二寸製如棗核置地而捧之一擊令起隨一擊令還以近爲負曰打板々古所稱擊壤者耶其謡云楊柳兒云々

あまがつ(はふご) 犬張子(犬の子) ひゝな(まゝごと、雛の調度、繪行器、ちぎびつ、あまざけ、

生薑市) 後のひな(紙びな、装束びな、土びな、衣装人形、押繪)

あまがつ

【源氏物語】(薄雲) 明石の上の姫君を都へ移し入る所にめのと少將とてあてやかなる人はかり御はかしあまがつやうのものとりてのる【河海抄】に尼兒アツカウははふこのやうなる物なり【仙源抄】に諸事凶事を是におぼするなり三歳まで用また【源氏】(若葉上) 明石の姫君皇子をうみ紫のうへあまかつ作ること有りちごうつくしみ給ふ御心にてあまかつなど御手づからつくりそゞりおはするもいとわか／＼し【榮華物語】(本の雫) 小法師のさまをいふ處小さき地蔵井はかくやおはすらんとみえ又あまかつなどのものいひうごくともみゆと有さてあまがつに説ども多くあれどひがことのみなり按るにあまかつはあまがつたなり天兒と書はその形によりて兒字を用ひしなるべしあまは尼なり故に尼兒とも書り【翻譯名義集】に阿摩此云女母とありてもて梵語なりと【釋日本紀】にいへり【日本紀】には阿尼の字を用ふ(今も鄙語に女をあまといふびくにのみいふにあらず)よりてあまがつは女母形と心得られぬ是に凶事をおぼすることはもと神事祓除の義なり【儀式】に御贖儀(六月十二月)神祇官預前受儀其料物鐵偶人三十六枚云々木偶人二十四枚などみゆこれ人かたなり

あからこ

○【公事根源】六月祓の條に是は朔日より八日まであからこ持てまいる朝餉にて主上にまいらす四のかはらけを指して上にはりたる紙に穴をあけて御息を入るなりと有り(清祓の時流す物は土器を覆ひて其内へひなを入上を紙もて張るといへり)十二月贈物是に同じと見ゆ此あからこといふ物にあまかつのよりて起る所なり

人かた流すなり

○又三月上巳の祓に人かた流す事は【源氏物語】(須磨の巻)浦邊に陰陽師をめし舟に人かたをのせて流すことあり加茂保憲女の歌におほぬさにかきなでなかつあまかつはいくその人のふちをみるらん【江家次第】立太子の條に阿末加津また比々奈の名出たりひなは雛の義にて小き物をいふ是また小き

人かたなりあから子とは赤裸の體をいふにや

○【雍州府志】に天兒一尺余竹筒上以白絹造偶人首、建之於尺余竹筒、頭又別以尺計竹筒横首下、是爲肩以置小兒之枕頭云々これ城殿の製造なり【和訓栞】城殿にて造るは老女の面を造る肩と胴とに竹筒をこめて内に護身符を入るなり禁裡の御膳にあまがつをすうる事【日中行事】に見えたりといへり(雍州府志) 城殿其家之稱號駒井氏也、相傳元三韓之投化人、而始住近江東坂本邊駒井、自茲終爲氏云々安齋云今も城殿和泉とて京にあり婦人假粧の具扇の類花美なる物を作る【職人盡歌合】疊紙賣「わすれめやきどのにそむる疊紙云々」

はふこ

○はふこ伽婢カハヒ子ともいふ母子の義にてあまがつと同じ類の物なり【伊勢守産所記】(貞陸)あまかつ一ツは、この事なり大さ二ツ三ツの子ほどにあるべし御ときの犬箱あるべしとみゆこれ天兒は、こを一物とす造りやう少しつゝかけりて又は、こといふ名も出来けめおなじく偶人なれど殊に小きを比々奈といふ今三月に雛祭といふ事するは上巳祓除の義をとれり【文德實錄】に嵯峨天皇太后崩云々、先是民間訛言、今茲三日不可造雛以無母子也、識者聞而惡之、至于三月宮車晏駕、是月亦有太后崩之事、無其母子遂如訛言【三代實錄】日田野有草俗名母子草二月始生葉葉白脆三月三日婦女採之蒸搗爲糰傳爲歲事これは漢名鼠麴といふ草なり今は専ら蓬を用ふれどもこの日草餅作ることいと古たりとあり母子のこことと此日によしあり伽婢子といふは彼をいやしめたる名なり其もとの母子の義にかなはず伽狗カカウなどより移りて後人の呼訛れるにこそ(天兒は尊くはふこはいやしとするも後人の説なり)【寛永發句帳】野にあそぶ人のお伽かほふこ草(家次)また了意か作に【伽婢子狗張子】といふ冊子あり(此作者了意は洛陽本性寺の僧なり【東海道名所記】などの作者の筆と異なり淺井了意松雲とも云るは本性寺の了意如備子又瓢水子とも云しものとは同名異人なるべし)【諸艶大鑑】よめ入の處に太公雛と書り(醒齋云おぼこ

犬張子

といへることはほうこの略なりされどもとははゝこなり)

○犬張子は【産所記】に御ときの犬箱と有り【婦人養草】に犬張子は犬の形したる宮なり産屋に用る器なり産衣をまつ此宮にきせ初て其後子にきする宮の内へは守り札またはうふやにて用る白粉疊紙または肩掃などを入るなり此はりこは奈良の法華寺といふ尼寺より天下へ出すなりといへり(延寶三年の【南都名所集】に此寺のつくり犬は小く愛らしきものなりとあり犬張子は多く賣れぬ物故其頃も専らにはゝて作れる犬を賣しことゝみゆ)

○【俳諧埋木】(明曆二年)御づしにはひなやはりこの並びてとありもとよりひなと共に置るなり又同年梓行の【世話盡】大犬も小犬も同じ君のものそのもじのかずのはりぬきの箱此物の始を考ふるに隼人宮牆を守ることにもよるべけれどさまでもあらず宮殿に獅子の形を作りて置事は唐にありそれをこゝにも學ばれて獅子狛犬とて禁中に飾らるゝは威儀のためのみにあらずもと邪を避る義をとり又几帳簾などの鎮にもされたるなり(此事【學山覆篋】中に委しくいへればこゝには略し)犬はりこもこれらの事によりたるものなり【年山紀聞】に爲房公の【大府記】を引て云ふ康和五年八月二十七日東宮遷御高松第戌四刻御出宗通卿御額に奉書犬字また爲房公の子息【顯隆卿日記】には戌刻行啓依可奉書阿也都古人事以予爲御使被申院爲章按るに犬字をかく事を阿也都古人をかくともいひけんかし【菟玖波集】に犬こそ人のまもりなりけれみどり子の額にかける文字をみよ(良阿法師)貞徳【油渣】に額のはすよりあふをみよ百とせをくらせと祝ふいんの子に祇園の印の子といふも犬の子なり小兒の寝ておひゆるを犬の子となへて呪ふも邪を避るなり又小兒に賤名付ること有り長育し易きによる犬の兒はこの義をも兼たり(小兒賤名の事歐陽永叔が或僧に答へたること【撫掌錄】に出たり)

犬の子

○額に犬字書くこと漢土にも似たることあり【博聞類纂】(十)小兒額上寫八十字此乃高僧王押字鬼集

ひゝな

見則廻遊とありよりて竊に疑ふ犬字もし八十の二字を合せたるにやいづれにも道家の事を學べるなり又この犬の面猫とも人とも見ゆるやうなるも古風なるべし狂言止動方角の馬の面などの類なり【人倫訓蒙圖彙】に張抜人形所々に造る張子師犬はりこをはじめ一切のかたちをあらはし香合等をつくる繪師これにゑがくなり所々に住す又はふこのかしら雛師これを作りひゝなやにうるなり雛屋これをもて品々仕立あきなふなりといへり

○ひゝな又ひなともいふ鳥の雛に准らへて小きものをいふ【枕双紙】みあれのせんじ五寸ばかりなる殿上わらはのいとおかしげなるを作りてみづからゆひそうぞくなどうるはしくて名かきて奉らせたりけるにともあきらのおほきみとかきたりけるをこそいみじうせさせ給ひける(今昔物がたり)に御形の宣旨は御堂の中姫三條院の御時皇后宮の女房なり)人の形小さく作りまたそれに似合たる家お調度などをも作り戯れ遊ぶ是をひゝなあそびといへり贈物のひゝなとは事ことなり【源氏】【榮花】等をはじめ諸の物語また歌人の家集などにもおほく見えたりもとより小兒の戯れなればいつといふ定りたる時もなし今兒女子のするまゝこと姉さまことゝいふ事とおなじ【源氏物語】(紅葉賀正月の處)紫のうへに少納言がいふ詞ことしだにすこしおとなひさせ給へとをにあまりぬる人ひゝなあそびはいみはへるものを云々またひゝなの中の源氏の君つくるひ立て内にまいらせなどし給ふ人形に名を付て人の所作を學ぶ童あそび今も同じ○ひゝなの家おは【源氏物語】(螢)ひゝなの殿のみやつかへいとよくし給ひて云々又(野分)ひゝなの殿はいかゞおはすらん【紫式部日記】(下)このころほんごもみなやりうしなひひゝなの屋つくりこの春し侍りにし云々反古にてひなの家造りたるなり又ひなをも反古にて作れるとみゆ【源氏】(夕霧)けにけさうなき御文なりけりと心にもいれねば君達のあはてあそびひゝなつくりすべて遊び給ふとあり童戲は古今かはる事なし

ひゝなの家お

まゝごと

まゝごととは小兒の言葉に飯をまゝといふ此戲は飯作り種々食物を料理する學びなればなり女子のみにあらず【甲陽軍鑑】(二)織田信長公幼少の時尾州治歌寺へ手習にあがり手跡をば不習江餅をつり歎冬の葉にて脛を作る云々【堀河百首題狂歌集】若菜如竹が歌「七草にまゝごとをするわらはべの髪さきみるもつめる(簪はたて髪とよむにや)」

雛祭

○今の雛祭は上巳の祓を思へるにや【俳諧水鏡】にひゝなあそびこそ慥なる故もあらねば打まかせては難なるべし【源氏物語】には元日にも野分の朝にもひゝなことありし由侍れば今日に限らぬとしられたり但いさゝかあひしらひあらば此頃の俗に任せて今日のことにもなりぬべしやとて【新續犬筑波集】にも少々まじへて入侍りし(此書享保十五年浪花人紹運といふものゝ撰なりそれを後に【増山井】と書名をかへ作者の名を削りて季吟の名を入たるは書肆が利を得むとの所爲なり)さて新犬筑波は季吟の撰なり件の文は季吟が説を録したるなれば此頃の俗とは萬治前後をいふ歟それより前にもさるべきあたりにはもてはやしゝ事ながら民間には専ら行はれしはおほやう其頃よりなるべし【犬子集】は貞徳の撰にて寛永八年より同十年正月にしるし終る【守武千句】は宗鑑が【犬筑波】に次での撰なり花の句よせたる中に政直が句「ひなといへと花の都の細工かなこれ鄙に雛をよせたり其頃はいまだ遍くもてあつかふことにはあらずとみゆ明曆二年刻したる【世話燒草】三月の條三日節句云々ひな遊已日祓とつゝけて出たり寛文元年一雪が【獨吟百韻】もとむるにさても直段のやす屏風ひゝなあそびはたゞ祝言のみ(是又雜に用ゆ)○相摸愛甲郡敦木の里にて年毎に古びなの損したるを兒女共持出てさがみ河に流し捨ることあり白酒を銚子携へて河邊に至れば他の兒女もこゝに來り互にひなを流しやることを惜みて彼白酒をもて離杯を汲かはしてひなを依の小口などに載て流しやり一同に哀み泣くさまをなすことなり此あたりのひな内裏ひなに異なることなし其外に藤の花をかつける女人形多しおもふにひなを河水に流すはもと神祇のこ

雛流し

とによるなるべし妹春山淨るりにひなの道具を水に流すことあるは作り設しことゝのみ思ひしにかく似たることもあり

○寛文八年刻梅盛が撰べる【細少石】に草餅を「けういはふ餅もやいはゞひゝな艸(重尙)餅となりし艸に花みる繪びつ哉(離雲)延寶八年【洛陽集】三月三日ひしきものや袖かき合せ夫婦雛(數寄)黒糸のむすぶ契やめをとひな(女綾戸)桃の苔る此子ひなかざる間鍋によろし(漏卮)妹御やひなのかんなへひそかにまつ(有知)こしかたや子持見なをす雛の節句(自悅)とあり此頃は専ら節物となれり【同集】(春部)飯だこや雛のあたまたまに七句さりひなはもとより小きものにて後世までもしかありし七八寸或は一尺にもこゆるなどはいと近き風俗なり【五元集】雛やそも恭ばんにたてしまろかだけ、折菓子や井筒になりてひなのたけ【温故集】超波が句に落雁にのまれてみゆる雛かな(その小きをいへり)いま古今ひなは寛政年中江戸にて原舟月と云ふ者製し出て世に行はる

○享保六年壬七月十九日先頃御觸人形裝束之儀上方へ仕入申遣候處不得止之儀有之由申越に付越前守様へ伺候へば右裝束之儀向後御觸之通り八寸より上拵へ不申并金入純子之裝束させ候義無用可仕候人形問屋共書付持參候事

雛の調度

○又むかしは雛遊びの調度も今の如く美麗なるを用ひず飯も汁も蛤の貝に盛て備へつけるとぞ不角が【箋絨輪】に雛に世話局もおもき尻あげて欠伸て棄る蛤の殻(寶角)といふ句あり配膳の老女をいふなるべし又【柳樽】(五編)蛤であげるが娘氣にいらすこは(明和七年の刻なり)【都老子】(寶曆二年)に近年は雛配膳の調度など殊の外美をつくす金銀を鏤めなどする事とはなりぬ然れども貧賤の家には蛤の貝殻に飲食を盛て供するも又多しといへり今その殻をば用ひざれども必蛤を備ふることはこれによりてなり但し高貴のあたりは格別のことさらでも都下には木地の五器などはありしなり【都老子】に近年美を盡す

繪櫃

といへれば寛保延享のころなどおもふべけれどさにはあらじ寛文七年町觸商賣の雛の道具結構に不仕かろく可致事これ作り置て售ふをいふなり然らば早くよろしき家などにはこれを買ふて用ひし事とみゆ

○又繪櫃といふもの有り【俳諧五節句】(貞享戊辰)桃の繪櫃(同柳)木地櫃に桃柳を繪く櫃の内に草の餅に赤飯も入る御臺魁といふもの添是には繪なしおつぼ五器是なり木地の挽物に繪あり【土佐日記】に二月二十六日ようさつかた都へのぼるついでにみれば山崎の小櫃の繪もまかりのおほちのかたもかはらざりけり賣人の心をぞ知らぬといふなる土佐日記の文は貫之ぬし任國にて幼女をうしなひし歎きの意前文に往々ものはかはらねども幼きものはうせたりと思ひ出らるゝ我心は商人は知らじと云なるべしこれ小兒のもてあそぶ物なればなり又九月九日條菊繪櫃一つの形三月節句に同じ繪に菊を書なり内に栗も赤飯も入て御臺魁おつぼ有り又自序の中に袴きぬ浦の蟹は桃柳の繪櫃をみずとあれば田舎には行わたらずとみゆ其圖をみるに櫃の形圓長くいはゆる飯びつ形して蓋は横長のすみきり角なり丸き曲物のかぶせ蓋なるは繪も櫻と菊をかきたるは後の製にて春秋二節を兼たる繪なり浦人は見ずといひしも都にはなくなりて田舎にのこれる處も有にや【諸國奇遊談】に繪櫃のことをいひて今も洛北の村里には三月節句には必用ふ予が幼き頃までは都にても用ひし故二月の末には賣ありきしに今は絶て見あたらす今圖する遠國また洛北の今の姿をもしるすとかぶせ蓋の丸き櫃に菊櫻の花のかきたる圖を出せり此冊子寛政の末の撰にて幼き頃といひしは寶曆ころにもやあらむ大かた其頃はうるはしき膳出來てひつはなくなりしなり繪櫃大小寸法不定おつぼ大小あり

○【滑稽太平記】ひなや立圃が傳に寛永十六年より祇園會兩度の山鉾練ものまでをひな人形に作り金銀を鏤め綾錦を飾り大造の膳を首尾し明る十七年に武江に持参しけるに心當ちがひてすべきやうなく引放しつゝ掃けり又宗門の大乗寺へも納め残る處明る十八年正月二十九日の火災に滅す云々

ちぎびつ

○【以呂芝居】(享保三年刻)といふ草子にひなさまに出します一升櫃の底ほどな小判と云り其頃までは皆横長の櫃のみなり此繪ひつ江戸には九月芝の神明祭禮にちぎびつとて飴を入れて賣繪に藤の花をかけるは三月にもあらずおもふに柳と桃との繪の轉じたるやうなれどさにはあらず此繪八朔の餅による下にみゆ又此祭禮に生姜をうり氏子の家には醴と酢を作る生姜を此月用ること【昔々物語】に端午は粽九日は生姜を臺に載て取替す是等の祝儀の取かはし近き頃は見えずと享保十七年にかく云り又【同物語】に三月は草餅をひなの行器に入れ醴を錫に入れて親類へ遺す事ありと云りそのかみ今の白酒ありしかど又あまざけも用ひし故に飯倉神明祭にこれを作るも後の雛に用ひしものなればなり【雍州府志】甘さけみえず土産門上白酒今處處にて是を製すもと筑前博多の練酒に倣てかます酒店の製とあれば今の中波か又并びて山川酒六條油小路酒店にて醸す山間水多くは白して濁る此酒その色に似て甘美なり因て名く夏日造之とあるは白酒なるべし今も山川酒といへり【社記】云人皇二十九代宣化天皇御宇諸國郡縣に屯倉を設て洪旱を

白酒

救給ふその穀倉ありし故に民俗飯倉領と號す是に依て土民此所にして飯を扱ふ器を専ら製す白杵木鉢餅器等なりチ器は古へ藤葛にてあみ餅を盛によりて餅器の上略なりと云々この説非なりちぎと呼は社に用ひしちぎの餘木と云へる意なり【宣胤卿記】文龜二年正月二十五日内裏御月次和歌御會云々賜入麵天酒等(甘さけなるべし)【御傘】にひとよ酒夏なり夜分にはあらず夜字に句嫌なり醴字を書故なり六月朔日より七月二十日まで日毎に奉ると【公事根元】に見ゆ

生姜市

○昔の俳諧にひなのかんなべ見えれば早く白酒を用ひしなるべし生姜市は【貞享江戸鹿子】に九月十六日芝神明祭詣しやうがうす其外諸色市立なりとあれば久しきことゝ見ゆ俗に目くされ生姜とて此市には目のたゞれなどしたる者の售るを求む【靱隨筆】拾芥抄食禁物部に三月五辛を食はず九月生姜を食はずとありあさつき鱈は雛の膳供にさだまり芝神明の生姜祭り食品にあらずして何ぞといへりげに【本草】

に孫思逸云八九月多食薑至春多患眼と云々孕婦食之令兒盈指あり目くされた生姜はこの儀にはよるべからずその辛味つよく目にしむの意なりこれを相贈ることは其時肥たる節物なればなり其うへ古諺あり【貞徳百韻】に生姜手が三へきと筆にかすまて其自注に手はしかみならば生姜三へきと云ふ俗語と記せり諺の意を押して考るに盈指(生姜手)にておもふやうに物かゝれぬ手のわるきなり三へきは音信なるべし生姜は指の事よりいひ三片は少しばかりをいふ心ざしは松の葉といへるごとく生姜三片といひたる事より音信とりかはしもしたるもの歟こゝに用なき事なれ共次に云ふさて繪びつまた繪行器ともいへり延寶八年【洛陽集】に八朔「繪行器や今こそ秋と藤の森(眠松)繪ほかゝるや東からげの後紐(可致)繪ほかゝるや後は灯心入となる花を(自悦)おもふに藤森の句は其邊にて賣たるにや今こそとは用ひらるゝ時をいふ〇【日次記事】に八朔には乳母のもとより養ひ君へ行器に柿と藤花とて白糸餅に赤小豆付てその花の形したるを入て贈るとあり故に藤の森をいへり東からげの後紐とは藤花を畫きたるさまをなぞらへたるなり形状を面白く見たてたり此ことにはよらねども【篋絨輪】に山形ありく端折と云る句あり灯心入となる花をとば後は外に用るやうなく燈草など入るなるべし藤の花房を畫き又白糸餅を藤の花とて入る事おのづから灯心に似つかはしきをいふなり彼ちぎびつに藤花をがけるは全くこれにて藤を假字もじにあし手がきにしたるもよしあるべし藤の花がぎは後京極殿より始れりとど【京羽二重】(林鴻撰)櫃の菊むしるは稚ごゝろ哉(三竹)これ九日節句なり【若葉令】第三歌仙尺艸「上方の寺と竹には負にけり葉ばかり底に残る繪行器これらは雜の句なり敷葉はかい敷のものなるべし

〇新井白石安積氏に答ふる書薑芽のこと捧心とも又斂手とも候へば此方の俗に手のはしかみ候と申如き手のわるきこと、埒明候きハンカミのことは【續博物志】に妊妊者不可啖生薑生兒多指と候へばこれ枝指のこと、見候餘り俗語にはあなたにても注脚に及ばぬことに候

飯餅

〇【風俗文選】吾仲が飯餅銘に云ふ飯餅はいづれの時よりもはやしけん此六條の名物にはいへりける今おほやけの奉りものにかぞふれば下さまの人は日を限りてもまつべしまして卯の花さくころは此もの、けしきも清からんに藤の花のさく時にそれが節をあはせたらんいかなる人のふかき心が侍りけん是にて二季草の名も世の人はいふべし器物は杉の香もつけたる折にいれて此花をかざしにも又は文など付てやるべしかくこと、しきやうなれどすべて上さまのもてあそびものなり醒齋云ふ斯の如くあれば彼ちぎびつはもと鮎をいるゝ器にて藤の花を畫くはかさしの意なること明らかし生姜を賣も鮎にそへて食ふものなればなるべし【雍州府志】(七)飯餅六條人家製之、云々熟後盛磁器、濯涼酒加生姜葉而食之、夏日珍味也、云々毎年西本願寺門主、待藤花開而與飯餅被獻禁中院中、

後の雛

〇後の雛は【滑稽雜談】(正徳三年撰)今また九月九日に賞する兒女多し俳諧是を名付て後の雛とすといへり前に引る【俳諧五節句】九月九日菊の繪櫃御臺おつほある事三月節句にほしき由のみ有し雛のこととはいはずこれは貞享戊辰重九日とあれば元祿元年なり此ごろ雛を賞すること餘りに今めかしく記すべき程にもあらずとみゆさりながら飯匙五器もあるは雛の具にあらで何ぞや漸く多くなりしは其後の事なるべし【續五元集】(中)穴いちに塵打はらひ草枕ひなかさりていせの八朔又【入子枕】(正徳元年草子)二季のひなまつり今も京難波には後の雛あるよしなれば三月の如くなべてもあつかふにはあらずとなむ播州室などには八朔に雛を立るとぞ是又彼繪行器を用る事の似たるより移れるか

紙雛

〇今の紙ひなといふもの寛永頃の繪にみゆこれ小兒平日の手遊なり又古き裝束ひなは今の次郎左衛門雛の體に似て男雛は大刀なく女ひな天冠なし衣服の體はかはれ共貞享元祿ころのも其如くなりおもふに江戸ひなと稱するものは享保已後の製なるべし【新野問答】鳥頸劍の條に云ふ今世にも小兒の所翫俗に裝束ひなと申候人形の劍皆柄首鳥頸に候云々

江戸雛

土焼の雛

奈良人形

衣装人形

押繪

子なき女の
人形を
愛すること

さゝやかなるもの

○奈良の在所帯解といふ處に土焼の雛あり(此所土焼七福神人馬等さまあり其家五六軒ばかりなりとぞ其國の人に尋ねしに今土人形作る處は南都より八木街道なりといへり)この土雛古きも有べけれど予が見しは男雛太刀を帯女雛天冠をきて共に臺あり高さ六寸五分許ありき古風にはあらず又奈良人形木ぼりに彩色したるは古きもの有り好事の者提もの根付に用ひし故大かた緒をとす穴あきたり男女の體離屋立圃などが繪のさまに似たり菱川師宣出て人形の體その繪を摸せり【誰袖海】(元祿)と云ふ冊子に菱氏か筆の品面顔うつす姿繪のどうもいはれぬいはしたゞ口なし色にそめなせるきむくひむくの衣装人形といへり【以呂芝居】(正徳草子)といふ物に菱川がことをいひて人形を作るにも又上手にて去かたより御堂に役者共の姿を手づから刻み舞臺衣装其儘に彩色さし上るといへるは非なるべし上に引る冊子の趣をもて誤りて手づから彫たりとする歟衣裳は絹布にて作れる故に衣裳人形といふ彩色にしたりとは奈良人形のやうなるにや望のもの有て作りし事あり共そは必下繪をかき上彩色したるにて彫刻は他人にさせたるにこそ又衣装人形と云に今の押繪なるあり【人倫訓蒙圖彙】に衣装人形は諸の織物もて繪を切抜これをつくる云々又同草子に紙ひな裝束ひなあり紙ひなは紙をもて頭を造るとあればむかしの紙雛今よりも質素なりまた押繪ならぬをも衣装人形といへり【雍州府志】衣装人形、木偶人作男女老少形施衣裳、其小者謂芥子人形云々あるは木彫人形に絹布を着せたるなり

○世に子なき女の人形を愛する者あり子をほしく思ふ餘りなり漢土にもこれあり【板橋雜記】に顧眉生、既屬麗芝麓、百計求嗣、而卒無子、甚至彫異香木爲男、四肢俱動、錦繡繡襪、顧乳母開懷哺之、保母襖襟作便溺狀、內外通稱小相、襦亦不之禁也、時麗以奉富、寓湖上、枕人目爲人妖、

○さゝやかなるもの【述異記】に【高江雜村記】直大内、見三異物焉、一小金盒大寸有六分、內貯彫刻牙器百種、如几榻舟車盤匣筆研墨袋局絃管升斗算子之屬、具體而微、不受手指、用金鑄錯而製之、其一錢家

爲球、周身百孔、凡九層、亦有七層五層者、以金簪自孔中揆之、圓轉活動層々相似、又皆刮磨光澤、中藏骸子一枚、金碧粲然、其外潔白無縫、非有湊合粘連之迹、名鬼工珠、其一酒杯二十有四、由大及小、如宰塔波、高二寸許、錐木爲之、質黃色有木理、薄如紙柔軟而輕、噓氣輒可飛動、然可注酒、三者精巧絕倫、雖有難妻公輸、亦不能施其心目、不知當時何以毀剔而成、守者曰、此自外國航海來貢云、皆鬼工所作とあり精愈は異なれども相州宮根の湯もと細工に似たる物なり至巧たぐひなしといへども眞に無用の長物なるべし

獨樂(ふせうこま、はかたこま、はいこま、ちたんほう、たうこま、木ばち廻し) 紙鳶(うなり)

鞆(いしなとり、きさご大小はじき)

獨樂

【和名抄】に獨樂和名古末都玖利有孔者也とみゆ【今昔物語】大江定基出家語の内寂照が前なる鉢俄に狛鷓の如くくるくと轉て前の鉢ともよりも疾く飛行て僧供を請て返りぬ又東山佛眼寺仁照阿闍梨房説天狗女來語の内に其時に女二間計投げ被伏ぬ二の眩を捧て天縛に懸て轉べること獨樂を廻すが如し暫計有て音を雲井の如して叫ぶ云々【和名抄】古本に都免求里此間云古方豆久利とある十二字を獨樂の下に分注せる【今昔物語】に狛鷓とあるはこまつふりと訓べし【和名抄】に鷓の注に【漢語抄】云都布利とあればなり(鷓は【戰國策】に鷓蚌相持とあるものにして今しぎといふ俗に鷓字を用る是なり其種類いと多し又鷓鷓を今はカイツフリ、ムクツチャウなど呼り【和名抄】にこれをニホといへり)然らば獨樂をツムクリともコマツクリとも又コマツフリともさま／＼に稱へしなりそをばぶきてコマといふ【字類抄】又諸の往來等の書に獨樂の名みえたり

○【太平記】(三十八)長講堂の大庭に獨樂を廻て遊びける童云々【寛永發句帳】慶友が句に日にまふや狛のわたりの瓜茄子(茄子などの枯るを舞といへば狛の舞にかけたり)など俳諧にもまた多かるべし【諸藝

太平記】にくるか／＼とめぐること九州の曲獨樂とても是ほどにはあらず云々其積が【色三味線】に頃日九州より獨樂廻しの少人のぼりて四條河原の小芝居にてさま／＼の曲こまをまはし數萬の人を取て歴々の大芝居をすからせけるが猶さかりになりて町々にこのこまをもとめて家々に翫びし後は狛五ツ六ツ或は二十買もとめてあるを押ならし一町に二百ツ、とつもりて狛一ツ十二文ツ、にして此代二貫五百文凡京中三千町狛の錢高七千五百貫銀になをして百五貫目餘なり云々

○按るに江戸に來りしは初太郎を學べるかげまなるべし【元祿十四年日記】十一月九日堺町狛廻し金之助方々へ參候儀無用之由被仰付其節狛廻し候様と有之見物申候元祿十四年己十一月十一日町觸頃日はやり候こま堺町木挽町見物所にては格別其外こま廻し候者の分屋敷方へ遣し候儀令停止候尤商賣にも一切仕間敷候若於相背者可爲曲事候已上又町中連印手形之文(上略)こま廻し候者之分遣し置町中にてこま廻し候か又はこま商賣仕候もの御座候はゞ何様之曲事にも可被仰付候爲後日町中連判之手形差上申候仍如件已十一月十一日とあり

○宮川町の子供屋の主不器用で隙日の多い若衆におなじ慰ならばこま／＼はしこそおもしろけれと親方ゆるして黒塗の狛をかふてあてがひける下地螺まはしの手き／＼なれば其格をもつて早速上手になりて初太郎も恥るほどなりしかば諸方より招きてはき／＼の太夫子より格別はやりて其名高しとあり

○古末といふはもと高麗より渡りしものなるにや都玖利は都无求里の略と聞ゆツムリはツフリにて是又略語なり粒粟の義か今物の矮短なる貌をツングリと云も同義なるべし

はかた狛
はふせうこ
ま
【慶長年中の草子】めくる物の中た／＼けばめぐるふせうこまと有り又【鷹筑波集】おもひまはせばみなおなし事といふ前句に】打た／＼けばいくつ有てもふせうこま【堀河百首頭昇遊

合】に池田正式冬の内はふせう氣にしも見えつるがうたねとおどりまはる春駒その判に云ふせうこまを春駒に引まはされたり云々是今のばいごまなりばいの介殼に鉛をとかし少し許つきこみぬれば介の尖りたる所に入りて重くなる故まふに勢ひすぐれてしばらくまふ小兒これをまはして勝負をいどむ先薦をしき二人ともにはいをそのうへにまはすに當りあひて勢ひ強きはよはきをはじき出す【本草啓蒙】にこれをばいげたといふといへり【一代男】(五)よい年をしてばいまはし云々又西鶴が【大鑑】に是も秋の末より螺つくはやらし云々あり(つくといふことツクリの名に似たり古名の遺れるにや)冬の戲と見ゆ【帝京景物略】に楊柳兒活抽陀螺とあると時候異なり

ばいごま
○陀螺と漢土に云も螺をまはしたるにこそ今のばいごまは木にて作れり寛延寶曆の頃まで介殼にてありしと見えてその頃の繪に見ゆまはすは紐ははかたごまの緒のごとしこれにてはこま／＼ひ終らむとする時打た／＼に不便なるべし今は作り革を細く截て短き竹のさきにつなぎたり越谷より日光山のわたりにてぢたむぼうといふ其形尖りたる處いさ／＼かくびれて木口に穴をほらす紐を竹に付たることは同じぢだんぼうとは地踏々房なるべし地踏々は俗にぢだんだむといへる是なり房は例の人に准へていへること常に多し又漢土空鐘といふものはたうごまなり【續山井】(寛文七年)たうごまの花のうなるやあぶの聲(利重)その聲ごとと鳴る故江戸の小兒はごん／＼ごまといふ安齋云蓋目の音は小兒の弄ぶたうごまとて竹にて作り候これと同じ音にて候漢土に惜千々といふ物はこれ今のはかたのこまなるべし

たうごま
はんとら
坊主ごま
○【長崎歳時記】たうごま象こまといへり其ひゞき象のうなるにたとふといへども象の聲しるものすくなし又同書にふせうこまを鞭こまといへりこれも打物の形唐書にかける馬のむちに似たるにや又同じ類にはんこま坊主こまと云へるあり是は博多ごまの如く緒を巻てまはすとぞ其圖をみるにはんこまは水かめの形に似たる故の名歟其故は同書方言の中に水甕をはんこまめとあり又坊主こまは上圓くし

て凹に下はほそく尖りたり

木ばちまはし

○木ばちまはし相州津久井縣にては正月兒童女木ばちの中にて小錢をまはしてまひ止たる時又次の者錢を出してまはしてこま止たる時先の錢に少しにても重りたるは勝にてその錢を取もし重ならざれば先者に負を取らるゝなり(錢こまは後の手車の條にいふ)

いかのぼ

○いかのぼり【和名抄】に辨色立成云、紙老鴟(世間云師勞之)以紙爲鴟形、乘風能飛、一云紙鳶とあれば古は昔にて紙老鴟と呼びしにてもこの物にはあらぬにやいかのぼりは畿内にての名なり明曆二年丙申正月六日跡々より御法度被仰付候通町中にて子供たこのぼり堅あげさせ申間敷候尤商賣にも拵申間敷候

たこ

○關東にてたこと云ふ【物類稱呼】云西國にてたつ又ふうりう唐津にてたこと云長崎にてはたと云ふ上野及信州にてたかといふ奥州にててんぐばたといふ何れも雅名にはあらず長崎の西川求林齋が【町人囊】

からすだ

○(四)今日本のいかのぼりは廣く大きく作り弓をつけて空に鳴つゞくをよしとす云々古のいかのぼりは鳥賊の形に小さく作りて麻の糸をつけ長閑なる春の日風ふくことなれども陽氣につれて二三丈ばかりに揚て小兒にひかして悦ばしむ云々げにも古畫にみえたる紙鳶小くして鳥賊の形したり

うなり

○今も一種すがだことて鳥を作る故からすだことも云ふ其外諸鳥の彩色したるもあり昔糸にてたこの數多くつなぎて一すぢのすが糸にてあぐるものあり此物江戸などには春の戲とすれ共諸國他時に弄ぶところ多し【志保之理】に三州吉田より濱州見付のあたりまで五月五日家々大なる紙鳶を作りあげ端午の遊とす大さ一丈餘方費銀百四十匁まづ四月の末より試にあげて端午各家廣き處或は河原へ出て美を争ふ所の男女集り見て酒肴を鋪し終日遊ぶこといと賑なり

○【夏山雜談】に大阪などにては五六月西國邊は七八月兒童のもてあそぶなりといへり【入子枕】といふ冊子に「梅川忠兵衛が情死の條」折から紙鳶世上にはやり(前文に衣きかへる朝日卯花垣根に咲きこゝろ)氣

をつくしたるおもひ付三井富山をさがしきれ／＼をあつめ石たゝみは上町の屋敷かたひぢりめんの達摩は中島の苦なし仲間もみの盃は天満の蛇組白給子のたか袖は新地の色茶屋鬼のかいなは渡邊筋鳥いかは阿波座ぼり封じ文は新町の情盛りか紙鳶百羽雀は竹田さゝいがらは嵐三郎四郎おやまいかは上村吉彌大黒はいづくの寺のいかなるべき龜やが方にも客かたよりあづかり置し孔雀いか御馳走にと上手をえらみ町代の半兵衛にのぼせさせけると見えたり虚文ながら此物の流行したることは先西鶴が【二代男】にも難波風の暮々鳥賊幟のはやりてさま／＼の作りもの雲にかけ橋のたよりといへるにても知べし俳諧には【鷹筑波集】寛永十五年貞徳撰かみなりのなるに天氣のあがる空とあるにいかのぼりこそ風にふかるれ(良次)今のうなりといふもの付たるにや漢土に風箏といふものうなりなり【續山井】いかのぼり木にかゝりければ「魚や木にのぼりのいかの糸さくら(道宏)【江戸三吟】「物の名のたこや古郷のいかのぼり(信徳)【箋絨輪】水を波袖風ぬれん御茶の水殿のかたくま守りの一角(利角)今小兒めんくふといふは水波ことながら語は舞狂の轉訛なるべし

○【詠物詩選】風箏唐司空曙が詩に松泉鹿門夜笙鶴洛濱朝また唐高駉が詩夜靜絃聲響碧空、宮商信任往來風、後世これを紙鳶とするは非なりといへり【楊升庵集】(五十七)古人殿閣簷稜間有風琴風箏、皆因風動成音、自諧宮商、又云王半山有風琴詩云、風鐵相敲同可鳴、此乃簷下鐵馬也、今名紙鳶、曰風箏非也といへりこれ風鈴の類なり唐人の詠する物是なるべし響碧空なといへるを思ふに風幡に鳴器を付たるにやこゝに風みと云ふ今この製は其物の向ふ方を見て風を知るのみ音を聞かざるをせす

○【長崎歳時記】二月條此月より四月八日まで市中にて風を放ち樂む快晴の日は金比羅山などへ行厨を携へ行てこれを放つ風巾の製一ならずばらもん劍舞筆冑ばらもん入道はた奴はた百足ばた蝶ばた障子はた日本ばたあこばたかほりばたとんぼうばた桐に鳳皇海老尻天下太平天一天上大吉等の文字を作るもあ

つるはか
硝子よま

り又つるはかしと云事あり硝子を細末にして糊に和し是を芋よまに引つけ日に乾し風巾にかけて放つ硝子よまと云ふ手元は常の芋よまなり互にこれを以て町をへだて谷をさかひて相かくる術の工拙ありよまとよまとすれあひ遂にきれ行を負とす又十日金比羅祭禮參詣群集す麓の廣野に毛せんをしきべんとう携へ大人小兒風をかけて勝負を争ふ此日市中のはた屋共野中に假店をしつらひ硝子よまはたを商ふ人々これが爲に數百錢を費すといへり其風の圖を見るにばらもんと稱するものはもと蠻製と見ゆまたさも思はれぬかはほりはたなども同じものと見えて出島内の黒坊ども是を造りて海をへだて市中の者とつるはかすことありといへりはかしと云は奪ひ合ことなり其唐製のさまなる風も見えたり崎陽の俗多く家業に怠り浮靡の樂のみ専らとす因て此樂より争論をなし互に疵を蒙り又は田畑を踏あらしまゝ公に訴出る事などあり他邦になき處古來よりの土風となむ無益いはん方なしといへり

○【廣東新語】(九)南海之佛山、歲九月十日爲放鶴會、先期主者懸式于鶴場、鶴皆以白楚紙爲之、凡兩翼一竿一弓、翼廣一尺以平爲上、竿長三斤弓二尺、絃以竹根片或銅片、以薄爲上、主者察之嵌以印、放日主者立一竿於地、長二丈、人十人爲耦、離竿二丈、約之曰、母過竿、母不及竿、出大竿復出小竿、如是者賞約、已依次而度鶴、出於竿末、則以線之直上者爲上、線已直上、則竿中更吐一竿、高至三丈、又以線之直出於三丈之末者爲上、線已直出於三丈之末、又以鶴之聲清和中節而其態廻翔合度者爲上、こは小兒の翫ぶにあらず弓はうなりなりその絃竹また銅にて作れるはこゝにてもまゝこれを用ふれ共大かたは鯨鰓を用ゆ昔のはいかゞありけんおもふにもと漢土の製に倣へるものにや【類柑子】に元ゆひこく音をいふに唐人風巾の雲に吼て春色をもよほす響もありとあればうなり付たるを唐人だこと云ふにこそ

○【賤緒手卷】に延享寛延の頃風を上るにさまゝの物すきをして尤大風をあげたり八ツ花形九曜の星蟬蛸などの形の風をよくこしらへて家々にあげたり畢竟は大人の慰にて子供の所作にてはなしといへり予

切ぬき風

がらくり

風

猿をやる

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

鞞

が幼かりし頃までは大なる風に切ぬき風とて種々に作り其間を切ぬき透したる細工風またからくり風とて傀儡師など作りたるは箱の人形かはり舟辨慶のさまあらはる又何の風にてもよくあげまた小く風のやうにこしらへたるものありてのぼせたる風の糸にとをし糸をしやくり上れば風の糸めの處まで上り行なり是を猿をやるといふたとへば頼光など作りたる風に土蜘蛛をさるとし上に行盡たる時急に糸を引て風をとんと響かすれば頼光の太刀抜て蜘蛛を切るが如く蜘蛛より血の如く赤き紙垂れ又細に截たる赤紙飛出るなどする類なり竹また鯨を用ひて機撥を作れり

○鞞(和名抄)鞞和名由佐波利もと北狄輕趨の態を習ふ伎なるを後中國に傳り専ら女子これを戲とするよし【事物紀原】等にいへり和名ゆさはりはゆる義にてゆすふるといふ是なり但こゝには田舎などにはする事もありそれも女子の戲にはあらず漢土には是を風流の事とす【中山傳信錄】に女子於歲初、皆擊毬爲戲、又有板舞戲、横巨板於木橋、上兩頭下空三尺許、二女對立板上、一起一落、就勢躍起五六尺許、不傾跌欹側也といへり江戸などには小兒ことさらのあそびにはあらねどもかやうのことすることあり是を白杵と云ふなり【房總志料】に夷隅郡萬木城の麓に妙見の社あり秋社に鞞の戲あり太平記の頃の古俗を傳へしとみゆ其名をツクマイと云名義未詳といへりツクマイは突舞なるべし江戸などにも兒童二人にて一木を踏あふりて白杵といひて遊ぶ事あり【六玉川】(二篇)ゆさはりに小僧をのせてあやまらせなどいへり○いしなどり【榮花物語】(月宴)へんをつかせいしなどをさせ【拾遺集】(十八賀)春宮の石などの石めしければ三十一をつみみて一ツに一ともしを書てまいらせけるよみ人しらす「若むさばひろひもそへんさざれ石の數をみなとるよはひ幾よぞ【赤染右衛門家集】に女院の姫きみときこえさせし頃いしなとりの石をめすを參らすとて「すへらぎのしりへの庭のいしそこはひろふこゝろありあゆかせてとれ【山家集】石なごの玉の落くる程なきに過る月日はかはりやはする【散木奇歌集】いせの齋宮に侍るころいしなどり

の石合といふ事せさせ給ひけるにちいさき草子のいしなとりの石の大きなをつくりて十の石にひとつつかき侍りけるとありて歌十首あり其歌金葉集に一首入「くもりなくとよさかのぼる朝日には君ぞつかへん萬代までも【和訓栞】に法隆寺の寶物にいしなどりの玉あり小兒の語に小石をいしなといふ伊勢に石名原あり奥州に石名坂ありといへりいしなとりは今いふ手玉なるべし【埃囊妙】に石拵子をいしなこと訓り拵は字書に摸也とありて義はかなへるやうなれ共其字面何に出たるか疑ふらく拵字の誤にや【帝京景物略】に正月元旦是月也、女婦間手五丸、且擲且拾且承、曰抓子兒丸、用象木錄磔、爲之競以輕捷とありこれ手玉なるべし【物類稱呼】石投江戸にて手玉といひ東國にて石なんご又なつことも云ふ信州輕井澤邊にてはんねいはなと云ひ出羽にてだま越前にてなつご伊勢にてをのせ中國及薩摩にて石なごといふといへり

小きさご大

○【房總志料】上總附録の内に長柄山邊二郡の海鏡砂子を産す女兒輩イシナゴといへるものなり又ナンゴといふ其最小なるを市原望陀の海に産す名をキサゴといふ土人採て稻田の糞とすなどみゆ(大なるをいしなご小きをきさごといふにや)

○きさごは【鶴岡職人歌合】蒔繪師「月かげにみぎはのきさごかきよせてこゝにまき繪のはこ崎の松と有きさごに大小二種あり【大和本草】にチシヤコ小螺なり殻薄し赤白の紋あり云々小兒其からをつらぬきあつめて玩とす(殻薄しといへるは非なり堅厚にして小は斑文あり大は灰色にて斑なし)小野蘭山云【本艸綱目】山草部白芨【集解】に根形似扁螺といへり白芨根ほどきさごに似たるものなれば此扁螺きさごなること明らかなり京師にせ、介と云ふ小兒是を貫き翫ふといへり(近江にせ、介と云は膳所貝にて鯉をいふ是とは異なり)せ、貝とは錢貝の意なり江戸にてはだんべいきさごと云たんべいはもと石つむ舟をいふ【風俗文選】(李山が湖水賦)段平に大石を積平は耕作のたすけなりとあり段平といふ舟の平たく堅厚に

したごみ

作れるをおもひよせて貝の名に負せたるにこそこのきさごの大なるを今は手玉にもとれども古へは小石を用ひしなり此介をいしなごとも云ふはこの戲事よりうつれるなり

○又童戯に舌尖にきさごを吸付ること有り【屠籠工隨筆】にシタマミはキサゴのことなり此貝を舌のさきに吸つければ舌のだみて物いはれぬ故に名けたりといへる説わろし神武天皇御歌に大石に八重匍纏へる小螺子と讀せ給へりしは石なりタ、ミは重なるをいふ今又一種石だゝみと云ふ介あり是は紋理の石たゝみに似たるなり【八子枕】は正徳元年の梓行なりマ、こと石なごなどにむすめらしくと云へることあり此ごろまでも手玉とるとはいはざりしにや手玉とるにてつといふこと相撲の條にあり

はじき

○はじきといふは小きまごを玩ぶもといしははじきは軍器の名なり【和名抄】に檐(音館和名以之波之岐か建大木置石其上、發機以投敵也とあり(抛石をもはじきと訓り前のつぶての條に出)小兒のはじきも石もてしたるにや【正章獨吟千句】「あてなるがせよと仰ある放會(橋字誤て二字になれり)といへり西鶴が【二代男】に藻屑の下のさゝれ貝の浦めづらかに手づから玉拾ふ業してまゝことのむかしを今にはじきといふなどして遊びぬ(こは貞享元年の板なり)貝をも其處により有に任せて用ひしなるべし今江戸にてはきさごははじきといふも昔よりの名にてあるべし海近き處は貝類多くあればなり

○【怡顏齋介品】にきさご肥前にて猫貝と云【長崎歲時記】に猫貝を小兒玩ぶことを云て其法のせははじきと云は貝を握り手の甲にうけ又手心にうけ握り取疊の上にとりたる餘り貝は一々ははじき取て勝負を決す十五握と云は各々貝二十を出し合せ順々目を塞ぎ面をそむけて數十五をつかみ取るを勝とすとのみと云は各々目印ある貝一ツ、出し合せそれを掌にてふり出し餘り貝は俯せ一貝仰ぐものを勝とす

○きさごははじきにツマと云はツマツクの略ヤツといふはやつあたりなりきさごをかぞふるにちうしくたこのくはへが十てうと云ふちうじは重二なりそれを重ぬれば八ツとなる章魚の足の數なり是に又二ツ

きさごは
しきのツ
マとヤツ

どろく
めぐり

加へて十となるをいふ

どろくめぐり(まはりの小佛、一の膳、いやく、ほうすく)首かたかれ(かたこ) いたいけし

りもち のゝ 十三七ツ 尼かべに 木登り 土なぶり 小家を作る 籠廻し

童のどろくめぐりは行道めぐりなり行道は佛家にする事なり古はたゞめぐりとのみいひしとみゆ【榮華】(もとの雫)十二三までの小法師にねぶつさまうつし云々頭は鼻をぬりかほはべにしるきものをつけたらんやうなり云々小き地藏井はかくやおはすらんと見え又あまがつなどのものいひうごくとも見ゆ又ちごどものめぐりするとも見えたりとあり【源氏】(禰)又【山家集】にまんだらしの行道とごろへのぼるはよの大事にて手をたてたるやうなり大師の御經かきてうつませおはしましけると中傳へたりめぐり行道すべきやうにだんも二重につきまはされたり登るほどのあやうさことに大事なりかまへてはひまはりつきてめぐりあはむことの契ぞたのもしきゝびしき山のちかひみるにも【源氏】(禰)にしはす十よればかり中宮(藤つぼ)の御八講なり云々又の日は院の御れう五卷の日なれば云々みこたちもさまん、のほうもちさゝげてめぐり給ふ【細流】に五卷の日は第三日なり薪の行道ある日なり又【明石卷】にあかしの入道源氏にわかれたる處に月夜にて行道する物はやり水にたふれ入にけり【細流】に物字に心なし行すればなり又【鈴虫巻】講師まうのほりきやうだうの人々参りつどひ給(抄に提婆品を講ずるなり採薪及菓蔬隨時恭敬と提婆品にあり八講は五日十座なり五卷の日といふは中日にて薪の行道あり行基井の法花經を我えしことは薪こり菜つみ水くみつかへてそえしといふ歌を聲明にして行道あるなり手桶に花を入六位藏人などになひて主上の御行道のさきへ行なり僧衆右の歌をはかせにて唱ふるを讃嘆の聲といふ【御法卷】薪こるさんたんの聲云々【藥師琉璃光如來本願功德經】晝夜六時禮拜行道供養彼世尊琉璃光如來また【阿彌陀經】に飯食經行とある經行も行道なり【拾芥抄】齋月條正五九月云々或此月々上十五日

一の膳
いやく

可持戒齋行道慈覺大師廻り給ふ時正月一日二月八日十二月七日とありまた【舞の双紙】景清に折ふし頼朝は六はら御所にてえんぎやうだうしてまし／＼けるなどみゆも是より出たる童戯かまたおのづからこれに似たるものかそは知べからねどもだうだうめぐりといふ名は行道めぐりにぞ有べき【正章獨吟千句】小人どもの袖のあつまり手車の果ての後のとゞめぐり廣々とした辻堂の内【雜兵もの語】【屠龍工隨筆】に一の膳いや／＼二のぜんいや／＼といふより段々かぞへて十の膳までいひ立る童部のごとくさのたはひなきよりいふにて膳府は本膳二膳三膳までなると思ひしに【甲陽軍鑑】の料理のことを書たる圖に誠に十の膳ありしなりといへり此こと今一種には粟の餅もいや／＼米の餅もいや／＼そば切素麴食たいなと云つゝどゞめぐりするなり

○【雜兵物語】(作者をしらす或云朝倉景衡)挾箱持の條によその挾箱持めが人込にだいたうめぐりをし

て挾箱をぶち破た云々有これはとゞめぐりをよこなまりしか
○【南海寄歸傳】五天之地、道俗多作徑行、直去直來唯遶一路、隨時適性、勿居閑處一則瘡病、二能銷食、禺中日咲即行時也、或出寺長引、或於廊下徐行云々、故鷲山覺樹之下、鹿苑王城之内、及餘聖跡、皆有世尊徑行之基耳云々、若其右繞佛殿、旋遊制底、別爲生福本、欲虔恭徑行、乃是銷散之儀、意在養身療病、舊云行道、或云徑行、則二事總包、無分涇渭(制底は窳賂波なり)

○又一種まはり／＼の小佛といふことあり【土御門安部泰邦寶曆十年庚辰正月東行話説】に水口の宿はづれの橋をわたり云々小里今在家えもしれぬ處に悪七兵衛景清武藏坊辨慶が脊比石といふもの有その由來を聞に昔辨慶この處にて晝飯を喰居たるに小兒打より遊びて中の／＼小坊達はなぜ脊が卑いぞといふ時辨慶がたけ此石と等しかりしとなり云々あり此また今いふ言と異なり(たとへば三人已上にて一人は立てゐその外は手を引あひ立たるものをかこみて旋りまはり／＼の小佛はなぜせいがひくい親の日に

まはりま
はりの小
佛

と喰てそれでせいがひくいといひつゝ一同にめぐる中なる者はめぐらせ一匝してかゞみ居る時中に立しものめぐりの者の首を何れより共心まかせに指先にて數ふるに線香抹香花まつかう櫛の花でおさまつたといふ其言の畢りにあたる者又前の如く中に立ッ人となれば中なるものめぐりの内に入なり) 或云此戲輪藏に安する博士兩童子を學べるなりといへり

○又【一休はなし】(寛文三年刻)或人日蓮畫像の讚を望む處にこの畫はさても小くかきてうす黄なる衣をきせけるよと笑ひ法然の讚を所々なをしてなされつゝ奥にほうすゝ小ぼうす豆の粉にぬりほうすとぞあそばしけるとかやと有これも小兒の戯ことを書るなり【阿宅松】といふ芝居うた童戯を種々いへる内にほうすゝ大坊主とある是なり(この文句今は葉ごしのく月のかげと唄ひかへたるはとりあはぬことなり)今もほうすゝ山芋などはやすなり

千艘萬艘
○小兒體をゆすり千艘や萬艘やと云ひ舟にゆるるゝ學をなす正月十四日朝まだきに本所龜戸の里の童共小き船のひな形作りたるに幣を立て昇あまた打むれて市中を廻るに千艘萬艘お舟が參ると云家々にて錢を與ふれば幣一ツ代りとすこれ道祖神の祭りなり道祖の祭處々田舎にありて各異なれども船を用るはなしこれ古へ道公法師が柴をもて小舟を作り道祖を送りし古事など思ひ出らる必これによれるにもあらじ河邊の兒輩は自ら舟などを玩ぶなるべし【南島雜話】三宅島の條正月十四日渡船は其乗組水主の子供漁舟は組合の子供とむれを分其舟々のひな形を造り順を立て村中家別に持歩行これを稼初とすとありこれ似たることなり又是とは異なれど【長崎歲時記】に四月下旬より市中の男兒端午競渡舟の學して町々を廻る二間程の竹を船に表し兒輩面に丹をぬり髪にたゝみ紙をはさみ又は笠を着右の竹の左右に取付てセロウ／＼ワタイと同音によびあかね木綿のくぼり或は五色の紙のほり劔ばたに何町子供中と書たるを押し太ことらをならし廻る他町の子供に行逢ば五にのぼりを出し合せ年齢ひとしき同士双方より一

ハイロン
人ツ、出で走りくらぶ是をハイロンと云ふ負方のゝぼりを奪取といへりまことのはいろんに二ツせり三ツせりと云ことありせらうと云は此せりにてせり合はんと云なりわたいとはこれへ來よと云ふ方言と聞ゆ

かみかた
○小兒のかみかたかれといふこと【守武千句】にあふなきこともしらぬみちなりおさないやかみかたかれとたむけまし【東海道名所記】に四月十六日三井寺にせんだん講といふ事ありそれを俗に千團子といひならはし團子一千をつくりて持て參れば子どもの首かたしとかや申つたへし又猿樂の狂言に小兒をかなぼろしといへるも堅固を祝へる名なるべし

○【散木集】連歌部におほ空はなみだ法師となりけり云々あるは今いふ法師の意小兒のことをいふなるべしかな法師は鐵のやうにて潤なく肉もなく疲發意と云ことなるべし先達の説に悴は子をいふ義なしやせると云字なればやせかれの上略ならんとさればかな法師も同意なりと柳亭いへりされど入道したる新發意とはいへども唯ほちとのみはいはず然らばほちと云は猶法師の急呼なり

かたこ
○又かたこといふは【醒睡笑】に女房の子を抱きたるをみて此子息はいくつと問へばこれはことし生れかたこでおはりありと答けりこれは一歳にいまだ足らぬをいふにて前の義にはあらず

いたいけ
○いたいけは痛氣なるべしいと愛む意の深きをいふなり【沙石集】(三)繼母あまりにうれしく思っていたいけしたる翫物取具して文をやりける【守武千句】玉くしげまたかたふたは明やらでこすゑ詠むるなりはいたいけ花ぶさをちぶさなりと思ふらむ猿樂狂言に七ツになる子がいたいけな云々【尤双紙】ひろき物みな人毎のこと草にいふおほちの頭巾孫のきておやのくつはくいたいけさよ【佐夜中山集】にけふ摘や七ツになる子がいたいけ茶池田正式が【狂歌合の判】に云さわらべのてうちかふり又いたいけにこそ侍れ正三の【因果物語】いたいけなる犬かなとて寺に飼置給ふ【契沖雜々記】に出雲風土記に大穴持

てうらか

命の御子晝夜泣たまふといふ處の文を引て乗船而率巡八十島宇良加志給頼猶不止哭之世に、いとときなき子をてうらかすといふは此宇良加志とあるに手をくはえていふにや【日本紀】に推の字うつらかすとよめりうらかすといふもこれにおなじきにやといへり今はてうらかすと云こと小兒のみにいふにあらず此詞もと小兒にいへりとなれば宇良加志と云ふ古語も似たることなるべけれど小兒にはあまやかすなどいふこともあるをおもへば寵らかすにや唯愛することなるべし

しりもち

○しりもちつく【四季物語】七夕の條そのくだものつくゑ物などのうへに蛛の小きありてやすらへばかならずその願かなへりとして折ふし風に吹れて落くるも幸とるべきはうれしくしりもちひをつく【一休咄し】(一)一休きこしめし善哉々々とて尻餅ついて喜び給云々あり嬉しがり喜べるに尻もちつくといふ事今はいはぬことなりまたその尻餅は今いふとはすこしかはりて小をどりするやうにや今江戸のならはしに小兒生れて一歳に満ざるに立て歩むことあれば其祝ひに餅を擗て親族に贈るこれを尻もちと云もと喜ぶことよりかゝる名目もあるにや善哉餅もこの意なりその條あり見合すべし

のゝさま

○のゝさま【堀川百首題狂歌】みどり子ののゝとゆびさし見る月や教への儘の佛なるらんのゝといふ詞古くは【七十一番職人盡】禰宜の歌我戀をいのると人の聞やせんさゝやき聲にのゝと申さん按るにのゝはのむの轉なるべしのみむとも活きて祈る詞なり【靈異記】などにも祈をのみとよめり【萬葉】には乞字をもよめり又叩頭の字などを訓るも同意なり佛神に乞願ふ故に其詞を體語にしてやがて佛神をのゝといへりと聞ゆさらばいと古言なり

お月さま
いくつ
三十七

○お月さまいくつ三十七つといへることをとれるにや【類柑子】乳のみ子に意味を付てや十三夜(沾州)【松の落葉】丹前の部難波津壺論こゝのの子はなくつ三十七つあらまだわかや云々沾涼が【あやにしき】雙に舟よぶ場所を思たし山からによつと三十七つ連貫菰垢離の音頭の鼻へ來るこの三十七つは月

尼が紅

おまんが
紅

の句にて童謡をとれるなり又似たる諺あり、物類稱呼に東國の童謡に旅籠はいくら十三はたごと云と有いにしへ鳥羽街道にて十三錢のはたごありしことなりとぞといへり(旅籠は古き草子などにはたご食に行などありて今茶やにて飯を食におなじ旅店に宿するにあらず)

○小兒星のとぶを見てよばひぼしと云ふ【帝京景物略】に兒見流火、則呼之曰賊星夜不以小兒女衣置星月下、曰女怕花星照、兒怕賊星照、亦不置洗濯餘水、爲夜游神飲馬也、曰不當價如吳語云罪過

○尼が紅幕霞なり小兒はおまんがべにといふ黄昏をおまんが時といふも是なり然るを何やらの筆すさびにおうまんが時は王莽が時といふ事なり王莽は漢家四百年のその半に出たるものなり黄昏は晝夜のあはひなればそれに似たりといへるは附會の説なりおまんといふはべに依て女の名にいひゝがめそを又おうまんと訛りたるにこそ尼が紅といふも天の紅なり惠空(紀州淨福寺住)が【節用集】に和俗呼赤色之雲曰尼紅粉貞徳が【油加瀆】に雲のうへにも湯やわかすらんべにやではかぬあまらが紅粉の色【寛永發句】べにやかすむ入日の尼が崎これらも天を尼にとりなしたり按るに舞樂の安摩の面は繪やうは鼻の左右に丸き巴の如き紋あり(これあまがほなるべし阿摩は女母の梵語なり)【守武千句】いつか法師のちかび出ましまうくるも又まうくるもあま小舟(これは男子の出生はなくて女子のみまうくるなりこれ女をあまと云へること古くありしなり)又熊野比丘尼が色を賣ものとなりて紅粉にて粧ひ臉べにつけたるを尼がほといひけるにや是【鷹筑波集】におやにしかられ迷惑やする尼がほにつけたる紅粉をかひぬぐひなどあるをおもふべしこは小兒のされごとしたるを親の叱りたるなり【安宅松】といふ歌舞伎歌に尼かべに付てとゝやかゝにいはうよといへるは此句などを意としたりとみゆ

あま

○又あまは前のあまがつの處にもいへる如く今も女のことをあまといへることありて女の頬紅とみても通すべし昔の女はほゝべにさしたり此故に少女椿の葩を頬また額にも粘戯れあり當時の妝を學べるなり

不角が撰める【續清鮑】に誰惚なまし椿ほゝべにと云ふ句あり又同人撰【水刷棹】と云ふ集に似合かと袖とめ前の茄子鐵漿と云付合の句もあり茄子の皮を口に含ではぐろめの學びすること今もあり似たる戯なり

○又小兒の京橋中橋おまんがべにと云は今も女兒のてまり唄におん京々橋なん／＼中橋おつや十六大ふり袖とうたふこれとく江戸の中にも殊に繁華の處なれば女子の風俗もとりわきて勝れたるを云なるべしさればおまんがべにもうるはしきを處がらに付て云なりおまんとは天が紅の時なるを女子の名にとりていへり或説に中ばしにおまんいなりとてべにを供へて願がけする社あり享保の頃はやれりといへり思ふに此いなるの名は童謡によりて人の云出しにや

木のぼり

○木のぼり【枕双紙】(一)桃の木に童のゝぼり枝をきる處黒きはかま着たるをのこ走りきてこふにまでなどいへば木のもとによりてひきゆるがすにあやうがりて猿のやうにかいつきておるもおかし梅などのなりたる折もさやうにぞありし【類柑子】柿の木にあそぶ子供や蟹と猿(白雪)【書紀】(神代卷)一書曰、門前一好井、々上有百枝杜樹、故彦火々出見尊跳昇其樹而立之

ひなたぼこり

○ひなたぼこり【嘉多言】といふ書に(慶安三年刻)ひなたぼかうとは日南北向と書侍ると云へり然るをひなたぼくりなどいふはよろしからじといへり此説非なり舊本【今昔物語】に西京仕鷹者出家語の中に日なた誇もせん若菜も摘なむ云々また【著聞集】(二十一)ある田舎人京上して侍けるが宿にて天道ほこりして居たりけるに云々あり日なたの暖なるにあぶる意にや焼ことをほこらすといひ其塵をほこりといふ是なり

土なぶり

○土なぶり砂あそび唐太宗の土城竹馬兒童之樂といへる是なり又【法華經方便品】に乃至童子戲聚砂成佛塔、如是諸人等皆已成佛道とあり【季吟韻略百韻】にまるをどり腹を機嫌をとり／＼にあやし／＼泥をふ

小家を作る

○又小家を作ること長明【方丈記】に幼子のついちのかげに小き家作りて居たるとあり【一代男】に里の童があまがへるの家などしてといへるはいとさ／＼やかなるをいへり(此こと藁の條にいふ)

○籬廻し近ごろ江戸及近在の小兒樽のたがを竹の枝なぞ了字形したるにて地上を押まろばし歩行戯あり「たが廻したたがまはし初めけむ」
雪山(雪佛、雪ころばし、雪やけ、雪女、雪こんこ、雪打、寒ごり、寒氷)ころ／＼(无木、竹かへし、つき)ふりつゝみ(はりつゝみ)

雪の詠めは月花をもかねて須臾の程に白たへならぬ隈もなくおもしろきながめにはあんなれど北風はげしく吹て手足こどゆるはたへがたく往來も自由ならず晴て後消かゝりて穢げなるはさらにもいはず路次のぬかりは日數経れ共かはきがたきなどを思へば月花にたぐふべきにあらず雪のふる日は寒くこそあれとはすなほなることぞかしこは下さまのことにてやむことなきあたりにはことなる詠めと興じ給ふにこそ又さらぬも酒のむ人と兒童とは寒さをも恐れずいたく降つむをよること多かるべし歐陽子が乃知一雪萬人喜といへるは雪爲五穀之精といへるに據て豊年をおもふことなれば其意異なり【公事根源】曰昔初雪のふる日羣臣參内し侍るを初雪の見參と申也桓武天皇延暦十一年十一月より始る初雪にかぎらず深雪の時は必諸陣見參をとる也此事絶て久しと云々いにしへは初雪の日を曆にしるしたるにや【紫式部家集】こよみには初雪ふるとかきたる日目にちかき日野のたけといふ山雪いとふかく見やらるれば「こゝにかくひのゝ杉村うつむ雪をしほの山に色やまかへるとあり

○雪にて岩を作ること【萬葉集】(十九)天平勝寶三年正月三日内藏忌寸繩磨の館に宴樂の時の歌に積雪彫成重巖之起(節信云起恐勢誤)奇巧綵發草樹之花、屬此椽久米朝臣廣繩作歌一首、奈泥之故波秋咲物乎

雪の山

君宅之雪巖爾左家里祢流可母、遊行女婦蒲生娘子歌一首、雪島巖爾殖有奈泥之故波千世爾開奴可君之挿頭爾(雪の岩に花を彩り作るとあるは作り花を立る也)

○雪の山は【清少納言】物のあはれしらせかほなる物の條、しはすの十よ日のほどに雪のいとたかうふりたるを女房どもなどしてものゝふたにいれつゝいとおほくをおなじくは庭にまことの山を作らせ侍らんとてさふらひめしておほせことにていへばあつまりて作るに殿守司の人にて御きよめに参りたるなどもみなよりていとたかく作りなす宮つかさなど参り集りてことくはへことにつくれば所のしう三四人まいりたる殿守司の人も二十人ばかりになりけり里なるさふらひめしにつかはしなどすけふ此山つくる人にはろく給はすべし云々いかにとゞはせ給へばむ月の十五日までさふらひなんと申す云々(その山大なるを思ふべし又其續きに)その山作りたる日式部ぞうたゝたか御使にてまいりたればしとねさし出し物などいふにけふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき御前のつほにも作らせ給へり春宮弘徽殿にもつくらせ給へり京極殿にもつくらせ給へりなどいへば「こゝにのみめづらしとみる雪の山ところ／＼にふりにけるかな【源氏】(朝鏡)女の童の雪まろばす處いとおほうまるはさむとふくつけがれどもえもおしうごかさでわぶめりかたへは東のつまなどに出ゐて心もとなけにわらふ一とせ中宮のおまへに雪の山作られたりしよにふりたる雪なれど猶めづらしくもはかなき事をしなし給へりしが【禁秘御抄】雪山條(上略)凡此事古不見、自中古事也、事始文略、一條院御時以後也、清少納言記在共仔細、初雪見参近代絶畢、初雪日仰六位藏人、令取見参、藏人束帶或宿衣、召朝餉仰之、内侍傳仰藏人、進見参給祿、内藏寮絹、大藏雀布也、また雪山のこと【榮花】(晩待星)などにもみゆ【河海抄】に雲山伏見院永仁の頃まであり諸家記録に出つ藏人頭奉行として沙汰する也云々

ゆき佛

○雪佛雪ころばし【新拾遺集】(十七釋教)雪にて丈六のほとけを作り奉りて供養すとてよめり(贈西上

雪ころばし

人)いにしへの鶴の林のみゆきかとおもひとくにぞあはれなりけり俳諧には【犬子集】すへりては人も雪ころばし哉寛永七霜月晦日西御門跡遠行の明御門跡西からはとちへゆき佛(已上二句共に貞徳の句也)【季吟獨吟】所またら雪ころばかしおり立て作る達摩もそれとみわかず(今は雪ころばし雪ころばし猶はぶきては雪こかしとも云ど古き俳諧は皆ころばかしと云り)又雪丸けは(今雪丸めと云なり)【續山井】に餅の皮むくとやいはむ雪丸け(伊賀上野蟬吟)【曾我物語】おくのゝ狩かしか峠にてたきくちの太郎大石を谷へおし落しければすまふの條にみしまの入道しやうげん石ころばかしのおきぐちのとあひざはのや五郎との出てとり給へり云々

雪灯籠

○【東京夢華錄】十二月の條に此月雖無節序、而豪貴之家、遇雪即開筵、塑雪獅裝雪燈、以會親舊(この灯籠はいかやうに作るにかあらむ今わらんへの作るは雪を丸くつくねて石灯籠の火ぶくろの如く横に穴をほり灯心のふときを一筋油に漬し中に入れて火を點せばよくともるもし灯心多く火のつよければ雪解て火ともらぬなり)

雪やけ

○【安布良加須】にあらおそろしとやくるなりけり雪道と何と分こしすねならんとあるは雪やけと付たるなり霜やけ雪やけともに 瘰シヤクといふべし 瘰シヤクは【和名抄】漢書音義云、瘰(陟王反、和名比美、辨色立成云、之毛久知)手足中寒作瘡也とあり【蜻蛉日記】霜くちまじなはんとてさはぐもいとあはれなり契沖云しもくちは俗に霜ばれといふ霜くちの出来るものは初霜を手足にぬればはれずといへばしかするをまじなふといへり

雪女

○雪女【俳諧懷子】(九)先ふるは雪女もや北のかた(作者不知)見られぬや山のおく様ゆき女(重供)【續山井】に目に見ぬや是もはせをの雪女(黒米)雲となり雨となる身か雪女(圓宅)有といへどみぬは貞女か雪女(丘貞)【續五元集】川むかひゝとりさめたる麴賣雪女には帯か黒くて

雪こんこ

○雪こんこ【徒然草】(百八十一)ふれ／＼こ雪たんはのこゆきといふ事よねつきふるひたるに似たれば粉雪といふたまれこゆきといふべきをあやまりてたんばのとはいふなりかきや木のまたにとうたふべしとある物しり申き昔よりいひけるにや鳥羽院おさなくおはしまして雪のふるにかく仰られけるよし【讃岐のすけが日記】に書たりと有(後世この歌石臼など挽にうたふにや【壺のいしふみ】に此ごろのならひ二上りたんせんしのびこまみなねじけたる音云々、ふれ／＼粉雪たまれこ雪垣や木のまたにとよねふるひ歌にいふには遙におとりてあさましといへり)今小兒が雪こん／＼といふことのもとなり(雪をいふより雨こん／＼といふはます／＼うつりてその義をなさず)

○【堀河百首題狂歌】よみ人不知「ゑのこさへ御寺の垣にふりたまる嬉しかりける雪やかう／＼【一休嘶】(四)雪やこんこあられやこんこお寺の柿木にふりやつもれこんこ俳諧には【寛永發句帳】雪こんこたまれこんこやしろ狐また【犬子集】に於丹州(休甫)つれ／＼をすさむたんばの粉雪哉【嘉多言】(慶安三年刻)わらはべにて侍しをり親たちのせいし給ふも聞いれずして雪こう／＼と庭に出つゝそほれあそべりし云々【佐夜中山集】たまれ粉雪丹波いかきの目いつばい【續山井】あすはさぞ雪こん今夜さよしぐれ又古き【前句付】に(雨よりはまし／＼)人ぎれは阿部の童子の母も來すこは雪こん／＼を隠していへるなり

雪打

○雪打【禁秘御抄】子に龍口相具衛士及所夫、上殿上舍、於棟抛雪、所衆作雪山、この雪抛は屋のうへの雪おろして山作る料とするなり【犬子集】雪打やさながら春の花いくさ【安布良加須】子供やおもふまゝに狂はむ繼橋を廣くかけたる雪打に【佐夜中山集】雪礫うつ子や五ツ六ツの花【五元集】雪うちやゝり手をかへす小忌衣【聯珠詩格】方南山の詩自緣着得重裘煖戲拾庭前雪打人【源氏】(浮舟)わらはへの雪あそびしたるけはひのやうにぞふるひあがりける

寒垢離

○寒垢離【洛陽集】に寒垢離があびける水に月もなし(有知)寒垢離や縮子て足らぬ人もあり(自悅)これはねき事などありて堪がたき事をするなり今世乞食坊の寒ごりといふは代垢離の意なりもろこしの潑寒胡戲といへるは只寒中に水嬉することゝみゆ【唐書】中宗神龍元年十一月己丑洛城南門觀潑寒胡戲また睿宗景雲二年十二月丁未作潑寒胡戲この事止みたるは玄宗開元元年十二月己亥禁潑寒胡戲とみえたり其後この事なし今小兒裸體なるをかんこほりと云ふは氷をまがひたり昔の小兒はおかん氷といひしなり【佐夜中山集】(付句)おさなき人のみる朝かゞみつめたきをおかん氷ともてはやしと云へり

寒氷

氷をたく戯

○又氷をたく戯は【鬼貫が獨言】に柄杓は桶の内にもつきて柄をにぎれどもうごかすあるはわらんべの瓶より出しもてあそびてはたく音かねのごとくむかへはかゝみのごとし漢土にも揚萬里が稚子弄氷といへる詩に稚子金盆脱曉氷、彩絲穿取當銀證、敲成玉磬穿林響、忽作玻璃碎地聲

小兒玩物字の事

○小兒玩具【埃囊鈔】(三)小兒玩物字事さいらとは編竹と書き或は編木と書く筑子はこきりこ也肚はころ獨樂はこま礫碧はつんばひ石拵子いしなご无木簪むきさい草薙くさきり鼓鞞ふりつゝみ輪子りうこ同類也といへり此内他の條に出たるをばいしは古來いかなる物ともいはずれば今さだかには知がたし按るにころとはころ／＼とまるぶもの故に名づくるなるべし肚は字書に腹肚なりとあれば其義ことにかなはず恐らくは此の字を誤りたるならむ肚五一切滑なる貌とあれば其義をとりて此字を用ひしにやさて其形はしられず但し兩面にて四面にはあらじ今は卑き者の詞に錢をチャンコロといひ又小兒は小石を石ころといふ皆同義なり錢にいふは【犬子集】になかされて居るは衾やさつまがた鐘の湯つぼへは入るころ錢また【似勢物語】おかし男錢えりける女にいへりけりうしろめたくやおもひけん我ならでこと錢えるなかなしやころかけとらぬはつとなりともと有をみれば文字なきなり惡錢をころといひけるにや

ころ／＼

无木簪

○【萬葉集】(十三)菅根之根毛一伏三向凝呂爾また【同集】(十)春霞出菜引今日之暮三伏一向不穢照良武高松之野爾この一伏三向と三伏一向とはおなじ物なるべし【十訓抄】に嵯峨の御門の一伏三仰不來人待暗降雨戀筒寝とかよせ給ひて小野篁に是をよめと給はせけり「つきよにはこぬひとまたるかきくらしあめもふらなんわびつゝもねんとよめりければ御氣色なほりにけりとなんわらはべのうつむきさいといふ物に一つふして三あふけるを月夜といふなりと見えたりこは正しく右の【埃囊抄】に无木簪といつる物とみゆ一つふし三あふくといへるは【萬葉】のころと訓るとおなじ然らばころと无木簪とは同物にやそをなとて二つに分て【埃囊】には書載つらむおもふに球杖と玉ととりはなしたるとおなじかるべし

○【萬葉略解】にも【十訓抄】を引て云々あるはこよによしなくてことにいと後世につくれるものなればあけいふべきにはあらねどうつむきさいといふものは昔よりや有けんさて【卷二】人聲の長歌に許呂臥者そのうつむきさいといふものゝ一伏三仰もおのづからころびおくるさまの物なれば古しへ其物をころとや名付て有けんさて上に出たる三伏一向は神佛をぬかつくより出てつくの言に借りたるにやあらん【十訓抄】には此一伏三向とよりちがへてつくといふに一伏と三仰と書るかこは試にいふのみといへるごとく【萬葉】につくの假字に用ひたるは三伏一向なるを【十訓抄】には一伏三仰を月夜のかなとす誤なるべし三伏一向は神佛をぬかつくより出たりといふは押あての考にて其實は知がたし

○【十訓抄】の文章のうつむきさいとあるを世に大かたうつむきさいとよめども【埃囊抄】に无木簪といひまた【遊學往來】に無木と出たりこれに據て童の打むき簪と讀べく覺ゆ簪は投るともふるともいへどうつとはいはぬ物なれどこは常の骨子にもあらず其法も異なるべければ双六をうつといふがごとく打といふものとみゆさて【萬葉集】につくのかなに用ひたるは音を轉じたるにて實は月なるべく簪の目の

げへ

竹かへし
つき

みりつゞ

はりつゞ

おきあか
りこぼし

名と聞ゆころといふはその用ふる所の【】の名なれども一ツふし三あふむけるをばころといひけることと聞ゆそのころてふ物は數多なるべし是樛蒲より出たるもの歟かりとてその稱へも近し【和訓栞】に貞徳が書につくよといふは小兒の竹にてつきといふことをするに手の甲のうへにて竹のうらおもてになることあるに譬ふるなり此をげへといふ竹は六本なりと見えたりされば【萬葉】に一伏三向をころとよめるも此等の義あるにやげへといふは今もあり又小兒戯に穴一といふ事をするにまつけをつくとして次第を定むることあり又いちあとの者をへといへり又采もてするげんべといふ名もげへの轉じたる語なるべし(穴一にはけしといふことも有)といへりげへといふことは今の竹かへしなるべしおもふにつきといふは竹かへしするに手の甲に載せたる竹を裏がへさむとする時突やうにするをいふ歟げへとはいかなる名義にかあらん未考これら件のところにはあらず

○【轉鼓】は【和名抄】に護和名不利豆々美【周禮】注云護如鼓而小、持其柄搖之、則旁耳還自擊之となり此字を用ふべし【榮花】今のうへわらはにはおはしませばつごもりのついなにてん上人ふりつゞみなどして參らせたればうへふりげふせ給ふもおかしこは樂器なるをその形を小くうつして翫物とするなり

○はりつゞみは【俳諧懷子】(八)京わらんべの心のときき(貞徳が付句に)けふといへば鶯笛やはりつゞみ猿樂狂言にはり太鼓あり是なるべししらべの緒なく革のつよく張たるをいふ歟

おきあかりこぼし(ふんだん)紙えぼし(ひたひ紙)合點首 錢太鼓(唐人笛)風車 張子
笛(獅子笛、鶯笛、猿松笛、ひばり笛、笙笛、麥笛、ボンピン)猿(はしき猿、幟猿、釣す
る猿、つなかり猿、水挽さる、米つき猿、桃の猿、みかんの猿)松笠の鳥 いかの甲の鶯
ほゝつきの瓢 桃仁松蟲 茗荷鶴 折かたの蛙 折居鳥 紙よりの犬 はさみ切形

猿樂狂言【まんちう食】といふに子供のもてあそび物、ひなはりこ、おきあがりこぼしと見え【鷹筑波集】

にちれば咲花はおきあかりこふしかな (小法師を辛夷の花に取なしたり) 【堀川百首願狂歌】(猶影)かいこけて丸寝の丸きつふりより起あかり小法師春立にけり唐山にて不倒翁といふものは是なり【詠物詩選】
雑玩部に吳偉業戯咏不倒翁詩あり是もとより達摩の像にはあらぬをいつの程より達摩に作りたるか達摩を翫物とするも近き事にはあらず小兒の戯ごとくに一に二にふんたる(るはむの訛也)だるまが赤い頭巾かぶりふんまいた(ふんはすんの訛也)といへり【安布良加須】に頭巾をだにも今はかつがず(付句多き内に)夜も晝も不斷達摩を禮拜しとあるは右の戯言をとれるに似たり【嘉多言】に不斷といふべきをふんだんなどいふこと如何といへり此音便は小兒のみにあらず今も物の多くあるをふんだんと云へり
○紙えぼし【清少納言】見くるしきもの一條に法師陰陽師のかみかぶりしてはらへしたると有り其【抄】に法師ながら陰陽師にて被などする者あり又(紫式部家集)やよひの朔日かはらに出たるにかたはらなる車に法師のかみかうふりしてはかせたちたるをにくみて「はらへとのかみのかさりのみてくらにうたてもまかふ耳はさみかな紙かぶりは白紙にて作れるなるべし幣にまがふと有にてしらる又耳はさみとは紙かぶりに緒をつけ耳にかけて結たるにや女の髪にも耳はさみといへる事有り面にかゝれる髪を耳にはさむをいふ(容儀部にいへり)紙かぶりのかけ緒の其體にはさむなり【宇治拾遺】(六)内記上人寂心播磨國にて法師陰陽師の紙冠を着て被するを何しに紙冠を着しぞと問ければ被戸の神達は法師を忌給へば被のほど暫着て待ると云ふ物語あり又【夫木集】西行の歌しのためてすゝめ弓いるをの童ひたひえぼしのほしけなるかなこの額えぼしは古き繪巻物に多く出たり三角なる黒きものを額にあつるなり紙を染たる物なるべし

○【十戒圖】葬送の處に見えたる男の額にあつるは同形して白紙とみゆこはえぼしの代にかりに用る物なり今も田舎には葬禮に白き紙の三角なるを額にあつるは紙冠の遺風なり(遺後などにては白木綿の袖なしはふりめく物を着て額に三角なる紙をあつこれ親族の者どものする事なりこの着る物をいと名く大かたは菩提所より借て用となん猶所々にあるべし)此事はむかしは田舎のみにもあらず古き草子のさし繪などに往々見ゆ【櫻陰比事】町人のべ送りの處に白衣はぬげ烏帽子は落てそろれい男をつかみさがし云々

○乙州が【それく草】に歌舞伎子の幽霊を眞似るに先細き竹杖額に紙をあてよろほひ出てかすかに聲を出すそのまねるものも幽霊はかく有と覺え見物の人も幽霊はかくと覺ゆ云々いへるなどを思ふに民間に此風俗うせたるは元祿の中ごろよりなるべし地獄變相の圖など皆そのさまを畫けり但し男女ともに同はいかゞ【再來田舎一休】と云ふ草子に女のことを云ふに青竹の杖にてひたひに萬字をあてかちはだしにて死出の山をこゆ云々あれば紙にマン字をかきたるなるべし畫には只かりそめにシかやうに墨を點じたるがやがて片假字のシの字と心得て後には皆しか書り

合點首
○合點首合點はもと官舎にて我得心し同役のものも同心したる事にはとも／＼點をかくる是合點なりまた歌のえらびなどするにも判者二人なれば歌の首に左右に點かくるありこれによりて何事も得心するを合點といふ故うなづく事をしかいふなり合點首は今もある首ばかりの人形なるべし【一代女】(貞享三年刻卷六)衣類と首は各別に違ひ合點頭の如し(子供の弄ぶに衣類は何にても有に任せて用ふればなり)【六玉川】(八)五月雨が人形もみながてんくび(五月人形をいふなれどもがてんくびと云ものあるゆゑにかくいへりまた小き雛にもがてん首あれ共それにはあらず又一文首の竹の串に付たる首は武者又鬼など色々ありしが今は見えず

錢太鼓、唐人笛【諸艶大鑑】(貞享元年)此處は洛中のお乳の人の集りあそぶ所なり錢太鼓唐人笛のひびき竹馬の鈴の音云々小きを錢に響へていふは錢龜錢蓮などのごとし今豆太鼓といふも同義なり

豆太鼓
風車

○風車は漢名もおなじ【帝京景物略】に出たり【尤草子】めくるもの、内或連歌の前句にあぢきなやたどまはしても見ん(付句)みどり子のなきがかたみの風くるま【雍州府志】に云所々是を作る然れ共祇園町を本とす春の初多く造る藁の臺に建置て賣るこれ兒女の玩具にして和風の體を含みおのづから春初發生の氣あり【永代藏】(六)に童子すかしの猿松の風車をするなどやうく一日に丸どりにしてから三十七八文より五十までのしことするかせぬかなり【松の落葉】(丹前部八幡詣出端)さてもくみごとやいたいけしたる物ありはりこのかほやぬりちかふ千くさ結びに笹むすび山しなむすびに風車ひやうたんにやどる山がらくるみにふける友千鳥とらまだらの犬の子とるや蓬のやはた山云々(みな玩具なり)【江戸名物鑑】に雜司谷風車新蕎麥や給仕もめぐる風車(これ明和七年の作なり其頃雜司谷専らはやりたり)【草根集】寄車戀手にとればそなたより吹風車めぐりあふべきしとぞ見む後奈良院御撰【何曾】に風車の謎嵐山を去て軒のへんにあり【帝京景物略】割秣楷二寸、錯互貼方紙、其兩端紙各紅緑、中孔以細竹、横安秣竿、上迎風張、而疾趨則轉如輪、紅綠渾如暈曰風車、路德延孩兒詩の相教放風旋と云もこれなり○はりこ【雍州府志】云木をもて人形鳥獸の形并に諸品の模範を作り紙にて張ぬく云々もろこしには脱砂といふ泥砂にてそのかたを作る故に名く云々文匣小篋みな張脱とすといへり西鶴が【大鑑】(七)人形屋をいふ處獅子笛張ぬきの虎又はふんどしなしの赤鬼太鼓もたぬやす神鳴是みな童部たらしの様々といへり(今はりこのもてあそび時代のみゆるものは男女の大あたまむかしの撲を用ひて作れり寶曆已上の風俗なり其外田樂をやく女袴きたる座頭などの首の動くは虎の首より出たりとみゆこも又今は古きものなり

獅子笛
鶯笛

○笛【西鶴大鑑】獅子笛(上に引り)これは獵夫の用る鹿笛にはあらず頭に獅子を付たる笛なるべし○鶯笛は【犬子集】けふははや鶯笛もねの日かな【誰身の上】春のしらべの琴の音に鶯笛のその聲は云

猿松笛

ひばり笛

○さるまつ笛【名物六帖】に【夢溪談】の類叫子をさるまつ笛といへり【永代藏】に童部すかしの猿松の風車とあれば笛のみにはあらず猿松は廣く子供の名にいふにや○雲雀笛はもとひばりを捕ふる爲に吹笛なり【一代男】(一)小兒弄びの内にひばり笛をとりそろへ云々あり

笙の笛

むぎ笛

○伊勢みやげの笛【諸艶大鑑】に伊勢みやげの笛を吹て門に遊びし云々貞享四年の衣服ひな形をみるにいせ土産の模様あり笛は小き笙の笛なり【永代藏】に伊勢のみやげをいふ處笙の笛貝抄子して世を渡る海の若和布の眞砂の敷しらすなどいへり

○麥笛【藻鹽草】うなひ子がすさひにならず麥笛の聲におどろく夏のひるふし【洛陽集】麥笛や折から蟬に一聲あり(榮也)麥笛や夜毎に人の在所より(同上)【和漢三才圖會】云、大小麥共中空白色云々、小麥稈厚硬、小兒用以作笛吹之、謂之麥藁笛とあり麥笛といふは即是にて今竹の管笛に麥わらもて飾りたるにはあらず麥の稈を鳴すなり杜中の葉を卷てならず類也麥わら細工今色々あり【吳社編】に虎丘之麥柴、則彫簞回柄、晶架連柄、皆以麥爲之如黃屋、瑠璃光射、清旭眞奇玩也と巧みに造れるとは見ゆれど染て用る事をしらするにや

ぼんびん
ぼこんぼ
こん

○ぼんびん江戸にてはぼこんくと云ふ【藝苑日涉】に響湖蘆ボンピンと出たり一名倒掖氣と云ふ【帝京景物畧】云、瑠璃云々、有啣而嘯吸者、大聲咏々小聲啾々、曰倒掖氣【日下舊聞】に倚晴閣雜鈔を引て曰、瑠璃廠原爲燒殿瓦之用、瓦有黃碧二種、殿瓦之外、所製曰魚瓶、曰瑠璃片、曰胡蘆、曰響胡蘆、小兒口銜嘯吸成聲、俗名倒掖氣傳家寶(二集)料物不可與兒といふ條に年節内外滿街都有賣料汁、不動并料汁瑠璃喇叭、但此等要物、最薄最脆、遍地小兒每喜吹、願若一吹破吸入喉膈無藥能救、其破片極是鋼利入目即瞎、入腹腸斷、料絲

弾き猿
轆さる

燈上、料絲害亦同、全在父兄切戒ひゝとろの喇叭はボンピンとは異なり料絲はひゝとろの管又は連珠なり
○彈き猿古き前付(書名缺)行あたりけり(彈かるゝ度にあたまを叩く猿(これ今もあるものなり))
○又轆さるはもと五月轆の下に付たる括り猿なりもてあそびのは其躰異なり【江戸二色】(明和の末に刻したる草子なれどもその圖は古によれり)のぼり猿の畫あり其うへに「きをかへて猿もさつきの竹のぼり風のくるまはおりてこそみれ短冊ほどの小幡の風に吹るれば猿竿の上のぼるなり又文字の扁にのぼり猿といふは非なり【嘉多言】にも文字の篇に小さと大さとゝいふべきを小猿大猿などいふは誤なりとかやといへり

釣する猿

○釣する猿【正章千句】霞む瀧津の鯉つらんとや劫を経し春の山猿智恵ありて貞徳が判に云ふ猿の釣すること慥なる古事は未知いへども世にいひ馴たる諺なればよき寄合にて候と云りこれ翫物に作りたるにはあらねど翫物も此諺によりて作れる物としらる林鴻が【あらむつかし】といふ冊子に似船が句「來しかたや猿は魚つるかきつばた

つなかり
猿

○手を引連りたる猿は【僧祇律第八】云、佛在王舍城、諸比丘爲調達、作舉羯磨、乃至佛告比丘過去世、時空間處有五百獼猴、遊行人間、有一尼拘類樹、々下有井、々有月影、猴王見已語諸伴言、月日落井、當共出之諸世間破於暗冥、諸猴言云、何能出、王云我知出法、我捉樹枝、汝捉我尾、展轉相連、乃可出之、諸猴皆從、纒欲至水、猴重枝弱、枝折墮井とある是なり【鹽尻】に五色線を引て曰謝靈運遊名山、觀掛猿下飲百臂相連云々世に猿の手をとりて連りて水中の月影をとらんとするさまを畫くは此ことにや但し月かけをとらんとすることは【經律異相】にてや見侍りし相連り下る故事とは別なりしかるをひとつに心得て圖し侍るにこそ○水挽さる今水からくりにうすをひくさるあり水にてひくと見えて【天祿識錄】に唐人の作たる孩兒の詩に折竹製泥爲添絲放紙爲五言輪水猿相効發風旋と見えたり皆翫具なり風旋かさぐるまなるべし

米搗さる

○米搗さる【續五元集】凍たる手から錢洩鞍のうへ風にはころぶ猿の米つき【江戸二色】夏冬を赤いふんどしひとつにて人にましら米をつくなり【箋絨輪】に輕薄わらひ乳貫ひの常手みやげに米つき猿を小籠賣(千翁)

桃核の猿

○桃核の猿【守武千句】うつりかはれば猿とこそなれ花の春もみぢの秋の桃のさね【以呂三絃】にもゝの核にて猿を作り竹の切にて耳かきこしらへ當座の御用に立る云々【後日】男桃のたねにて猿を作り又はひやうたんの口を細工にして居云々などいへるみな手細工にて賣ものにはなきものとみえたり今も作る括り猿の形したるなりそれとは異なれ共後藤氏に傳へていふ四郎兵衛祐乘享徳の頃將軍家へ仕へしが故ありて召籠られし時心願を起し桃の核に日吉二十一社獼猴六十餘を彫たる是より祐乘に刀劍を飾る具ともを造らしむとなん(又彫刻師吉岡因幡が先祖も桃核に山王神輿二十一各舟に乗せあまたの猴棹さしてこぎまはる處を彫たるがあり家に傳へて寶とす余も一覽したり桃核僅に半分ほどなり神輿には寶珠又鳳凰など付たるいと細やかに彫たるやうに覺ゆ)これもとより桃核にて猴作る事あるより出たる事としらる○蜜柑の猿【洛陽集】に向齒や蜜柑の猿の腸をたつ(榮也)【一代男】にみかん一つ黒髪をぬかせられ猿などして遊びし夜云々是今も柑、輒、を髮毛にて括りて猴に作るなり寛文十二年【俳諧三つ物】うら白や海老上蔭のしたかきね(正長)【前付付廣海原】煎り海老はげに上蔭の箸休め

蜜柑の猿

松笠の鳥

○松笠の鳥【日次紀事】八朔條に云今日兒童戲、以松笠造雉鳥、或以鳥賊魚甲作鷺鷥、或以絲絮括金灯籠、草實作瓢形、又以桃仁製松蟲、是等類自玩之、或互相贈、謂之賴合云々、綵雀亦與雉鳥鷺鷥之類同、又蓋葺子連枝、折之與行器贈之とあり【世間胸算用】八朔の雀は珠數玉につなぎ捨られといへる是なり○松毬にて翫物を作るは雉のみならず【江戸二色】に二刀を帶たる奴と鉄かたげたる農夫ありいづれも體ばかり松かさなり其狂歌に百姓と奴が着たをよくみれば松つふくりてござりまうするこれ雉の鳥より

松毬にて
翫物を作

出たる作りものとみゆ鳥賊甲の鷲今も作りて弄ぶものなり酸漿ホホジキの瓢ヒラコまた同じ桃仁の松蟲マツムシこれをみれば今西瓜子スイカゴにて鈴蟲スズムシを作るのものと成り

若荷の鶴

○若荷の鶴不角が【矢の根鍛冶後集】よき作意とて譽られにけり「水物に鴨はなしたは若荷の子(素仙)【六玉川】(二篇)名月やめうがの鶴も生のこり又(四篇)めうがの鶴のくさる舟底といへるは臺の着物の飾にてありしなり【俳諧白花鳥】(寶曆五年)けしきどり水さかなの躰に留る故なり身はめうがの如く頭は赤くとうがらしの如しいかの甲に生るは稗ヒナの中に留る子どもの慰になる鳥なり

折形の蛙

○折形の蛙【清輔朝臣集】女をうらみて云々青き筋ある紙にてかへるのかたを作りて書つけてやりける云々

折居の鳥

○折居の鳥【一代男】(一)或時はおり居をゆかし比翼の鳥の形は是ぞ云々これ紙の折方にて鳥を作るなり【五元集拾遺】に聖代を仰ける句とて鶴折て目こそ多きに大晦日といへり春の設けの提子などをかざる料なるべし【俳諧三疋猿】折形の舟なかさはやかきつばた(麥林)今をり鶴といふものにや【伊呂芝居】に女子の遊びごとをいふ處に折すゑの鶴鉞形の兜とあり今も作るものなり疊紙のみ折居と心得るは非なり(此ごろ淺草に紙折たゝみて種々の物を作り人物鳥獸何にても人の望に任せて造る者あり)

紙捻の犬

○紙捻ヒシの犬【江戸枝折】にも思ひこよりの犬も瘦かたち望一は紙より細工をよくしたりとか【あら野集】はる雨はいせの望一がこより哉(湍水)

鉄切形

○はさみ切形【俳諧名物鑑】(寶曆中より江戸の名物を集む明和七年梓行)芝鉄切形「きり形に咲せて見ばや菊の花と出たり其人芝に在しなるべしこれ今もある紙をたゝみて夾剪ウツリにて種々の紋を裁る者なり寶曆十三年の板【諸藝遊戯双六】には紋彫とあり宋の曾三【異同話録】に蔣大坊母夫人曰少日、隨親謁泰山東嶽、天下之精藝畢集、人有紙一百番鑿爲錢、或鑿如葉、或鑿如鳥、其下一番、未嘗有鑿痕、其上九十九番紙錢

假面

也こは手づまの類なり近時ははさみにて紙のはしよりきり初め人物は眉も目もはさみを止めず紙を廻ししながらきり畢てはなれたる紙を合すれば全紙の如し又錦畫を白紙にかさね毛筋の如く細やかにほりぬくもありはさみにて裁るたくみに及ばず

假面(めんがた、般若、乙御前、天狗、しほ吹)芥子人形 今戸焼の女 相撲人形 金平人形 飛人形 輕わざ人形 てんぼ 西行 鈴 麼喉羅 繪職 發燭の燕(とんぼ蝶々) 小鍋 箔團扇 (ほゝつき挑灯) 麥わらの蛇 つぼく

めんかた

○めんかたとは湯桶よみなり【著聞集】(十二)小盜の條に面がた一つありけるは其面をして顔をかたくして夜な／＼強盜をしけるなりけりと有おもてかたと讀べし【鎌倉職人盡歌合】猿樂の歌いとつるゝわれとはさらに見えしとおもてかたをもきまほしきかな今小兒玩物のめんがたは面摸なり瓦の摸に土を入れてぬくなりまた芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが今はかはりて錢のやうにて紋形いろ／＼付たる面打となれり元祿の頃【若葉合】と云ふ歌仙の内に常陽花をどり指人形の輕はづみ彼けし面は指人形の爲に作れるなり

般若面

○般若面は「尤草子」ひろき物あはうのはなはんにやのめんめんの口といへり怖ろしき女の面を般若といふ【般若心經頌鈔】云翻般若云智慧、其躰也清淨、不受諸安染云々見えて智慧といふことの梵語なり鬼女の面をはんにやといへるは言の轉りたるなるべしそのもと謡曲より出づ葵上に怨靈行者が加持する誦文を聞て「あらおそろしの般若聲やと有り【大般若波羅密多】(第五百七十八)般若理趣分 曰、菩薩摩訶薩、摧伏一切魔怨とみゆ般若の聲に怕れたる怨靈が着る面をやがて般若といひたるにや又猿樂金春が家に傳來の鬼女の古面あり般若坊といひし者の製造となむ般若坊は南都の僧とか是によりて鬼女の面をはんにやといふとぞ又同じ家に三光といふ尉の面ありこれも三光坊とて三井寺の僧の作といへり然らば老翁の面

寫の面

を三光といはざるはいかゞ其角が【錦緞】に鬼女の面は般若あだち女とて古來より角ある面なり黒塚の能の位におもひ合せ侍れば全く一念の鬼女といふにはあらずたゞ罔兩のたぐひなるべしとて源助に申てあたらしく角なき面をうたせけるは時にとりての工みならんやと申されしにいふは誠かといへる兼盛の論も思ひやりたるやと雜談して兩吟の物ずきにはなしぬ「黒塚のまことこもれり雪女(其角)蹴あげ目にたつ白革の足袋(沾蓬)云々あり源助は【江戸鹿子】に面打日比谷一町目出目源助と出たり(此事いつの頃なるか元祿中の俳諧なり)【諸藝太平記】(四)張貫の般若の面雨にうたれしをみるやうに天晴芝居のみせ物したらば直打のある男云々【耳袋】に金剛太夫家に金剛といへる面あり是は古き仁王の顔を面に拵へたるなり其太夫はこれが祟りにや鼻を損じけるとかや右の面は京都の一古寺に納めおき代替に一度これを拜することゝなむ

乙御前の面

○乙御前の面今おたふくといふは多福の義にとる歟略きておふくなどいふめりこれを世に【山谷集】四休の語の内、鹿茶談飯飽即休、三平二滿過即休とあるを三平は兩の頬と鼻をいひ二滿は額と頤とにて乙御前の事なり此説古く聞えたれども非なり平は心安らかにして滿はたらはぬことなきなり三と二は大數をいふなるべし

天狗の面

○天狗の面、畫にかけるも古くは鳥の嘴の如くなりし鼻の長きは狩野元信僧正坊を畫きしより起れり其圖今に鞍馬山にあり假面に鼻の長きは胡德樂の面なり又王の鼻といふは猿太彦なりといへり【俳諧馬鹿慇懃】と云書あり其返答に【破雪麿】といふ書あり又その拾遺を【非免路】といふその内に「木高くて赤きや王のはな栢榴此言云いづれの君のことにか尤憚ある事なり陳云この王の鼻は御靈殿の祭やらんにかつける面なりされば此頃の小歌にまであかひ物そるへの内へいれば人あまねくしれり只末社の神ぞ云々(赤い物描への小歌は茶樂城書讀の時の歌なりその内に王のはな有り【尤の草子】に出つ)按るに元信

しほ吹

が天狗の像は胡德樂の面などによりしもの歟今神祭にみる猿太彦の面なり是王のはなとて古くより有しものならば元信が工夫奇とするに及ばず王のはなは元信の畫より後なるべし今鼻の長きを大天狗嘴尖りたるを小天狗といへるは何ことぞ【帝京景物略】云、紙泥面具曰鬼臉鬼鼻目、染鬚蠶曰鬼鬚これは鬼の面のあるは鼻の大なるあるは目の大なる毛の色さまざまなるもの種々有なり【胸算用】(元祿五年)五文の面張貫樋ひとつにてといへるは大黒の面はりぬきなり

○しほ吹【屠龍工隨筆】に今童の弄びに口の尖りたる面は鎌倉鶴が岡の拜殿に海よりあがりたるとしてしほ吹と名付たる面あり是を學びたるものとおもはるといへりしほふきは小ばかといふ介潮の干潟にありて口を閉る時水はじきの如く潮をふく假面のしほふきは其義をしらすこれうそふきを誤りとなへしものか嘯く面のおかしげなるなり【鷹筑波集】(二人名はいかい)見たもなきうそふく貌はさん三郎月の夜ふろに垢をかく助

芥子人形

○芥子人形【一代男】(一)小宮をさがし芥子人形おきあがり雲雀笛をとり揃へ云々【五元集】菓子盆にけし人形や桃の花これ三月ひなの句の中にあり【雍州府志】云、木偶人施衣裳小者謂芥子人形、芥子比至小者云々

今土籠の小人形

○今土籠の土の小人形【西鶴置土産】(二)淺草寺町の横筋を行に内のみえすくよし簾住あれたる宿の棚に小紫姿屋と看板出して土人形の細工する云々御亭主此人形小紫ならば先遊女にしては帯がせまし殊にうしろのとりなりまんざら人のおかためきたをといへば壹文に一ツ、賣ものを無理な御吟味それは七十四匁に賣ときのせむぎと笑ひけると有り今もあるふり袖きてすはりたる人形なるべし同じ小人形にあみ笠きたる遊客などもあり

相撲人形

○すまふ人形今熊と金太郎のすまふ人形うす板をきりぬきて作れるものあり【江戸二色】に其製のすまふ

人形あり二つとも人形の體同くほゝかぶりを赤、彩りたるいと兪相の作りとみゆ狂歌「かちもすまひまけもすまひの木偶坊勝負は人の手のうち」ありすまふとりの畫をきりぬきて後につけぎをほそくさきたるを貼つけて立つやうにして二、向はせ息をふきて倒し勝負をみるものあり板にて作れるといづれ先なるかこれも古きもの、乃細親之、可、みゆ【相撲大全】の叙に一戯具取見之摺疊、予少時有蕪紙聯、剪爲鼎形、折如人字、乃對曲折僂僂、尖其口嘴、氣息微々一齊吹起來、則盤旋欹斜、暫時爭競而仆、得其上者爲勝而呼號【寶曆癸未】

金平人形

○金平人形西鶴が【大鑑】に肩車に乗て懐より具足着たる金平を賜り道すがら切合ことしてまた手遊とて飛人形又は染分の手拭云々土佐ぶし淨るりに金平の事を作れり(作者は岡清兵衛といふものなり)和泉太夫これをかたりて大に行はる是より世に強き事を金平といふ手遊一枚繪々双紙などに出たり今も男めける女子を金平といふ(又漆にひとしく固き糊を製て金平と名付また牛旁の煮やうに金平あり)【六玉川】(十篇)金平は女にありておもしろき(金時ともいへるはもとよりなり)【温故集】に遊女歳旦「盃や金時らしき初笑ひ(袂)とあり又土佐節【草摺引】にも鬼を茶の子のきんひらだんべい

飛人形

○飛人形は竹の串を膏藥に捻り付てはね返らす張子人形なるべし【描金畫譜】に笠着て匍匐る人形みえたり今淺草寺雷門にて賣る龜山の化物などいふは張子二つにて一つは上に着せはねかへれば脱て形かはるやうにしたりいと近き物なり又綿に作れる兎もありこれらはもとより有しなるべし龜山の化物は四國を廻て猿となると云ふ諺を人形に作りたるが始にて其外さまざま作りしなるべし龜山の化物と云ことは觀せものあやしきものと龜山にて生捕しと云しこと度々ありしゆゑしか云なれたること、みゆ此外に紙を方にたゝみ獅子舞の形に作り足にし、み貝を付てうちにはにてあふぎをどらすものあり祐信が書に笠きたる人形を紙に作りたるにうす板の車を付て扇にてあふぎを走らすものあり似たる戲なり【雲合奇

蹤】十五)飴賣のことをいふ處挑了糖租一頭辨、有播鼓兒、泥人兒引線兒、紙糊小兒、燈草發板兒、丁々當々とあり草發板兒は飛人形の類にや

形經業人

てんぼ

土の西行

○輕わざの人形【西鶴置土産】(五)渡世かなしく毎夜蛛まひの人形拵へて云々
○てんぼ、西行法師、鈴【誰袖海】といふ草子に東福寺裏の門前此邊の名物地黃煎土にて作りし狐鈴鳩てんぼさては風呂敷わいがけたス富士見西行かねをためるものはあの西行の心やうならではならぬ其故はたとひ首は落されてもふる敷包ははなさぬと大わらひ云々これら今も有るものなり土人形を造るみな合せ摸にてぬくなり彼風呂敷包みやうの物は後に土を捻りて付たるなり故にこれは中に空虚なし首は缺やすきも風呂敷は背に焼付あれば落がたしこゝにやくなき事ながら西行の圖古畫をみるに笈を負て包み物負つるはなしさるを、寶藏【二】にも西行法師のひらづみは世をはなれたる袖にはいかけられ難波かたにさまよひては蘆の枯葉に驚き云々いへり是今いふ風呂敷包みなり風呂敷は風呂に入る時敷ものなれば常に物包むをばひらつゝみといへり似たる物故後には(大小の違ひはあるべし)風呂敷にも物を包み用ひてひら包の名はうせたるにやひら包は【下學集】に平包と有り【雅亮裝束抄】にひらつゝみのうはさし【俳諧染糸】の内千句に「泥足も其儘涼む一橋岩根におろしおく平包さて包み負へる西行は俗圖なるべけれど是もやゝ古く其さま有とおぼゆ熊野山妙見院八坂寺大師修行影像かのひら包みを背負たりでんぼ今もあり小き炮烙の俗名なり享保中に書たる【調味抄】といふ物に蒲鋌をほうろく焼にすることを云て深き大でんぼに入又てんぼにてふたをして火つよくたけばむしやきになる云々てんぼは手くぼにやとおもへどさる古雅の名にはあるべからずさらば土炮烙の略稱なるべし土焼の鈴は【洛陽集】に初午や典主は鈴を彩りけり(春澄)兆典主は東福寺の繪具谷の土を繪畫の着色に用ひたりとぞ其邊の産物故とり合てかくいへり土焼の鈴を彩色するなり【續山井】に風になるやすゝの子とものもてあそび(捨女鈴

土焼の鈴

小鍋

○小鍋、貫之が娘の幼き時の歌とて篤よなとさはなくぞちやほしき小鍋やほしき母やこひしき此歌【袋双紙】(四)【俊頼口傳】【女郎花物語】(下)等に見えたり

箔の團扇

○箔の團扇、ほゞぎ挑灯【伊呂三絃】に遊女七月の贈り物をいふ處に箔の團扇五十本ほゞぎ挑灯三十云々是踊の調度なるべし

挑灯

ほゞぎ

挑灯

挑灯

挑灯

挑灯

挑灯

挑灯

○麥わらの地井唐團扇【江戸砂子】駒込富士權現祭日當所の産唐團扇麥わらの地五色網夏の果物と見えた【六玉川】(六篇)江戸は地が出てあつて朝日【江戸二色】にもその畫あり狂歌にや水無月のついたち布の賣ものは外にたぐひのあらぬうちにはちや【江戸塵拾】駒ごみ不二祭麥わらの地は寶永のころ此處の百姓喜八と云ものふと案じ付てこれを作りて賣といへり(淺草の不二權現にて此地を賣は近きこととみゆ)江戸近在を二月頃あるきてみれば田のくろに竹など立て藁盒子にこの地のごとく稻程にて編たるものを結付たりおもふに初午稻荷祭にわら合子作りて供物を入れるなるべしその合子の編かたこの地の口如し次でに地を作りゆひ付るは地を避る呪ひなどにや地は合子のあみかたより出たりとみゆ常のは大森村の外に麥わらの手遊び賣所なし

○駒込麥わらの地は寶永の頃此の處の百姓喜八と云ものは是を作りて祭禮の日市に賣る一とせ疫病はやりし時此地ある家は免れたりと云ふ雜司谷麥稈の角兵獅子は高田の四つ家町に住し久米と云へる女製し初たり寛延二年の夏の事なり其ころ參詣多かりしかばよく售たりとぞ

葭の種鳥

○又葭の種などにて鳥獸を作れるはもとよりにて近ごろは大森村にて男女のかつらを棕櫚にて作ることに上手になれり大師河原のみやげに買て幫間の生醉などがかふれるもみゆこの頃聞たる折句にまだ鮫洲きげんで坊主しゆるかつら(坊主あたまには着やすけなり)【帝京景物略】積編冠を、僕額曰草帽云々、香客歸途衣有一寸摩、頭有草帽、面有鬼臉云々物まうでのかへさにわら細工のかぶり物して鬼の面をきたるなり

つぼく

○つぼく、此手遊古きものと見えて慶長ごろの古畫人物の衣のもやうなどにも付たり【犬筑波集】わらはへの縁にてくるふ藥師堂もてあそびぬる瑠璃のつぼくもと壺とのみいふべきを小兒の詞のかさねいふ例にて名付るにや【懐子】(十)立別れいなかあたりの朝ひらきつぼくほどの涙たる中(重頼)【松の落葉】京童といふ東上るりきさらぎや初午參のみやげとて鈴やつぼく風くるま【好色盛衰記】(貞享五年)稻荷の前つぼくかま作り賣これも土佛の水あそび云々これ壺と釜となり

削り花 餅はな 栗花かや穂の馬猿みづくなどの類 作り花 五色網 はぜの花 箔おきの金一文長刀 浮鳥(人形) 酒中花 紙でつぼう 竹の吊瓶 ふくら雀(雀の笛) 興次郎人形

削り花

古今集(第十)物名二條の後春宮のみやす所と申ける時にめどにけづりはなさせりけるをよませ給ひける(文屋やすひで)花の木にあらざらめとも咲にけりふりにしこのみなる時もがな【奥義抄】に著といふ草をゆひ集めてそれにけづり花をさす事といへり著は【和名抄】に女止とあり【史記】龜策傳にも見えて其莖は筮とする物なり削り花は木をけづりかけて花に作るなり【延喜式】圖書寮に金銅花瓶二口削り花二(左右各進一枚近衛寮受供之)と有り佛名の時に削り花を供養に備ふる事多くみゆその引歌とも【餘材抄】に委しく出たり【夏山雜談】に今も西國邊にては著に作りはなを付て神佛にさぐる所も有といへり【西武獨吟】常盤の松のかゝりあくよ霞酌たいのものには削り花(寛永ごろの畫に繪物師が家に削り花立る洲はま有り今も芋の臺何くれの臺といふものみなけづりばなり)

餅花

○餅花【宗長紀行】(下)冬の梅の一りん二りんかすかにさきて匂ふこそあはれふかゝらめあまりに正月の童の餅花つけたるやうにさきたるふさはしからず云々(宗長は宗祇が弟子にて文明大永ころの人なり)餅花もと節物なるを江戸目黒の餅花などは常にあり【江戸二色】にこの餅花出たり竹串をさきかけて其末ごとに餅を丸くひらめて付たり吉野の花餅を學びたるものなり(委しくは食類の部にいへり)【四神地

栗花かやの穂にて馬猿蟲るい此外いろの穂にて馬猿など作り花

名録】(下)目黒村條名産に餅花あり又儲よし近年童子の手遊びに栗花かやの穂にて馬猿蟲るい此外いろの穂にて馬猿など作り花
【細工を仕出し賣るものその細工尤よしとあればこれらの手あそびは寛政初年より出来しと知らる
○作り花雑色の綵帛もて造れるをいふ【萬葉集】(十九)雪の巖に綵花を殖たるをよめる歌あり【伊勢物語】梅の作り花に雉を付てたてまつるとて我たのむ君がためにと折花は時しもわかぬ物にぞ有ける【清少納言】二月朔日のことをいふ處おかしき櫻の一丈ばかりにていみじう咲たるやうにてみはしのもとにあればいとよろさきたるかな梅こそたゞ今さかりなんめれとみゆるはつくりたるなんめり【金葉集】(十雜下)後三條院かくれおはしまして後五月五日一品の宮の御帳にさうふかけ侍りけるに櫻の作りはななまゝれたりけるをみてよめる藤原有祐朝臣「あやめ草ねをのみかくるよの中におりたかへたる花櫻かな【新古今集】に後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心をおのこともつかうまつりけるに大納言忠家櫻はな折て見しにもかはらぬに散ぬ計をしるしなりけり大納言經信さもあらはあれ暮行春も雲の上散ことしらぬ花し匂ひて

五色網

○五色網【江戸砂子】駒込富士社の條當所の産とある内五色網あり【丹前能】(五)娘一人手わざには五色のあみを拵へ伊勢参りの土産物賣と織とにいとまなく母に孝を盡し云々いへり又今金柑など入て小き網も有これとは異にて手遊にはあらねど【松の葉】にあみすきといふ小歌ありこの町は子供でかしましかみの町ですきましましよ上の町下の町みせのはなに引かけておいてから子供しゆ子供しゆもちつとそちらへよらんせのわくるはくすきわくる網を五色にすきわくる又兵衛かすいたかねの緒とかく又兵衛とはしやくはんこせねかひ(宿願後世願にや又兵衛といふ者鐘の緒に五色の網をすきたる事ありとみゆ)
○はぜの花、近ごろの物にも非ず【後撰夷曲集】にはふことありて酒もりせし座にて四天王寺に名たゝるはぜと云ものをこよりにつけて梅ばちを作りたて是をさかなに今ひとつとてよめる「冬の中に作れる

はぜの花

はぜ

枝は紙ながらかくこそはぜの花となりけれ大坂胡蝶女と見えたり天王守に名だゝるとは彼十日我賣のもの市にうるを云なるべし小歌にはぜ袋に錢かますとり鉢さい榎たばねのしと云ふ是なり今はこの賣物どのを手遊に小く作りて小寶とゝなへて賣る子寶の名詮をとるなり
○はぜは漢名儼なり後世采花とも字婁とも云ふ明の李翊が【戒菴漫筆】に字婁の詩あり東入吳門十萬家家々爆穀卜年華、就鍋抛下黃金粟、轉手翻成白玉花、紅粉佳人占喜事、白頭老叟問生涯、曉來粧飾諸鬼女數片梅花挿髮斜これ吳中の風俗にて上元の夜にあることなり
○えんぎの金【伽羅女】は寶永の冊子なり其中に伊勢の處末社へ不殘一角つゝ禰宜達肝をつぶし土の箔おきしんちうかと思ふ猶古くよりあるべし寶永七年【世説故事苑】に正月の祝ひことを云に俵子及金銀の包みたるを買と云るは今の土にて作れる百兩つゝみなり

一文長刀 浮鳥

○一文長刀【一代男】(四)ある時は一文賣のなきなたをけづりなく子をたらし云々
○浮鳥、宋人丁用晦が【芝田祿】に煬帝在江都、代王留守長安郡、盜賊蜂起有獻計者、刻木鷲繫詔于頸、致之渭池、冀關東救兵至、日放百十順流而下、竟無救至また【東京夢華錄】に以黃蠟鑄爲鳧雁鴛鴦鷄鴨龜魚之類、彩畫金縷、謂之水上浮また【物理小識】(十二)戲科斗、樟腦黃蠟和勻染墨投水中、作科斗自然走動、但欲潔淨、油手止之即佳(今兒女のびいどろかんざしに水を貯へ蠟に朱を和て金魚に作り入たるあり)木の葉の舟に山椒の實にて人形作り棹とらせたるを鉢の水に浮めたるを讀人不知「木の葉ふね朝くらきより漕出し船頭とのはつかれ山椒(母の物語に聞しか今わすれたり)【六玉川】(四)浮人形の掌をこぐといふ句あり(今はびろうどのはりかねして猿を作り小船をこがせ線香火花をもたせ又は蠟引の紙にて鴛鴦を作り火をともして水に浮す)

酒中花

○酒中花【洛陽集】雪國へ酒中花さそへ歸る雁(元好)【虛粟集】名をかへて線か禿おとなしく(柳興)